

# 文化継承における女性の教育的役割

—オルドス・モンゴルの伝統文化の変容をめぐって—

サラントナラ

## 目次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 凡例                           | VI |
| 序章 研究の目的と論文の構成               | 1  |
| 1 研究の目的                      | 1  |
| 2 研究方法                       | 4  |
| 3 資料と先行研究                    | 6  |
| 3.1 旅行記と年代記に登場するモンゴル人女性      | 6  |
| 3.2 近代におけるモンゴル人女性に関する人類学的研究  | 7  |
| 3.3 教育の視点から書かれたモンゴル人女性に関する研究 | 8  |
| 4 論文の構成                      | 10 |
| 第I部 伝統文化及び家庭教育におけるモンゴル人女性    | 12 |
| 第1章 調査対象地域の歴史的・社会的変遷と文化的特徴   | 12 |
| はじめに                         | 12 |
| 1.1 オルドス・モンゴルの歴史             | 13 |
| 1.2 文化としてのモンゴル               | 16 |
| 1.3 定住牧畜の経済                  | 19 |
| 1.4 オルドス・モンゴルの社会変遷           | 22 |
| 1.4.1 農地化と人口流動               | 22 |
| 1.4.2 禁牧政策                   | 25 |
| 1.4.3 生態移民政策                 | 28 |
| 1.4.4 資源開発                   | 29 |
| 1.4.5 観光化される「草原文化」           | 32 |
| 1.4.6 学校統廃合                  | 34 |
| おわりに                         | 35 |
| 第2章 モンゴルの伝統社会にみる女性           | 38 |
| はじめに                         | 38 |
| 2.1 大地母神信仰にみるセクシュアリティ        | 39 |
| 2.1.1 大地母神                   | 40 |
| 2.1.2 男女平等観よりもバランス           | 41 |
| 2.1.3 日常生活に根付いた信仰            | 42 |
| 2.2 モンゴル政治にみる女性の役割           | 43 |
| 2.2.1 父系社会と女性                | 43 |
| 2.2.2 政治と女性                  | 44 |
| 2.2.3 帝国の政略と女性               | 46 |

|            |                          |           |
|------------|--------------------------|-----------|
| 2.2.4      | モンゴル人の女性像                | 47        |
| 2.3        | 非日常における女性                | 49        |
| 2.3.1      | 女性主役の行事                  | 49        |
| 2.3.2      | 女性が忌避される行事               | 55        |
|            | おわりに                     | 59        |
| <b>第3章</b> | <b>牧畜業にみる女性</b>          | <b>61</b> |
|            | はじめに                     | 61        |
| 3.1        | 牧畜社会の特徴                  | 62        |
| 3.2        | 女性主導の家畜の再生産              | 65        |
| 3.3        | 女性が支える日常                 | 67        |
| 3.4        | 食の生産とセクシュアリティ            | 69        |
| 3.4.1      | 食の生産                     | 69        |
| 3.4.2      | 乳製品をめぐる                  | 70        |
| 3.4.2      | 家畜の屠殺                    | 72        |
|            | おわりに                     | 74        |
| <b>第4章</b> | <b>伝統社会におけるしつけと母親の役割</b> | <b>76</b> |
|            | はじめに                     | 76        |
| 4.1        | 歴史に見る「母の教え」              | 76        |
| 4.1.1      | 「教育の母」                   | 76        |
| 4.1.2      | モンゴル再統一を実現した「国母」         | 77        |
| 4.2        | モンゴルにおける子育て              | 78        |
| 4.2.1      | 子どもの誕生                   | 78        |
| 4.2.2      | 乳児期における育児                | 80        |
| 4.2.3      | 幼児期における育児—礼儀教育           | 81        |
| 4.3        | モンゴルの家庭教育の特徴             | 82        |
| 4.3.1      | 家畜と共に成長                  | 82        |
| 4.3.2      | 遊びのなかの学び                 | 84        |
| 4.3.3      | 労働のなかの学び                 | 85        |
| 4.3.4      | 伝統的な教育法である口承伝達           | 86        |
|            | おわりに                     | 87        |
| <b>第Ⅱ部</b> | <b>近・現代の学校教育とモンゴル人女性</b> | <b>89</b> |
| <b>第5章</b> | <b>近代教育の登場と導入</b>        | <b>89</b> |
|            | はじめに                     | 89        |
| 5.1        | カトリックの伝播と近代教育の誕生         | 90        |
| 5.1.1      | モンゴルにおけるキリスト教の伝来         | 90        |
| 5.1.2      | 布教と近代教育の試み               | 91        |

|            |                                 |            |
|------------|---------------------------------|------------|
| 5.1.3      | キリスト教と少数民族の文化変容                 | 93         |
| 5.1.4      | 当事者が伝えるカトリック教育                  | 94         |
| 5.1.5      | カトリックが内モンゴルの教育に与えた影響            | 96         |
| 5.2        | 日本から導入された教育機関の登場                | 97         |
| 5.2.1      | 女子教育                            | 97         |
| 5.2.2      | 教育科目の近代性                        | 99         |
| 5.2.3      | 近代教育の影響                         | 100        |
| 5.3        | 興安女学院の開設                        | 101        |
| 5.4        | 中華民国期の教育—国民党政権下を中心に             | 103        |
|            | おわりに                            | 105        |
| <b>第6章</b> | <b>社会主義体制下の民族教育—学校教育</b>        | <b>106</b> |
|            | はじめに                            | 106        |
| 6.1        | 少数民族教育の政策と制度                    | 107        |
| 6.1.1      | 政策の制定                           | 107        |
| 6.1.2      | 教育制度の変遷                         | 108        |
| 6.1.3      | 民族教育の現状と課題—90年代以降               | 110        |
| 6.2        | モンゴル人女性にとっての少数民族教育              | 113        |
| 6.3        | モンゴル人女性教師に対する調査                 | 114        |
| 6.3.1      | 調査概要                            | 114        |
| 6.3.2      | 調査考察                            | 115        |
| 6.4        | 若年女性の教育観                        | 118        |
| 6.4.1      | 調査概要                            | 118        |
| 6.4.2      | 調査考察                            | 119        |
| 6.5        | 民族学校の現状と問題点                     | 122        |
|            | おわりに                            | 123        |
| <b>第7章</b> | <b>文化継承と学校教育</b>                | <b>125</b> |
|            | はじめに                            | 125        |
| 7.1        | 教育環境が異なる女性の文化継承状況—ライフストーリー法を用いて | 125        |
| 7.1.1      | 調査概要                            | 125        |
| 7.1.2      | 調査考察                            | 127        |
| 7.2        | 女子中高生の「生活空間」と「家庭生産」における文化観      | 133        |
| 7.3        | 伝統文化の深化に貢献した女性                  | 141        |
| 7.3.1      | 調査概要                            | 141        |
| 7.3.2      | 調査考察                            | 142        |
|            | おわりに                            | 145        |
| <b>終章</b>  | <b>伝統文化の担い手の課題</b>              | <b>147</b> |

|  |            |
|--|------------|
| 1 各章のまとめ.....                                  | 147        |
| 2 全体考察.....                                    | 152        |
| 2.1 モンゴル文化変容の行方.....                           | 153        |
| 2.2 モンゴルの文化継承における女性.....                       | 155        |
| 2.3 モンゴルの文化における教育.....                         | 157        |
| 3 今後の課題.....                                   | 158        |
| <b>補論 社会主義中国が描くモンゴル人女性—民族教育と社会教育の間.....</b>    | <b>160</b> |
| はじめに.....                                      | 160        |
| 1 民族教育と社会教育—女性誌が描くモンゴル人女性.....                 | 160        |
| 1.1 分析概要.....                                  | 161        |
| 1.2 分析内容.....                                  | 161        |
| 2 まとめにかえて—創成された女性像.....                        | 166        |
| <b>参考文献.....</b>                               | <b>168</b> |
| <b>付属資料Ⅰ 女性教師に対するインタビュー調査.....</b>             | <b>176</b> |
| 1) U氏：内モンゴルで育てられた日本人女性教員.....                  | 176        |
| 2) Z氏：民族中学校教員の場合.....                          | 177        |
| 3) Y氏：大学教員の場合.....                             | 178        |
| 4) W氏：民族中学校教員の場合.....                          | 178        |
| <b>付属資料Ⅱ 教育環境が異なる女性のインタビュー調査（一部抜粋）.....</b>    | <b>180</b> |
| 1) A氏：学校教育を受けた経験のない遊牧民.....                    | 180        |
| 2) I氏：漢語で教育を受け、漢化した女性.....                     | 182        |
| 3) H氏：漢語で教育を受けたが、伝統文化を大切に思う.....               | 184        |
| 4) G氏：内モンゴルで教師をしながら修士課程に在籍.....                | 186        |
| 5) F氏：日本に留学し、大学院修士号を取得.....                    | 187        |
| <b>付属資料Ⅲ 伝統文化の発展に貢献した女性に対するインタビュー調査内容.....</b> | <b>191</b> |
| 1) J氏：文化再現の前線に勤務.....                          | 191        |
| 2) K氏：伝統食品の普及と商品化に尽力.....                      | 192        |
| 3) L氏：伝統食品の未来を探求.....                          | 192        |
| 4) M氏：異郷で文化継承への努力.....                         | 193        |
| 5) N氏：伝統的な手芸品の創作.....                          | 194        |
| 6) O氏：民族衣装の普及に尽力.....                          | 194        |
| 7) P氏：伝統文化保持の試み.....                           | 196        |
| 8) Q氏：伝統とモダンの文化融合.....                         | 197        |
| 9) R氏：探求心の強い現代女性.....                          | 197        |
| <b>付属資料Ⅳ.....</b>                              | <b>199</b> |
| 表1 社会主義体制における女性のイメージ.....                      | 199        |

|     |                          |     |
|-----|--------------------------|-----|
| 表 2 | 家庭における女性の重要な役割—家庭教育..... | 202 |
| 表 3 | 女性自身の生き方—婚姻生活.....       | 204 |
| 表 4 | 女性に影響を与える民俗文化.....       | 207 |
| 表 5 | 女性の自立を支えるキャリア.....       | 210 |

## 凡 例

1. 本論文において、モンゴル人の人名と地名のカタカナ表記は、基本的にモンゴル語のオルドス方言を忠実に再現したものである。ただし、必要に応じてモンゴル国の標準語に合わせたものもある。
2. モンゴル語のローマ字表記は、国際モンゴル学界で定着しているニコラス・ポッペ (Poppe, Nicholas, *Grammar of Written Mongolian*, 1974)式に従う。
3. 漢語史料と漢語の人名、地名は時代に応じて繁体字と簡体字の双方を用いる。
4. 清朝時代から漢字で以て表記されているモンゴルの地名と人名は、基本的に従来のものを踏襲している。
5. 日本語史料を引用するにあたり、旧仮名表記のまま引用したが、旧漢字は新字に置き換えた。
6. 引用文とインタビュー記録内の( )は、筆者が加えたものである。また、引用文中の「……」は、筆者による省略を示す。
7. 本文中の年号、日付は原則として西暦を用いるが、必要に応じてオルドス暦と中国・日本の元号をそのまま使う。

## 序章 研究の目的と論文の構成

### 1 研究の目的

本研究の目的は、遊牧民であるモンゴル人社会の女性に焦点を当て、子どもの教育・養育と女性の関係性の検討から、女性が次世代への文化継承においていかなる役割を果たしてきたのか、また近現代社会への移行の過程で伝統社会での行動様式や慣行との対比において、それらがどのように変容しつつあるのかについて解明することである。

北・中央アジア地域において、モンゴル人は長い間、遊牧生活を営んできた。遊牧は人間と自然の最適な調和であり、一種の生活様式として現代に至る<sup>1</sup>。ユーラシア各地の遊牧民について研究を続けて来た松原正毅は「遊牧の合理性とその簡素さの一つの文明として発達し、人類の持続可能な発展を見守ってきたのである」<sup>2</sup>と指摘する。しかし、近代化の進んだ現在、数千年という歴史的プロセスの中で文明として発達してきた遊牧は終焉を迎えつつある。当然、遊牧民における伝統的なしつけも、社会変動や近代教育の導入に伴い大きく変容しつつある。

とりわけ本論の研究対象地域である現代中国・内モンゴル自治区（以下、内モンゴル自治区）においては、農耕化と人口増加による定住化、そして資源開発や移民政策などの環境変容により、モンゴル民族<sup>3</sup>の伝統的な生活様式が一変し、牧畜産業が成り立たなくなっている。今日までに培われてきた遊牧生活の知恵や生産の技術は農業と産業生産の発展に伴い、牧畜業の基盤が喪失し、モンゴル人の「草原離れ」が進む。このような経済的発展は牧畜民にとって生活環境の変容だけではなく、価値観と人生観にも変化をもたらすものである。こうした状況において、遊牧社会の伝統的な生活様式によって生み出され、継承されてきた伝統文化の歴史的再評価をし、文化的価値を見直す必要があると考える。

筆者は本論文において、「モンゴル」という概念を同じ血統だけではなく、同じ歴史と文化的価値を含む体系であると定義づけておきたい。本論文では、近代化以降に枝別れし、それぞれの国の歴史を紡いでいる状況の中で、モンゴルという同様の文化の土台として存在してきた、そして存在している伝統的な生活様式において、子どものしつけと子育て、

<sup>1</sup> 遊牧とは天然の水、草を求めて定期的、周期的に移動しながら家畜を飼育する牧畜形態を指す。モンゴル人は遊牧の生活形態をしてきたが、歴史の変動により定住化も進み、牧畜生活が変容しつつある。そのため、本論文では時代区分として遊牧（遊牧民、遊牧社会、遊牧生活）と牧畜（牧畜民、牧畜社会、牧畜生活）というように使い分けている。なお、本論文における伝統（伝統社会、伝統生活）も前者の遊牧（遊牧社会、遊牧生活）のことを指し、同じ時空間として定義づける。後者の牧畜（牧畜社会、牧畜民、牧畜生活）は主に、近現代の定住化が進んだモンゴル人の生活形態を指し、特に内モンゴルが中華人民共和国の一族自治区として位置づけられた後の時空間を指す。

<sup>2</sup> 松原正毅「遊牧からのメッセージ」小長谷有紀、楊海英編『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）、p. 15。

<sup>3</sup> モンゴル部族は遊牧騎馬民の異なる氏族及び部族による総称であり、モンゴル部族に当てはまる人々をモンゴル人と定義付けている。なお、本論では1949年以降中国の管轄により少数民族自治区となった内モンゴル自治区（中国の他の地域で生活しているモンゴル人も含む）に住むモンゴル人を、特に民族政策関連について述べる場合は「モンゴル民族」と時代区分によって使い分けている。また、漢語を話し、漢文化を継承する人々を漢人とするが、中華人民共和国成立後は、原則として漢民族と記載する。



とりわけ、モンゴル独自の教育に着目する。

伝統的な遊牧社会では、専門的な教育機関や特定の教育者がいなかったため、<sup>1)</sup>教育は主に生産と社会活動を通じて行われ、教育手段は言語伝達や観察模倣に頼っていた。モンゴルの子どもたちにとって、自然と生活とは切り離せない概念であり、労働と学びは密接な関係にあった。子どもたちは幼少の頃から「小さな大人」として様々な労働に参加して生活技術を学んでいき、母親が主要な「教育者」として遊牧民を代々育ててきた。

現代化が進み、生活環境が変化するにつれ、各戸家庭での「母の教え(eji-yin suryal)」と「生活実践」の教育しか受けたことのない草原の子どもたちは、学校教育(中華人民共和国建国以来の民族教育)を受けることによって、伝統文化に対する認識や価値観が薄くなりはじめた。このことに関してごく最近でも、サイハンホワール(賽漢花)は内モンゴル自治区赤峰市における民族学校を事例にあげ、報告している<sup>4)</sup>。社会変動の著しい中国の内モンゴル社会において、モンゴルの文化継承を誰が担うかは、喫緊の課題となっているといえる。

上記を背景に、本論文では第一に、伝統社会における家庭教育とモンゴル人女性に注目する。モンゴルの伝統文化の継承において、女性の果たしてきた役割に焦点を当て、担い手の諸相を教育の視点から考察した。第二に、近現代化における学校教育とモンゴル人女性に注目する。中国の改革開放政策以降の社会の近代化、市場化といった社会変動と、近代教育の定着過程の中で、文化の継承者としての女性の役割がどのように変遷を遂げているのかを検証していくものとした。調査対象地としては、先行研究を踏まえながら、社会変動の著しい内モンゴル自治区西部のオルドス地域を選んだ。

## 文化とその担い手

ここで、本論文で用いる「文化」についても、定義しておく必要がある。文化は抽象的な概念であり、人々が考える文化の定義がきわめて多様であるため、文化には明確的な定義をつけることは難しい。クラックホーン(Alfred Louis Kroeber)は「ひとつの文化は当該集団の知恵をプールした貯蔵庫をなしている」<sup>5)</sup>としている。

本論文では、「文化」という定義について、モンゴル人の古くからの遊牧生活の中で培われてきた「教養たる文化全体」を指す意味で用いる。モンゴル語の「文化」(soyol)という言葉自身にも「教養」(surtayal)という意味合いが含まれている。近現代以降、モンゴル人は伝統文化から牧畜生活を経て現代の文化変容に至っても文化=教養の意味づけは変わらない。モンゴルという文化体系は近代の国民国家もしくは民族に限らず、モンゴルの精神文化などその他広い意味合いを包摂するのである<sup>6)</sup>。

また、日本社会では、伝統とは「古くからのしきたり・様式・傾向、血筋などの有形あ

<sup>4)</sup> 賽漢花「学校統合政策による民族教育の変容—中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に—」『日本モンゴル学会紀要』〈47〉(2017)、pp. 36-44。

<sup>5)</sup> クライド・クラックホーン、光延明洋訳『人間のための鏡』東京サイマル出版会(1971[1949])、p. 30。

<sup>6)</sup> 楊海英『モンゴルの親族組織と政治祭祀—オボク・ヤス(骨)構造』風響社(2020)、pp. 4-5。

るいは無形の系統を受け伝えること」<sup>7</sup>、「民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い伝えてきた、信仰、風習、制度、思想、学問、芸術、あるいはそれらの中心をなす精神的あり方」<sup>8</sup>など、との見方が定着しているようである。

以上の議論に沿って発展的に考えると、「伝統文化」は世代を超えて受け継がれる精神的な充実感と快適さを含め、個人やある集団を肯定する重要な意味合いを有している。ここで強調しておきたいことは、筆者が本論文で用いる「伝統文化」とは、19世紀末からオールドスで布教していたベルギーなど西洋からの宣教師たちによって記録され、民族学者たちによる研究の対象となったものも指す。

一部の文化人類学者はホブズボーム流に言えば、「伝統は創られた」<sup>9</sup>との立場を取っている。「伝統」も文化も「創造」されることにより生まれ、担い手により継承され、深化され、そして破壊されることもある。そのため、文化は能動的かつ流動的である。

あるモンゴル人文化人類学者は更に「文化変容はその社会を構成している政治や経済、ナショナリズムといった要因に影響され、また生活環境における多数者及び主流によって左右されるものである」と指摘している<sup>10</sup>。このような文化変容は目に見える客観的な要素だけではなく、そのコミュニティ自身に内在している人々の価値観や態度といった主観的な要因にも影響される。「伝統」に対し、「近代」とは「変化」を意味するのだといえ、この「変化」には深化・再編・消滅などのあらゆる可能性が含まれる。

一方、特定の「文化」のなかで、女性はしばしば民族精神の本質の貯蔵庫としての役割を投影する存在で、アイデンティティの要として表象されている。遊牧生活の継続において、女性は、例外なく主役であり、経済開発と遊牧文化の葛藤が起きている現状でも、彼女たちはやはり文化継承を担い続ける。

それでは、文化継承者の意識観念に働きかける教育とはいったいどのように継承者自身に影響し、さらに既存文化にいかなる変容をもたらすのだろうか。近代化が進む中、特に「教育」（主に学校教育）は女性自身にとって「変化」を引き起こす重要な要素となった。教育は女性が伝統文化の拘束から自立するうえで重要な役割を果たしてきた。女性は教育を受けることで、伝統文化から遠ざかることが可能となり、イデオロギー的束縛から自由になると考えられる。

そして、近代教育を受けた女性たちは、伝統文化と自分自身の密接な関係を切り離していく存在にもなりうる。すなわち、学校教育を受けた一部の女性たちは、伝統文化の変容そのものを助長する存在になり得る。

本論の調査対象となる内モンゴル自治区においてエスニック・コミュニティに生活する

<sup>7</sup> 『日本国語大辞典』小学館（2005）。

<sup>8</sup> 『広辞苑』第六版、岩波書店（2008）。

<sup>9</sup> ホブズボーム、E. レンジャー編『創られた伝統』紀伊国屋書店（1992）、pp. 487-489。

<sup>10</sup> Bulag, Uradyn, *Nationalism and Hybridity in Mongolia*, Oxford: Clarendon Press, 1998, pp.259-273.

モンゴル民族の女性たちは、近代教育の洗礼を受けた後、伝統文化とどのように向き合うのか。母から子への教育的機能を通じて、伝統文化を継承し続けることができるだろうか。それとも、伝統文化の変容を助長する存在になるのだろうか。変化の渦中にある現状において、現地調査を通じて正面からその実態を明らかにすることが求められている。

## 2 研究方法

本研究において、調査対象が現在の内モンゴル自治区オルドス地域である以上、現状をより動的に理解するためにも、教育学とともに、文献学と人類学の方法も同時に駆使し応用する必要がある。方法論としては以下の通りである。

第一に、文献研究である。本研究はモンゴルを対象としている。国際的には、モンゴル学は基本的に文献学であり、欧米と日本で発達した「東洋学」の中核を成してきた。したがって、文献研究を駆使しない限り、対象とする社会に関する分析も不十分と批判される。そのため、本研究でも文献資料については、『元朝秘史』などの年代記<sup>11</sup>、『中央アジア・蒙古旅行記』<sup>12</sup>、『東方見聞録』、『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』<sup>13</sup>など古い「史書」やヨーロッパ人の「旅行記」、現代の民族誌に焦点を注ぎ、本論の主演としてのモンゴル人女性に位置づける。こうした手法は本論文の客観性を示すためにも有用である。文献資料を用い、事実と証拠が整理されることにより、論点を設定し、本研究に価値と意義が付与されることが可能となった。

第二に、ことわざと風俗習慣、民間口承に関する人類学的フィールドワークに立脚した調査である。筆者自身がモンゴル草原で生まれ育った体験を一種の参与観察のデータとして生かし、故郷のオルドス<sup>14</sup>でのフィールドワークを通して把握した内モンゴルの社会変容を踏まえながら、「チンギス・ハーンの八白室祭祀」<sup>15</sup>、「モンゴルの軍神スウルデ祭祀」<sup>16</sup>、「火の祭祀」など民間信仰、祭祀に関する行事を考察し、女性の地位や役割を抽出する。そのうえで、モンゴル牧畜民の実生活を土壌にしたしつけ（子育て）を考察の視野に入れつつ、モンゴルの伝統的な家庭教育の基本とも言える口承文芸と禁忌（タブー）をモンゴル独自の教科書として構想し、資料を収集した。既に先学による豊富な人類学的成果や現在でも行われている民間信仰や祭祀の考察及び口承文芸が実存する証拠となって、本研究の信頼性を示すことができる。

第三に、質的調査の方法として主に個人へのインタビュー調査を行った。調査対象地の

<sup>11</sup> 本論文では、小澤重男訳『元朝秘史』岩波文庫〈上、中、下〉（1997）を用いる。

<sup>12</sup> プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社（1965）。

<sup>13</sup> ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』平凡社（1971）。

<sup>14</sup> オルドスという言葉はトルコ系の言葉であり、トルコ語で「宮廷」を意味する「オールド」を語源としている。オルドスはオールド＝宮殿という言葉の複数形の名詞である。楊海英、前掲書、『モンゴルの親族組織と政治祭祀—オボク・ヤス（骨）構造』、p. 181。

<sup>15</sup> チンギス・ハーンの八白室祭祀は平時の「信仰祭」や毎月の「月祭」があり、最大級の祭祀はオルドス歴の6月（太陰暦の3月）21日にオルドスのエジンホローにあるチンギス・ハーン廟で行われる。

<sup>16</sup> 軍神黒三叉（ハラ・スウルデ）の祭祀ともいわれ、八白室の祭祀と同時にされる。

オルドスには、2010年から2016年にかけて、回数を重ね訪問し、調査対象者と継続的な連絡と関わりを保ったうえで、信頼関係を築きながら真実を引き出すことに努めた。インタビュー調査は対象者の得意な言語（モンゴル語或いは漢語、対象者によって異なる）で行なった。質問の際、言語的なデータだけではなく、語り手が出来事を振り返る時間を持ち、当時の感じたことや認識を思い出せるようにした。こうして本人の感情や考え方も含めた行動観察により深堀できる内容を記録し、一次標本資料として収集することに試みた。そのため、個別性と代表性を認識する証拠として資料価値を有していると考える。録音データの質的分析方法を用いるにあたり、手順としては、テープを逐語録として文字に起こし、これを繰り返し精読し、文意を確実に把握したうえで表現上の修正を入れながら日本語に訳した。

筆者が行った主なインタビュー調査として、以下を挙げることができる。

1. 女性教師に対する調査4名（調査地：オルドス、調査年：2010年）
2. 教育環境と文化継承に関する調査9名（調査地：オルドス、調査年：2012年）
3. 伝統文化の深化に貢献した女性に対する調査9名（調査地：オルドス、調査年：2011年-2016年）

以上計22名の20代から80代までの幅広い年齢層を設定し、時系列による文化の変容がどのように現実のなかに投影されているかを半構造化インタビューで明らかにした。時代背景を反映しながら文化（オルドス・モンゴル独自の伝統文化における代表的な要素）を教育という手段で、どのように伝達したかという調査を実施した。

質的調査データの分析手法としては、オープンコーディングや焦点的コーディングで調査内容を具体的にラベル化し、中核となる現象を抽出して帰納的アプローチで考察に繋げた。

第四に、さらに、インタビュー調査とともに質問票調査も実施し、質的調査で提示された問題を実証する共時的検証方法を用い、数値化できたデータから調査対象者の集団の性質を統計的に探ることを試みた。量的調査の一次標本資料は、質的調査の結果を検証し、多様性と普遍性を認識する証拠として資料的価値を持つものであろう。そして、オルドスで教育を受けている女性たちは、どのような近代教育を受け、さらに教育という手段で上の世代から文化をどのように受け継いでいるのかを質問票調査により立証する。具体的には、女性教師、女子高校生への教育意識に関する質問票調査70名、（調査地：オルドス、調査年：2010年）、女子中高生への「生活空間」や「家庭生活」での文化観に関する質問票調査206名（調査地：オルドス、調査年：2012年）を実施した。以上における計276名の次世代となるモンゴル人女子を対象に調査を行い、再現性の高いデータ収集に努めた。

インタビュー調査、及び質問票調査では、主にモンゴル人女性と伝統文化との二者関係、その間に介在する教育という存在に着目し、論文の趣旨に向けて焦点を絞り、検証していくことを目的としている。

第五に、『内モンゴルの女性たち』という唯一モンゴル語で出版されている雑誌の素材を

一次資料として利用し、時代に沿って変容している女性のあり方を通時的検証方法で取り込んでいる。これは、補論で論じられている部分である。

モンゴルの場合、内モンゴル自治区であろうが、モンゴル人民共和国であろうが、ともに社会主義的な近代化を経験した。モンゴル人民共和国における女性の伝統文化の継承及び社会主義的な「発展」については、近年、トゥルムンフ・オドントヤが「語り」と女性誌の分析を通して再現している<sup>17</sup>。彼女の研究手法は有効で、筆者も本論文の中で一部、その手法を発展的に踏襲している。女性誌の分析は、整理された資料として、本研究の客観性を裏付ける。

以上、研究方法について述べてきた。ただし、繰り返しになるが、モンゴル社会にについて調査研究する際には、東洋学(歴史学)の伝統を最大限に消化しながら、人類学と社会学的なアプローチを併用しなければならない。本研究はそれを常に自覚し、複数の方法と成果を生かしていくよう工夫している。

### 3 資料と先行研究

#### 3.1 旅行記と年代記に登場するモンゴル人女性

これまでのモンゴル関連の古い年代記やヨーロッパ人の「旅行記」、それに現代の民族誌における女性について、説話のなかの女性や歴史人物の美談がみられる。

まず、『元朝秘史』はモンゴル人自身が書き残したチンギス・ハーンとその息子のオゴダイ・ハーンの同時代史である。詳しくはこれから整理、記述していくが、モンゴル人の開祖チンギス・ハーン一族の英雄たちはすべてその母親や夫人たちの果たす経済的、政治的な役割に大きく依存していたことは、研究者たちに共有されている。一例を示すと、チンギス・ハーンは遠征する度に必ず母親と夫人たちの意見を聞いてから慎重に判断していた。このようなモンゴル人女性についてモンゴル帝国期に西洋からやってきた旅行家や宣教師たちもまた記録を残した。

『元朝秘史』に次いで、ヨーロッパ人の視点で観察されたモンゴルは、『中央アジア・蒙古旅行記 遊牧民族の実情の記録』(カルピニ、ルブルク)と『東方見聞録』(マルコ・ポーロ)の中から読み取れよう。

そうした年代的書物と西洋人の記録はセクシュアリティあるいはジェンダーの視点から女性に焦点を当てた現代的な研究とはいえないが、今日においても継承されている女性たちの変わらぬ過去を再構築する上で、欠かせない重要な歴史的資料であることは間違いない。今日の女性学の視点から検討しても、歴史の中で登場する女性の地位や役割はモンゴル社会においていかに大きいものであったかが浮き彫りになってくる。農耕社会と異なり、生活の基盤である家畜の管理と再生産の重要な役割を女性が中心に担ってきたため、

---

<sup>17</sup> トゥルムンフ・オドントヤ『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから—』東北大学出版会(2014)。

必然的に農耕社会内の「主役ではない女性」とは全く異なる姿を歴史的記録から抽出することが可能である。

### 3.2 近代におけるモンゴル人女性に関する人類学的研究

上記で示した文献資料以外でも近代社会で活躍した女性像について記録した資料は豊富にある。ベルギー人の宣教師モスタールト<sup>18</sup>はオルドスに約 20 年間滞在し、数々の民族誌を上梓したが、その一部は『オルドス口碑集』<sup>19</sup>という形で翻訳されている。いわゆる「口碑」と呼ばれる歌・民話・諺の中に女性をめぐるジェンダー的な表現が多くみられる。モスタールトと現地で知り合い、その作品を積極的に日本に翻訳し紹介した磯野富士子は『冬のモンゴル』<sup>20</sup>という民族誌を公刊している。彼女は遊牧民の家庭における女性がいかに乳製品の作成と家畜の管理に関わっているのかについて関心があった。また、嫁と姑との関係を分析し、女性の地位が決して低くないと立論している。

ウノ・ハルヴァの『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』<sup>21</sup>は、シベリアの諸民族とモンゴルの宗教信仰を網羅した民族誌であるが、神聖視される女神、祭祀活動における女性の役割を狩猟採集と遊牧生活との関連で描いた。ソ連が崩壊した後、西側諸国の文化人類学者たちがモンゴルでフィールドワークを実施するようになると、アメリカのモンゴル学者<sup>22</sup>の著作も現れ、チンギス・ハーン一族の中で王女たちが果たした政治的な役割をまとめている。遊牧社会における男女平等の精神が王女たちの政治的な活躍を創出したと結論している<sup>23</sup>。

社会主義時代のモンゴル人民共和国に留学し、改革開放期の内モンゴル自治区でも調査した小長谷有紀は「草原の国を変えた女性たち」<sup>24</sup>の中で、政府がいうところの「解放されて主人公となった新しい時代の女性たち」を描いた。

また、オンドルナ(温都日娜)は内モンゴル自治区東部の蒙漢雑居地帯における婚姻関係、それも族際婚に注目し、現地調査に依拠した民族誌を刊行し、多民族混住地域における民族意識の創成の重要性に関し報告している<sup>25</sup>。

<sup>18</sup> モスタールト：1881年ベルギー生まれ、1905年から1925年の間オルドスにおいて伝道。主著として『オルドス口碑伝』、『オルドス語辞典』などがある。

<sup>19</sup> A. モスタールト著、磯野富士子訳『オルドス口碑集』平凡社（2003）。

<sup>20</sup> 磯野富士子『冬のモンゴル』中央公論社（1986）。

<sup>21</sup> ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』平凡社（1971）。

<sup>22</sup> Jack Weatherford, *The Secret History of the Mongol Queens*, New York: Broadway Paperbacks, 2010.

<sup>23</sup> 民族誌ではないが、文学作品として『賢妃マンドハイ』（Sh・ナツァグドルジ著、鯉淵信一訳、読売新聞社、1989。）と『蒙古传奇女杰』（乌云娜、套格套、杭盖、内蒙古人民出版社、2010年）も歴史上に活躍した女性の役割を強調している。遊牧というオープンな社会環境が「閉鎖的」な農耕社会と異なる「傑出した女性」を生んだ、と著者らは主張している。

<sup>24</sup> 小長谷有紀「草原の国を変えた女性たち」窪田幸子、八木裕子編『社会変容と女性：ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ出版（1999）。

<sup>25</sup> 温都日娜『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』溪水社（2007）。

以上の諸研究から読み取れる論点を端的にまとめると、社会主義を経験した世代から、資本主義化の変化の時代を生き抜こうとする若い世代までの女性たちのさまざまな事例が紹介され、モンゴルの近・現代史の一断面が描き出されている。社会主義の時代に牧畜生活から離れ、親となる世代に都市に定着する人々が増えたため、草原での祖母による養育代理という新しい伝統が生まれてきた流れが整理されている。そして、資本主義化での更なる都市化が進んだ結果、伝統文化も失われつつあり、雇用の相対的な減少によって結果的に女性たちが育児のために家庭に押し込められるということになっている現状に着目し、大きな転換期にあるモンゴルの社会変容を生きる女性の困難な状況をインタビューという手法で描き出している研究が多い<sup>26</sup>。

このように諸研究や民族誌において、ある特定の時期の事情を記録したものが多く、女性を主体として通時的に分析した研究は相対的に少なかった。女性は、女性性の存在や女性に関する事情を通して、ほかの研究課題を明確にする補助的な役割として書かれたにすぎないことがほとんどである。また、モンゴル国における女性について人類学的な研究はなされているが、異文化と共存するマイノリティとしてのモンゴルコミュニティにおける女性に焦点を絞った研究を、筆者は現時点で把握できていない。筆者は、こうした諸研究の成果をふまえたうえで、モンゴル民族の女性である筆者自身が受けた家庭教育、学校教育に基づき情報収集を行い、モンゴル人女性と教育について先学の空白を埋めようとしている。

### 3.3 教育の視点から書かれたモンゴル人女性に関する研究

近年においては、中国内モンゴル自治区の民族教育（学校教育）・モンゴル語の言語教育など教育学分野の中ではさまざまなテーマで研究がなされている。モンゴル独自の教育あるいはモンゴルの伝統的な家庭教育の視点からアプローチした研究は、管見の限り蓄積されていない。

そもそもモンゴル東部の近代的な教育は日本と深く結ばれている。それは、モンゴル人が近代的な教育に目覚めた時に、日本はモデルとなる存在と認識されたからであろう。例えば、ハラチン・モンゴルの親王グンセンノロブに招聘された河原操子の『カラチン王妃と私』<sup>27</sup>はどのような近代教育をモンゴル人児童に対して実施したかを詳しく記述している。彼女の活動に対するモンゴル人の評価は高く、「モンゴル民族の心に生きた女性教師」とも呼ばれている。その後、人類学者鳥居龍蔵も夫人のきみ子を帯同してハラチン王府に入る

---

<sup>26</sup> 当然、現代社会主義時代の女性たちもまた共産主義運動の犠牲ともなった。例えば、楊海英著『チンギス・ハーンの末裔』草思社（1995）と『墓碑なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』岩波書店（2009）は文化大革命期におけるモンゴル人女性たちの運命を活写している。女性たちはそのジェンダー的な特性も一因となって、性的な被害にもあったが、その点については、楊海英の研究に詳しく述べている。

<sup>27</sup> 河原操子『カラチン王妃と私—モンゴル民族の心に生きた女性教師—』芙蓉書房（1969）。

が、夫人の鳥居きみ子は『土俗学より観たる蒙古』<sup>28</sup>や『満蒙を再び探る』<sup>29</sup>といった優れた民族誌を上梓している。近代教育の試みとモンゴル人たちが示した反応などについての情報は、上記の民族誌から読み取ることができる。近年では新保敦子が「満洲国におけるモンゴル人女子青年教育」<sup>30</sup>や「改革開放政策下での中国エスニック・マイノリティと中等教育：モンゴル民族に焦点を当てて」<sup>31</sup>などの論考を世に送りだしている。満洲国時代の豊富な資料と現地でのインタビューにより、東部内モンゴルの女子教育の流れが整理されている。

近年、ジョー・ジンジュー(Zhao Zhenzhou)は高等教育機関に進学したモンゴル人の教育の場における民族意識の葛藤、文化の維持方法について、社会学の手法で分析した成果を出している<sup>32</sup>。また、ウルゲンは内モンゴル自治区西部ウラト地域での調査に基づいて、「モンゴル民族」を対象とした教育政策と制度の変遷、実態について研究を行っている。彼は、政府が唱える「中華民族多元一体格局」論に立脚した教育は民族間の調和(和諧)を優先とした政治政策である、との結論を導き出している<sup>33</sup>。更に、ハスゲレルは教育学の視点で「少数民族としてのモンゴル人」<sup>34</sup>が学校で受けるバイリンガル教育、英語教育に注目した成果を呈している。彼女は、内モンゴル自治区の現行の教育政策ではモンゴル人の自民族の歴史・文化・母語の継承は不十分であることを指摘し、民族教育の衰退危機の実態について描写している<sup>35</sup>。

以上、モンゴル人女性に関する共時的な研究・民族誌は多々見られるが、変化の視点から通時的に分析しているものは少ない。言い換えれば、研究が行われた時期によって、研究課題が異なっており、着眼点も様々である。女性が伝統文化と関わる中、どのような教育者あるいは伝達者としての存在意義をもっているかという女性・文化・教育の三角関係の相関を分析した通時的なアプローチはまだ不十分である。

本研究の独自性としては、女性を伝統文化の保持あるいは深化に欠かせない継承者としての役割を持ち続けてきたこと、文化伝達の中でいかなる役割を果たしてきたのか、今後どのように伝統文化と対峙していくかという問題に焦点を当てている点があげられよう。そして、伝統と現代的な生活環境に生きるモンゴル人女性の現状を直視しつつ、女性の文

<sup>28</sup> 鳥居きみ子『土俗学より観たる蒙古』大鏡閣(1927)。

<sup>29</sup> 鳥居きみ子『満蒙を再び探る』六文館(1932)。

<sup>30</sup> 新保敦子「満洲国におけるモンゴル人女子青年教育—興安女子国民高等学校を中心として—」『東アジア研究』(2008)、pp. 3-17。『日本占領下の中国ムスリム』早稲田大学出版部(2018)参照。

<sup>31</sup> 新保敦子「改革開放政策下での中国エスニック・マイノリティと中等教育：モンゴル民族に焦点を当てて」『学術研究』(2011)、pp. 49-60。

<sup>32</sup> Zhao Zhenzhou, *China's Mongols at University, Contesting Cultural Recognition*, 2010, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

<sup>33</sup> ウルゲン『中国におけるモンゴル民族の学校教育』ミネルヴァ書房(2015)、pp. 105-107。

<sup>34</sup> 筆者も「少数民族」という言葉を便宜的に援用するが、この表現には漢民族中心主義的思想が内包されており、現在ではそれを極力、避ける研究者が増えている。

<sup>35</sup> ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容—バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐる—』現代図書(2016)。



化伝達に捧げている教育的役割を分析し、それを「継承＝教育」という視点からアプローチしている点にある。幅広い研究方法を用いて、女性を多角的に分析することに試みた。

換言すれば、本研究のオリジナリティは以下にある。

- ① モンゴル人女性を文化継承の担い手として位置づけ、通時的に考察したこと。
- ② 文化と女性の切離せない関係を検証し、モンゴルの伝統文化の再認識を試みたこと。
- ③ 教育と女性の相互関係を通して、モンゴル独自の教育及び教育の機能性を概念化したこと。
- ④ 文化、女性と教育の三点を一つの論点にまとめたこと。
- ⑤ 改革開放以後の社会変動の著しい内モンゴル地域において、ライフストーリー法やサーベイ調査を行い、文化変容及び文化継承の実態、そこにおける女性の姿をリアルに描き出したこと。
- ⑥ 伝統文化と文化の革新の調和を図りながら、新たな文化構築を図ろうとする女性像を模索したこと。以上である。

#### 4 論文の構成

本論文は、序章と終章を含めて計9章から構成されている。これは、文献研究と人類学・社会学という複数の手法を併用して本研究の課題に挑戦した必然的な構成である。

まず、序章では、本研究の対象であるオルドス・モンゴルの社会的背景から問題を提起し、研究課題を設定する。そして、先行研究を①「旅行記」・「史書」の中に登場するモンゴル人女性に関する歴史資料、②近代におけるモンゴル人女性に関する人類学的研究、③教育の視点から書かれたモンゴル人女性に関する研究の3点から検討し、本研究の独自性を示した。

第1章では、まず本論文の研究対象である調査地の選定理由を述べた。モンゴルの伝統文化の変容の最前線にある現地のオルドスは政治、経済、文化、地理的な面において独自性を持ち、本研究を進める上で最適な調査対象及び調査地であることを立証した。オルドス地域はその地理的な環境によりまさにモンゴル文化の伝統を比較的によく維持してきたにもかかわらず、近年は資源開発等により近代化が急速に進んできたという意味において、モンゴル文化の変容や未来を展望するうえで欠かせない調査地であると判断した。

第2章では、モンゴルというコミュニティにおける文化の源を探り、モンゴル人の精神世界のセクシュアリティ形成や信仰について述べた。そして、歴史資料における女性の地位や伝統祭事の中の女性の役割と忌避を再検討し、箴言やタブーにみる女性像の表出からモンゴル独自のジェンダー思想について検証した。ここでは主に伝統社会における女性の社会的な立場や役割はどうであったかを把握することを目指して、考察を進めた。

第3章では、モンゴル文化の基盤となる遊牧社会の特徴について論述し、男女の役割分業を分析した。その中でも、遊牧生業に従業しつつけた遊牧民女性に焦点を絞り、女性の主体的な役割について考察した。そして、衣食住においてモンゴルの日常生活の礎を築き、

女性の果たす役割を取り上げ、遊牧生業を支えるかけがえのない存在である女性の役割を分析し、女性と文化構築との切り離せない関係を明らかにした。

第4章では、モンゴルの伝統社会において、子どものしつけと母親の役割について検討した。歴史資料にみる「母の教え」(eji-yin suryal)をまとめ、モンゴルならではの子育ての特徴を分析した。モンゴルの伝統社会での教育は家庭教育であり、主として母親がどのような教育的役割を果たしていたのか、つまり、モンゴルコミュニティによってなされていた教育の独自性とは何であったかを解明した。ここにあたり、女性と教育の密接な関係について論じた。

第5章では、伝統文化の変容の要因となる教育のあり方を検討し、モンゴル人分部地域におけるカトリックの影響や日本から導入された近代的学校の創設について述べた。内モンゴルにおける近代教育の始まりは、西部のオルドス地区のカトリック学校を始め、東部のゾソド盟・ハラチン右翼旗<sup>36</sup>にも近代式学校が創設された。そして、河原操子や鳥居きみ子などの日本人女性教師が招かれ、モンゴル初の女学堂である毓正女子学堂が誕生し、その後、満洲国時代は興安女学院が創設された。西洋型のシステム化された教育を受けることによって、モンゴル人の従来文化や生活様式、そして、価値概念に大きな変化をもたらしたことを考察した。

第6章では、中華人民共和国の成立以降の民族学校の誕生と発展の流れを分析し、内モンゴルにおける民族教育の実態について述べた。モンゴル人の受ける教育は伝統的な家庭教育を経て、さらに近代的学校教育の影響も受け、最終的には「少数民族の教育」として定着している。この歴史的変遷がモンゴル人女性の受ける教育に影響を及ぼしただけではなく、生活様式や価値観にも影響を与えてきたことを論述した。そして、女性教師や女子生徒の教育意識に対して、調査を行い、さらに、民族教育の現状や問題点を取り上げた。

第7章では、オルドス・モンゴルの社会を舞台に、オルドスのモンゴル人家庭における文化継承の現状について多くの事例を取り上げて述べた。オルドスにおける近年の経済発展は、オルドス・モンゴル人の今までの生活様式と生産方式、また、遊牧民の人生観と価値観を質的に変えつつある。このように、経済開発と伝統文化の継承に矛盾や軋轢が生じる中で、オルドス・モンゴル人の文化伝承は重大な危機に直面しつつある。現地の実態調査を通して、女性と文化と教育の三者関係を確認し、分析した。モンゴル人コミュニティの生活環境の変化及び文化継承者である女性の価値観の変容が次世代の伝統文化の受容に対し、どのような影響を与えるのかを解明した。

最後に終章では、各章から得られた成果を総括し、近代化の到来はモンゴルの伝統社会及び独自の文化にどのように影響し、それによってモンゴルコミュニティの生活・環境・教育のあらゆる面においてどのような変化が起きたかを明らかにした。また伝統文化の保持と開発の葛藤が起きた場合、文化継承の可能性と矛盾はどのように克服されていくか、

---

<sup>36</sup> 清朝政府はモンゴル地域を6つの盟に管轄区した行政区の1つ、現赤峰市にあたる。

文化変容における女性のあり方がどのような教育的意義を有しているのか、そして、今後の文化継承の担い手の限界に着目し、全体を総括した。

補論では、内モンゴルが中華人民共和国の自治区になって以降、社会主義近代化がイメージし、創出した女性像について論じた。これは、理想と現実の間を生きる女性たちの実態を抽出する為の社会的背景に関する整理でもある。そのうえで、少数民族の教育の在り方は、モンゴル人女性の生活様式や価値観にどのような影響をもたらしているかを内モンゴルで発行されている女性誌の分析を通して検証した。

## **第 I 部 伝統文化及び家庭教育におけるモンゴル人女性**

### **第 1 章 調査対象地域の歴史的・社会的変遷と文化的特徴**

#### **はじめに**

本章では、オルドスの文化に焦点を当てながら、その歴史的、社会的変遷を踏まえつつ、モンゴルの中でも独特の文化が色濃く残っているオルドスの政治、経済、社会、地理的な独自性を整理し、検討する。

オルドスには新石器時代から人類が居住しており、文明発達地のひとつでもある。長年の歴史から紡がれた豊かな文化資産に恵まれ、複数の文化圏が交差する地理的位置に置かれ、伝統文化が温存されてきた。したがって、オルドスは、モンゴル人の文化継承を検討するにあたって有益な条件を十分備えているといえる。

モンゴル諸部の 1 つであるオルドス部が居住してきた高原地帯は、東・西・北の三面が黄河に囲まれ、南が万里の長城によって中国本土と隔てられ、現在の中華人民共和国・内モンゴル自治区西部に位置する（図 1-1、図 1-2 を参照）。地理学的には、モンゴル本土から切り離されているため、オルドスは文化的にも地政学的にも独自性を持っている。それにより、ほかのモンゴル部族、あるいは回族、漢族といった他民族からの攻撃を避けることができた。

15 世紀の頃、オルドスはモンゴル高原に活動するモンゴル部族連合のトゥメン(万戸=万人隊)、いわゆる「六万戸」の一つに数えられ、その右翼部に所属し、歴史に登場した。その後、鬼方、林胡、匈奴、鮮卑、タンゲード、モンゴルなど歴代遊牧騎馬民族の活動する舞台となり、周、秦、漢をはじめ、ここは常に中国本土と北方の遊牧系民族との抗争の地であった。

図 1-1



図 1-2



出所：Google マップ『中国地図』より筆者作成

オルドス地域の面積は 8.7 万平方メートルである。地域全体が波状の地形をなし、標高 1000～1300 メートルの高原に、岩石が露出している乾燥地帯で、降水量は年平均 200～500 ミリメートルである。北東部から南西部にかけてステップが広がっているが、砂漠も多い。特に北西部にクジュークチ(庫布齊)砂漠、南部にモーオス(毛烏素)砂漠が広がり、砂漠地帯の規模が大きい<sup>37</sup>。そのため、ここはまさに生態系破壊の最前線とも言える状況にいたっている。

### 1.1 オルドス・モンゴルの歴史

「オルドス」とはモンゴル語の「オールド」(=宮殿)の複数形として多数の宮殿を意味していたが、歴史的流れの中で部族名、地域名として使われるようになった<sup>38</sup>。

1260 年に元朝が建立され、その後 1272 年にフビライ(チンギス・ハーン)の三子マングラ(忙哥刺)が安西王になり、オルドス地域を領有した<sup>39</sup>。当時、オルドス地域には 4000 戸の遊牧民が置かれ、マングラ(忙哥刺)の私有牧場となっていた。この牧場は元朝の 14 大牧場の一つで、大量の馬が放牧されていた<sup>40</sup>。1369 年、元朝の順帝が大都(北京)を追い出され、元朝が滅んだ。1370 年に明朝の湯和の軍と元朝の虎陣の軍がオルドス地域で大戦し、明軍が 10 余万頭の馬・羊を得て、モンゴルを塞北へおいはらった<sup>41</sup>。

そして、1460 年代になると、マンドラ(満都魯)部などが率いたモンゴルは、ふたたびオルドス地域を領有するようになる。当時の明王朝にはマンドラ部を撃退する力がなく、清

<sup>37</sup> 本論文において、モンゴル語のローマ字表記はウイグル文字を転写したもので、モンゴル語のカタカナ表記は原則としてオルドス方言を忠実に表したものである。

<sup>38</sup> 楊海英『モンゴルの親族組織と政治祭祀—オボク・ヤス(骨)構造』風響社(2020)、p. 59。

<sup>39</sup> 宋廉『元史』中華書局(1976)、p. 143。

<sup>40</sup> 同上、p. 2553。

<sup>41</sup> 張廷玉等撰『明史』中華書局(1974)、p. 3753。

水営（現在の陝西省府谷県）から花馬池（現在の寧夏回族自治区塩池県）まで長さ 800 キロの長城を築いて防備にあたった<sup>42</sup>。1470 年、バトムンケ・ダヤン・ハーン（Batumöngke Dayan Qayan）がモンゴルを再統一し、部族連合の万戸トゥメン<sup>43</sup>を作り、オルドスはいわゆる「六万戸」の一つのトゥメンに数えられ、正式的に軍団名として歴史に登場した。オルドス万戸はその内部において、更に左翼と右翼に分かれていた。

歴史学者の岡田英弘は、チンギス・ハーンの四大宮帳オルドの祭祀を維持、運営していた集団である、と論じている<sup>44</sup>。四大宮帳オルドを携えた集団が緩やかにオルドス万戸に発展し、15 世紀後半に黄河南岸の高原に進駐する<sup>45</sup>。この集団は再編を繰り返しながらも、もっぱらチンギス・ハーンを祭る「ナイマン・チャガングル」（八白室）という祭殿を守り続けた<sup>46</sup>。モンゴルに占領されたこの高原地域に住むモンゴル人は、間もなくその名を広く知られるようになった<sup>47</sup>。そして、集団名がそのまま地名となったのである<sup>48</sup>。

モンゴル人は自らをオルドスと称したが、これは彼らの郷に移された「チンギス・ハーンの八白室」（ejen-ü naiman čayan ordu または ejen-ü naiman čayan ger）に由来する名である。『蒙古源流』にも「オルドスは主（チンギス・ハーン）の八白室を守った大恩人たちである」と記録され、オルドス部族はモンゴル帝国の始祖チンギス・ハーン生前の宮廷（チンギス・ハーンの八白室）を靈廟として奉祀し、またイフ・ジョー（大きい宮廷、ジョーは神を意味するチベット語であり、一般的に宮廷や寺として使われている）盟<sup>49</sup>としていた。元の時代にモンゴル高原に駐留し、チンギス・ハーンの靈廟を守護した王族の称号を「晋王」といい、この集団の長の「晋王」をモンゴル語でジノンと称する<sup>50</sup>。したがって、オルドス部族は元の晋王領を起源とする集団であると考えられている。

15 世紀の末頃、オルドス部族を含むモンゴルの西部はオイラト部族の影響下にあり、東部のチャハル部族を支配するモンゴルのハーンの権威は及ばなかった。16 世紀初頭、モンゴルのダヤン・ハーンはオルドスに次男のウルス・ボロドを婿入りさせ、ジノンとして送

<sup>42</sup> 同上、p. 4737。

<sup>43</sup> モンゴル語で「万」を指す言葉で、一万人の軍隊や行政集団を意味する。

<sup>44</sup> 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店（2010）、pp. 299-307。

<sup>45</sup> モンゴル帝国内には、ウリヤンハン（Uriyanqan）という部族があった。ラシードウッディーンの『史集』によると、このウリヤンハン部族はもともとヘンティエー山のブルハン・オーラ地方（現在のモンゴル国内）でチンギス・ハーンの陵墓を守っていた。「奴隸」である故にほかの部族から嫁をもらわず、「内婚制」をとっていたという。彼らの一部が後に南下して、ダヤン・ハーンがオルドス部を征服した時はダヤン・ハーンに従ってオルドス各地を転戦したという説もある。こちらはオルドス万戸の再編を物語っている。楊海英「家畜と土地をめぐるモンゴル民族と漢族の関係—オルドスの事例から—」『民族学研究』〈55、4〉（1991）、pp. 455-456。

<sup>46</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀—オボク・ヤス（骨）構造』、pp. 59-61。ラシード（拉施特）『史集』商務印書館（1985）、pp. 259-260。

<sup>47</sup> A・モスタールト著、石野富士子訳『オルドス口碑集—モンゴルの民間伝承』平凡社（1966）、p. 3。

<sup>48</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀—オボク・ヤス（骨）構造』、pp. 59-61。

<sup>49</sup> 盟は地方行政区画の一。モンゴルの行政上もっとも上位の区画で、日本の県に当たる。現在の内モンゴル自治区における行政区画を高い順に並べると、市・盟（ayimay）→旗・県→街道弁事処・鎮・郷・ソム→居民委員会・ガチャー・村委員会となる。

<sup>50</sup> 楊海英『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成』風響社（2004）、pp. 37-39。

り込んだが、ウルス・ボロドはオイラト部族のイブラヒム・タイシによって殺害された。

そして、イブラヒム・タイシが1510年にダヤン・ハーンによって滅ぼされ、モンゴルが再統一された。その時、オルドスは同じく西部のトゥメンであるトゥメト部族に婿入りしていたダヤン・ハーンの三男のバルス・ボロドの支配下に入った。オルドスにいたバルス・ボロドは父ダヤン・ハーンの死後、チャハル部族と大ハーンの位を継承した甥のボディ・アラクを差し置いて一時はハーンを自称するほどの勢力を誇った。しかし、バルス・ボロドの死後、彼の長男のグンビリクがオルドスを継ぎ、次男のアルタンがトゥメトを継ぎ、オルドスとトゥメトは再分割された。1532年、グンビリクがチェチェン・ハーンと称し、ウリヤンハン部族を含むモンゴル各部を支配することになる。それ以降、チェチェン・ハーンはオルドスを離れることなく、オルドス東部の河套平野から各地へと広がる。

1542年、オルドスにいたグンビリクが死去し、トゥメトのアルタンの勢力がオルドスを凌ぐようになり、アルタンはチャハル部族の大ハーンからハーンの称号を許されるに至った。オルドスのジノン家はこれ以降、もっぱらトゥメトのハーン家と行動を共にし、オイラト部族と戦って現在の青海を占領した。そして、ジュンガリアやチベットまで侵攻するなど、西方に勢力を拡張した。1572年にはトゥメトと同じく明朝に支配された。その後、1648年にチャハル部族のリンダン・ハーンがトゥメト・ハーン家を滅ぼし、オルドスはチャハル部族に服属した。1634年チャハル部族のリンダン・ハーンが青海地方で病死し、オルドス部族はほかの内モンゴルの諸部族とともに清朝に帰属した<sup>51</sup>。

1650年（清の順治7年）、オルドスが7つのホショー（旗）<sup>52</sup>に分けられ、イフ・ジョー・アイマグ（伊克昭盟）が設置された。この時からオルドスはイフ・ジョー盟（大きな廟の意味）という名を得、エジンホロー、ダラド、ジュンガル、ハンギン、ウーシン、オトク、オトギンエムネトホショーといった7旗で編成された。アイマグの支配者はダルガ（Daruy-a）で、ホショーの支配者はザサグ（jasay）である。ダルガ（Daruy-a）は有力なザサガ（jasay）の中から選ばれる。ホショーとは元来満洲族の軍事制度であり、清朝が成立してモンゴルを支配するようになったとき、その制度をモンゴルにも適用した。オルドス王家であるバルス・ボロドの後裔を各旗の旗長として世襲した。そして、オルドストゥメンはイフ・ジョー（大きい宮廷）盟に改名され、オルドスは行政名から単純な地域名に変わった。

<sup>51</sup> 宮脇淳子『モンゴルの歴史』刀水書房(2002)、p.177。

<sup>52</sup> 地方行政区画の一。モンゴルの行政上もっとも上位の区画の次に当たる区画。「旗」（qosiyu）・「鎮」（sum）は内モンゴル自治区における下位行政区画である。「旗」は中国の「県」レベル区画であり、「旗」の下位単位として「郷」レベルの「鎮」・「ソム」がある。「鎮」を設置する条件は、1963年以前、常駐人口（その地域の戸籍をもっている人）が2千人以上、非農業人口が50%以上としていた。1964年からは、常駐人口が3000人以上、非農業人口が70%以上、あるいは常駐人口が2千5百人から3千人、非農業人口が85%以上となった。1984年以後、「旗」（旗）の地方政府機関の所在地、あるいは総人口が2万人以下の郷において、郷政府所在地の非農業人口が2千人を超えた地域；総人口が2万人以上の郷において、郷政府所在地の非農業人口が郷総人口の10%以上を占めている地域；あるいは少数民族地域、人口が少ない辺境地域、山地、あるいは小型工業と鉱区、小港、観光地、国境地域では、非農業人口が2千人以下でも鎮を設置することができるとした。

1660年代、初代ダルガ(Daruy-a) エリンチン(額麟臣)が「ナイマン・チャガングル」(八白室)をワン・ホシヨー(Wang qosiyu)、今日のエジンホロー・ホシヨー(ejjen qoriy-a qosiyu)に置き、ウリヤンハン部族をその周辺に定住させた<sup>53</sup>。同時に、これがオルドス・モンゴルの由来でもあると見られている。

清朝の統治に続き、中国の国民党と共産党の内戦が起き、1947年に内モンゴル自治区政府が成立したが、後の1949年に中華人民共和国のもとで最終的に綏遠省が廃止された。そして、イフ・ジョー盟は行政区として再び復活し、1956年に内モンゴル自治区に加わった。このイフ・ジョー盟は、2002年に「盟」から地方行政区画の「市」に変更され、オルドス市となってから現在に至っている。

## 1.2 文化としてのモンゴル

元朝が中原を追われてからのことは、『元朝秘史』の原典の序文などモンゴル語年代記にも記されているが、チンギス・ハーンの遺品を伝えるという「八白室」がこの地にあるところから、オルドス地域はモンゴル人にとって特別な意味を持っていた。

モンゴル人の特徴ある風俗習慣のひとつにチンギス・ハーン祭祀がある。これは組織化、制度化されたモンゴルの祖先(偉人)崇拝である。チンギス・ハーンがばらばらの小さな部族らを統一することによって現在のモンゴル民族が形成された。チンギス・ハーンがモンゴルの創始者であり、「モンゴル」は彼の支配下に入ったすべての部族の総称である。オルドスの人たちの習慣は古い伝統を強く見守るもので、その一番の特徴としては、チンギス・ハーンを信奉することであり、すべてのことはこれに基づいて行われてきた。そのため、チンギス・ハーン抜きにモンゴルについては語れない。

また、チンギス・ハーンの姿を神々しい永久不滅の聖者とし、ボゴド・エジェン、すなわち「聖なる主」と呼ぶ。オルドスは元朝建国以来、「チンギス・ハーンの八白室」を霊廟として奉祀し794年の歳月が経つ。この長い歴史過程において、現在でもオルドスで「チンギス・ハーンの八白室」を祭ることは変わることがなかった。

オルドス部族のなかでも、ダルハド氏族は「八白室」の守護担当であり、「チンギス・ハーンの八白室」を祭る祭殿の祭祀を主宰し、祭祀儀礼を継承し続けている。ダルハド氏族は1227年、チンギス・ハーンが死後以来約800年間(文化大革命の10年間は閉鎖された)、霊廟を守り続けてきた。ダルハド人はこの数百年に渡り、御霊を慰める「jula」(灯明)が消されたことがないほど忠実な氏族である。このように守られてきた「八白室」は、全モンゴル民族(すべての部族を含む)の「共通の信仰」であり、彼らにとって精神的な拠り所となり政治の拠点にもなっていた。こうしたことからオルドスはモンゴルの歴史や文化において特別な存在であり、大きな役割を果たしてきた。

オルドスは「チンギス・ハーンの八白室」を霊廟として奉祀してきた歴史において、元

<sup>53</sup> 張穆『蒙古遊牧記』文海出版社(1965)、p. 63。

朝、明朝、清朝、中華民国などいくつかの王朝時代を経てきた。数多くの戦いで勝利をおさめる度に、モンゴルのハーン達は最大の即位式をチンギス・ハーンの廟の前であげることが定められており、オルドスは内モンゴルにおけるモンゴル文化活動の中心地の一つともなった。

また、ダヤン・ハーンの二子バルス・ボロドが漠南の西半部を治め、その子グンビリクが居を河套に定め、オルドス部族の祖となったが、その孫に当たるホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジは文武にひいでた名士であった。また、『蒙古源流』(エルデニーン・トブチ)として知られている年代記の著者サガン・セチェンは、ホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジの曾孫である。彼の学識と史書編纂ならびにその根底にある仏教信仰、そして『蒙古源流』に記されるホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジの武勲、これらすべてが称揚され、崇拜の対象ともなっている。加えて、十七世紀後半に『蒙古源流』がオルドスにおいて書かれたということも、モンゴル研究にとって、この地を由緒ある土地にしている。

オルドスはまた、早くからチベット仏教の影響を受けた土地である。グンビリクの弟のアルタン・ハーンはオルドスの北にあるトゥメト部の祖となったが、彼はチベットを討った折にチベット仏教に帰依した。ホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジは16世紀後半にオルドスのウーシン地方に登場し、現在の内モンゴル自治区の区都であるフフホト市を中心に大勢力を誇ったトゥメト部の首領のアルタンとともに活躍した。

最も顕著な活躍として、ホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジが属するオルドス部の首領を主たる勢力として行われた新疆や青海地方への遠征活動が知られている。すなわち、この遠征の一環として、仏教への帰依を深めるアルタンとチベット仏教ゲルク派の高僧三世ダライラマ・ソナムギャンツォを青海地方のチャブチャールで会見させたことだった。このでき事は、その後のモンゴルにおける仏教信仰の広まりのきっかけとして評価されることが多い。この評価が示すように、ホトクタイ・チェチェン・ホン・タイジは今日も衰えることなくモンゴル人が信仰する仏教の拡大に大いに貢献した人物であり、オルドスにも多くのラマ廟がたてられた。『蒙古源流』がモンゴルの祖先を仏教と結びつけて説いているのも、このような背景から出ている<sup>54</sup>。

モンゴルの伝統的信仰体系あるいは風俗習慣に、仏教の要素が所々みられる。現在でもチンギス・ハーン祭祀の一隅にラマ(チベット仏教の僧侶)が参加し、何らかの経文を唱え、一部の祭文に仏教的な要素や影響が確認されている。インドに発祥し、中央アジアやチベットを経由してモンゴル人のもとに到達したチベット仏教が、モンゴル人の祖先(偉人)の崇拜に影響を与え、今日まで伝わっている。

ところで、「チンギス・ハーンの八白室」を奉祀し、見守るためにオルドスに集まってきたモンゴル人たちは独特な儀式やしきたり、タブーを尊奉している。また、彼らは「天」

<sup>54</sup> 井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察—“二人のセチェンの祭祀”を事例に一」『北東アジア研究』〈別冊、1〉島根県立大学北東アジア地域研究センター(2008)、p. 228。



や「大地」といった自然の全てを祭り、火の神様にも祈りを捧げる。普段の生活でも、例えば、刀やナイフなどを天に向って指してはいけない、家の敷居で立たない、子どもの誕生日は一回しか祝わない（一生に一回だけ誕生日を祝う）、白と青は縁起の良い色で、黒色を禁忌とし、2.8.9 を縁起の良い数字とするなどがある。また、「聖主・チンギスの二匹の馬」（*ejen boyda-yin qoyar jiyal*）という口承民話があり、今もなお結婚式や祭りなどで歌われる民謡になっている。そして、農曆や西暦とは別のモンゴルの年代もあり、これは「オルドス年代記」とも言われている。このように、オルドス独特の文化や習慣は多く残されている。

ほかにも、オルドス独特の文化や習慣の例としては以下のようなものがある。まず、男の子が生まれたらゲル（モンゴル式の円形をした住居）の出入り口の上部にモンゴル民族の勇敢の象徴である弓矢を飾り、健康な成長を祈る。末子相続のモンゴルでは、長男をはじめ、息子たちは次々と本家を離れて独立した世帯を持ち、親から譲られた家畜を増やしていく。長男が家を継ぐ民族は多いが、モンゴルでは長男は出世し、末っ子は家を継ぐ文化がある。

また、モンゴル人の精神のシンボルである「ハラ・スオルデ」（戦いで使われていた旗）が今現在もオルドス・モンゴル人の各家庭で祭られている。玄関の前にチンギス・ハーンの「黒の旗」（ハラ・スウルデ）を象徴した旗（サンギーン・バガナ）を立てている。旗の部分をまたヒーモリとも言い、布切に馬と経文を印刷したものである。これはオルドスのモンゴル人たちが祭っている旗幡の一つで、ほかの部族にはない祭祀である。この旗を立てることはモンゴル民族の一部族であることを表し、玄関の前に旗を立てているかどうかでモンゴル人の家か漢民族の家かと区別することができる。また、チンギス・ハーン生前当時の身分役割によって、旗が1本と2本に別れている。

そして、オルドスは各領域に独自性を持っているだけに、古今において、国内外の多くの研究者たちに注目されてきた。

ベルギー出身で、聖母聖心会の神父であるモスタート(Mostaert Antoine) は、1906年から1925年にオルドスで宣教活動をし、多数のモンゴル語の文献を収集し、後に言語的・歴史的研究に専念していた。彼の著作には『オルドス記』(*Ordosica*,1934)や『オルドス口碑集』などがある。

また、チンギス・ハーン祭祀の研究を行っている研究者は数名いた。例えば、ブリヤート・モンゴル人のジャムツァラーノは、1909年から1910年にオルドスで調査し、八白室を訪れた最初のモンゴル人の知識人である。彼は、チンギス・ハーン祭祀の政治的的重大性を目的とした研究を行った。そして、イタリア出身でドイツを拠点に研究活動を行うキョードー女史、ブリヤート・モンゴル出身のデリコフ、モンゴル国のリンチンやダムディンスレンはみなオルドスを研究フィールドとし、主にチンギス・ハーン祭祀の研究を行っていた。

東洋史研究者である和田清（東京大学）は『東亜史研究・蒙古篇』<sup>55</sup>でオルドスの名

---

<sup>55</sup> 和田清『東亜史研究 蒙古篇』東洋文庫(1955)。

前の由来や「チンギス・ハーンの八白室」を守り続けたダルハド支族の起源と継承について検証した。彼はモンゴル語や満洲語の資料収集に力を尽くし、明代のモンゴル史研究に大きく成果を挙げた。その著作『明代の蒙古と満州』<sup>56</sup>、『内蒙古諸部落的起源』<sup>57</sup>などにオルドスに関する記述がある。

これ以外に、オルドス出身の研究者としては、ホルチャバートル（1999年、ドイツのトゥビンゲン大学で博士学位を授与）、オーノス・チョクト（楊海英）も『チンギス・ハーンの祭祀』、『チンギス・ハーンの末裔』などの著書を上梓している。

また、オルドス現地で活躍されているソナム（Sonam オルドス出身、中国のモンゴル語学研究協会・民間文芸研究協会・民謡協会・民俗協会の委員、副監訳、チンギス・ハーン研究協会の副理事長）は『モンゴルの禁忌』<sup>58</sup>などを書いた。

今や、オルドスの結婚式、かまどの神の祭祀、オルドス・シューズ、ウーシンの歌舞文化、オトクのナイル文化、オボー祭祀などが2006年から2008年にかけて中国の「無形文化遺産」に登録された。このように、オルドス独自の文化や習慣が築かれ、伝承されてきた。漢族の文化の影響にさらされながらも、彼らがチンギス・ハーンの霊廟「八白宮」の祭祀を続けてきたことは、この地理的・文化的な特徴と深く関係があるといえよう。

### 1.3 定住牧畜の経済

昔から、オルドスの人々は狩や遊牧生活を営み、家畜の肉や乳製品、革製品などを製造し、漢人や回民から陶器や金属品を買い、物々交換などをしてきた。また、チベット・インドの文化が伝わってきて、建築、芸術、天文学が入り、モンゴル文化の発展を促進した。特に、モンゴルにおいて、チベット医学はとても盛んで、今でも医学界では重要な位置を占めている。チベットから伝達された医学はモンゴルで広がり、後にモンゴル医学とも名づけられるようになった。チベット医学を学び、チベットの医薬や治療法を使用しているモンゴル人の医者は多数にのぼる。今や、それを専門にした病院や蒙蔵（モンゴル・チベット）医学校も存在している。

オルドス地域は遊牧の好適地であるとともに、モンゴル高原から華北へ、また、華北からモンゴル高原へと通じる交通上の要衝であり、古くは匈奴と秦、漢が争奪した地帯でもあった。匈奴の呼韓邪単于は、後漢に従いこの地に宮廷をおいた。現在オルドスには、モンゴル民族のほかに漢族、回族が居住し、牧畜が主たる産業であるが、各地で農耕も行われている。

オルドスのモンゴル人たちは15世紀以前から軍隊と一緒に行動していたので、集団の規模が大きく、長距離の移動をとまなう遊牧を行っていた。遊牧のための移動では、同じオルドスの中なら、どこまでも制限がなかった。それについて、モスタールト（Mostaert）は

<sup>56</sup> 和田清『明代の蒙古と満州』（1934）。

<sup>57</sup> 和田清『内蒙古諸部落の起源』奉公会（1917）。

<sup>58</sup> Sonam, *Mongvol-un Čiger Yösun*, Öbür Mongvol-un Yeke Surıyayuli-yin keblel-ün qoriy-a, 1991.

次のように述べている。「自己の家畜群と一緒に遊牧移動する権利を持っているから……（中略）何処に住居を設けようと、それは自由である」<sup>59</sup>。それに反して、中華人民共和国建国後は移動距離が短くなったため、住居も次第に一家所に固定化するようになった。住居が固定化した原因に関しては、モスタールトは次のように分析している。「冬季、固定家屋の方が天幕家屋より暖かいからである。……（中略）天幕家屋の放棄も貧乏人ほど徹底している。裕福な者は、固定家屋のわきの一つか二つの天幕家屋を建てて、その中に住み、暑い夏を涼しく快適に暮らしていることが多い」<sup>60</sup>。

厳しい気候を持つモンゴルでは、植物の成長期は1年のうちおよそ4ヵ月しかない。このような自然条件の中で、モンゴル高原で遊牧生産活動が2000年以上営まれてきた。遊牧とは、人間と家畜が共に時間的、空間的な移動を通じて、草原の生産力を持続的に利用する生産様式である。厳しい自然条件の中、幾千年にわたって草原の生産力を利用してきたモンゴル人の遊牧は、人間と自然の融合を実現した模範とも言えるだろう<sup>61</sup>。

遊牧民は一年間にわたって、春営地、夏営地、秋営地と冬営地を巡る季節的な移動を行う。このような移動では家族全員がすべての家畜を追い、すべての家財道具を持って移動する。降水量や気温など気候変動と牧草の出来具合によって、移動回数が異なる。また、家族の一部のメンバー（男性労働力）が、家畜の一部を連れて、牧草の出来具合の良い草原を巡る短期（1～2週間）放牧をすることもある。こうした放牧行為はオトル（Otor）と呼ばれている。オトルに出かけるときに、テントを余分に持っていき、小型ゲル（移動式住居）とする。主なゲルに居残る家族、すなわち女性・子ども及び年寄りが、残りの家畜の放牧や乳製品の加工などの仕事に当たることになる<sup>62</sup>。

本来の遊牧とは、貧弱な植生を有効かつ持続的に利用できる生産方式として生み出されたものであり、草原は決して規則なしに自分勝手に移動して利用するべきものではない。しかし、内モンゴルでは清朝時代から開墾が始まり、漢人の農民の移住が急激に進んだ。そして放牧に必要な土地の確保ができなくなり、農耕社会への転換が見られた。近年、経済政策の導入と資源開発が従来の合理性を打ち破り、放牧生産活動に大きな影響を与えている。牧畜産業は昔ながらの自給自足的な遊牧から、定住畜産業に移行し始めた。さらに、遊牧という生活行為自体が行われなくなり、逆に草原生態系が大きなダメージを受けるといふ現象も起きている。

まずは、1950年代末期から1980年初期まで進められた「人民公社」（＝公有化）時代は、各家庭に一定の収入が平等に配分されることになっていたため、貧富の差も著しくなかった。しかし、牧草地の分割制度の実施によって、従来型の牧場は変貌し、近代的牧場への

<sup>59</sup> A・モスタールト著、磯野富士子訳『オールドスロ碑集—モンゴルの民間伝承』平凡社（1956）、p. 65。

<sup>60</sup> 同上、p. 77。

<sup>61</sup> 同上。

<sup>62</sup> Nachinshonhor.G.U、広瀬忠樹「モンゴル草原の生産力と遊牧」『モンゴル研究論集』〈6〉東北アジア研究センター、p. 60。

芽生えが始まったといえる。また、1981年の改革開放路線が本格化し始めた時から、「競争」という概念が導入され、オルドスの牧民と陝西省の漢族農民の間で、次第に省界を超えた活発な交易も行われるようになった。こうした新しい交易関係のなかで、漢民族の新たな進出もさらに促された。

モンゴル人の暮らしは移動式住居であるゲルによる伝統的な遊牧生活から定住式住居へと変化した。1990年代以降、牧畜地域における住居形態としてもっとも普及してきたのがレンガ造の固定家屋である。これは、定住化の浸透を象徴しているものでもある。中国政府による世帯単位の請負制度である「生産責任制」、「草原法」（1985年）、各家庭への家畜の配当、草原の所有権、使用权の確定がモンゴル民族の牧畜経営が従来の集団経営から個人経営へと移行させた。

次いで、段階的に牧地使用权が個人化されるようになると、各家庭では自分の土地を柵で囲うようになり、自由な放牧や移動が制限されるようになった。それに加え近年では、環境保全対策の一環である「退耕還林・退耕還草条例」（2000年）、牧畜地域に対して出された「退牧還草条例」（2003年）などにより、各地で家畜の畜舎飼育および半畜舎飼育が浸透した。また、前述の「草原法」にも、家畜の囲い飼いや、牧民の定住を支持、奨励することが明記されている。

牧畜民の最大の財産は家畜である。遊牧民は移動のため、本来は家畜以外の財産を所有する概念はなかった。しかし、定住生活をするると家畜以外にも各種の財産を貯めるようになる。オルドスの場合、一定の牧場に執着し、移動が不可能となったため、同一の土地でさまざまな方法を尽くして富を築かなければならなくなった。

そして、オルドスのモンゴル人社会はまさに大きな試練に立たされている。漢民族によるモンゴル民族の牧畜経営への介入によって、モンゴル民族の生産活動は抑圧されつつある。これがモンゴル民族の伝統文化と生活様式に大きな影響をもたらすことは明らかである<sup>63</sup>とする研究者もいる。

モンゴル人の社会・文化、生活様式は時代を経て、大きく変化を遂げてきた。それがもっとも顕著なのは衣食住の分野であるが、こうした物質文化の面における変化の背後にはこれと結びつく社会構造、人間関係、更には個人の価値概念的な変化が存在している。こうした現状を包括的に捉えることによって、伝統文化がここ最近においてどう変わってきたかを本論では究明したい。そして、これによってモンゴル人の将来的な文化のあり方を展望していくことが重要である。

また、オルドスだけではなく、内モンゴル自治区におけるほかのアイマグ（盟）においても、「モンゴル民族を主体としながらも、漢民族人口の多い地区」<sup>64</sup>と言われ、モンゴル民族が人口の面では漢民族より少数である。そのため、モンゴル人は内モンゴルの多くの地

<sup>63</sup> 楊海英「家畜と土地をめぐるモンゴル民族と漢族の関係—オルドスの事例から—」『民族学研究』〈55、4〉（1991）、p. 467。

<sup>64</sup> 奇守業『内モンゴル自治区地名志』内蒙古出版社（1986）、p. 329。

域において「主体」ではなく、マイノリティの立場にあることには変わらない。

このような経緯のもと、内モンゴル自治区では、モンゴル民族と漢民族を主とする多民族の雑居社会が形成されている。さらに、近年では町へ移住する人々が出てくるなど、従来の生活文化は激的に変化している。そのために、モンゴル民族と漢民族が婚姻関係を結ぶ事例は農村地域や半農半牧地域において増加し、近年では草原地域においても例外ではなくなってきた。さらに、遊牧業を離れることで、元来のモンゴル文化の基盤であった草原での生活や日常でモンゴル語を使用する生活から遠ざかっている。

以下では、そうした生活・文化の著しい変化について、オールドスにおけるいくつかの政策や事例を検証しながら検討していきたい。

#### 1.4 オールドス・モンゴルの社会変遷

遊牧は、自然に対して加工を加えず、家畜群を媒介とすることによって、所与の生態系をそのままの形で利用してきた。このように、エコ生活サイクルを保ち続けてきた遊牧の空間は、歴史の展開に連れて農耕や資源開発に丸呑みされてゆく<sup>65</sup>。

農耕産業と現代文明の系譜は、生産至上主義という要素が重視されている。遊牧は、過去の遺物とみなされ、すでに終焉の段階にあるとも言われる。近代国家の成立に伴って、ほとんどの地域で遊牧生活様式が変容を遂げている。旧ソ連邦中央アジアやトルコにおいても、1930年代から1950年代にかけて、遊牧民の定住化政策が強力に推進された。遊牧の空間は、国境を含む境界線によって切断され、移動を制約する様々な条件が課せられる。

モンゴル諸部族のなかでオールドスは独特な伝統文化を保持し、チンギス・ハーンの霊を祭る「聖地」だけではなく、地下資源の「秘蔵」でもある。近年、政府の資源開発により、オールドスは経済発展の「モデル地域」とされ、伝統文化と経済開発が激しい葛藤を起こした。以下では「内モンゴルにおけるモンゴル人の近代化」、中でも「オールドス型」「漢化」「定住化」「都市化」について、文化変容の背景となるいくつかの政策を事例に述べていくこととする。

##### 1.4.1 農地化と人口流動

###### 「漢人人口の流入」

清朝による統治の時期、内モンゴルの放牧地に開墾や農地化が始まった。モンゴルは、清朝にとって中国の統一と各地の制圧を維持する上で欠かせない軍事力であったため、清朝の朝廷に優遇されてきた。清朝前期において、モンゴル地域と漢人地域との経済的・文化的往来を制限し分割統治する「蒙禁政策」がとられていた。

しかし、中期になると、清朝はそれまで漢人移民の入居を禁止していたモンゴルに対す

<sup>65</sup> 松原正毅「遊牧からのメッセージ」小長谷有紀、楊海英編『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）、p. 15。

る優遇政策を一転して、「殖民実辺」政策をとり、北の辺境を充実させる目的で大量の「殖民」を放牧地に入居させ草原の開拓に従事させた。それに加え、アヘン戦争で多大な賠償金を払わなければならなかった清朝政府は、モンゴル人の土地を耕して金銭を工面していた。そして、戦乱や災害で土地をなくした農民の反乱をおさえるためにもモンゴルの土地は役に立った<sup>66</sup>。

また、18世紀に茶がモンゴルでは通貨の替わりになっていた記録がある。これは、茶が物々交換のもっとも基本的な商品であったことを意味する。モンゴルで茶葉を売買する漢人商人の数が増えるにつれて、品物の種類も多様化してきた。それに伴って、商人たちの欲望は、やがて家畜から土地に移るようになり、漢人商人の高利貸しに苦しむモンゴル人たちは牧草地を手放さざるを得なくなった<sup>67</sup>。

清朝末期から中国では「殖民政策」という用語が盛んに使われて、モンゴルへの「殖民」を奨励してきた。この「殖民地」という語は、その後の国民党政権時代にもモンゴル語で「庶民を繁殖させる場所」という意味で翻訳されていた。このように「民を増やす空間」という意味で、内モンゴルはまさに文字通りの「殖民地」に当たると思われる<sup>68</sup>。ちなみに、清朝末期に当たる今世紀初頭に、すでに内モンゴル総人口の3分の2を占めていた「殖民」である漢人は、現在約9割を占めるまで増えている。

清朝末期、1902年から漢人官僚の手による開発と改革を目指した「新政」の重要な政策の一つである「移民実辺」が実施された。同政策が推進された10年間(1902年~1911年)に、内モンゴルでは4300万畝あまりの放牧地が開墾された<sup>69</sup>。それと同時に漢人人口は次第に増え、1912年には155万人を超え、総人口(240.3万人)の絶対多数(64.5%)を占めるようになった。そして、中華民国時期の「北洋軍閥」、国民党政府の「屯墾」「軍墾」の実施に伴う漢人農民の入植によって、内モンゴルの漢人人口は1937年の時点で371.9万人(内モンゴル総人口の80.3%)になった<sup>70</sup>。

第2次世界大戦後から中華人民共和国建国後の1947年~1957年は、土地の改革が進み、小作の解放から自作農が作りだされた。さらに、中華人民共和国成立後の内モンゴルにおける行政区画の変更<sup>71</sup>、国家計画による内モンゴルへの移民および漢人農民の自主的流入などにより、漢民族の人口は1956年には811.2万人になり、同地区の総人口の86.7%を占めるようになった<sup>72</sup>。

そして農業の共同化から合作社が成立し、全国的に人民公社がつくられた。当時草原に

<sup>66</sup> フフバートル『私が牧童だったころ』インターブックス(2000)。

<sup>67</sup> 同上、pp. 165-166。

<sup>68</sup> フフバートル、前掲書、pp. 165-166。

<sup>69</sup> 郝維民・齊木徳道尔吉主編『内蒙古通史綱要』人民出版社(2006)、pp. 23-26。

<sup>70</sup> 内蒙古統計局『輝煌的内蒙古』中国統計出版社(1999)、pp. 256-257。

<sup>71</sup> 1954年、漢民族240万人、モンゴル民族とその他の民族5万人の居住する平地線、河套行政区を含む。綏遠省は内モンゴルへ合併された(『人民日報』1954年2月28日)。

<sup>72</sup> 内蒙古統計局、前掲書、pp. 256-257。

放牧されていた家畜数は十分な数となっていたが、こうしたときに国営農場がつくられはじめ、草原の乱開墾と移民が始まった。たとえば、第二次5ヵ年計画の期間（1953年～1957年）にオルドスでは上海農場などが開墾され、内モンゴル地域に合計19ヵ所の農場が作られ、その規模は19万9662畝にもものぼった<sup>73</sup>。

1960年代から1970年代にかけて、内モンゴルの人口増加は急激なものとなり、内モンゴル史上で頂点に達した。その最大の要因として挙げられるのが、自発的移住民に対する内モンゴル政党機関の「安置措置」であった<sup>74</sup>。具体的には、1957年7月後半から1960年6月までの間に、河北省や山西省など13省・地域から流れ込んできた87万2644人の漢民族が内モンゴルの各地に割り当てられた<sup>75</sup>。さらに、オルドスで砂漠化防止を目的として烏蘭布和沙漠周辺につくられていた「育草地」も、「沙漠を畑に」（沙漠変農田）という名目で190万畝開墾された<sup>76</sup>。しかし当時、オルドス（旧イヘジョー盟）党委の書記を務めていたボインバト氏の証言によれば、オルドスの開墾された放牧地のほとんどで耕作ができたのは最初の1年だけで、2年目には早くも砂漠化してしまった<sup>77</sup>。

内モンゴル地域の土質は表面が薄く、厳しい乾燥と苛酷な寒冷といった独特な気候風土を持っている。家畜が草を根こそぎ食べてしまったり、耕作で掘り起こしてしまったりすると、乾燥に加えて、砂礫性の土質になる。そのため、人間と家畜が過剰となり、人間・家畜・水のデリケートなバランスが崩れ、草原源、水源の不足が起こってしまう。

1970～1973年には内モンゴルにも大寨学習運動が拡大し、大規模な草原開墾が再び強力にすすめられた。文化大革命は1976年に終わるが、80年代までに開墾された草原の面積は2000万畝に及んだ。そのため、1980年代半ばになると、下記のような法律ができた。

「中華人民共和国草原法」（1985年6月18日、第六回全国人民代表大会常務委員会、第二会議で制定され、1986年10月1日に実施）

第七条：

…国家建設のため集団に固定した長期使用の全人民所有の草原を使用する場合、「国家建設土地徵用条例」の規定を参照し、徵用される側に相応な補償を支給し、かつ牧畜民の生産と生活を適切に確保（妥善保護）しなければならない…

第十条：

草原植生を嚴重に保護し、開墾並びに破壊を厳しく禁ずる。草原使用者が少量の開墾を行う場合、県クラス以上の人民政府の許可を必要とする。既に開墾して、しかも草原の砂漠化あるいは深刻な土壌流亡をもたらした場合、県クラス以上の地方人民政府

<sup>73</sup> 菅光耀、李曉峰主編『穿越風沙線』中国档案出版社（2001）、pp. 145-147。

<sup>74</sup> リンチン「大躍進期の内モンゴルにおける放牧地開墾・人口問題、政治と文化の間—小説における梁啓超の近代意識をめぐって—」『現代中国研究』〈25〉（2010）、p. 105。

<sup>75</sup> 宋工『中国人口—内蒙古分冊』中国財政経済出版社（1987）、pp. 174-176。

<sup>76</sup> 菅光耀、李曉峰主編『穿越風沙線』中国档案出版社（2001）、p. 143。

<sup>77</sup> 肖瑞玲等『明清内蒙古西部地区开发与土地沙化』中华书局（2006）、p. 241。

が一定の期間内草原を閉鎖し、当事者に植生の回復、耕作から放牧への返還を命じなければならない。

### 「族外婚の増加」

一方、こうした漢民族の大量の人口流動に伴い、モンゴル民族と漢民族の異民族間結婚である「族外婚」が増加した。族外婚の増加は、モンゴル民族と漢族の言語・飲食・慣習などの文化を相互に影響し、異文化間の差異の縮小を促進させた。さらに、お互いの文化を柔軟に吸収する要因を形成し、人々の固定的文化/慣習から脱却する意識を醸成し、民族文化の融合の促す契機でもある。

族外婚増加の背景には、交通と通信の発達・産業の発展・人口移動にともなう都市化の進行がある。また、人口の抑制、少数民族の優遇、「民族所属」の変更の許可など、各種の施策がモンゴル民族の人口を増加させた。族外婚に対して肯定的な見方が強くなり、婚姻の条件として民族所属が重視されなくなるほど、文化の相互浸透に作用を働いた。

このようにモンゴル人と漢人の文化的意識が複合、あるいは両者の間を揺れ動きながら、それらの区別が曖昧になることで新たな民族意識が創られる。こうして今日の社会状況の下で創出された新たな「民族」意識は、血統的モンゴル民族、法的モンゴル民族、文化的モンゴル民族、イメージ的モンゴル民族という諸要素が、一個人のなかに複数存在することで形成されている<sup>78</sup>。

1980年代初期、所属民族の変更が認められ、1978年から1990年の間に、所属する民族を少数民族に変更した者は約200万人（同時期の少数民族人口増加数の50～60%）にのぼる。また、当時の内モンゴルの場合、1982年の上半期だけで、モンゴル民族へ30万9300人（当時のモンゴル民族の人口の12.44%）、満洲族へは約12万5500人など、約45万人が出自を変更し、漢族が23万7600人減った<sup>79</sup>。こうした少数民族人口の大幅な増加には、上述の所属民族の変更のほかに、異民族間の結婚による家族が所属民族を少数民族に選択したことが関係している。

以上のように、「人口増加」によって、モンゴル民族と漢民族の文化の差異が縮小され、再編成された。さらに、族外婚関係の複雑な実態は、中国における民族構成の多様化とそれにとともなう民族意識の変化を生みだした。したがって族外婚家族の次世代の民族意識は、複合的で重層的な新たな民族意識として再構成され、これは従来の固定的な民族概念では理解することのできない変化でもあるだろう。

### 1.4.2 禁牧政策

オルドスでは、従来、広い草原に羊やヤギなど家畜の放牧をしていたが、現在、そのような生活風景は見られなくなっている。それは、砂漠化のもっとも進んでいる地域の一つ

<sup>78</sup> オンドルナ「多民族混住地域における婚姻と民族意識の関連—内モンゴル赤峰市地域のモンゴル民族と漢族の族際婚姻を中心に—」『北東アジア研究』〈10〉（2006）、pp. 123-125。

<sup>79</sup> 張天路『中国少数民族社区人口研究』中国人口出版社（1993）、p. 5。



になったことに原因がある。すなわち、砂漠化の原因として特に中国政府が問題視しているのが、遊牧民による過放牧である。具体的に、カシミア需要や遊牧民人口の増加に伴い、草の根まで食べつくすヤギの数が急増したことがその理由だといわれる。

そのため、政府は砂漠化の進行した地域に緑を復活させようと、2000年以降、「緑地回復政策」を実施し始めた。それが、家畜の数量制限と「禁牧政策」である。この政策は、一戸で飼うことのできるヤギの数を制限し、飼育法も柵の中に限定する、というものである。

20世紀初めにモンゴル国に関して優れた調査と分析を行ったロシアのマイスキーは、モンゴルの遊牧を「原始的牧畜」とし、その特徴として、それが「自然と偶然の為すままに」行われるものであると特徴づけている<sup>80</sup>。モンゴル史、中央アジア史を専門とする吉田順一によると遊牧は、モンゴルの地理環境を活かしたもので、羊の本性にしたがって移動させることが、もっとも良い飼養状態を生み出している。そして、これは遊牧の特徴を最大限に発揮し、合理性を持っているものであるとする。

しかし今から約100年前、オルドス・オランチャブ・チャハル・ホルチンなどの牧畜地域において、開墾や家畜品種改良が行われた<sup>81</sup>。数千年にわたり牧畜社会が共同所有、共同利用、共同保護を続けてきた牧草地を切り分け、経営権を各戸に分配し、移動放牧を行う基本的な条件が消滅した<sup>82</sup>。それは、牧草地の非合理的な利用や破壊が進み、生産費用が増加したためである。

そして、20世紀半ばにおいて、内モンゴルの牧畜は遊牧から定住牧畜に変わり、品種改良、野外放牧と飼育を結合するなど、牧畜業の生産方式に著しい変化が起きた。こうした転換は、一方で牧畜地域の社会経済の一定の領域を発展させたものの、他方で牧草地を破壊して牧民を貧困化させ、遊牧経済の持続可能な機能を停止させ、ひいては遊牧文化を滅亡の危機に陥らせた。

このように、モンゴル高原の地理的環境の重要性や数千年来の社会経済の発展の歴史と文化を無視し、遊牧文化を工業文化や農業文化で代替しようとした動きが起こった。また、「工業文明」「小農文明」を重視する論者が遊牧文化を「後進的」で「野蛮な」ものとして否定し、「小農経済」の形式で遊牧経済の改革をしようとする考えも現れた。こうした見方が、ここ10数年の内モンゴルの牧畜経済の変化を先導した理論的基盤であった<sup>83</sup>。

モンゴル人の認識における牧畜経済の原則は、草地を退化させずに、牧草を最大限に利用し、牧畜に伴うリスクを常に予測することである。地方政府の決めた制度はまず、牧畜業の機能を十分に理解した上で、生態環境に繋がることを考慮すべきである。よって、禁牧政策は、経済的かつ環境保護に効果のある措置であるかを正しく判断する必要がある。

---

<sup>80</sup> 満鉄庶務部調査課編『外蒙共和国』〈上編〉大阪毎日新聞社（1927）、p. 269。

<sup>81</sup> 内蒙古自治区畜牧业厅修志编史委员会編『内蒙古畜牧业发展史』内蒙古人民出版社（2000）、p. 50。

<sup>82</sup> 吉田順一著、阿拉騰嘎日嘎译「遊牧及其改革」『内蒙古師範大学学报』〈5〉哲学社会科学版、（2004）、p. 37。

<sup>83</sup> 海山「内モンゴル遊牧経済転換の地理的分析」岡洋樹編『モンゴルの環境と変容する社会』東北大学東北アジア研究センター〈27〉（2007）、p. 187。

宋乃平は牧畜業の生産方式の変化に伴い、以下の効果が認められると指摘している。

(1) 年齢、性別と品種などの方面から家畜群の構造を調整することで収益率を引き上げる。

(2) 飼料の加工処理を普及することで、利用率を高める。

(3) 農牧(耕作システム、牧畜システム)の組み合わせが増加し、現代的牧畜業の特徴が顕著となる。

(4) 短期肥育が起こり、飼養効率を高める<sup>84</sup>。

しかし、草地資源の非合理的使用や舎飼いコストの増加は、牧草地破壊の直接の原因となったばかりではなく、生産費用を大幅に増加させた。牧畜民にとって飼育料を購入するための費用は収入の大半を占め、さらに、牧草地と家畜の管理を個人が負うことにより、自然災害、市場リスクの克服において不利な立場に追い込まれ、貧困に陥る原因となった。

統計によれば、1962年から2000年まで、牧畜地域の家畜の頭数は2.3倍に増加したものの、1990年から2004年までの15年間、牧畜民の牧畜生産コストは30倍増加し、生活費も10倍ほど増えた。これは同時期の内モンゴルの牧民の生産や生活費用の増加の2倍から4倍になる<sup>85</sup>。これによって牧畜地の生産力が大いに低下した。草の成長量は1950年代の7.3kg/hm<sup>2</sup>から90年代の2kg/hm<sup>2</sup>まで、3.6倍低下し、家畜の食べられる草の保存量は3.9倍低下した<sup>86</sup>。

そして、定住化により生活水準が下がっている牧畜民に対しては、本来、より広い牧場を与えることが必要であるにも関わらず、「放牧禁止」政策が行われた。狭い畜舎の中では、多数の家畜を飼育するためのコストが一家の全収入でまかないきれないものになる。放牧権利を失った牧畜民は、政府のさらなる計画である「生態移民」政策により遊牧生活を離れることを余儀なくされている。これは、環境保全のため、砂漠化や土壌流失が深刻な限界地における農耕や放牧を停止させ、そこに居住する人々を村ごと集団移住させてしまうという中国政府の政策である<sup>87</sup>。これに関しては、次の節で詳しく述べる。

こうして、モンゴル文化によって生み出された「牧畜民」という言葉も次第に使われなくなり、生活環境の移り変わりによって、モンゴル民族自身の存在も変わっていくだろう。最後に、モンゴル民族の生活形態の移り変わりと、それに関わる人々の名称の変化について図式化したものを示すと、下記のようなになる。

遊牧式生活 ⇒ 定住式生活 ⇒ 町での移民生活  
遊牧民 ⇒ 牧畜民 ⇒ 環境難民

<sup>84</sup> 宋乃平「禁牧政策影响下的农村劳动力转移机制分析-以宁夏盐池县为例-」『資源科学』資源科学出版社(2007)、pp. 41-45。

<sup>85</sup> 内蒙古自治区统计局編『内蒙古自治区统计年鉴 2005』中国统计出版社(2005)、pp. 252-254。

<sup>86</sup> 苗忠「试论内蒙古草地资源危机与保护」『内蒙古草业』<4>(1996)、p. 2。

<sup>87</sup> 小長谷有紀、シンジルト、中尾正義編著『中国の環境政策 生態移民』昭和堂(2005)、p. 7。

遊牧民が数千年以来、自然を合理的に理解し利用してきたことは疑いのない事実であるが、モンゴル高原の地理環境とその役割、遊牧生産に固有の発展原理、ひいては民族の長い歴史・文化が再認識されることが重要であろう。移動生活では、累積的な富の蓄積は自ら制約されていたため、遊牧社会は極端な格差のない平等な社会であった。しかし、その構造が崩れ、環境崩壊と禁牧政策に相まって富の偏在が著しくなった。

### 1.4.3 生態移民政策

砂漠化が急速に拡大している背景には、すでに述べたように漢族の入植や開墾・放牧の過剰、地下資源の開発など様々な要因がある。そこで政府の砂漠化の拡大を防止するためにとった政策が「禁牧」に続く「生態移民」である。これは、砂漠化が進んだ地域の牧民を、「生態移民村」と呼ばれる町、あるいは町の郊外にある「人工村」へ移住させ、そこで農業や畜産に従事させるものである。その際、家や土地は政府が補償するが、地域によって補償内容が異なる。こうした政策や、「緑化活動」により砂漠化の進行に歯止めがかかったかというのが検証が必要であろう。

草原の人々は、何世紀にもわたり放牧生活を送り続け、季節ごとに新しい牧草地を求め、生活の場所を移して暮らしてきた。しかし、政治的状況と自然環境の変化によって、遊牧民は伝統的な生活様式を断念し、移動式居住から定住、定住から町への移住を強いられている。遊牧を糧としてきた彼らは、町の仕事や生活などに関する知識や慣習も、それに順応するような手立てもない不安な状況にある。実際は長年の歴史を持つモンゴル民族の放牧文化に危機が訪れ、一連の政策は人々の生活に大きな打撃をもたらすだけのものにすぎないのである。

文明が発展していく中で、環境を守り、暮らしの豊かさを高めるには単に経済開発や資源開拓に頼るのではなく、従来の文化の機能の再認識やライフスタイルの転換、社会構造の変革等さまざまな領域での取り組みが求められる。近代化に伴って、ますます深刻になった環境破壊は人々の生活に大きな被害をもたらしている。とりわけ、遊牧民にとって自然環境の破壊は生活面だけにとどまらず、遊牧文化そのものが衰退あるいは消滅されることになる。

こうした現象に対し、少数の人々が認識し始めた事例をあげよう。2007年2月のベルリン国際映画祭で、「トゥヤの結婚」という民族誌的映画が最高賞の金熊賞を授賞した。この映画は、内モンゴルを舞台にした映画で、漢民族監督のワン・チュアンアンの作品であり、主演は女優のユー・ナンである。映画の出演者の中で、トゥヤを演じたユー・ナン以外はすべて素人の遊牧民である。物語で、病に倒れた夫と2人の幼い子どもを抱えながら、妻のトゥヤは家畜の世話をするという重荷を背負うようになった。枯れ果てた草原は砂漠化してゆき、それにより家畜に飲ませる水は遠くの井戸に頼らざるを得ない状況になる。このような厳しい環境の中で、女一人で家族を背負って過酷な生活をたくましく

生きる美しくヒロインとして描かれた。

映画の舞台は、中国政府が環境保護という名目で遊牧民を強制的に都市へ移住させる「生態移民」政策を進める地域であった。内モンゴル生まれのワン・チュアンアン監督は、同政策が進み遊牧民の生活が永遠に失われてしまう前に、この土地に生きる彼ら・彼女たちの喜びと悲しみ、怒りをフィルムによって記憶させようとした。そして、2 ヶ月にわたる撮影の後、牧畜民たちは移住させられ、この映画に記録された人々の暮らし、風景は永遠に失われることとなった。砂漠化が拡大する中で、政府は一部の草原を自然保護地として囲い込み、放牧を禁止することによってその回復を図るとしている。これは一定の成果をあげているものの、草原に頼りながら放牧をしてきた牧畜民にとっては、死活問題となっている。映画「トゥヤアの結婚」でも、環境破壊とそれに対する政策が、牧畜民の生活にどのような影響を及ぼしているのかという現実をリアルに表現している。

今日、地球温暖化や砂漠化など地球規模の環境問題が、メディアによって頻繁に報道されている。しかし、都会や直接の被災地に居住していない人々にとって、情報や知識として知っていたとしても、リアリティに乏しい問題である。そのような状況において、「トゥヤアの結婚」は、砂漠化の中で生存のために闘う人々の生活の現状や心の葛藤を描いている。そこには、守るべきものに固執する女性の姿があり、自然と環境を大切に思う牧畜民の気持ちが滲み出ている。

#### 1.4.4 資源開発

##### 「経済発展とバブル経済」

中国において少数民族の居住地域の多くは面積が広く、資源が豊富で、人口が少ないため、国の未来の発展にとっては開発の欠かせない地域である<sup>88</sup>。

オルドスは伝統文化のモデル地域というだけではなく、地下資源の宝庫でもある。近年では「羊・炭・土・ガス」の四文字がオルドスを代表するようになっている。具体的に、羊はカシミヤ、炭は石炭、土はレアメタル、ガスは天然ガスを指している。オルドスは、中国で有数のカシミヤ産業基地であり、石炭産出量は1244億トンで、中国全土の6分の1を占めている。そのほか、石油や天然ガスの重要な産地でもあり、中国最大の油田の一つであるスリゲ油田はオルドスにあり、産出量は全国の31.8%を占める。

80年代に入ってから、社会主義の浸透や市場経済の急成長によってそうした地域の資源開発が始まり、現在資源開発、経済発展の最前線に置かれている。オルドスのアルプス地域のカシミヤが優良な質を持ち、「オルドスカシミヤ」とブランド名が付けられ、「オルドスカシミヤが世界を温める」とコマーシャルに流された。こうして、初めてオルドスの知名度を上げた。最近にはさらにオルドスが酒やタバコなど飲食品の商標にも使われるようになった。

<sup>88</sup> 梁多俊「少数民族地区経済発展の展望」『中国少数民族地区经济概况』西南师范大学出版社(1993)、p. 232。

特に、内モンゴル自治区の伝統文化がもっとも残されているオルドスでは、急激な発展によって1人当たりのGDPが2007年末に、中国大陸のもっとも裕福な都市である上海を上回った。内モンゴル自治区人民政府副主席の連輯氏は2009年12月5日（第8回）中国企業リーダ年会開幕式で「内モンゴルの最近の経済成長は速い、スピードは全国第一位、特にオルドスの1人当たりのGDPは香港を超えた」と発表している<sup>89</sup>。中国という巨大な経済体の中で、オルドスの経済成長のスピードは7年連続で1位を占めてきた。そのため、様々な意味で同地域はモデル地域と言われている。

2011年のオルドス地域の税収は、230億元（約3200億円）にまで及び、内モンゴルの中では、経済規模と財政収入の面で「ダブルトップ」となった。連輯氏はよれば、2009年の2161億元のGDPのうち炭鉱、火力発電や化学工業などの収入が全体収入の90%を占めているとしている。そして、オルドスに埋蔵されている炭鉱量は、今後500年間も採掘できる量であると言われている。

中国では一般的に、オルドスの財政は「市強而民貧」（政府がお金を持ち、市民は貧乏という意味）の現象を表していると言われている。政府が大量の資金を支配しているからこそ、10数億元そして100億元をも動かし、新しい都市を造ることも可能だった。また、同記事ではこの現象はバブル経済ではなく、社会の財産の巨大な無駄使いであると指摘している。

この地域の中心の町は、オルドス市の旧市街地である東勝区（旧東勝市市街地）であったが、役所施設が新たに開発された町「康巴什」（カンバシー、モンゴル語ではヒヤ・バックシ、康巴什は中国語の当て字表記である）へ移転され、市当局により公務員の住居も「康巴什」へ移転されている。「康巴什」は主に、富裕層をターゲットに作られた。たとえば、同地区では一戸建ての高級住宅が並び、広い通りも整然と配置された。また、オフィスビル、役所施設、博物館、映画館、図書館、スポーツ施設も備わっている。このプロジェクトには、50億元（約686億円）が投じられたという。

しかし、オルドス市で5年の歳月をかけて建設された高級住宅地「康巴什」は「100万人の居住圏を創出した」と言われているが、入居者が集まらず「まるで人類滅亡のSF映画」に出る光景との説もある。中国のインターネットサイトである「人民網」によれば、これについての記事<sup>90</sup>を掲載し、中国の不動産市場がバブル化している証拠の一つとして、内モンゴル自治区オルドス市カンバシー新区の様子を紹介した。以下は、その記事の抜粋である。

同市は石炭採掘産業の中心地として比較的裕福で、人口は約150万人。同市カンバシー新区にはオフィスビル・行政機関・博物館・劇場・スポーツ施設・中産階級をターゲットとした住宅や別荘などがわずか5年の間に続々と建築され、100万人が生活す

<sup>89</sup> 新浪財經：[http://www.sina.com.cn\(2020年9月11日アクセス\)](http://www.sina.com.cn(2020年9月11日アクセス))。

<sup>90</sup> The article, “Ghost Town” published in TIME magazine April 5th, 2010.

る空間として整備された。しかし問題は、この空間にほとんど人が住んでいないことだ。昼間の街を歩けば、広い車道を時々数台の車が通りすぎるだけで、営業しているのは政府系事務所のみといった状態。たまに見かけると通行人はまるで、大災害の後ただ1人生き残った生存者。パニック映画のワンシーンを思わせる光景だ。

このように少数民族の居住地であり、深刻な環境問題を抱えながら、資源開発と不動産熱に浮かれるオールドスは、まさに「今」の中国を象徴する地域として、今後もいっそう注目を浴び続けるかもしれない。

ところで、この町では、道路の新設とマンションの建設が、急速に進められている。たとえば、カシミア製品で有名な「オールドス集团公司」（日本の有名な商社である三井物産とも合併している企業）の不動産部門が新設された。また、海外からも有力な市場として注目され、さまざまなビジネスが持ち込まれている。具体的に、米国最大の太陽電池メーカーであるファーストソーラーが、オールドス砂漠に大規模太陽光発電施設を建設し、クリーンエネルギーの開発が始まる。そして、日本の三井物産、資生堂など大手企業も進出し、様々なビジネスネットワークが構築された。たとえば、日本企業によって2010年に、5つ星の老人ホームが建設されはじめ（のちに中止）、大手化粧品メーカーの資生堂も店舗を出した。こうして、オールドスではカシミアをはじめ、資源開発、電力事業など幅広い分野の事業が展開された。

### 「経済の急速な伸びに伴う矛盾」

経済成長に伴い、都会と農村部の間における収入の格差が一段と広がり、貧富の差が高まった。康氏の記事に依拠すれば、「GDPが香港を超えたとは言え、香港の毎月の1人当たりの平均収入は9100人民元なのに対し、オールドスは1619元である。これは、全国の平均水準と比べると300元高いが、両者の間には約5倍以上の差がある。さらに、香港政府の教育、福祉、医療の3つの基礎事業にかかる支出額は財政全体の支出額の54%を占める。これに対して、オールドスも教育、福祉、医療、科学技術などへの支出額を増やしてはいるが、いまだ30%にも満たない」<sup>91</sup>。

そして、内モンゴル自治区内においては、経済発展の度合いが地域によって異なる。つまり、オールドスではほかの地区よりも一歩先をいく「オールドス型」の状況が進んでいる。漢族のモンゴル地区への入植はあとを絶たないため、現在オールドスで起こっている現象は、いずれほかのモンゴル地域でも起こる可能性が高いといえる。

2010年頃、オールドスはバブル経済を迎えたが、その時期に出現した問題を詳細に見ていこう。

第一に、不動産バブルに伴う問題である。2005年、オールドスの住宅の平均値段は1平方

<sup>91</sup> 康尽欢『新周刊』「一个隐形的富裕城市—“猛开”的鄂尔多斯」〈314〉广东新周刊杂志社(2018)。

メートル1000元だったが、2007年になると3000元に値上がりし、2009年からは再度高騰した。この町の土地の地価には、1平方メートル1万円から2万円といったものもある。不動産バブルが起きた裏には、隆盛する石炭産業があり、現地の資産家にとって、不動産以外に投資する対象がなかったからである。人々は複数のマンションをまとめ買いし、転売により利益を得ることができる。ただし、地価上昇に従い物価や生活コストすべてが高くなり、オルドスにほかの地域から働きに来る労働力が減少するという問題も生じた。

また、2011年の2月からマンションの売れ行きは悪化し、全く売れないケースも出てきた。マンションが売れなくなった要因として、まずは、政府の「融資制限」政策がある。初めてマンションを購入する際は頭金30%を支払い、二回目の購入にあたる頭金は60%、2戸以上購入する場合はローンがつかないという制度である。次は、「炭鉱整理」の影響である。オルドスの財政収入はほぼ不動産と石炭産業に頼っている。しかし、2012年に石炭企業の整理を行い、300あまりの石炭企業を40に整理した。基準以下の小規模の炭鉱を合併させ、この合併期間中には炭鉱の営業や工事は禁止された。

したがって、多くの資金の流れが切断された。オルドスではほとんどの企業の資金の源は石炭であり、企業の景気は、不動産、娯楽、ホテル経営など様々なビジネス界に影響をもたらした。投資回収の周期が長くなり、リスクも高くなった。

第二に、高利貸しに伴い、引き起こされた問題である。大金の借金をし、返済できず逮捕された者もいれば、多くの債権者からの取り立てや現地の法務局、公安局、検察院からの訴追に追われ、家族からの非難にも遭い、自殺に及んだ者もいる。

オルドスは短期間に、バブル経済を経験し、崩壊した。やみくもな資源開発の結果、自然環境と伝統文化はともに悲惨な打撃を受けた。以上の事例は主に、2010年代前半の事例である。利益を得た一部の政府、企業関係者はいるが、そこに元々居住していた人々は現在も被害者となり、影響による苦しみはいまだに続いている。

#### 1.4.5 観光化される「草原文化」

オルドスは資源開発で好況が続いていたが、経済のバブルは期待されたよりも早くに終焉を迎えた。世界的に石炭の値下がりが起き、地下資源に頼り、絶好調であったオルドスの財政収入は2012年から一気に下落した。

オルドス政府の次善の策は、文化産業であった。オルドスは、内モンゴル自治区のなかでもチンギス・ハーンの遺品と称する品々を収めた廟があるために、国内外の観光客がもつともたくさん訪れる地域である。「チンギス・ハーンの陵」以外にも「響砂湾」（ブリエ・マンハ）など有名な観光地があり、バブルの際建設した「ゴーストタウン」（康巴什）の個性的な街づくりも文化産業の基礎を創った。2013年に元朝宮廷を再現した新しい名所などができ、「ゴーストタウン」自体が観光名所となっている。それに、近年の環境保護のスローガンのもと、植林などのプロジェクトも進んでおり、牧場に多くの観光拠点が設置された。

オルドスの観光産業の特徴は、華麗な観光施設の建設に加え、オルドス・モンゴル人の伝統的なもてなし文化である。まず、挨拶とともに、かぎタバコを交換する。どのような相手であれ、乳茶をふるまう。それは、乳製品は相当のもてなし品として重視されているからである。いわゆるハレの場においては、ハダクとよばれる絹布を礼品としてささげることは一般的である。

視覚で楽しむ景色の次は味覚で楽しむ食も重要である。モンゴルの食文化におけるもてなしには最上級の食とともにお酒が登場する。モンゴルのもてなしの習慣を、モンゴル帝国のシステムとして成立させたのがジャムチ制度（モンゴル帝国の駅伝制度、宿舎・食料・換え馬を備えた宿駅の設置における制度）である。特別な場合の料理であればこそ、政治的な宴会にまで援用され歴史文献にも記録されている。制度化された食のもてなしは、いずれも肉料理である。肉のなかでも、最上のもものは、ゆでたヒツジ肉を一頭分つみあげて献じることである。このヒツジの煮物の盛り付け方や食べ方には細則がある。

モンゴルでは、飲酒は一種の娯楽にもなっているが、接客の一環にもなっている。お酒はしばしば歌とともに献じられる。そして、お客を喜ばせるために、歌や楽器の名手がよばれる。

モンゴルの接待において、歌っているのは、ゲストを迎えたホスト、すなわち家人である。ホストは「接客歌」を歌い、ゲストを渡り鳥にたとえて、ゆっくり楽しむこととすすめる。モンゴルの音楽は草原の遊牧生活と結びついた文化を中心としているため、複雑な器楽合奏よりも語りや民謡が多くつくり出されている。

オルドスは「モンゴルの歌の海、踊りの世界」といわれるほど民謡の宝庫であり、なかでももっとも多く多くの歌が収集されている。オルドス民謡は、民間文学の代表として、主にモンゴルの生活環境、生産方式、思想感情を表す。民謡は祭りや宴会の席をはじめ、馬に乗り遊牧する牧民とともに草原に広がり、次世代に受け継がれていく。

文化のなかで生み出された接客法が、ひとたび家庭をこえ、親族をこえて、近代社会における産業として確立されれば、それは観光になる。観光の原点は、「接客」すなわち「もてなし」にあるといっても過言ではない<sup>92</sup>。

上記以外にも、「オルドス結婚式」などの舞台劇が有名で、数多くの独自の文化が残されている。このように、オルドスでは、お客へのもてなし料理、食の儀式は文化を代表し、観光客へのセールスポイントにもなるのである。オルドスでは文化産業を進めるにあたって、オルドス・モンゴルの伝統文化の存在こそが、価値となっている。

しかし、このような、観光地における「もてなし」がモンゴルの伝統的な接待文化と異なり、セクシュアリティ、さらに「民族団結」に利用されている問題となっている。辺境の観光地には、笑顔を浮かべ、杯や儀礼用のハダクを両手にした少数民族の女性像か、女性を描いたポスターがよくみられる。「歓迎」された客は、少数民族の女性の歌と踊りを楽

---

<sup>92</sup> 小長谷有紀『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』角川書店（1992）、p. 74。



しみ、これは一種の性的支配である<sup>93</sup>。楊海英は、このような「ジェンダーとセクシュアリティ」で以て具体化された民族関係は「植民地的構造の代表」<sup>94</sup>と指摘している。

オルドスの観光地の創造は、伝統遺跡の復元ではなく、その「深化」を作り出した。これは一種の伝統文化のラベリング形成の始まりであり、モンゴル文化のラベル化とも言えよう。

また近年、観光のブランド化で原点本物志向への回帰現象が起こっている。観光開発は環境自然との共生を目指すエコツーリズムの拡大であり、環境問題と人間生活の基本的なあり方への模索である。それぞれの地域の住民の「日常性」の中に、地域の文化の個性や独自性、特異性が存在するが、しかし、それが文化変容により喪失し、危機にさらされているのは問題であろう。

#### 1.4.6 学校統廃合

モンゴル民族は生活環境だけではなく、教育にかかわる打撃も受けている。それが「学校統廃合」政策である。具体的に、生徒数が少なく、教育の水準が低いという理由で、「ホショー（旗）」以下の村や田舎にある学校を廃校にし、「ホショー（旗）」にある学校と合併させた。この政策について、「旗の学校に行けば学校の寮に無料で住めるから良い」と賛成する人もいれば、「草原や田舎の子どもたちが交通不便になり、年少で学校の寮に住まわせるのが不安」と反対する人もいる。

これに関して、オルドス n モンゴル民族小学校の教員 T 氏は、「学校統廃合」がもたらした概況を次のように述べている（2009年8月18日調査）。

同小学校には700名の児童がいて、そのうちの112名の児童は留守児童である。また、「学校併合」により、草原や田舎の学校が廃校になると、児童たちは、町の学校へ通わなくてはならなくなった。田舎の学校が廃校された結果、町の学校までの距離が遠くなり、交通の不便により、草原に暮らす子どもたちの通学は困難な状況に陥った。子どもを学校に行かせるため、草原に暮らす牧畜民の家庭が町で部屋を借り、町への引っ越しを余儀なくされた。そして、生活と子供の教育両立のために、片方の親が子どもと一緒に移住し、世話をしながら学校に通わせるようになった。

しかし、家族の離れ離れの生活が家庭崩壊という深刻な問題を引き起こし、次々と夫婦関係の悪化につながり、離婚も増えた。通常、一家の主な労働力である父親が田舎に残り、母親は子どもと町に移り住む家庭がほとんどである。そこで、町に移住した母親は、しばらくすると町の華やかな生活に憧れを持つようになる。そして「モンゴル人の夫は酒好きでお金も貯まらない」と、金持ちや出稼ぎにきた漢民族の男性と駆け落ちするケースが多

<sup>93</sup> 楊海英「王昭君をめぐる中国人の苦悩—観光資源における歴史の政治利用の一例」『ASIAN STUDIES アジア研究』静岡大学人文社会科学部アジア研究センター<13> (2018)、p. 99。

<sup>94</sup> Bulag, E. Urady, *The mongols at China's Edge, History and the Politics of National Unity*. Rowman&Littlefield Publishers, Inc.2002:63

い。その結果として、子どもは放置されてしまう。こうした状況からも、新しい社会変化に応じる過程で、「貧困」を脱出しようとするマイノリティの無力さや従属性が見えてくる。

なぜこのような現象が起こりえるのか。これはまさに、生活環境の変化・価値観の変化の結果であろう。T氏の話は、実際の状況が、ここまで深刻な問題に陥っていることを示している。

経済が発展し続ける今日、人間と自然の一体化が最新情報手段や技術によって、むしろ疎外され、親子の語り合いや触れ合いが少なくなった。経済開発は確かに生活に便利さと快適さをもたらしたが、「変化」に適応できない人々に不安や恐れを与え、価値観や精神的信仰が左右される。また裕福な階層とそれに次ぐ中間層、貧困層の生活格差が生じている。

また、調査対象地オルドスの中間層の中には、他の町に移動する者も出てきた。理由としては、富裕層の拝金主義の生活スタイルが、子どもの健全な成長にとって障害となり悪影響を与えると考えられているためである。オルドスにおいてモンゴル文化を継承することが困難な状況が生まれているといえよう。

## おわりに

内モンゴルは、世界でも自然環境の破壊がもっとも深刻な地域である。これまでの生活形態は分散型で、かつ持続性の高い遊牧で土地を有効に利用し、生態系のバランスを維持してきた。しかし「改革開放」や「資源開発」が進み、自然を重視してきた伝統文化が失われつつある。そして、行きすぎた開墾や非合理的な開発の影響が土地に負荷をかけた。このように政治的、経済的条件の変化により、伝統の遊牧文化を維持できなくなったことが、環境破壊の一因となっている。

特に近年、「資源開発」、「禁牧」、「生態移民」、「都市化」が徹底的に実行されてきたため、昔ながらの風景は一変してしまった。放牧していた牧場は炭鉱や油田の開拓地となり網で囲まれ、羊の群れの代わりに工場が建てられ、煙突から色の濃い煙が吹き出して青空を染める。

オルドス地域のエジンホロー旗はもっともモンゴル人の比率が少ない旗である。1万1000人のモンゴル人しか暮らしていないチンギス・ハーンの八白室の周辺及びソボラガ草原は理想的な草地である。そのため、「禁牧」と「観光地」の対象にされ、過半数の牧畜民は「生態移民」となり、住んでいた古い家は倒され、町のマンションに引っ越した。

観光地化された草原には人工的な牧場が再現され、観光者向けのゲルの前に、ガイドの指示を待つ自由の奪われた数匹の馬が見世物にされている。「第三次産業」や「文化産業」を強化する観光開発政策により、民族芸能や民間伝承も「見世物文化」に変化し、草原から抜け出して大都市の劇場や広場のイベントとして観光向けの催し物になっている。

一方、町のマンションに移住した牧畜民たちは生活環境と生産方式を変えざるをえなかった。牧場を離れた男たちは工場などで力仕事をし、職に就けないものの中には酒やマージャンなど娯楽に溺れる者もいる。女性たちは本来ならば家畜の乳搾りや乳製品作りなど

の作業をしていたが、今や町の道路掃除やレストランの洗い場の作業をし、生計を立てている。

両親の放牧や家畜と共に育てられていた子どもたちの生活環境も変わり、家でテレビやゲームに熱中し、大自然や動物との関わりがなくなった。

大自然での家畜との共生における生活の中で、子どもたちは近代的な科学や技術を学ぶことはできなかったものの、「命の大切さ」、「環境保護」、「信仰・調和」など現代社会に欠けている多くの大切なことを肌で触れ身に付けることができた。そして、「厳しさ」「強さ」「忍耐力」に満ちた草原の主人が代々にわたって、長年の生態文明を作ってきた。

しかし、現在のモンゴル人の家庭教育において、従来の遊牧生活に即した生きたテキストは、学校教育の教材及び各種の参考書に取って代わられた。オルドスにおいて急激な社会環境の変化によって、家庭における文化の継承は、テレビやインターネットで見る歴史記録番組に収録された過去の記憶となるだろう。そして、家庭教育の手段であった母語による口承伝達も、携帯及びインターネットを通じた国家の共通用語である漢語による大衆メディアにとってかわられつつある。

機動性に富むモンゴル遊牧民たちは、古来より周辺諸地域との交渉を活発に行い、数多くの文化交渉を経験してきた。「超域文化理論」では、外来文化の受容により既存文化は変容し、さらに、変容から定着に至るまでの過程を経て、再び新たな外来文化の影響で文化は再変容を遂げる。そして、文化が他の地域に波及してゆく過程を「文化の拡散・収斂運動」とし、「文化触変反復モデル」と捉えている<sup>95</sup>。このように文化の変動は、社会秩序とその統治の原理・構造が拡散-収斂するダイナミズムとして考えられなければならない。

20世紀に民族文化の変容に大きく影響を与えた二つの潮流があった。一つは国民国家を前提とした国際社会の流れであり、もう一つは科学技術の発達による生活様式の変化である。20世紀前半において、西欧列強や日本によるアジア・アフリカ諸民族の植民地支配と2度の世界大戦が勃発し、後半には東西冷戦構造のもと独立と国民国家形成への模索が、各地の諸民族のあり方に大きく影響した。そうした中であって、科学技術の発達の成果は徐々に世界各地に浸透し、各民族の伝統的な生活様式を大きく変える働きをした。とりわけ、都市における建築や交通、情報通信機器の発達と普及は、各民族文化の交流を急激に促進し、国家における民族のあり方にも多大な変化を与え、大きな文化変容をもたらした。

オルドス地域では、地下資源の開発によりモンゴルの伝統文化が変容した。オルドスのような伝統文化を保持してきた地域に急激な経済開発がおきたことで、人々は今までの生活様式、生産方式、また人生観・価値観を変えていく。発展過程にある地域には伝統文化と開発発展の衝突が避けられないプロセスかもしれないが、オルドスの事例は開発と民族

---

<sup>95</sup> 井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察」『北東アジア研究』〈別冊、1〉島根県立大学北東アジア地域研究センター（2008）、pp. 227-277。

文化の関係や開発と環境問題を考える上でも重要な意義を持つのではないかと考える。また近現代史を考察する上で無視できない問題でもあろう。

## 第2章 モンゴルの伝統社会にみる女性

### はじめに

伝統文化の継承において、モンゴル人女性の教育的な役割は何であろうか。伝統文化の脈絡の中で、モンゴル人のセクシュアリティは如何に表象されているのか。こうした疑問を紐解くには、モンゴル語の文献資料をもとにその伝統的信仰の内容を取り上げる必要がある。したがって、本章ではセクシュアリティについてはモンゴル人社会における男女の役割分業に関して考察する。

モンゴル史学者の宮脇淳子は、モンゴル語年代記や漢籍、それにイスラムの資料を総合的に分析して、モンゴルの遊牧社会における女性の政治的、社会的地位について、以下のようにまとめている。1.遊牧生活を維持するのに、男女の役割は明確であった。2.古代から現代に至るまで、女性には独自の財産権があり、戦時には専属の軍隊もあり、かつ、指揮権を有していた。3.女性たちは戦争と政治に積極的に関与し、強い発言権を行使していた。4.チンギス・ハーンのような名家の女性たちは政権維持のために男性たちの政争を調停していた。5.上記のような伝統は現代に入ると、女性たちの高学歴と繋がり、各界における活躍と無関係ではない。以上のように、遊牧社会における女性の地位は農耕社会より遥かに高いと指摘している<sup>96</sup>。歴史学者のこうした見解は、筆者の資料と基本的に一致するので、以下では歴史学の先行研究に依拠しながら、モンゴルの伝統社会における女性の存在について具体的に論じていく。

モンゴルでは古くから「天」（モンゴル語ではテンゲル、*tengri*）を信仰してきた。モンゴルの人々にとって、「天」は彼らの畏敬している自然をさらに超える存在である。その「天」とは、実体の見えない虚なる空でもなく、無限に広がる宇宙でもなく、抽象的な天でもない。それは日本の「神」でもなく、キリスト教世界の「ゴッド」でもなく、中国の「天」とも異なる<sup>97</sup>。それは超自然的で生命たる存在であり、モンゴル人は「天」にまさる、あるいは「天」の背後に最高至上の「神」というものを想定しなかった。

モンゴル人の由来について、年代記『元朝秘史』（巻一）はその冒頭で、「上なる天神よりの命運を以って生れた蒼き狼であった」<sup>98</sup>と記している。

蒼き狼は妻の淡紅色の牝鹿とオノン<sup>99</sup>河の源となるボルカン・カルトン<sup>100</sup>山で牧営をして暮らし、バタチカンという子が生まれた。これがモンゴル人の祖先の誕生であり、その子孫になるアラン・ゴアもまた「天」からの光によって子どもを産んだのである。そして、

<sup>96</sup> 宮脇淳子『モンゴル人力士はなぜ嫌われているのか』WAC出版(2017)、pp. 64-120。

<sup>97</sup> ソーハン・ゲレルト「『モンゴル秘史』所伝「蒼き狼神話」と「アラン・ゴア神話」」『日本モンゴル学会紀要』(2000)、pp. 45-61。梶村昇「『元朝秘史』に見るモンゴル人の信仰」『アジア研究紀要』(モンゴル研究特集) 亜細亜大学アジア研究所 (1978)。アジア大学 NII Electronic Library Service。

<sup>98</sup> 小澤重男訳『元朝秘史』〈上〉岩波書店 (1997)、p. 13。

<sup>99</sup> 現モンゴル国のヘンティー山脈の北側を流れる川、ブルカン・カルトン山を源流とする。

<sup>100</sup> 現モンゴル国のヘンティー山脈の山、モンゴル人の発祥した聖地。

この系譜につながってチンギス・ハーンが生まれた。この神話には、モンゴル人の祖先たる女性アラン・ゴアが「天」から命を授かり、もっとも崇拝するチンギス・ハーンも「天の御子」であるとしている。これよりモンゴルの「天」への信仰をうかがうことができる<sup>101</sup>。

モンゴル人の考え方によれば、「天」は人間界を支配し、人間の一切の行為の洞察者であると同時に、正邪善悪の審判者として天罰を下し、正義を守り、ときに人間界に霊を与える絶対的存在であった。モンゴル人はこの「天」の意向を無視しては、あるいは「天」の庇護なくしては安心を得ることができないかのように信仰している<sup>102</sup>。「天」は万の目を持っており、「天が見ているから悪をしてはいけない」など、道徳心を養うときや子どもへのしつけをするときの原理となっている。

また、孟慧英氏は「モンゴル・シャマニズムの考えによると天は、九層、三十三層、九十九層などのそれぞれの説がある」<sup>103</sup>と指摘している。モンゴルでは「天」が九十九名、あるいはそれ以上いて各々の役目があると考えられる。九は一桁数字のなかで一番大きい数字で、円満で完璧を象徴する。そのため、モンゴルでは九が一番縁起の良い数字である。「天」はその信仰上の性質から権力の象徴としてみなされてきたと考えられる。

以上のような拝天信仰をベースにしたシャマニズムの遊牧社会において、女性たちはどのような存在で、如何なる役割を發揮してきたのかについて、以下検討する。

## 2.1 大地母神信仰にみるセクシュアリティ

モンゴル人の信仰対象となる「天」とともに「大地」も聖なる尊い存在にある。古来、万物の形成は「大地」によって生まれたという役割説に対し、「天」は熱や光を与え、雨を降らせることで、生命を吹き込んでいると考えられていた。人間は「天」から命をもらい地上で誕生し、万物から栄養をもらい繁殖し数が増えたという世界観が植えつけられているため、天地万物を敬い感謝するのである。

またフルブは「大昔、天と地は合体した一大物体であった。それが切り離れる中で、天・地が誕生した」という物語を現代科学に照らし、「宇宙はビッグ・バンという爆発によってばらばらになった、というのと似ている」<sup>104</sup>と説明している。モンゴル・シャマニズムは、物事が長年の変化を経て成り立っていることを説明し、物語っていた。このように、モンゴル人の信仰に「天」と相對した「大地」の存在が生まれた。

<sup>101</sup> ローマ聖庁よりモンゴルに派遣された修道士のプラノ・カルピニは、モンゴル人について以下のように伝えている。「タタール（モンゴル）人は、その唯一の神を信じ、これを有形および無形界の造禦と考え、また、神は現世における幸福を造るものであって、同時に刑罰者であると信じている」といい、またフランチェスコ修道会士であるルブルクも「タタール人は、唯一の神を信じるが、彼らは同じく偶像を造る…」と記している。彼らの言っている「神」とはいわゆる「天」のことである。プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社（1965）。

<sup>102</sup> 梶村昇『『元朝秘史』にみるモンゴル人の信仰』（モンゴル研究特集）『アジア研究紀要』〈5〉亜細亜大学アジア研究所（1978）、p. 139。

<sup>103</sup> 孟慧英『中国北方民族薩滿教』社会科学文献出版社（2000）、p. 190。

<sup>104</sup> フルブ『蒙古薩滿教』民族出版社（2006）、pp. 57-58。

モンゴル人が「天」・「大地」を父と母になぞらえることから、「母と父、地と天などは二元論的宇宙観と同一」と煎本孝はまとめている<sup>105</sup>。「天」への信仰から「大地」が派生し、モンゴルでは「天」の絶対的支配力を強化するため、「大地」の存在が確立されたという二元論的宇宙観の観点だと考えられる。

### 2.1.1 大地母神

ウノ・ハルヴァは、アルタイ系諸民族は、天を崇拝するだけでなく、大地母神についても篤い信仰を有していると記述している<sup>106</sup>。大地母神をモンゴル語でオテュケン(ötügen)という。この言葉はまた、「火の神様」を指すと同時に、女性の秘部をも意味する。いわば、人間を生成する命の根源である神様そのものが火の信仰の対象にもなったのである<sup>107</sup>。

信仰上の性質によりモンゴルの人々の間で「天」は父の存在に例えられ、「大地」を母に比喻することは太古の時代から語り継がれてきた。つまり二つの対立項の同一化によって新しいものが生まれると考えるからである。したがって、「天」が命ずることによって、蒼き狼が生まれたことも、「天」は「大地」なくしてはものを産む性格をもてないことになると考えられ、こうして「天」・「大地」は男女の性差に照らされ、「天」は男性的神の象徴となり、対する「大地」は母神オテュケンに代表される女性的聖なる象徴であると考えられよう。

そして社会の発展につれ、男性の政治や軍事面での役割が上昇し、男性の地位が上がることで男性的神である「天」の地位も上がり、全ての神々の首位に立ったのだらうと推測されている。具体的にはチンギス・ハーンを生んだ「黄金家族」の神聖性、それも男性たちによって表象される王権の成立にともない、天と「天孫」は主として男性優位に変質していく。

また、「天」を父に「大地」を母に例えると同様に、大自然のなかの山を男性的で、湖や川を女性的な存在だとみなしていた。山は生命界を危機から守り、万物の「願い」「祈り」を叶える力強く厳格な性格を持っている。

一方、湖や川は万物に水を与え、生命力の支えとなり、優しくつつむような母性的な性格を持っている。自然環境の厳しいモンゴル草原において、「大地」の超自然的な力となる湖や川はつねに人々を守っていた。モンゴルの文化や精神世界には女性的な性質をもつといわれている水が欠かせない要素として結合されていたのである。したがって、母親は天や大地のすべての邪悪をはらい、大人しく、和らげ、円滑、平和にする力の持ち主である

<sup>105</sup> 煎本孝「モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析『東北アジア諸民族の文化動態』」北海道大学書刊行会(2002)。加藤謙一『匈奴帝国』第一書房(1998)、P.434。

<sup>106</sup> ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』三省堂(1971)、pp.40-48。エルデムト氏は「地獄が存在しない独特な宗教であるモンゴル・シャマニズムにおいて、天から人を支配する力を弱めていたため、元朝のフビライ・ハーンがチベット仏教のサキヤ派を国教にした」と指摘している。エルデムト『蒙古薩満教及其思想史』民族出版社(2001)、p.59。

<sup>107</sup> ウノ・ハルヴァ『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』。楊海英『逆転の大中国史』文春文庫(2019)、pp.196-197。Serruys, Kumiss *Ceremonies and Horse Races—Three Mongolian Texts*. Asiatische Forschungen, Band.37(1974). Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

と考えられている。人々の願いが「天」からの恩恵を得て、それから「大地」の支えと忍耐を経て初めて叶えられ、思いが現実に変わる。

チンギス・ハーンは「天の守りと大地の支えはどちらか片方を抜きにして成功は語れない」と、「天」と「大地」を切り離すことのできない一体的な信仰対象と見なし、そして大自然そのものをセクシュアリティの役割に組み込むことに念を入れていた。

モンゴルでは至上なる存在として信仰される「天」と「大地=大地母神」を性別で区別する。そして、大自然の山や川に命名するだけでなく、性別でわけ、さらに高い山を「ハーン」(王)、河を「ハトン」(妃)と尊称をつける。この由来からも、男性の名前で山「オール」という名前が多く付けられている。こうした信仰の一環として、20世紀前半までのオールドス・モンゴル人たちは馬乳祭の儀礼を実施した際に、供物を捧げる対象に「ハトン・ゴル」(黄河)と「ムナン・ハーン」(陰山)が含まれていたことが、モンゴル語の古い文献によって伝えられている<sup>108</sup>。

### 2.1.2 男女平等観よりもバランス

チンギス・ハーンの知性に満ちた指導力や厳正な政治人生の基盤には父なる「天」と母なる「大地」への信仰が潜んでおり、彼の宗教思想や政治理念が築かれていた。そして、その精神世界を支える信仰において、セクシュアリティとジェンダー観は両性のバランスを取って彼の政策や戦略に反映された。個人や家庭あるいは国において、この両性のバランスを正しく維持し、両性の力を合わせて最大限に発揮できることは彼の生涯の探究でもあった。

モンゴル社会の平等観において相続を例としてみた場合、モンゴルでは末っ子が「かまどを守る子」「一家の聖なる火を継ぐ子」と言われ、末っ子に相続権があるのが一般的通念となっていた。子どもの間には性差による財産の分配は行わないで、理念として男女の別なく平等に扱うしきたりが守られてきた。こうした事実からわかることは、男の子と女の子の間には差がつくことなく、男女は平等であったと解釈できる。こうした財産分与方法は重要であり、男女の社会地位はやはりモンゴル独自の価値観に従い、女性の地位は高く、社会全体には「バランス」「適性」を原則としていた側面があるといえよう。

チンギス・ハーンは生涯にわたって「天」と「大地」への畏敬の念を抱き続けていた。『元朝秘史』には、チンギス・ハーンが重大事を決する際、あるいは戦いの前後といった人生の節目に当たって「天」に祈り、その意志に従うと同時に「大地」に支えられ、守られていることを信じ続けていたことが記されている。以後現在に至るまでモンゴル人の「天」と「大地」への崇拝は変わらず継承されている。この精神世界の崇拝においては、信仰している「天」と「大地」の相互関係がモンゴルのセクシュアリティ観念を形成したのである。

<sup>108</sup> Serruys, Kumiss, *Ceremonies and Horse Races--Three Mongolian Texts*. Asiatische Forschungen, Band.37(1974). Wiesbaden: Otto Harrassowitz.



上述のような歴史的背景から見るとモンゴル人のジェンダー論は決して単純な「男女平等」という観念からではなく、女性の地位が高いうえ、社会そのものが「バランス」感覚で保たれていたと考えられる。モンゴル社会における性役割は個人、家庭、国という各カテゴリーのなかでの最適なポジションに着かせることである。それは性別を区別したうえで、男女ともに尊重し、かつそれぞれの役割を活かし、どちらもが欠かさずに協力しあうことを意味した。

### 2.1.3 日常生活に根付いた信仰

人間の精神を支えているものは信仰であり、何を軸に生きていくかということは生活する上での原点でもある。果てしない草原に水草を求めて移る遊牧の生活にとっても、彼らを支配するものは「天」と「大地」である。干ばつや雪嵐、砂嵐など自然災害が起き、家畜に被害が及んだ場合でも、「天」と「大地」に祈願し、大自然に身を委ねざるをえない遊牧の厳しさがある。そのため、この絶対的支配者である「天」を怒らせることは禁忌のなかの禁忌であり、「天」と「大地」を代々にわたって拝み続けてきたのである。

この「天」と「大地」信仰は、モンゴルにおいてチベット仏教が隆盛をきわめた清朝時代以降も、モンゴル人の信仰の奥深いところで根強く息づいている<sup>109</sup>。いまでも、人々は丘の上に石を積み上げて、天地を祈る「オボー」信仰の伝統を守っている。「オボー」は大地の母神に対する献祭で、小高い丘の上や山の中腹に石積みをして塚を作り、そこに供えものをして祈ることが「天」に通じるとみなされている。

お酒を飲むときも、まずは注がれた器に指を入れ、指先でお酒に触れて、その指先を最初に天に向かってはじき、次に大地に向かってはじき、最後はおでこにつけてから飲む。これは、お酒の最初の一滴を天・地に捧げている意味である。女性は牛や羊の乳を搾った後、加工などする前に、容器一杯の乳をすくって空の方に向かって撒く。これは乳を天に捧げる意味がある。乳製品や肉を食べる前に最初の一片を火（神様）に投じるなど、「天」の属性としての星に乳を捧げることを欠かさずに継承しており、いまでも厳守している。

したがって、この「天」の空の青さである「フフ」（青色）が色彩としての意味を超えて神秘的な、崇高な色として認識されている。「蒼き狼」、「フフ・モンゴル」など崇高を指す以外にも、色彩として敬意の表象である「ハタク」<sup>110</sup>は青い色がほとんどである。「ハタク」はモンゴルの礼式には欠かせないものであり、目上の人に正式に拝謁するときには敬意を表す印として、また貢物を奉るとき、あるいは物を贈るときには、上に載せて奉ることを法式とする。日常でも客に捧げて歓迎の気持ちを表したり、旅人に贈って無事を祈ったりする象徴的意味あいをもつものである。客が「ハタク」受け取った際も大事に扱う

<sup>109</sup> モンゴルの元朝期におけるサキヤ派は輪廻と涅槃の不可分性を強調し、天国と地獄の存在を明確に分けている。そこには地獄があつてこそ、「天」の意思と一致する君主や権力者たちの意思が人々に浸透しやすいとし、ここに「天」の絶対的支配の性質を指摘するため「天」国教にしたと思われる。権力者の意思は「天」の意思であると思わせ、その意思にそむけば、確実に地獄に落ちるという考えである。

<sup>110</sup> 幅一尺程度、長さ三尺ぐらいの薄絹の裂(キレ)であり、上に仏像の圖紋があるものもある。

ことが礼儀である。

モンゴル古来の宗教はシャマニズムであるが、十三世紀の終わりごろから仏教が普及し始めた。モンゴル帝国が滅び、モンゴル人の勢力を抑えるために清朝が仏教を支配手段として使い、出家することが奨励された。男性は結婚せず、武器も持てなくなり、人口も大幅に減ったという。ただし、のちに宗教の排除や寺院の崩壊はあったが、「天」・「大地」信仰は宗教というカテゴリーを超えているため、モンゴル人はいまでも天・大地の崇拝を継承している。

モンゴル人は信仰のなかで「天」と「大地」に対する観念を築いただけではなく、大自然を含める万物への畏敬およびセクシュアリティとジェンダーへの概念を持っていた。つまり、モンゴルの文化や歴史の中に、このような社会的な性の役割がつけられていたことになる。ここに独特な文化的コミュニティの世界観も形成されたのであった。したがって、モンゴルの文化はモンゴル人の信仰である「天」を基盤とし、その歴史的背景から「大地」という観念を産み出す必要が生じ、そこからセクシュアリティが派生していったと考えられるのである。

## 2.2 モンゴル政治にみる女性の役割

元来、人類がまだ原始的な狩猟採集の生活をしていた段階で、男子は肉食を調達し、女子は菜食の供給を分業していた<sup>111</sup>。ロシアの著名なモンゴル研究者 B. J. ウラヂーミルツォフは、十三世紀のモンゴルは「単なる遊牧民ではなく、遊牧狩猟民であった」<sup>112</sup>と述べている。この説とあわせて推察すれば、男女分業は昔から存在し、経済体系において女性の役割分業は既に確立されていた。ただし、牧畜の発達に従い、生業体系や環境が大きく変化した。そして狩猟は生業活動としてほとんどその意義や重要性を失い、後退していった。当時は動物性食料の需要が重きをなし、植物性のものは些細な添え物に過ぎないことが多かったことから、男子が極めて有利な立場を占めていた。このように、男女の性別分業は歴史の発展段階において大きく変化してきたことも事実である。

### 2.2.1 父系社会と女性

世界地図でもっとも大きな領土を持っていたモンゴル帝国はユーラシア大陸の全域の歴史に名を残した。いうまでもなく熟練した騎兵となる遊牧民の男性が主人公であり、女性と非戦闘員男性はその後方に随伴し、生産と補給を並行して行った。モンゴルの歴史では女性はずねに男を助け、遊牧集団と家庭の基盤を支える重要な役目を果たし、賢い妻、優しい母親として描かれてきた<sup>113</sup>。村上は、モンゴル人は妻のことを「帯なし」(büse ügei)

<sup>111</sup> 大塚柳太郎『ヒトはこうして増えてきた』新潮社(2015)、p. 88。

<sup>112</sup> ウラヂーミルツォフ『蒙古社会制度史』外務省調査部(1936)、pp. 107-108。

<sup>113</sup> フフバートル「伝統的生活空間にみるモンゴルの女性—ことばとコミュニケーション、情報をさぐって—」昭和女子大学女性文化研究所編『女性と情報』(昭和女子大学女性文化研究業書第8集)お茶の水書

とあって、それは夫に身を委ね服従を誓うことであると説明している<sup>114</sup>。モンゴルの伝統社会では、社会の方向性を決定する能動的な主体は男性であったが、その裏で女性は地道に父系社会の仕組みを支えていた。

遊牧民の労働の割り振りには、慣習上の地位にすぎないものも存在した。そのため生業が狩猟から遊牧へ移行するにつれて、遊牧生業の労働における女性の役割分業の比重が大きくなっていったと考えられる。実際、移動式生活で頻繁に行われる移住にあたり、引越し荷物を積んだ馬車や牛車を引く役割は女性が担っていた。一家、一族の資産は女性が主体となって管理していた。

それでも、モンゴルの遊牧社会における家族は家父長制であったといえる。親族制度が父系原理によって構成されたとする説は多くある。「モンゴル人は、オボク（姓）とヤス（骨ん）をセットで記憶し、その規約を遵守し、共通の祭祀に参加することによって、自らの父系親族集団への帰属を明確にしている。これらの父系親族集団が統合されてモンゴル人社会を形成する」<sup>115</sup>とある。モンゴルの文化圏の経済的特質によれば、遊牧民の唯一の財産は家畜であり、その所有権は、男性にあったからである。

後藤富男はエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』内の「牧畜民（遊牧民）の唯一の富となる家畜が男性の特権であり、貴重な財産となるものは男性の所有に帰した」との記述に注目している。そのうえで、自著『騎馬遊牧民』で「狩猟文化の一要因である馬が、遊牧生業を成立させる中核的な役割を果たしたのであれば、馬を掌握する男子が一般的な経営に大きな発言権をもつことは自然のなりゆきとしなければならない」<sup>116</sup>と述べ、家父長制の発生について説明している。

女性が生業する経済活動は拡大したが、騎兵となる男性の地位に着目して、上記一連の説が生まれたのであろう。生計の安定は、資源を利用するために必要な社会関係の創出と維持にかかっている。そして、社会の形式的な部分、表面的な部分にかかわる変更を決定するのは男性が大多数であるものの、社会活動の実質を動かし、生活文化の内実を維持し、継続させているのは女性である。モンゴルの伝統社会で女性はあらゆる面で重役を担ってきたことを、以下のいくつかの側面から検討することにしたい。

### 2.2.2 政治と女性

モンゴル語で書かれた年代記には古代モンゴルを政治舞台としたヒロインたちがしばしば登場する。これは、遊牧生業における女性の役割分業の比重が大きいため、中世に至るまで女性は政治にも影響力を持つようになったと考えられる。

『元朝秘史』で父イエスゲイが殺され、部族民が去り、テムジン（チンギス・ハーン）の

---

房（2012）、p.183。

<sup>114</sup> 村上正二『モンゴル秘史』〈3〉（訳注）平凡社（1976）p.127。

<sup>115</sup> 楊海英『モンゴルの親族組織と政治祭祀』風響社（2020）、pp.3-4。

<sup>116</sup> 後藤富男『騎馬遊牧民』近藤出版社（1970）、p.106。

家族だけが草原に取り残されたとき、母ウエルンの女丈夫ぶりを「…幼子達を養う時、きりりと髪を結びあげ、丈短く帯して、オナンの河を上り下り走っては、山林檜、土桜の実を拾い、日夜、のどを養えり…檜の堀り棒をもち、われもこう、さわぎくを掘りて養えり」<sup>117</sup>と記録してある。

モンゴルの近代の著名な民族学者であるロブサンチョイダン氏は「モンゴルの風俗の監」(*Mongyol jang ayali-yin oyilaburi*) では「オゲルン・ナラン・ハトン(Ögelön naran qatun)の知恵のお蔭で、多くのモンゴル部族は朝廷を失わず…また数多くの子孫を育て、国を守った…そのため現在においても人々はナラン・クーケン・ハガン(Naran keüken qayan) というのはオゲルン母のことを指しているのである」<sup>118</sup>と記している。ここでいう「ナラン」とは本来男性たる「太陽」を意味しているにもかかわらず、女性ハトンに冠されている以上、女性の役割の重要性が強調されているのである。

ウラジーミルツオフの『モンゴルの社会組織の歴史』<sup>119</sup>では、モンゴル統一の諸要素を分析し「祭祀の儀式は統一の重要な要素の一つ」と指摘するとともに「モンゴルの参拝する信仰の中で(Borjigin 氏族の祖先に当たるアランゴワ・エヘ Alun yu-a eke <sup>120</sup>もいる)」と書かれている。

ペルシアの政治家・歴史家であるラシードウッディーンの『集史』(*Sudur-un çiyulyan*) では、ソルカクタニベキ(Surkhagtai bekhi qatun、チンギス・ハーンの四男 Toloï の妃)を高く評価し、「彼女の知恵と見識は世界中の女性の中でもトップ」<sup>121</sup>と述べる。

モンゴル語の年代記『蒙古源流』でも、ソルカクタニベキへの評価は高く、ムンケ・ハーンとフビライ・ハーンという二人のハーンを育て、「子孫を育て、政治を指導し、名声を守り、懸命かつ断固な判断力と解決力は男性よりも優れている…もし女性はみんな彼女と同じくになれば男性を追い抜くことは疑いがない」と謳歌している<sup>122</sup>。ソルカクタニベキはモンゴル最大の有力部族であるケレイト王族の出身であり、国母同然の存在で、理想的な母親像として崇拝されてきた。「ケレイト部族が減んでも、その王女たちのなかには、チンギス・ハーン一族の有能な妃になったものが多い」<sup>123</sup>。ソルカクタニベキはエシ・ハントンとも呼ばれ、現在のオルドスにエシ・ハントンの「白宮」の祭殿も行われており、ケレイト氏族となる後裔もいる。

モンゴル人女性は夫が軍役の場合は戦争に同行し、夫の留守の間に政治の役職も担わなければならない。いわゆる「良妻賢母」を果たすだけでなく、夫の代役としての役割も担っていた。多くのハーンたちも国家や政治のことすべてを夫人と共有し、相談して意見

<sup>117</sup> 小澤重男訳『元朝秘史』〈上〉岩波書店(1997)、p. 58。

<sup>118</sup> Lubsangçoyidan, *Mongyol jang ayali-yin oyilaburi*, Öbür Mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a. (1981).

<sup>119</sup> ウラジーミルツオフ『蒙古社会制度史』外務省調査部(1936)

<sup>120</sup> 現在のモンゴル語の教科書に登場する「教育の母」、次節の記述を参照。

<sup>121</sup> 拉施特主編、余大鈞、周建奇译『史集』〈一、二〉商务印书馆(1985)、pp. 85-92。

<sup>122</sup> 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫』ビジネス社(2016)、pp. 292-293。

<sup>123</sup> 楊海英『モンゴルの親族組織と政治祭祀』風響社(2020)、p. 221。

を乞うていた。

また、『元朝秘史』ではチンギス・ハーンは後継者を定めるとき、第三夫人のイエスイは次のように進言していた<sup>124</sup>。

生まれたる生あるものに永はなきぞ。

大木の如き汝の身のにわかに行かば絡み合える草芥の如き己が民人を  
誰にぞ委ぬる。……

生まれたる四人の駿馬の如き己が子等の、その「誰」と云うや。

チンギス・ハーンは「女人にあるとも、イエスイの言は、こよなく是なり」（続巻一）と言って感謝し、息子たちを集めて後継者は誰が適当かを話し合わせる。妻たちの助言や忠告が、こうしてチンギス・ハーンの決定に影響を及ぼすことは多かったという。このように女たちの活躍は一般に想像されるほど弱いものではなかった。

### 2.2.3 帝国の政略と女性

チンギス・ハーンは多くの部族と婚姻関係を結ぶよう奨励し、モンゴル帝国の統一を強化してきた。娘たちの結婚相手を慎重に選び、決して敵になる部族を選ばなかった。そして、娘たちが結婚する際、ハーンから任命があり、嫁いだ相手の領土を守る使命を受けていた。チンギス・ハーンは婿たちに特別な地位を与え、彼らには信頼をよせ、重大な任務を果たさせてきた。同様に息子と結婚した嫁にも、自分の出身の部族や国の代表として、つねに「国交・代表者・エージェント・コーディネーター」の役割を果たすよう求めていたという。また、一夫多妻の社会でもあったため、モンゴルのハーンたちは娘と結婚した婿にはほかの妻を娶っても、主導権はつねにモンゴル系（自分の娘）の妻に握らせることを強く勧奨していた。

チンギス・ハーンが自分の娘アラクベヒに残した「オンゴウド」の記録では、「王族の男性は誰であったかは関係なく、女性の有権者は重要である」と書いていたという。もう一人の娘アラルトンをウイグルのイドテと結婚させるとき「女性には三人の主人がいる、最初の主人は国、その次の主人は名誉、三番目の主人こそ夫である。国のために尽くせば名誉もついてきて、夫も離れない」と言ったとされる<sup>125</sup>。また「夫婦は馬車の二輪であり、どちらかが機能を失った場合、残りの輪は車を引っ張っていかなければならない」というように、妻も夫と同等の役割を果たしていることを説いた。チンギス・ハーンは四人の娘それぞれを政略結婚でモンゴル帝国と国境となる領土に率先して嫁がせ、モンゴル帝国の安定と強化に取り組みながら拡大していったのである。チンギス・ハーンの四人の娘は政略に利用された犠牲者であるとする一方で、強大なモンゴル帝国を支えた英雄であるとも

<sup>124</sup> 小澤重男訳『元朝秘史』〈下〉岩波文庫(1997)、pp. 172-173。

<sup>125</sup> 蓋山林『陰山汪古』内蒙古人民出版社(1991)、p29。

いえる。

また、アランゴワは夫のないときに出産した説やチンギス・ハーン自身の母も妻も、結婚式の最中に他氏族の男性に奪われたことから、チンギス・ハーンは「子どもが生まれたら、父親が誰であることよりも産んだ母親のほうが大事である…子どもを育て、立派な人間にさせることが一番大事だ」と言った。チンギス・ハーンが女性の人身売買を厳重に禁止し、女性保護に関する法律を定めたのも、心の尊重や実際の社会仕組みの安定や団らんを考慮してのことだった。彼はつねに、女性の潜在能力を最大限に開化させることを考慮していたと推察できよう。

#### 2.2.4 モンゴル人の女性像

漢人の古代における女性の「四つの宝」は「美・知・徳・技」であり、完璧な女性とはこの四つを揃えていることであるとされた。帝政中国の時代には、女性の地位は名実ともに必ずしも正当に認知されていなかった。女性は父系的親族組織の中で継承者となりうる男児を出産することが唯一の目標とされ、そのため結婚を重大事と捉えるよう仕向けられてきた。清代には科挙を受験する権利のない娘には、教育をして妻となり母となるための修行をすれば充分とみなされていた。モンゴルの古代女性は「調和・知恵・責任・勇気」が重視される。特に「和」が重んじられる。モンゴルは昔から戦いと結びついた社会であり、家庭、氏族、国の団結のため賢明な女性は調和を一番重視していた<sup>126</sup>。

以上のような女性の位置づけは歴史資料に記載されているだけではなく、生活実態においても厳然とした事実である（詳細は次章）。生活機能を持った組織のなかで、モンゴルの女性たちは必要不可欠な存在であり、人間と家畜の共存関係を繋ぎ、人間と自然が一体化していた。女性は家事の全責任を担っているだけではなく、家畜の管理や移動の処理をほぼ自主的に行い、男性に劣らない高い地位を享有し、かけがえのない役割を果たしていた。

イタリアの商人・旅行家であるマルコ・ポーロは『東方見聞録』で、「モンゴル人女性の清潔さと礼儀正しさは世界一」「モンゴル人女性は男性の担う商売や家庭経営の全てを行っている…全ての家事をするだけではなく遊牧生活に必要な簡単な道具を生産することもできる」と記している。また、「男性の運命は妻によって決められ、商売においても女性の意見に従い、女性が主導権を握っていた」とヴェニス商人は述べたことを紹介している<sup>127</sup>。

十三世紀中頃、第三代グユク汗治世のモンゴルを旅したイタリアの修道士カルピニは以下のように記録している。

男どもは、矢のほかは一切何も作りません。またときどき、家畜の世話をしますが、大人であろうと、子どもであろうと、だれでも弓がとても上手なので、狩猟を行

<sup>126</sup> 乌云娜、套格套、杭盖『蒙古传奇女杰』内蒙古人民出版社（2010）、pp. 2-3。

<sup>127</sup> 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録』校倉書房(1960)、pp. 126-140。

い、弓の稽古をします…女たちはあらゆるもの、革の着物・上着・履物・頸当て、革製のものをなんでもつくります。また車を操縦して、それを修繕し、駱駝に荷を積み込みますが、どの仕事をするにも非常にすばやく、かつ精力的です。なかには、男のように矢を射るものもおります……<sup>128</sup>。

十九世紀後半のプルジェヴァリスキーの記録にも「男性は極端に怠け者であるが、この怠惰は遊牧民の日常生活のすべてに現れている。家畜の乳を搾り、牛乳とバターを取り集め…殆ど全く女の責任となっている。男はたいてい何もしない。朝から晩まで、あちことの包へ馬を走らせては茶やクミスのみ、隣人とお喋りをするだけである」とし、「女性は男性よりもずっと働き者」とある<sup>129</sup>。これは、男の仕事の実体とはかけ離れているが、家長の権限は男に握られているものの、男が留守のとき家事の一切と家周りのすべての仕事を女性が担っている。遊牧社会では、女性は男性の仕事となっている大半のことをこなし、留守が多い夫に代わりその命令がなくても、みずから裁量するという判断力と決定権「機能」がある。この「機能」が女性に期待されていること自体、女性の地位の高さを示している。

信義を守り、勇気を持つことが、男性に求められる生き方であるとするならば、その一方で優れたモンゴル人女性に求められている生き方の共通点として、政務執行、家庭教育、文化芸術、遊牧生業などの多くの領域で多様な役割を担うことがある。

上記のようにあらゆる場面で活躍する遊牧民の女性の労働の特徴をまとめるとすれば、以下となる。

①家の内から外に及ぶまでの仕事を遂行し、牧畜民としての「自律性」を具えていること。草原に生きる生活のなかで、男女の仕事は分業されているとはいえ、完全かつ精密に専門化しておらず、誰でも、いつでも仕事を交代できるという特徴がある。それは、厳しい自然のなかで生きるという条件のなか、老幼男女問わず生活に直結することは誰もが最低限にできるよう育てられてきているからである。

②女性は産業社会の労働者とは異なる存在である。彼女らの仕事は雇用主によって配置されているのではなく、主体的な行為者として協同的にほかの人々と関わっていることである。

③「自給自足」であるため、作業の結果できる物（食糧や工芸品・フェルトなど）は財産という資本にはならないこと。女性の生業における産物は所有者の権利を主張するものではなく、報酬を期待する仕事でもないという特徴がある。

モンゴル社会は、今日もなお、伝統文化を基盤に成り立っている。伝統文化を継承する役割を担っているのも女性である。一見すると、モンゴル社会は男性が主役の「父の背中」

<sup>128</sup> プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社(1965)、pp. 23-24。

<sup>129</sup> プルジェヴァリスキー著、田村秀文等訳『蒙古と青海』〈上巻〉生活社(1939)、p. 74。

というイメージが強いが、実際は女性が主な生活生産文化の担い手であって、彼女たちは遊牧や日常生活の維持に生涯を捧げている。つまり、モンゴルの伝統的な民族性として、政治などに関わるのが男性である一方、生活習慣など身近な文化と関係が深いのは女性である。さらに女性は家庭作りだけではなく国作りにもかけがえのない存在であった。政治経済、生活生産のあらゆる場面で重責を担っていた女性には、男性にも増して固有の地位が与えられていたのである。

したがって、このように女性の潜在的な支配となる地位は何らかの優位というよりも、その役割を果たしているからこそ、与えられている地位であった。

## 2.3 非日常における女性

この節では女性に特化した行事や儀礼において、女性が果たしてきた役割について考察する。女性はモンゴルの日常生活にあたって主役であるが、非日常のなかでも重要な役割を果たしている。他方、女性が儀礼から排除される場面を描き、その意味について検討する。

### 2.3.1 女性主役の行事

#### 火の神と女性

モンゴル人は、「天」と「大地」以外に「火」を崇拝してきた、と1846年にロシアの学術雑誌で論文を発表したドルジ・バンザロフは論じている。「火」はモンゴルの人々にとって至上の神であり、敬意を払う存在である。モンゴル (mongyol) という言葉は (mōng yal) 一永遠なる火という意味の言葉から由来してきたという。モンゴル人の火の神は女性であり、「火神の母」と呼ばれる。ドルジ・バンザロフは以下のように述べている。

波斯人に於いては、イゼド・アデル (火の神) は神であったが、蒙古人においてウトは母 (eke) と呼ばれた。すなわち女神である。…… (中略) 女神ウトは幸福及び富の授与者とみなされるが、その特質は純潔、すなわち清める能力であり、己れの純潔を他物に伝える能力である。火は清潔者としての資格をもって各戸の保護者となり、また火を焚く爐 (yolumta) は神聖なる場所とみなされる。家は火を焚くことによって清められ、火が家を聖化するのである。かくて女神ウトはある意味においては家の主婦である。家に住む家族の一員たらんと欲する者は、先づ女神ウトに伏拝すること、あたかもその許可を乞い、また己れをその保護に委ねるかの如くである。これよりして蒙古人には、婚礼の当日は新郎新婦が火の前に伏拝し、これに献祭する風習が起こった<sup>130</sup>。

---

<sup>130</sup> ドルジ・バンザロフ著、白鳥庫吉訳『シャマニズムの研究』新時代社 (1941)、pp. 30-31。



シベリアのブリヤート・モンゴルを事例としたバンザロフがいうところの女神ウトは、オルドス・モンゴル語発音に従う本論文ではオテケンと表現している。火の神と女性との関連性が強調されている。既述のように、「火の神」は前述の「大地母神」とも重なる<sup>131</sup>。女性がモンゴル文化のなか、特別な行事を行うときに果たす役割として以下の例をあげよう。

モンゴルの正月は、旧暦12月23日の拝火祭から始まる。モンゴル語ではガル・ダヒホ(yal takiqu)あるいはホリンゴルヴァン(23日)という。拝火祭の当日は、家族全員で食事を楽しみ、「火の祭祀」を行う。昔からモンゴル人は火を敬い、火神が幸福と財産を授けてくれると信じている。そのため、火神を祀るのが慣習とされている。

拝火祭の日、火の女神は天界へ戻り、約一週間後の元旦に地上へ戻るとされる。年の暮れに送り出した火の神様を迎えるのがお正月となるため、モンゴルの拝火祭はプレ正月であり、本正月と時間的につながっている。

この火神を祀る準備はすべて日没前に行われる。拝火祭の供物を「火の装い」(yal-un emüsgel)といい、十三世紀に書かれたとされる『モンゴル秘史』にもみられる古い表現である<sup>132</sup>。「火の装い」は主としてウシもしくはヒツジの胸骨(ebčigüü)と直腸(abid, abiy, abilay, abisay)にラクダの頭部の毛(oγbuy)を巻きつけたものである<sup>133</sup>。今でもモンゴル人の民間信仰の中に息づいている祭日であり、行事は次のように行われる。

夜、家族全員が集まり、フェルトじゅうたんを敷き、火神の母に羊の胸骨、チーズ、煎り米、赤ナツメ、黒砂糖などを釜戸で焚いて捧げ、拝礼する。その際、家族全員が火鉢を囲んでひざまずき、一家の長男は火打ち器で火を起こす。そして、火鉢の火力の勢いが盛んになると、全員でかまどの神を祀る。ただし、この火神を祭る行事の中で、羊の胸骨を解体するときと燭台(jul-a、皿にバターを満たし紐状に火を付ける)に火を付ける際、女性は決して手を付けてはならないというしきたりがある。

この行事の過程では、一見すると女性の象徴である神様を拝礼しているようにみえるが、むしろ女性を避ける場面もある。しかし、この行事の主体は女性であるため、可視的な行いと矛盾があるとは言えない。

先に取り上げたドルジ・バンザロフはまた次のように記している。「火に対しては鋭利な武器を振り回すこと、汚物や水をかけてはならないなどの禁忌が設けられた。家の主人は毎日食事を始める前に火に供物を献じるほか、毎年一回厳かに火を祀る儀礼を行う。『火の

<sup>131</sup> 楊海英『逆転の大中国史』文藝春秋(2016)、p.185。

<sup>132</sup> 楊海英『チンギス・ハーン祭祀一試みとしての歴史人類学的再構成』風響社(2004)、p.116。

<sup>133</sup> S.Narasun, *Ordos-un Jang Ayali*, Öbör Mongyol-un Arad-un Keblel-ün qoriy-a (1989)、pp.259-261。

祈祷』と名付けられた写本が昔から広く伝わり、古き内容を維持しながら新しい表現が書き足されて今日に至っている」<sup>134</sup>。

火の神が持っていると言われる浄める能力は、実に巨大な力と見なされている。ニマーは『靈魂・偶像・信仰』のなかで「モンゴルの人々は昔から自分の魂を大切にし、愛し、自分から離さないようにする。自分の魂が汚れることにより、様々な障害や病気が自分にやってくるものだ」と信じる。そのため汚れた場合は、火を使って清める…」<sup>135</sup>と述べている。

花嫁は新しい家に入る前、玄関の前に燃えている二つの火の間を通るが、それは自分の身を清める意味がある。結婚式でも「バガナまたぎ」と「拝火」が連続していることから、バガナと火の象徴的な結合が認められる。火によって人や物を清める思想がモンゴルにあったことはよく知られ、十三世紀の著名な旅行記にも記されている。カルピニは『中央アジア・蒙古旅行記』のなかで「何でも火によって清められると信じています。ですから、使節、諸侯、そのほかなにびとであろうと、タルタル人（モンゴル人）のもとへ来たものは、そのたずさえてきた贈りものともども、火と火のあいだをとお祓いをしてもらわねばなりません」<sup>136</sup>と記している。

モンゴル社会における火は神秘的で象徴的な自然界のトーテムとして継承されてきたが、そのなかでもセクシュアリティ性が潜在的に示されている。この伝統行事の特徴として、信仰する聖なる対象は女性性を持っているが、実際行う過程では、女性をむしろ避けることが挙げられる。モンゴルの精神世界において、セクシュアリティの存在が指摘されるとしても、それを現実の生活に起きるジェンダー問題と同じ文脈で捉えることはできない。

### 「出産と女性」

女性の場合、出産は特別な意味を有する、と理解されてきた。モンゴルの伝統的な医学について研究してきた内モンゴル医学院教授のバ・ジグムドによると、出産に関わる女性は特殊な身分を有していたという。バ・ジグムドは次のように述べている。

モンゴル人にも、太古から助産の専門的な才能をもつ人がいて、それはおもに女性であった。その歴史は「イドガン」という名詞の語源から判断することができる。中国内外の多くの学者は、イドガンという名詞の由来を研究して、多様に解釈しているが、その研究はシャマン研究の域を出ていない。……（中略）イドガンという語は母権制の時代に起源をもつと思われる。モンゴルのシャマン教では、昔から男性の巫師を「ボー」といい、女性の巫師を「イドガン」と呼んでいる。イドガンとは、ただ巫師

<sup>134</sup> ドルジ・バンザロフ、白鳥庫吉訳「黒教或ひは蒙古人に於けるシャマン教」『シャマニズムの研究』新時代社（1941）、pp. 29-33。

<sup>135</sup> Nim-a, *Sünesü. Ongyod. Sütülye, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a*, 1999, pp.25-26.

<sup>136</sup> プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社（1965）、p. 15。

を指しているのではなく、助産婦もその名で呼ばれ、現在もモンゴルでは広くそう呼ばれている。……（中略）したがって、モンゴル人のなかに、はるか昔から助産婦が存在したと断定できる。科学の未発達な時期の助産婦すなわちイドガンたちの助産方法は未熟なものであっても、豊富な実現のなかで数多く有効な経験を積み、当時の歴史条件のもとに、モンゴル人の女性・幼児の健康を維持するのに、重要な役割を果たしたのである<sup>137</sup>。

女性にとって、出産は非日常的行為の一つにあたる再生産である。この非日常に関与し、介助するのもまた女性イドガン（ウダガンともいう）で、いわばシャマンと「医者」を同時に兼ねた存在である。こうしたイドガンは、近代的な医学施設が普及される1980年代後半まで、オルドス地域に存在し、モンゴル人から絶大な尊敬を受けていた。

女性は本能的に自然とつながっていると認識されている地域がある。例えば、セントラル・カラハリ・サン（グイとガナの二つの言語集団からなる）は、アフリカ南部のカラハリ砂漠に住む狩猟採集民である。グイ/ガナ語で「儀礼」にあたる単語が「治療」や「薬」を意味し、初潮儀礼も、少女自身の治療と同時に、少女が自然を慰撫することで、自然の災いから人々を守るという「癒し」を目的にしている。その癒す力の源泉は、少女は自分の影響力を自覚し、自身の感受性を鋭敏にすることにある<sup>138</sup>。

アフリカに暮らすサン族の初潮儀礼は、思春期の少女の自意識を高め、感受性を鋭敏にし、少女が新しく生まれ変わることをめざしている。相互的な「感応しあう」世界において、少女の自然への意識は、そのまま自然から人間への意識として返され、少女の変容は自然からの応答でもある。少女が感受性を研ぎ澄まし、自らの行動を意識的に行うことが、雨をもたらして自然を豊饒にさせることにつながると人々は考えている。人々は少女の感受性を使い、少女の成熟とともに自然が豊饒になることを願っているのである。その意味で、グイ/ガナの初潮儀礼とは、大いなる自然を「治癒」させ、彼らの生活世界を新生させるものなのである<sup>139</sup>。

このように女性と自然の関係は古くからの慣習のもとに、人々に信じられてきたのである。同じようにモンゴルでも、女性は特別な存在であり、女性を神聖とみるのは彼らの信仰と関わりがあったのであろう。

### もてなし文化と女性

自然界における民間信仰はさまざまであるが、現在に至るまでもっとも伝統文化を継承して行われている活動として、旧正月の祝いに当たる行事を取り上げたい。モンゴル人は正月を「白月」（ツェガーン・サル）と呼ぶ。かつては乳製品がもっとも豊富になる秋の開始

<sup>137</sup> ソログト・バ・ジグムド『モンゴル医学史』農文協(1991)、pp. 45-46。

<sup>138</sup> 今村薫『沙漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と礼儀—』どうぶつ社 (2010)、p. 131。

<sup>139</sup> 同上、p. 157。

を「白い月」と名付けて一年の暦の始まりにしたとされている。現在は太陰暦の正月を指しているに過ぎないが、本来は牧畜作業暦との関連があったようだ。

万物が蘇ることへの期待を表して、新しい年が始まる正月を「白節」という。白節はモンゴル人のもっとも盛大な祝日で、人々は早くから準備し、大掃除をはじめ、新しいミルク桶、フェルト、鍋、鉢などを用意する。まず上述の「火の祭日」が過ぎると正月の本番がやってくる。正月はモンゴルではもっとものんびりした季節であり、遠い親戚同士で挨拶を交わす貴重な団らんの機会でもある。これは牧畜社会のなかの「もてなし文化」の一つでもある。

旧暦 12 月 31 日の大晦日が一年の最後の日で、モンゴル語では「ビトゥーン」という。この言葉は、一年をまるごとまとめることを意味している。「ビトゥーン」の夜には家族全員がゲル<sup>140</sup>の前に集まって、火を燃やす（これも浄める意味で行う）。そして、チーズ・お酒などを用意して火の周りを 3 周し、天の神様を祀る。最後に、火神の母を拝み、酒を勧めるなど一連の流れを終えると、神を家へ迎え入れる。これは前述の拝火祭の続きでもある。

この祭祀が終わると、年長者から順に席につく。そして、年少者は年長者に低頭して (toluyai mürgükü) 挨拶をし、酒を捧げて祝いの言葉「ユルール」(irügel) を述べる。これは一般に「祝詞」と翻訳され、申し述べるときは抑揚をつけてのびやかに朗々と語る。さらに、一家揃って食卓を囲んで年越しの食事をする。食卓には肉や乳製品のほかに、菓子、たばこ、酒などが並ぶ。ビトゥーンの夕食には「白い食」とされるさまざまな乳製品及び「赤い食」とされる肉類でほぼ全品が構成される。ほかにもバター、黒砂糖、小麦粉で作る「新年餅」や菓子など普段食べられないものも豊富に出てくる。新年餅には、家族が仲良く暮らし、永遠に幸せな生活を送る願いが込められている。

ビトゥーンの夜は、徹夜で歌ったり踊ったり、家族全員で楽しむため、この旧暦 12 月 31 日から 1 月 5 日までの間は、モンゴル人にとってお正月期間の中でもっとも楽しい日々である。正月は楽しむ期間ではあるが、楽しむための準備は手間暇のかかる作業であり、そしてここでも男女の役割分業は徹底されている。神や火に捧げる祭事以外の作業は、ほぼすべて女性がこなすのである。

元旦を迎えると、各家庭に一人か二人の年長者または女性を留守番に残し、ほかの者は正装でミルク茶を入れた銀製の壺を持って「オボー祭り」へ出向くのが習わしである。オボー<sup>141</sup>では、供え物を火に投げ入れて、一年の平安を祈る。そして家に戻ると、年少者は父母や年長者に酒とハダグを捧げ、健康と幸せを祈る。加えて朝食の後、人々は三々五々、親戚や友人に新年の挨拶に行く。訪問先の部屋に入る際、訪問者はまず年長者に叩頭して新年の挨拶をし、健康と長寿を祈る。同輩の間では、ハダグと嗅ぎたばこを互いに贈りあ

<sup>140</sup> モンゴルの移動式住居のこと。

<sup>141</sup> 小山や丘など高いところに木や石を積み上げた自然崇拝の祈りの場。周辺の遊牧民が天に雨乞いなどの祈りを捧げ、定期的にオボー祭をする。祈りをする際は時計まわりで三回回るのが習わし。

う。また、戸主の婿がお客に酒を勧めるのだが、お客は注がれた酒を必ず飲み干すのが習慣となっている。この日は、飲みながら歌ったり踊ったりし、草地ではさらに競馬、ラクダレース、相撲などに興じて一日が暮れる。

モンゴル国のサンピルデンデヴの記した『牧畜民の伝統的習慣』によれば、羊や山羊の搾乳儀礼にあたって次のような準備を行うとある。「芽吹いた Arča (アルチャ、木の名前) で屋内に香を焚き、芽吹いていない Arča をアギ (ヨモギの一種である香草) と混ぜて、ウルム (脂肪分を主体とする乳製品の一種) などと合わせて皿に盛り付け、宿営地の西北方あるいは四方に置き、大いに香を焚く。それから搾った乳を清めた器に入れて、女性の一人が持ち、もう一人の女性が乳をふりまくために儀礼用の匙をもつ。そして、天地に九九回、山河などの土地の神々、先祖霊などに向けて七七回ふりまきながら、次のような恵みを乞う言葉を述べる」<sup>142</sup>。

エムゲン (先祖の母) なる代々権力ある永遠の天よ  
すべての母なる大地よ  
最上のハーンである永遠なる天よ  
ハーンである大地と水よ  
万の星の丸き  
月、金色の太陽/金の星  
日の幸なるを  
月の良きを求めて  
良き日に乳をふりまく

一般に、「ハーンである永遠なる天」は男性始祖に、「母なる大地」は女性始祖に対応して形容されることが多いと述べてきた (本章第一節)。しかし、ここでは「天」は母として形容され、エムゲンという「先祖の母」を意味するモンゴル語から始められている。出産、増殖、乳などをめぐって母性が意識されているからであろう<sup>143</sup>。

正月の家族団らん以外のもう一つの特徴的な過ごし方は年始まわりである。特に草原における住宅間の距離は途方もなく離れ、すぐに訪問可能な距離ではない。正月は客人を接待する季節であるといっても過言ではない。ひたすら親戚や近所に挨拶をし、ごちそうしたり、ごちそうされたりするしきたりである。「客好き」で知られるモンゴル人は来客へのもてなしをとて重視する。客人は知り合いであれ、通りがかりの旅人であれ、とにかくゲルの外から出迎え、客席まで案内し、食卓に溢れるくらいの食事でもてなしすることが、家庭の原則であり女性の義務でもある。

<sup>142</sup> Sampildendev, X. Malchin Ardyn Jan Uiliin Ulamjilal (牧畜民の伝統的な習慣)、Ulanbaatar, (1987)。

<sup>143</sup> 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』朝日選書 (1996)、p. 124。

客人が来客した場合、玄関の外で両手の平を上にし、案内する。そして最初、乳製品に口を付けてもらい、そのあとミルクティーにチーズなどを入れたお茶碗を両手で渡す。客人にただのお茶だけを出すことは失礼にあたる。食卓には必ず一番格別な料理でもてなすことが慣習となっている。また客人が帰宅するときに、両手の平を体の前方に上にし、手の平をお客様に見せないようにし、旅の安全や順風を願う。このようにモンゴルのもてなし文化では女性は主役を務めている。

正月行事の一環である年始まわりには、とりわけモンゴルのもてなし文化が集約され、女性が主体となって実践されていることが分かる。そこには女性の役割分業の性質を垣間見ることができるのである。以上二つの例からわかることは、モンゴルの非日常生活の中でも、女性が主体となる行事があり、ごく素朴な行動が典型的な伝統行事として形成され、今日に至っていることである。このような伝統行事はまさに女性によって、継承されてきたことを示している。

### 2.3.2 女性が忌避される行事

女性が主体となる作業がある一方で、女性の介入が制限される作業もある。この節では忌避行事から見える役割分業とは別の女性の作業の特質について検討する。モンゴルは家父長制の影響もあり、生活文化のなかにジェンダー的に性役割分業に見えるものが散見される。

女性は遊牧生活の中で、不可欠な尊い存在であると同時に、多くの行動がタブー化されている。例えば、以下のような例が挙げられる。チンギス・ハーンの霊を祭っている「八白室」や大モンゴル帝国の政治のシンボルである「ハラ・スウルデ」に近づくことは許されない。また、オボの祈りの場に登ってはいけない。このような女性の行動のタブーはどのような意味を持っているのであろうか。

#### チンギス・ハーンの八白室祭祀

ナイマン・チャガン・オールド(八白宮)はオールドス市エジン・ホロ(伊金霍洛)旗に建てられている。ダルハト部族からなる祭祀者集団によって祭られ、「チンギス・ハーンの墓」(成吉思汗陵)とも名付けられているが、正式な墓ではなく、祭殿である。既に述べたように、チンギス・ハーン祭祀については、楊海英が民族誌『チンギス・ハーン祭祀』<sup>144</sup>を公刊している。

オールドス地域のモンゴル人はお正月の朝一番にチンギス・ハーンの陵(八白室)へ参拝し、「聖なる主」に新年の挨拶をし、健康と長寿の祈祷を受ける者が多い。ただし、昔は女性が「八白室」の室内に入ることは禁じられていたため、外から拝むことだけが許されていたという。その理由として、一説では、古くは「男尊女卑」の考え方の強い社会だったため、女性を「けがれている」「卑しい」ものとして「聖なる地」に入れないようにしてい

<sup>144</sup> 楊海英『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての人類学的再構築』風響社(2004)。

たという。このように、女性はモンゴル社会において伝統文化の主演でありながら、一方、差別あるいはタブー視されていたことも少なからずあったといえる。

また、社会構造に関わる禁忌がある。現在でもオボーにより女性の参拝を禁じる場所がある。オボー祭祀では部落や氏族の重要な出来事や決断を定めるがゆえ、女性の参加が禁じられるほか、テンゲル（天）祭祀や祖先祭礼のような父系親族集団に関わる盛大な祭礼には必ず女性を排除する掟があった。オボー祭祀では出産して一か月経たない人や、葬儀を行って百日経たない世帯は家族全員、参拝してはいけないというタブーもある。戦前に内モンゴルで牧畜社会全般について調査を進めていた後藤富男は、モンゴルにおける女性の地位の問題は分業体制と深く関連性をもつと指摘している。彼はモンゴルの儀礼をシベリアなどの北方狩猟民と比較したうえで、次のように述べている。北方諸民族は「種族の生死を握る食物の分配者たる女性神を『動物の母』だと認めていただろう」という<sup>145</sup>。モンゴル人の信仰となるオボー祭典の際、女性の参加が禁じられていることは仏教の不浄観によって説明されるが、オボー神が女性であったという説もあることから考えれば、女性の神への畏敬の念が強かったのではないかととも解釈できよう。

モンゴルの遊牧民の親族制度が父系原理によって構成され、その家族が家父長制の下にあり、唯一の富ともいべき家畜群の飼育は男性の特権であって、貴重な財物はすべて男子に帰し、婦人の従属をもたらしたという<sup>146</sup>。ナランゲレル（娜仁格日勒）によると、女性は劣っているとか、穢れているという広く行き渡っている観念には賛同できず、祖先祭祀や死者儀礼において女性が排除されているのは、女性自身に関心が寄せられていたためであり、女性保護及び女性特有の匂いに求められるという<sup>147</sup>。

女性のタブーは祭礼の場面では一層厳しかった。女性の行動におけるタブーは「ヨゴレ」や「ケガレ」と関連する意識に導き出された禁忌であると思われるが、この意識に関しては長い歴史が背景にあるため、起因に関する結論を導き出すことは困難である。

しかし、時代の流れや文化変容の影響にしたがって、昔のタブーや禁忌も変化している。現在はナイマン・チャガン・オールド(八白宮)にも、女性たちは参拝することができるようになっている。

「聖なる力（マナー）」とそれに伴う「禁忌（タブー）」の関係を女性の象徴性に関連付けて分析してみよう。女性に対する禁忌は「女性が汚れている」からではなく、女性が「聖なる力と親密である」からではないだろうか。高貴な女性は生殖を通して、神の聖なる力を伝達・蓄積する役割を担っているために、母親の地位は聖なる力の保持者の継承条件であり、そのための重要な要素となっていたとも理解することができる。

## モンゴルの軍神スウルデ祭祀

<sup>145</sup> 後藤富男『騎馬遊牧民』近藤出版社(1970)、p. 97。

<sup>146</sup> 同上、p. 106。

<sup>147</sup> 娜仁格日勒『论蒙古族的祖先崇拜』嵯峨野书院(2003)、pp. 115-124。

スウルデはモンゴルの人々を守護する氏神のシンボルである。一家の主人は朝夕、スウルデに香を供え、チンギス・ハーンをたたえる「主の賛歌」を大声で唱える。遠い旅に出かける時や、旗王の兵士として出陣する際も、スウルデに向かって安全を祈願する。スウルデには黒いスウルデ、白いスウルデ、アラグスウルデとあり、黒いスウルデは大モンゴル国の軍旗であって、ナイマン・チャガン・オールド(八白宮)の右側約0.5キロ離れたところに設置され、同じくダルハト部族からなる祭祀者集団によって祭られている。モンゴルでは、黒色は「力強さ」、「堅実さ」、「勇ましさ」の象徴とされている。

しかし、例外もまた存在する。オールドス西部ウーシン旗に住むガタギン氏族(Qatagin obuy)の守護神の祭祀においては、逆に娘たちの参加を奨励してきた、と民族誌は伝えている<sup>148</sup>。女性たちの積極的な参加により、婚出していった仲間との連携が強化されている。

また、軍事の行われる厳正な場において、女性を守るため、危険な場を回避させるという目的にくわえ、男性達が女性に気を取られないようにということが狙いであったとも言われている。軍神祭祀は主に男性、すなわち戦士達が主体で執り行う。そういった祭祀現場では、羊の丸煮などを供え物とするため、家畜の屠殺を行う。女性は母性を備えているため殺生行為には本能的に向かないとされている。これは、屠殺の際に生じる血を女性達に見せることを避けるためだと考えられている。

モンゴル社会で女性は主導的な役割を發揮していたが、地位が相対的に下がったと見受けられる事例もあった。例えば、チンギス・ハーンが亡くなった後、三男のウゲディ・ハーンが王座についたが、酒におぼれ、女性や子どもを侮辱する事件まで起こした。1241年に亡くなるまでには4人の妹が支配している王国を自らのものとした。しかし、彼の妻であるドレゲネ・ハトンが政権を握ると、自分に5人もの息子がいるにも関わらず、一番重要なポストを担う大臣として、自分の従者であるファティマという名前のペルシア人女性を任命した。彼女は「ハトンの住まいに自由に出入りし、ハトンのプライバシーを共有しあい、国の秘密を知っていた」<sup>149</sup>と記録されている。

ウゲディ・ハーンの子であるフユクはファティマを迫害し、またほかの女性に対する侮辱事件を起こした。彼は自分の母親を殺害し、多くの女性にセクハラやパワハラを行い、女性の地位や権力を強く制限した。ウゲディ・ハーンが二代にわたってチンギス・ハーンの子孫の女性尊重の法律を犯した歴史も残された。

### 箴言が反映するモンゴル流ジェンダー観

今に伝わるモンゴルのことわざや箴言は、長い歴史により培われた生活経験と先人の知恵によって代々継承されてきた。それが人々の行動規範として広まり、問題や障害が生じた際の解決策にもなっている。そして、ことわざや箴言の中には、モンゴル独自のジェン

<sup>148</sup> Qurčabayatur, *Qatagin arban yurban atay-a tegri-yin tayily-a* (『ガタギン十三アタガー・テンゲル祭』). Qayilar: Öbür Mongyol-un Soyul-un Keblel-ün Qoriy-a (1990), p.84.

<sup>149</sup> 拉施特主編、余大鈞、周建奇译『史集』<二>商务印书馆 (1985)、pp. 209-210。



ダー思想の表現を含むものも多い。

例えば、「女性たちの集まりは井戸にて」(emes-ün čoylay-a qudduy deger-e) とある。水を汲むなどの家事は女性が行い、昔の草原地帯に暮らした人々は隣人同士で同じ井戸を使って水を確保していた。したがって、女性たちの語り場、情報交換の場は自ずと井戸になっていたようである。そしてこの言葉には、女性は井戸より遠い場所には行けないという軽蔑する意味合いも込められていたようだ。

「馬はよくても鞍よりは下、妻はよくても夫よりは下」(mori sayin ču emeysel -ün dour-a, em-e sayin ču er-e-yin dour-a) とある。馬は人がまたいで乗る移動手段であり、人よりも低位な動物と並列して、妻は夫より社会的立場が低位であるということを表している。男性の視点に立てば、女性は社会的地位の低い存在だという解釈ができる。

「男の胸の内、鞍つき、くつわつきの馬が駆けめぐる。女の胸の内、鍋やカマドが駆けめぐる」(er-e kümün-e čegejin-dü emegel tai mori ergildüne, eme kümün-e čegejin-dü toyoyä sinayä ergildüne)。周知の通り、遊牧社会において、騎馬は男の飾りであり、馬とともに歴史を歩み、時代を切り開いたという誇りは持ち続けられた。それに対し、女性は家事を担い、台所を離れられないということを示し、男女のステータスの違いを表現している。

「愚かな指導者は国のくず、悪い妻は家庭のくず」(Mungqay noyan törü-yin böke, Mayu em-e ger-ün böke)、また「良い嫁をもらえば月に三回は祭り、悪い嫁をもらえば日に三回悲しむ」(sayin ekner abubal sar-a-yin ħurban bayar, mayu ekner abubal edür-ün ħurban ħobalang) とある。家庭での役割分業において女性の負担は大きいため、女性の貢献は家庭が健全に機能する上で重要であることを表している。

男性に関する諺にも女性の地位を暗示する表現がある。「悪い夫は妻に威張って英雄となる」(mayu er-e ekner degen bayatur) である。これは(優秀な男性は国や社会など家庭を超えた大きな領域で影響力を及ぼす英雄となる)が、能力の劣った男性は身近な人や自分の妻にしか権勢を振ることができないということを表している。ともすれば、能力の劣った男性でも、妻より秀でていうことであり、男性より女性の地位を低く位置づけた表現であると解釈することもできるであろう。

これ以外にも、多くのジェンダー思想を含んだことわざや箴言が広まり、定着している。女性は夫や他の男性の額や頭に触ってはいけない。それは、額が人間の運勢の象徴的な部位だと考えられているからである。男性の帽子や帯はその人の地位や自由のシンボルであるため、勝手に男性の帽子や帯などに触ることはできない。また妻は夫の馬捕り竿の上を跨いではいけない。馬捕り竿も同様に馬を捕まえるためのもっとも大事な道具であり、それを跨ぐことは男性の運勢に不吉をもたらすとされた。男性の運勢に障碍とならないようにする一連のタブーがある。

モンゴルでは、男女を問わず尊属・首長など年輩の名や両親の名前を口にせず、それと同音の語を使用してはならないとする風習があり、女性は自分の夫を直接名前で呼んではいけない。必ず「主人」や「子どものお父さん」などで呼ぶ。結婚した女性は髪を一つに

結ばず、二つに分けて結び、年長者の前で自分の髪分け目を見せてはいけないため冠帽を脱することは非礼とされる。

また、女性が年輩の男性や義理の父の前で非正装の姿や素足を見せてはいけない。嫁は義理の父に自分の手で直接物を渡すことも禁じられ、必ず他の人を通して渡すのである。妻は夫の兄や伯叔父などのゲルの内部では炉の場所よりも奥に入ることを許されない。嫁は嫁いってから三年のうちは、家を出るとき背中を見せてはならず、後ろにさがる姿勢でドアを出ていたという。このような規範 (Purdah, 女性隔離) は北インドにもあり、嫁たちは義理の父親や義理の兄など、自分より年長の男性に顔を見せてはならず、直接声をきいてはならないなど多くの規制がある<sup>150</sup>。女性たちは社会生活のなかで、男性から制限されていた環境に置かれていたことが伺われる。男性は社会的知識を持ち、社会の中心にあり、すべてを能動的に動かす存在として見られ、一方、女性は周縁的で、知識を持たない受け身の者として見られていた側面もあろう。

女性に対する制約は上記だけではない。女性は若い男性の顔を直視してはいけない。また大きい声で笑いながら話かけてもいけない。必ず小さい声で答える。女性は喧嘩をし、年輩の前で怒声や罵声を挙げるのが禁じられる。結婚した女性は悠長な生活が禁じられている。これに背くと女性は墮落していると捉えられ、家庭が滅びると言われる。

## おわりに

一般的に宗教の男性中心主義 (androcentrism) は、「男性」を人間の規範としていることに表れているといえる。例えば司祭や僧侶など公的に教えを説く指導者の役割は、男性が独占することが多い。顕著な例として、ローマ・カトリック教会における女性司祭の問題があげられる。女性は「不完全な人間」であり「神の似姿」として作られてははいないため司祭職に就くことができない、とトマス・アクィナスやボナベントゥラなどの聖職者たちは考えていた<sup>151</sup>。教義の面では、女性が男性に従属すべき身分であることと、誘惑に負けて罪を犯した存在であることを聖パウロが強調した聖書の記述がよく知られている<sup>152</sup>。

セントラル・カラハリ・サンでは、月経中の女性は夫の狩猟道具に触ってはいけない。月経中の妻は夫が狩ってきた肉を彼女が熾した火で調理してはいけない。これらのタブーを破ると、夫の矢や槍が動物に命中しても、動物は「月経中の女性のように、血をながしながら平気で逃げ去ってしまい」夫の狩猟は成功しなくなるとされている<sup>153</sup>。ここで、女性は生理的な違いから、男性中心の生活文化の中で禁忌とされることがあるとわかる。

これと同様にモンゴルの軍神黒いスウルデの祭祀にもそのような意味合いで女性の参拝

<sup>150</sup> Mandelbaum, D.G. *Women's Seclusion and Men's Honor: Sex Roles in North India, Bangladesh, and Pakistan*, Tucson, University of Arizona Press. 1988.

<sup>151</sup> ワインガーズ・ジョン著、伊従直子訳『女性はなぜ司祭になれないのか—カトリック教会における女性の人権』明石書店(2005)、pp. 103-155。

<sup>152</sup> 例えば、新約聖書「コリントの信徒への手紙」や「テモテへの手紙」を参照のこと。

<sup>153</sup> 今村薫『沙漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と礼儀—』どうぶつ社 (2010)、p. 143。

は禁じられていると考えられる。アームストロングは、キリスト教の女性忌避に関する研究のなかで、「西洋においては、女性は永遠に男性を墮罪に誘うエバである」と論じ、キリスト教の女性排除を批判している<sup>154</sup>。

キリスト教の救世主は、生涯独身を通した「男性」である。また、仏教を説いた人物は、妻と子を捨てて出家した「男性」である。この説話は、宗教の男性中心主義を正当化する根拠に使われることもある。男性中心主義的な宗教体系において、女性は宗教的価値や権威から遠ざけられた存在と見なされるのである。宗教は女性支配のための前近代的な装置であり、女性は無価値で従属的な存在と規定されるようになった<sup>155</sup>。

歴史の長い足跡を辿っていくと、男性と同等の女性の功績や地位が存在していたことに疑う余地はない。しかし、他方で男性優位という考え方から女性を政治の場や家族間で抑圧するといったことも起きており、「男尊女卑」に即した歴史的事実も多く存在する。

ジェンダーは、男性/女性、戸外/家内、支配/従属というようにしばしば二極化される。一方、モンゴル社会では、上述のような男女セクシュアリズムが潜在していたが、ただし極端に「男女平等」や「男尊女卑」であるといった明確なジェンダー意識は希薄で、その区別や差別の妥当性はすべて「バランス」で衡量されていたと言えよう。歴史的経過のなかでモンゴル独自のセクシュアリティ、とりわけ「男女のバランス」という考え方が定着し、このようなジェンダー概念がその社会生活に組み込まれていたのである。

しかし前述のようにモンゴルの伝統社会でも、女性のタブーが普段のありふれた生活のなかに浸透し、タブーがことわざやしきたりとして、さらには是非の判断基準として伝承されている。これらのタブーが過去の教育の根幹であるとするれば、現代におけるモンゴル社会の文化変容に伴い、その後どのような変遷を辿るのだろうか。それは合理化されたかたちで再形成されるのか、あるいは消失するのか、推移を見守る必要があろう。

---

<sup>154</sup> カレン・アームストロング著、高尾利数訳『キリスト教とセックス戦争—西洋における女性観念の構造—』 柏書房 (1996)、p. 57。

<sup>155</sup> 宇田川妙子、中谷文美『ジェンダー人類学を読む—地域別・テーマ別基本文献レビュー』 世界思想社 (2007)、p. 292。

### 第3章 牧畜業にみる女性

#### はじめに

「自然への敬意」が日常生活の様々な場面で見られ、それが常識として定着しているとも言えるモンゴルであるが、自然をありのままの姿に守りながら生活する方式は遊牧社会の核となっている。では、遊牧社会での生活様式の実態とは如何なるものか。狩猟文化や農耕文化とはどこが異なるのか。本章では、このような問題点を意識しながら、遊牧生業における女性の存在と役割について考察する。

遊牧が生業として確立する前、人間は狩猟によって動物を捕食していた。家永は次のように論じている。「人間は動物の群れの圏内に入りこんで、いつしか狩猟生活者とその群れが自分に与えられた群れであり、自分の所有にかかる群れであると考えようになって所有意識が強くなり、やがて自分の所有に帰した群れの維持をはかるように心くばりをするようになった…牧畜の起源はこれ以外にも考えられ、定着的な農耕社会で、個別的に訓化されて、次第に家畜化したケースがあっても不思議ではない」と狩猟生活から牧畜生活への遷移と牧畜の起源を述べている<sup>156</sup>。後藤富男(=十三雄)が論じているように、牧畜を経済発展段階論で低く位置づけることは、学問的な根拠がまったくない偏見である<sup>157</sup>。

人間は昔から動物を相手に狩猟と牧畜という異なる生業を行ってきた。狩猟がもつばら動物を捕殺するのに対して、牧畜は「搾乳」や「毛刈り」、「交通手段」とするなど動物を育てながら多くの目的で利用するという相違点がある。牧畜は狩猟と比べ、より発展的な生業方法とも言える。

遊牧生業は、家畜が自然に生える草を食べ、人間はその家畜に生活のすべてを依存する「徹底した自己完結の生活様式」<sup>158</sup>である。モンゴルの牧畜生活に最適かつ実用性のある動物は、主に羊・山羊・馬・牛とラクダである。そして、これらの動物はモンゴルで「五畜」と呼ばれる。

上記のように、家畜は牧畜民にとって生活を支える財産である。肉や乳は食材に、毛や皮は生活資材に、そして収入源にもなる。特に「五畜」の利用は徹底され、家畜自身には無駄なものは何もなかった。基本的に家畜が活着ている間は乳からチーズを作り、屠殺したら内臓から血液まで料理され、直接的あるいは間接的に食として利用する。そのほか、毛はフェルトの原料に、糞は乾かして燃料に、毛皮は衣類の素材とするか販売した収入によって生活を支える。

<sup>156</sup> 家永泰光『草原文化の道』株式会社古今書院(1994)、p.7。エンゲルス『家族・私有財産および国家の起源』参照。

<sup>157</sup> 後藤十三雄『蒙古の遊牧社会』生活社(1942)、p.11。

<sup>158</sup> 鯉淵信一『騎馬民族の心』日本放送出版協会(1992)、p.206。

遊牧民は決して家畜の存在を疎かに扱うことない。恩賜の存在として敬意を払い、家畜の命が誕生する時、そして命が絶える時、その重みと意味を常に尊く扱っていた。家畜は牧畜民の身体と一体化した存在といっても過言ではない。牧畜民と「五畜」の関係は、「支配と従属」の関係を超え、感情を分かち合う存在同士の共存関係だといえる。

日常生活だけではなく、家族の形態や社会的な集団のあり方まで、家畜を中心に動かされている。家畜は単なる生活手段とはいえ、実用性をはるかに超えた牧畜文化として形成されている。モンゴルは多種の家畜をもつことで多様かつ独特な生活様式を作り上げ、これなしには牧畜民の文化を語ることはできない。

モンゴルの牧畜民は自然の循環に順応し、家畜と共存して生活するというごく簡素な生き方をしているが、そこには自然と人間を根底から結びつけるモンゴル独自の信仰に大きな影響を与えている。前章で述べたように、モンゴルの牧畜民は「天」と「大地」へ限りない畏敬の念を持ち、爽やかな風やきれいな空気を心の芯から求めるのである。それは、自然に委ねる生活というよりも自然への憧れとしての牧畜生活として捉えることができよう。

### 3.1 牧畜社会の特徴

牧畜と農耕という二大生業の相違にも着目したい。牧畜社会は旧大陸の三分の一以上の面積を占めるといわれ、その多くは広い乾燥地域にある。人類に多大な影響を与えてきた牧畜社会とそれを支えてきた草原文化は、農耕文化圏と共通性をもっているが、以下の3点において基軸を異にしている<sup>159</sup>。

第一に、農耕民と遊牧民の家畜観は異なる。農耕社会における家畜は、畑を耕す手段としての存在であり、人間のために家畜が働く。それに対し、牧畜社会では家畜自身と共存し、家畜のために人間が働くという違いが存在する。前述のように、牧畜民と家畜の関係性は生活手段を超越し、文化として形成され、宗教や精神世界にまで深く入り込んでいく。このように、キリスト教の牧羊、イスラム教のラクダ飼養と放牧、仏教やヒンドゥ教と牛とのかかわりやモンゴル人の馬とのかかわりは、想像以上に相互関係を持っている。

第二に、牧畜社会と農耕社会における草の持つ意味合いが異なる。遊牧民は、天然の草を求めて、草原で家畜を飼い、家畜を生活の基本にした移動式生活スタイルである。農耕民は、土地を耕し、草を防除し、農作物を生活の基本にした定住スタイルである。自然環境に対する影響をみれば、農耕民の耕地は地力を消耗する一方、牧畜民の草地、林地は地力を微増させる。

遊牧の移動は植生と環境条件が良いところを探し求めているというより、合理的な「生態バランス」を判断基準にして移動を行っている。草原は土壌条件や気象条件などの差異があり、遊牧民はその状況に合わせて草原資源を最大限に活用しかつ循環させるため、移動

---

<sup>159</sup> 家永泰光『草原文化の道』古今書院（1994）、p. 8。

を行う。その移動距離や位置は畜群に必要な草原の面積、種類、牧草の状況などにより決定され、つねに臨機応変でなければならない。また、遊牧民が去った跡に別の牧畜民が宿営地を移すことも度々あるため、必ずしも家畜が草を食べつくしたあと別の牧草地を求めて移動することを批判はしない。

したがって、モンゴル人は家畜の恵みをもたらす草原に対して特別なとおしみを抱き、土を掘って草原を傷つけることは絶対的禁忌事である。草原は非常にデリケートな地質をもち、土を掘ることによって砂漠化しやすくなるため、大地を採掘することは牧畜民にとって命取りを意味する。牧畜民には、草原に勝手にゴミを捨てたり、水を汚染したりということは許されず、車道をはみだして走らないことも基本的なマナーである。牧畜民の自然の保護意識は、今潮流の「環境保全」や「他人に迷惑かけない」という日本の文化とは違う意味で、彼らの精神世界の「大自然主義」に基づいている。

第三に、遊牧社会と農耕社会では財産となる対象が異なる。遊牧民にとっての財産は家畜であり、農耕民にとっての財産は土地である。『家族・私有財産・国家の起源』の中で、「無限の大地はさまよう遊牧民にとって空気のごとき存在であり、これに労力を加え、もしくはこれをわがものとする必要のない自由財であるとしているのだ」と述べている<sup>160</sup>。伝統的な遊牧民にとって、放牧は季節的性格をもち、利用しうる草原が広大であるため、土地の稀少性はほとんど存しなかった。それぞれの牧群は自由に好むところに放牧することができ、したがって土地に対して単なる支配を抱いてこなかった。換言すれば、遊牧民には土地を所有する概念がなく、地上の上にある水草が本旨であり、家畜こそが唯一の財産だったのである。

遊牧社会において、人間の自然や家畜に対する関係に着目してきたが、以下遊牧社会の独特な行動規範を中心に、人間同士の関係について考察したい。古来より、社会はいわゆる規範によって守られ、社会秩序が作られ、文明もその規範を踏襲しながら発達を遂げてきた。規範が協同体に行き渡るには、規範に沿っているか否かを判断する公正な第三者的視点を内面化させる必要がある<sup>161</sup>。

モンゴル社会の規範は「大ザサク」(Yekhe jasay)により定められていた。「大ザサク」はチンギス・ハーンが1206年に大モンゴル帝国で実施した大法典であり、世界で早くから使用された憲法の性質を帯びた文献の一つである<sup>162</sup>。

<sup>160</sup> 「牧人種族は、爾余の未開人よりも多く生産したのみではなく、ほかの生活飼料をも生産した。彼等は爾余の未開人よりも多量の乳、乳製品および肉を持っていたのみならず、また獣皮、羊毛、山羊毛及び原料の量とともに増加する紡糸及び織物を持っていた。かくして規則的な交換が初めて可能となった」。エンゲルス著、岡崎三郎ほか訳「家族、私有財産と国家の起源」『ゴータ綱領批判・家族・私有財産と国家の起源』新潮社(1956)、p. 119。

<sup>161</sup> 西田正規、北村光二、山極寿一編『『家族起源論』の再構築—レヴィ=ストロース理論との対話』『人間性の起源と進化』昭和堂(2003)、pp. 2-30。

<sup>162</sup> チョクト『チンギス・カンの法』山川出版(2010)。行政権と司法権を用いた大法典の判例制度はイギリスの19世紀の判例制度より600年早く作られ、当初はモンゴル語・英語・漢語など8種の文字が使用されていた。

法典のなかには様々な法律規範が定められ、草原と野生動物保護問題及び投資信託規範など、現代の社会生活のすみずみにわたる行動規範として浸透しているものもあり、遊牧民独自の規定も盛り込まれている。例えば、「草が生えているところで穴を掘って植物を傷つけることや草原で放火をすることは死刑として罰する」、「動物の狩りをする際、傷のある動物や雌と子を生きたまま逃がす」とある。

「大ザサク」の最大の特徴は、すべての人間は平等であり、超越者や権威が存在せず、人類を支配しているのは唯一「天」のみだということである。モンゴル社会では年長者が「儀礼資源」において優位に立つことはあるが、年少者との間に階層はなかった。そして、もう一つの特徴は「モノや行為を共有するべし」という規範がある。牧畜社会の経済システムの生産や分配において、「所有」と「共有」は同源同根であり、共存を続けてきた。例えば、特定の個人や世帯が食物を独占することを忌避するなど、食物分配についての強い規範がある。

しかし、この「共有」を破った場合の制裁はなかった。モンゴル社会の規範は変動の大きな自然環境や政治・社会的環境をもとにしたもので、生存し続けるには、状況に応じて集団を再編させながら、成員全体への食物分配を可能にするための柔軟さと、相互扶助関係が必要である。大自然を生存範囲としたからこそ共有共存という関係性が生まれた。同時に移動を繰り返す生活様式だからこそ、堅牢な制度も、永続性を保証する権威も創出する必要がなかったのであろう。それでも部族間の戦乱時代において、「大ザサク」の行動規範は社会に秩序をもたらし、人々の意識を向上させる役割を果たしていた。

現代社会は規則の発生、規範化、規範の中からの制度の発生、制度の明文化、構造化、法の成立など、いくつものプロセスを経て、秩序を公正し、共存を図っている。それが人間社会の発展にしたがい、所有の部分だけが肥大化して、今日の産業社会に至ったのである<sup>163</sup>。大自然に委ね、「天」に任せ、家畜に付き従うという遊牧社会の独特な行動規範には「共有共存」が最適であったのだろう。

遊牧社会ならではの価値観についても、検討してみよう。遊牧民は家畜を営む過程で動物に対する感情をもつようになり、独特な価値・概念を定着させた。遊牧民は自然に委ねながら原始的な生活を送ってはいしたが、そこには知恵を絞って独自につくりあげた社会的な秩序が完成され、草原の掟が構築されていた。

歴代のハーンたちの優れた資質の一つに、人間同士と動物に対する寛容さと、異文化に対する謙虚さや大自然へ敬意を上げることができる。例えば、「大ザサク」には「チンギス・ハーンはあらゆる宗教を無差別に尊崇すべしと命じた。彼はそのすべてを以て神意にかなうものとなしたるなり」という条文がある。「習俗にしたがって治めよ」の精神こそ、モンゴルの異民族統治の根本であるという<sup>164</sup>。

<sup>163</sup> 今村薫『沙漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と礼儀—』どうぶつ社（2010）、p. 222。

<sup>164</sup> 鯉淵信一『騎馬民族の心—モンゴルの草原から—』日本放送出版協会（1992）、p. 84。

また「大ザサク」には、「いかなる民族においても学問のある賢い人々を尊敬せよ。あらゆる宗教を尊重し、どれもひいきするな」<sup>165</sup>とある。統治の過程で妨げになるものは断固排除し、毒にも薬にもならないものは放置した。騎馬遊牧民的統治理念に照らして、その統治に役立つものだけを厳密に取捨選択して採り入れたのである。言い換えれば異宗教や異文化は、モンゴルの統治に益することを前提として寛大かつ平等に受け入れられたといえる<sup>166</sup>。

チンギス・ハーンはかつて数多くの忠実で有能な外国人の人材を採用していた。彼は能力や忠実さを人材選択の基準とし、人種や宗教の違いで人を差別することはなかった。また、モンゴル帝国時代に商業を重視し、自由貿易を奨励したことが、実に東西の商業、交通、技術、思想文化の交流を促した。これ以外にも、世界初の郵政通信、国際的に通用する紙幣を印刷し、東方の印刷術、火薬兵器などを西方に伝えた。またレモン・人参・毛布・うどん・お茶・ズボンなどの日常生活用品を東西の人々の生活に浸透させた。遊牧社会は、草原に基盤を置きながら伝統を維持すると同時に、新しいものへと絶えず挑戦していた。モンゴルの統治は、多様性の共存を前提としていたと考えられる。したがって、遊牧社会は他者を尊敬し、多民族・多文化のグローバル社会でもあったと言えよう。

### 3.2 女性主導の家畜の再生産

牧畜という生業は生きものを相手にし、動物との日々の接触の中で、人々は細やかで、豊かな心を育み、様々な高度な牧畜技術を生み出してきた<sup>167</sup>。家畜を飼うことは、野生動物に寄り添い「生態バランス」を考慮しながら行う人間の営みである。

狩猟民が獲物を「天」からの授かりものであるとみているように、遊牧民も家畜を「天」からの恩恵としてみている。狩猟民であれ、遊牧民であれ、生きることは他の命を犠牲にして、自身の命を救っているということになる。しかしモンゴル人は家畜に対して、単に衣食住を満たすものという以上に感謝の気持ちを抱いている。遊牧民は家畜の価値を十分に認め、大切な関係性にあり、人間と家畜の間に厳格な一線を画し、家畜を「見下す」ことは決してない。

家畜と共存する生の営みは、遊牧民の「命」に対する独特の観念を形成した。万物に生命があるとみなし、その生命との感情の相互作用が彼らに「命」を大切にする家畜観を生み出した。遊牧民は「命の綱」として家畜を育てては屠殺し、「正当化された殺害死による再生」<sup>168</sup>を行う。この「命」の再生過程において、家畜の誕生と育みはすべて女性の手で行われた。

<sup>165</sup> 米村正一訳「世界史資料」『大ザサク』東京法令出版(1979)。

<sup>166</sup> 鯉淵信一、前掲書、p. 86。

<sup>167</sup> 鯉淵信一、前掲書、p. 5。

<sup>168</sup> 小長谷有紀「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」畑中幸子、原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会(1991)、p. 315。



草原の人間と家畜の関係について、後藤十三雄は、次のように述べている。

「風の吹き荒れる厳しい寒さの曠野で、生まれ落ちた子羊や子牛にみせる彼らの愛情は、これを家族の一員としてわが子をみとるようにかいがいしく立ち働く人々の顔はかがやいている。モンゴルを旅行するとゲルの中で子牛と同居させられることもあり、牛角の先端に穴を開けた哺乳器を子畜の口にふくませ、抱くようにして牛乳を与える老婆を見うけることもある。作物をいたわる農民の態度が、単なるものに対する以上の熱心を示すように、家畜であるだけに一層の心づかいと情愛がしめされ、人間と家畜がより合って一つの社会生活を営んでいるようにさえ思われる」<sup>169</sup>。ここでは、人間の家畜に対する愛情が生き生きと描かれている。

「五畜」の中でも羊はもっともか弱い動物であり、完全に人間に守られながら生息している家畜である。羊は過剰におとなしい性格で、殺されるときは泣き声も出せないほど無防備で無抵抗な姿勢をしている。そのため、狼などに襲われることを防ぐため、飼い主は見張りをする必要があり、群れを誘導しなければならない。

人間の介入に依存してきた羊の出産は飼い主の手間がもっともかかる仕事である。家畜が出産する時期は寒さが続く春であり、草も乏しく、家畜の死亡率が多い。牧畜民にとっては、乳児である仔家畜の授乳と親家畜の食糧を確保しなければならないため、春は一年のうちでもっとも多忙な時期である。仔羊の出産における牧畜作業は、モンゴル語で「トル・トスホ」（仔畜を迎える）と呼ばれる。

女性は、家畜が生まれたその日から仔家畜をわが子のように世話し、その短い生涯のすべてを担う。出産を迎える家畜については、飼い主の女性たちに全責任があり、傷病による異変や分娩があれば、徹夜をして宿営地で寝ている群れまわりすることもである。仔羊と母羊が互いに認知し、乳を飲ませるかを確認する。遊牧の女性たちは昼夜関係なく、厳寒のなか二十四時間体制で家畜たちの出産状況を見守り、「難産」や凍死を防ぐため必死になる。

そこで、仔羊の面倒を見ようとしない母羊に対して、飼い主はしばしば歌を歌う。羊には「トイク、トイク」と語りかけ母性ホルモンに刺激を与える。この手法には歌を歌う以外に馬頭琴など楽器を弾いて母家畜に聞かせることもあり、これらはさらに羊だけではなく、ヤギやラクダなどの時にも使う。家畜は人間と同様に感情のある動物であるため、心を和らげるメロディを聞かせることによって、見捨てた仔あるいは他人の仔も受け入れるようになる。家畜は実に心の優しい感情豊かな動物であり、歌を聞いている最中涙を流す母畜もいる。

また、母羊が死亡し、あるいは見当たらない場合は、飼い主は牛の乳や他の仔羊を持つ母羊の乳を搾って哺乳瓶で育てる。また、病弱の原因で仔羊が自力で哺乳できなくなったときも、飼い主がその手助けをしなければならない。人類にとって搾乳の起源も、母子関

---

<sup>169</sup> 後藤十三雄『蒙古の遊牧社会』生活社（1942）、p. 38。

係介入の蓄積の結果であろうと推察されていることから、家畜の出産介助は、伝統的に女性の「天職」と見なされてきた。

このように、家畜の母子認知と哺乳関係がうまくいくように介助するのはすべて女性の仕事であり、新しく生まれてくる仔と母の組み合わせを一つも漏らさず認知し、すべての羊に名前を付け、そして成長後も間違いなく覚えている。とにかく、飼い主は家畜のお世話をする際、万全な対策で適応し、発生した様々なトラブルに臨機応変な対応をしなければならない。

モンゴルの遊牧において、人間が家畜の群れに付き添うことは、人間が動物に過度に適応しているのだとも、動物が飼い主の主導権にしたがっているのだともいわれる。いずれにしても、人間が自然に最適に介入し、共存したものであるといえる。牧畜民は家畜を強制的に支配したというよりも、むしろ飼い主と家畜はお互いの感情を感知し合い、意思疎通を行うという相互関係を築いてきたのであろう。

### 3.3 女性が支える日常

モンゴルは地理的に高緯度にあり、厳寒の長い冬と降水量の少ない夏、強風が吹く春という厳しい季節環境とあいまって、植生の乏しい複雑な地形は、人間と動物の生存環境に対する挑戦ともいえる地域である。このような条件でも、移動循環する遊牧の生活は長年の英知により形成され、遊牧民の伝統文化として定着したのであろう。

モンゴル社会では女性が遊牧生業や日常生活の維持に生涯を捧げている。遊牧生活において、女性は放牧・家畜の餌やり、燃料集め、縫い物、移動のための準備や整理、そして乳絞りから始まる乳製品作り・掃除洗濯といった家事・子育てなど、家の内外のあらゆる場面で役割を担っている。日の出から日の入りまでの時間のなかで、家の中や周辺のすべての雑務を女性が務める<sup>170</sup>。

日の出の前に草に付いている露を食べることは家畜の体内の「のぼせ」に効くという家畜の健康知識が知られている。大切な家畜に健康的な食生活をさせるため、女性は朝暗いうちに家人より一早く起き、すみやかに牧草地に家畜を移動させる。そして、一家の主な食材である牛の乳搾りを急いではじめる。本来、仔畜が飲むべき乳を母畜から人間が搾取するため、仔牛を強引に乳から離して繋いでおくか、子どもたちに見張らせる。搾乳後は、残りの乳を仔牛に与えるため、朝と夕の一日二回の搾乳が済んだあとは、しばらくの間だけ母子は一緒にいることが許される。

乳搾りを終えた女性たちは、まず火を起こしてお湯を沸かし、「お茶」を作り始める。ゲルのトーノ（天窗）の煙突から牛糞の煙が立ち始める時がこの一家の一日の活動の始まりとなる。したがって、トーノから煙の立ち上がるのが早いか遅いかによって、嫁の勤勉さが評価される。母親は、ゲルの中を片付けながら朝食を作り、子どもたちも掃除や準備を

<sup>170</sup> 呉人恵「性のいとなみ」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』財団法人千里文化財団(1998)、p. 199。

手伝う。モンゴルの朝食は「お茶」を飲むことである。

モンゴル人の一日はお茶を沸かすことから始まって、お茶との付き合いの中で終わる。ほかの国でもお茶の文化がさまざまであるが、モンゴルのお茶は単純な飲料の価値を超え、麹菌により長時間発酵させた黒茶を煮出し、牛乳と岩塩を加え、ひしゃくですくいあげながら加熱して作る。このビタミンの補給源ともなる「お茶」において、濃度や風味が女性の腕に委ねられるため、モンゴルの女性にとって「料理の腕よりもお茶の腕の方が大事」とされる。お茶の味が一家の評判の基準でもある。モンゴルでは男性が食べ物についてあれこれ言うのは禁物である。例えばモンゴルには「いい男は成したことを語る。ダメな男は食べたことを語る」<sup>171</sup>という古くからの諺がある。

「お茶」は通常、上記の特徴を持つミルクティーを指す。ときとして、お茶の中にチーズやバターなどの乳製品とキビを一緒に入れて食事代わりに食べることもある。農産物の食材を持たない遊牧民にとっての「お茶」は腹持ちがよく、乳製品からのビタミンをはじめとする様々な栄養分を摂取することができる。昼ご飯を作って食べる家庭もあるが、伝統的な食生活には昼間も朝と同様の乳茶でやり過ごす家庭も少なくない。それはしばしば家畜への飼育を優先し、人間自身は手間暇かからない簡単な食事ですませるからである。草原における一日の食は、お茶と乳製品をもってすごし、夕食に肉うどんなどを食べるのが多い。

十三世紀のモンゴル帝国に派遣された修道僧たちの旅行記には、当時の食生活の様子が書かれている。カルピニの旅行記『中央アジア・蒙古旅行記』には「黍を水で煮て、非常に薄くしてしまうので、食べられず、飲まなくてはなりません。タルタル人の誰もが、朝それを椀に一、二杯飲んで、日中はそれ以上何も口にしません。しかし、夕方には、みな、少量の肉を与えられ、肉汁を飲みます。これにたいして夏には、馬乳を多量に持っているの、肉は滅多に食べません」とあり、一日のパターンと一年のパターンが的確に記載されている。同様のことをルブルクもまたその『中央アジア・蒙古旅行記』に「夕方のはかには食物は何もくれませんでしたので、空腹と渇き、寒さと疲労には限りがありませんでした。朝には飲むものを何か、でなければ食べるのに黍を若干くれました。これにたいして夕方には、肉・羊の肩肉・肉汁のついたあばら、それに肉汁を飲めるだけくれました」と記録している<sup>172</sup>。一日のうち、夕食としてとりわけ一年のうちの冬のあいだ、肉あるいは肉汁が主食であったことがはっきりうかがいすることができる<sup>173</sup>。家畜を太らせるため、夏はできるだけチーズなどの乳製品を食べて過ごし、極寒の冬は肉を中心とした食生活を送る。

草原の食材つくりにおいて、女性は古い順に分類された乳の加工、乳製品作りを始める。

<sup>171</sup> フフバートル『私が牧童だったころ』インターブックス（2000）、p. 29。

<sup>172</sup> プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社（1965）、pp. 144-146。

<sup>173</sup> 小長谷有紀『モンゴル万華鏡—草原の生活文化—』角川書店（1993）、p. 124。

昼間は仔牛や仔羊、仔山羊の管理や世話などをし、仔畜は主に子どもたちに任せ、仕事の役割を分担する。子どもの世話や洗濯・縫い物なども女性が担当して行う。合間に家族の服を作ったり、直したりする縫い物の負担が重く、縫い物が堪能かどうかは、嫁入りの一つの重要な条件であった。一家の衣服は女性によってつくられることが多く、また靴や頭飾りなどの手芸も女性の仕事の一環であった。

そして、夕方に大事な燃料となる家畜の糞を集める。乾いた牛糞は石炭やガスとは異なり、環境汚染がなく、ゼロコストの燃料である。家畜の糞は燃料となるだけでなく、燃やすときに出る煙を利用し、仔家畜を虫や蚊などから守ることができる。暗闇の中でゲルに戻ってきた妻は、子どもたちに夕食を食べさせ、寝かせる。最後に、またゲル内に残っている片付けや洗いもの、縫い物を終わらせたらずっと女性の一日が終わる。

### 3.4 食の生産とセクシュアリティ

#### 3.4.1 食の生産

人間はつねに環境に働きかけ、食糧を確保しながら生存してきた。植物に対しては、採集にはじまり、やがて農耕へと発展する。一方、動物に対しては、狩猟にはじまり、牧畜へと発展してゆく。農耕や牧畜は、人が環境に働きかけながら生存していくため、同じ時期に並行して開発された技術体系であると言われている。

『元朝秘史』には、ヒツジの群れはイデーすなわち「食べもの」と表現されている。ヒツジの群れは昔から、いわば移動する生きた食糧倉庫だったのである<sup>174</sup>。

牧民の食生活の成り立ちに注目してみよう。まずは羊に草を食べさせる。羊からは肉と乳、それに毛が手に入る。体重およそ30キログラムの羊が、小さい体でこうした原材料を三つも提供してくれる。遊牧地域では、バラエティ豊かな乳製品が普及する。家畜の乳から作られる多様な乳製品の加工は主に女性の行う作業である。乳搾りをはじめ、ヨーグルト・バター・チーズといった一連の製品が移動や気温変化などを考慮してつくられ、インスタントかつ栄養があるとして遊牧生活には最適な食品となる。このように女性の知恵でモンゴルの乳製品は何百種類に増えたと言われている。もし、400頭の羊を飼っている遊牧民がいれば、それは移動する小工場を400ほども持っているようなものとなる。

人類のもっとも古い乳製品は、バターとチーズであると言われており、すでに紀元前4000～2000年ごろにアジアの西方でつくられていたとされている。ユーラシア東部のモンゴルでも同様に乳製品の種類は多く、栄養価の点からみると、牛乳成分のうちカゼインと脂質が約十倍に濃縮された形となっていて、消化されやすい。なかにはカルシウム、ビタミンA、B2を豊富に含んでおり、牛乳以上にたんぱく質の摂取形態として、大変好ましいとされて

---

<sup>174</sup> 小長谷有紀『モンゴル万華鏡—草原の生活文化—』角川書店（1993）、p. 125。

いる<sup>175</sup>。

モンゴルの乳製品加工は主に女性の役割として分業されているため、乳製品の生産を中心に紹介する。搾乳を容器に入れてそのまま放置するだけで、自然に加工が進み、上層に浮いてくる乳脂肪分のかたまりが「ズーヒー」という食料になる。残りの乳酸発酵が進み、静置されている間に、ヨーグルトへと発酵していく。乳酸発酵をむしろ抑制しながら、もっぱら「あぶらぬき」に努力をかたむける。したがってモンゴル全体の乳製品加工の特徴としては、やはり最初に「あぶらぬき」を行う方針のもとに加工プロセスをたどる点が挙げられる。これがクリーミング系列とよばれる体系なのである<sup>176</sup>。

また、搾乳したばかりの乳からは、「ウルム」とよばれる製品がつくられる。鉄製の鍋に乳をそそぎ、弱火で煮ながら、何百回もひしゃくですくいあげていると、乳脂肪分が上方に泡だって浮いてくる。これを一夜置くことで、一枚のかたまりになる。次の朝は取り出した一枚の「ウルム」を二つ折にし陰のあるところで乾燥させる。これはよく「お茶」に入れて食べる食料である。

ヨーグルトはモンゴル語で「アイラグ」とよばれるが、適切な温度と攪拌する工程を経て、「ツァガン・トス」すなわち「白いあぶら」となり、それを精製するとバターになる。

攪拌後のアイラグは、白い固まりの部分と、黄色い液体の部分がはっきりと分離してくる。黄色い液体は、「シャル・オス」すなわち「黄色い水」とよばれ、これは家畜の栄養ドリンクとなるため、特に体質の弱い家畜に飲ませていたが、近年人間にもデトックス効果があるといわれ人気上昇している。浮いてきた白い固まりの部分を布袋に入れ、しっかりと口を結び、石や木で圧縮する。やや乾燥したところに、白い固まりを袋から取り出す。これを「アールチャ」といい、手ごろな大きさの様々な形にして天日で乾燥させる。乾燥させてできたのは「ホロート」及び「シュームル」とよばれるチーズである。この乾燥食品も「お茶」に入れて食べることもあるが、携帯にも便利な食料である。

この一連の女性の乳製品作りは、伝統の知恵や技術として、栄養など多くのことに配慮しながら作られる。乳製品は、自然にタンパク質が分離し、乳酸発酵が進むため、温度や放置する時間など詳細なところに工夫が必要である。女性は多くの家事をこなしながら、複雑な生産工程を担わなければならなかった。

### 3.4.2 乳製品をめぐる

乳製品は単なる食材であることに加え、同時に栄養や医薬の代わりに使われるなど多くの付加価値がつくられている。中世の伝統モンゴル医学は、インドやチベットの古代医学における自然弁証法や四元素（土・水・火・気）・五元素（土・水・火・気・空）説、モンゴル医学の「熱」と「寒」を対立させる考え方のもととなった<sup>177</sup>。そのため、食べ物にも熱属性

<sup>175</sup> ソロンゴト・バ・ジグムド『モンゴル医学史』農文協(1991)、pp. 31-36。

<sup>176</sup> 小長谷有紀『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』角川書店(1993)、p. 93。

<sup>177</sup> ソロンゴト・バ・ジグムド、前掲書、pp. 57-70。島崎美代子、長沢孝司『モンゴルの家族とコミュニテ

と涼属性のものがあり、熱性質のものを食べると体内バランスが陽に傾きのぼせるという。伝統的なモンゴル医学書には、ヒツジの乳は気（のぼせの一種）をおさえる性質があり、脂肪分が多く、熱性質である、とされている。これに対して、ヤギの乳は軽く、涼性質であり、それゆえに伝染病やぜんそく、血の病や腎炎にも効きめがあると言われる。また、ラクダの乳においては、ウシのそれよりもはるかにカロリーが高く、様々な慢性病や肺病に効果があると言われている。消化吸収にすぐれ、呼吸器官を活性化し、腹くだしや水腫れ、直腸の病気に効くと記されている。

モンゴルの人々は、ことあるごとに乳を天地にかるくふりそそいで、神々に感謝の念をあらわし、幸福を祈願する。正月や長寿の祝い事ときにはもちろんのこと、しばらくの間の別離といったときにも、中指や薬指で乳をはじくようにして天地に乳をかるくそそぐ。天地にふりそそぐ乳の中で、馬の乳はもっとも貴重なそそぎものである。馬は富や権力の象徴であり、その乳あるいは馬乳酒のシーズンを祝う行事があった。

人間や家畜は生まれた後、はじめて乳を飲み、生命を維持するが、乳はその意義を超え「高尚、清潔、純正、神聖、善良」のシンボルとなり、乳の白い色は縁起が良い色とされてきた。万物が生まれた際、母からの愛や感情がある前提で乳が出る。その乳は、生命を維持させるエネルギーのある聖なるものと見なされる。そして、家畜は季節ごとに変わる350種類以上の植物を食べているため、その栄養分も季節によって変わり、人間の体に必要な成分を補ってくれる。旅立ちのとき、家族の健康や安全のため、草原のお母さんは全ての願いを縁起の良い乳に心を込め、九層の天に振りまく。すべてがうまくいくようにという願いが乳に託され、天に祈るのである。

モンゴルには、神聖的な母の「白き乳」という有名な儀式があり、子が母の「白き乳」で育ったこと、そして、母が子に対する純潔な愛を意義した儀式である。2014年、モンゴル国の有名な歌手であるジブホラン氏がモンゴル国の21アイマク（県）を回り、全ての母なる女性を集め「乳を振りまく」儀式を復活させることを訴え、このような伝統文化が継承されていくように広報活動を行った。モンゴル人は、昔から食彩を超えた純潔さを表す白い色を尊び、乳製品は尊厳のこもった「白い食」であった。

モンゴルのことわざには「母親は弱くても子どもにとっては強い存在である」((*eke kümün čidal ügüi ču,üre-degen bambai*))とあり、母親は家族、とくに子どもにとって畏敬すべき存在である。例えば、結婚する際に、花嫁側からは花嫁の母が同行していくが、父親は家に残る。この儀式にはほかの説もあり、『元朝秘史』では父親が娘を同行し、花婿側の人に殺されたことがあったから父親が同行を控えるという物語もあるが、母は子を強く守ってくれる存在であることには変わりがない。また、その母に対して花婿がねぎらいの言葉を唱える儀礼を「母の白い乳に感謝する」(*sün sačuli*)といい、母親だけが行う儀礼が多いのである。このように、女性は結婚し、子女をもつことにより、慣習法上手厚く保護されている。

---

イ開発』日本経済評論社（1999）、p. 182。

女性に担わされる「白い食」に対し、「赤い食」は男性に任されるものである。羊肉はモンゴルでは定番食材であり、結婚式などの儀礼や遠来の客をもてなすときには最高な食材として出される。しかし、まだ食種が豊富でなかった牧畜社会において、肉は食としてというよりもむしろエキスとして滋養を摂取するという面が強かった。寒冷気候にふさわしい食料としての脂肪はもっとも重要な栄養として認識されていた。

モンゴルの伝統社会でもすでに「食事療法」が存在し、モンゴル人は遊牧と狩猟により、季節に応じた食物で栄養を摂取し、病気を治すという経験的知識を持っていた。例えば、羊肉は「味は甘、大熱で無毒、胃脾を温める作用」があり、乳製品はビタミンが豊富で、栄養バランスに効果的などである。また、伝統医療法として「温熱療法」があり、モンゴル人は昔からフェルトにつけた脂肪を温めて患部に当てるという治療法を行っていたが、これは現在で言う「灸」のルーツである。また、薬用植物や動物性の薬物の効用に関する知識も蓄積されていた。

モンゴル薬に特徴的なのは動物薬の使用である。十三世紀にすでに「牛黄」の効能が知られていた。牛黄とは、牛の胆石を乾燥させて作る生薬であり、今でも世界各地で使われている希少な生薬である。子どもの病気、高熱、けいれん、精神錯乱などの治療や、脳卒中などの脳血管障害の予防治療のために服用する<sup>178</sup>。

### 3.4.2 家畜の屠殺

モンゴルでは、乳をきっかけに儀礼をおこなって「増殖の祈願」をし、殺しを契機とした儀礼を行い「再生の祈願」をしてきた。屠殺の際の祈願は、死にともなう再生の祈願である。死んだ個体そのものはもちろん現実世界には蘇らない。死んだ個体を手厚く葬り、その魂を別世界に蘇らせるように、またたくさん個体が蘇生されるように祈願する。自分自身が殺すことを納得するために、言葉を工夫し「殺す」現実を様々な「死」に置き換える言語技法を編み出してきた。

モンゴルでは、家畜の屠殺と解体は男性の役割である。屠殺の際には、できるだけ羊の苦痛が伴わない方法で行われる。一般の羊の屠り方の一つである「オルルフ」は、モンゴル帝国時代から法令化されていた、と伝承されている<sup>179</sup>。

また、当該の動物種そのものにとって、再生が必要であり、再生するためには死を経なければならず、そのために死をもたらすという論理も考え出されたようである。再生を繰り返す自然界において、その再生サイクルから人間が一部を奪っていることを意識するがゆえに、あくまでも再生サイクルのなかに埋め込まれた殺しであると主張するのである。家畜は死んでも、その種は維持される。死しても、維持が可能となるサイクルを人々は熟

<sup>178</sup> 島崎美代子、長沢孝司、前掲書、p.182。

<sup>179</sup> 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』朝日選書（1996）、pp.139-142。

知しており、さらに自分たちの殺害行為もその一連のサイクルの部分に過ぎないという認識がある。動物の死と生をめぐるそのような自然観と、それにうまく整合した殺しの論理とを読みとることができよう<sup>180</sup>。

屠殺する際、大地を血でけがすことのないように、外には一滴の血も出さないようフェルトを敷く。これは、血を一滴も無駄にしないという実利的な知恵でもあり、また大地を汚さないという信仰習慣でもある。羊の血は塩と小麦粉で腸つめにし、「ジムス」とよばれる。大腸にも、きざんだ肉と薬味を合わせてつめれば、ソーセージになる。

古代モンゴル人は靈魂が血の中に宿ると考え、血を流すことを嫌がる習性があった。『元朝秘史』から例挙すると、ジャムハが5人の友に捕らわれてチンギス・ハーンのところに送られてきて、チンギス・ハーンの勸告を聞かず、死を選んだとき「盟友がお赦しを下さり、我を殺めしむ時、血を出さず殺めしめよ」<sup>181</sup>と言ったとされる。この習性が今日まで残っていると思われるのは、モンゴル人が食肉のため、家畜を屠殺するとき、その家畜の腹を手の入る分だけ切り、そこから手を入れて大動脈を切るのだからである。これはなるべく血を出さないためであろう。そして健全な霊は死んだ人や動物の額の穴から抜けていくと信じられているため、こうした習性が生まれたのであろう。

男性は小刀を用い、皮と肉を最終的に分離させるために、四肢をそれぞれの蹄および首の部分で、切り離し作業を施す。次に内臓をとりわけける。屠殺と解体は男性が担当すべき作業であるが、内臓の処理は女性が担当する。家畜の屠殺や解体は遊牧民族であるモンゴル人にとって、自然と共存した生きるための活動である。食は必ず、他の生命の犠牲の上に成り立っている。羊の解体を通し、命を受け継ぐことの重みを理解することができる。牧畜民による羊の解体から調理までの一連の工程は、私たちが他の生命の上に生きていることを実感させ、人間に自分たちの命の尊さを再認識させる。「赤い食」の文化的意義から学ぶところがあるのではないだろうか。

肉の食べ方には細かいタブーがある。例えば、「ダル」と呼ばれる肩甲骨についてのタブーが有名である。肩甲骨は三角形をした平たい骨で、いかにも特別視されやすい特異な形態をしている。骨占いにも用いられている<sup>182</sup>。火にくべて入ったひびの状態を占うというこの肩甲骨については、口にくわえてはならない、独り占めしてはならない、男性からうけとらなければ女性はたべられない、といった各種の決まりが設けられている。また、「ダル」という言葉の発音は数字の「70」の発音と同音のため、70歳まで長生きをするようにという長寿の願いが込められており、大事に食べる。そして、「ダル」肉だけは食卓を囲んでみんなに平等に配られるのである。自然環境が厳しいモンゴルでは、早逝する人も多く、70歳まで生きられれば、長寿であると考えられている。

「礼の肉」と呼ばれる正式な客に出す肉とは肩肉、長い4本のアバラ肉、腎肉、脛骨肉

<sup>180</sup> 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』朝日選書（1996）、p. 154。

<sup>181</sup> 小澤重男訳『元朝秘史』〈下〉岩波書店（1997）、p. 59。

<sup>182</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀』p. 236。



などを指す。女性と子どもはこれらの部分の肉を客の前で食べることを控えるようにいわれている。そして、胸骨(ebčigüü)の肉はモンゴル人が娘に与える部位である。家畜の各部位にすべて文化的意味合いを持たせているモンゴル社会の通念上、胸骨はいわば「女性的な骨」と理解されている<sup>183</sup>。オラン・タグナイという口の中の硬口蓋の部分は女の子に食べさせるが、そこには「器用に裁縫ができるように」という願いが託されている。このような表現は、詳細な部位全般にわたって数多く存在する。

また、肉を焼くことはほとんどなく、肉を焼くときに肉汁が火に落ちると、火を汚すと考えられていたため、チンギス・ハーン時代には、厳罰が科せられたのである。同時に、燃料の少ない草原地帯で肉を焼くことの無駄を省き、さらに肉の栄養分を無駄なく吸収しようとする生活の知恵でもあった。

肉を食べて残った骨は子どもたちの遊び道具だけではなく、結婚式などの儀式でも道具として登場することがあり、骨や部位に関する言いまわしも多い。これらの習慣は、狩猟と遊牧を長きに渡って続けてきたモンゴルの人々たちが、動物の解体を通じ身につけた解剖学的知識を前提とするイメージの発露といえるだろう。

## おわりに

伝統的な生活におけるモンゴル人女性の「一日」は、子どもや仔家畜の世話から始まる。多岐にわたる分業の役割があり、日常の家事は手を抜くことはできない。そして、春の家畜の出産を終えれば、夏の乳製品作り、冬の保存食の準備と遊牧生業の一年を過ごしていく。地方によって、また家畜や季節によっても内容は大きく異なる。このような、日常の些細な作業の積み重ねが牧畜文化を作り上げ、遊牧の一日がこの巨大な文化の土台となり、一生を過ごすのである。

モンゴルの遊牧生業において、男女のバランス(均衡)を考慮した分業が行われているが、女性は極めて中心的な役を演じている。家畜の世話や出産をはじめ、家畜から生産される乳製品や肉の食材も主に女性の手でこなしている。そして、家畜を寄り添う生活様式の日常においても女性が仕事を担っているのは事実である。

そして、男女の役割も所々みられる。例えば、搾乳や乳製品の全責任者であるにもかかわらず、馬の乳しぼりは男性の仕事である。馬の世話については、女性があまり介入しないものの一つである。女性に困難な特別の熟練を必要とし、危険が多く、もしくは女性の資質に相応しくないという指摘もある。馬群の管理は特殊な技術的熟練と体力を要する激しい作業であると同時に、常にゲルを離れて遠隔の牧地に放牧されるところから女性に適わしくないと考えられていた。それに、狩猟文化における馬の役割からして、女性は狩猟

<sup>183</sup> 楊海英の記述によると、火の神様に捧げるヒツジの肉の各部位には、それぞれ五畜の幸や恵(kesig)があるという。具体的にはラクダの幸は肋骨、ウマの幸は胸肉の周り、ヒツジの幸は直腸、ヤギの幸は胸肉の外側、となっている。楊海英『チンギス・ハーン祭祀』(2004)、p. 116。

の部外者であるため遠ざけられるといった要因も考えられる<sup>184</sup>。家畜の屠殺や去勢の作業には女性の介入が排除される。

女性に特有と考えられてきた慈悲や愛情、または母性的なるものを、家畜の分娩や仔畜の世話にむけさせたという点は、やはり文化的伝統との関連が大きいといえる。したがって、家畜と共存するモンゴルの女性にとって、「家畜育て」は「子育て」とも比べられないほど時間と労力が求められる仕事である。多くの社会生活において、女性の役割は主に家事や子育てを中心に行われている。そして、その他の産業の領域でも女性は欠かせない働き手である。しかし、遊牧社会において、女性は家事や子育てはともかく、牧畜業を支える家畜の再生産を担い果たしてきた。このような遊牧社会の女性の社会的役割が、モンゴル民族の文化そのものの特徴でもある。

---

<sup>184</sup> 後藤富男『騎馬遊牧民』近藤出版社（1970）、p. 111。

## 第4章 伝統社会におけるしつけと母親の役割

### はじめに

モンゴルでは十三世紀初頭から文字をもつ社会になり、文字は王公貴族からしだいに人々に普及しはじめ、口承伝達は文字文芸に移っていく。モンゴルの遊牧生業に基づいて、家畜とともに移動しながら季節を送るという生活様式の中でさまざまな独自の儀礼や文化が形成されていた。したがって、モンゴルの口承文芸の伝達者もほとんど牧畜民であり、いわゆるプロの語り手ではなかった。モンゴルの家庭教育の特徴はやはりその文化環境にあり、独自のモンゴルの教育が形成されていた。第1章から第3章までは文献学の成果を駆使して論じてきた。

では、近代教育が浸透していなかった時代の遊牧社会において、モンゴルの人たちはどのように伝統的なしつけを行っていたのか。子育てを担い、そして家庭教師でもあった母親はいかなる働きをしていたのか。本章ではこのような問題について現地調査に依拠して分析し、考察する。現地調査は有効であっても、モンゴルを対象とした豊富な先行研究があるため、そうした成果も生かしていくこととする。

教育が家庭という場で行われていた時代において、両親や家族によって行われる意図的・無意図的に伝達される文化継承は当時のモンゴルの教育方式であると言っていいだろう。そして、家庭教育はまず子どもの人格形成のファースト・ステップである。その実態としては、遊牧社会の分散型スタイルで暮らす若い母親たちにとって、一番の育児指導者は姑や自分の母親であり、彼女らから教えてもらったことを子育てに実践する。今現在のそのような情報化された近代社会環境があり、育児の雑誌や専門書、インターネットなど参考文献も溢れ、手軽にカウンセリングも受けられる条件はとてなかつた。

モンゴルでは、視覚と聴覚を早い段階から養う。母親は子どもを背負い、放牧するとき、遠い距離の山や河を見せ、草原の緑や空の青といった自然の色を覚えさせる。特に「目がよければ物事を理解するのも速い」という考えがあり、視力だけではなく、目で見ると同時に物ごとを理解し、判断できるようになる。また、鳥や動物の鳴き声及び水の流れなど野原の擬音を聴かせ、草原で生活していくのに必要な力を身に付けさせる。これ以外にも、臭覚や味覚などの鋭さも重要な訓練事項である。

遊牧生活において、原始的な自然環境のなかで生きていくためには厳しい適応能力が要求される。するどい五感をもち、自立した立派な人間に育つことを願い、モンゴル独特の教育が行われる必要があつたと言えよう。

### 4.1 歴史に見る「母の教え」

#### 4.1.1 「教育の母」

『モンゴル秘史』において、アランゴワ・ホエルンは偉大なる母親であり、優れた教育者であつたと書かれている。アランゴワはモンゴル先祖伝承のボルテ・チョノ（蒼き狼）の

12 代目の子孫ボダンチャルを生んだ。ボダンチャルはチンギス・ハーンの 9 代前の祖先にあたる。アランゴワは不仲の 5 人の息子に 5 本の矢を束ねて団結すること教えたとしたとする説話が、現在の内モンゴルの教科書や校内の壁などに多く見られる。

アランゴワは「汝ら 5 本の矢柄の如し、一人ひとりにていれば、かの一本の矢柄のごとく容易しく折られるべき、かの束ねたる矢柄の如く共に一なる和を持っていれば何人によるも、いかで折られるべき」<sup>185</sup>と述べている。

ウエルンはメルギド部族のイフ・チレドゥという男に嫁ぐ道中、後のチンギス・ハーンの父となるイスゲイ・バートル兄弟 3 人に略奪された。イスゲイ・バートルの正妻となったウエルンは、テムジン（チンギス・ハーン）、ハサル、ハチョーン、オチギンという 4 人の息子とテムルンという 1 人の娘を産んだ。テムジンが 9 歳のときに、イスゲイ・バートルがタタール部族に毒殺されたため、周りから見捨てられ、さまざまな苦勞を乗り越え、必死に 5 人の子どもたちを育てた。幼い子どもたちの生存のため、略奪・飢餓・排除という試練は彼女の心身を鍛え、余儀なく強い母親にされた。

苦境に負けなかったウエルンの心の強さと広さはモンゴルを統一できるリーダを育てたのである。テムジンがチンギス・ハーンになった後、弟のハサルと仲違いしてハサルを捕え罰しようとしたとき、母のウエルンが駆けつけてハサルの縄を解き、テムジンを叱った。兄弟仲間割れでウエルンに怒られたチンギス・ハーンは「私には母上に怒られる以上の恐れと恥じはない。これから私たちはもう兄弟喧嘩をしません」<sup>186</sup>と言った。

#### 4.1.2 モンゴル再統一を実現した「国母」

マンドハイ・ハトンは 16 歳でチンギス・ハーンの孫ホビライ・ハーンの子孫であるマンドールン・ハーン（40 歳）の妃になった。マンドールン・ハーンの死後、モンゴル高原で生き残ったチンギス・ハーンの唯一の男系子孫だった幼いバトムフと再婚した。1487 年にバトムフはハーン位に登り、ダヤン・ハーンという称号を採用した。幼いダヤン・ハーンが一人前になるまで、マンドハイは手に武器を握って、馬に跨り、兵を指導し、国を正し、民を導き、モンゴルの再統一を果たした。1505 年、マンドハイ・ハトンはダヤン・ハーンに国を治める権利を譲り、自ら政治を行わないことを誓った<sup>187</sup>。マンドハイ・ハトンとダヤン・ハーン間に 7 人の息子と 1 人の娘が生まれた。7 人の息子は 1 人がなくなったのを除き、そのあと代々モンゴル諸部族の首長となり、チンギス・ハーンの子孫が再びモンゴル高原の広域を支配した。

年輩で持病のあるハーンの妃から幼いハーンの妃になったマンドハイは「母」と妻役を演じながら、その体力と知力で大軍を率いて国をまとめてきたことが歴史に知られている。

<sup>185</sup> 小沢重男『元朝秘史全訳』風間書房（1989）と村上正二『モンゴル秘史一 チンギス・カン物語』平凡社（1970）を参照して、現代モンゴル語から訳した。

<sup>186</sup> Tayičiyud・Mansang, *Mongγolčud-un niyuča tobčiyān-u üliγer*, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a (Vol.10) (1991), pp.182-183.

<sup>187</sup> Altanša, N, *Mongγolčud-un öčügedür-ün mör*, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a (1993), pp.944-951.

女と男の二役を同時に演じたマンドハイは、ダヤン・ハーンやその子孫の偉大なる模範となった。

歴代人物のなかでも母親への畏敬は強く、モンゴルの歴史的書物や口頭伝承に現れるのはチンギス・ハーンを始めとする英雄の物語と馬や草原の讃美歌だけでなく、母親の歌が多いのである<sup>188</sup>。

## 4.2 モンゴルにおける子育て

### 4.2.1 子どもの誕生

モンゴル人は子どもを産み、育てることは、家族や一族、そして民族や国家の未来の宝として見なしていた。

モンゴルにおける子どもの誕生は「お産願」から始まる。お産願は主に、オボー（石などで積み上げた小高い丘）やお寺、それにチンギス・ハーンの祭殿、末子トロイの妃エシ・ハトンの祭殿など祭礼が行われる場所に行って祈願する。『*Mongyol suyol-un čubural bičig-jang üile*』（モンゴル文化の叢書—風俗篇）では「十五世紀のモンゴルの再統一に大きな貢献を捧げたマンドハイ・セチェン王妃がチンギス・ハーンの祭殿八白室の前で『七人の息子と一人の娘が生まれるよう祈願し、大地を守り、子孫代々の連帯を繋げるよう約束した』ことが託され、後にマンドハイ・セチェンは7人の息子と1人の娘を産み、モンゴルの繁盛に最大限の役割を果たしたのである」と記されている。尚、オルドスの場合、チンギス・ハーンの末子トロイの妃が「お産願の神」になっている<sup>189</sup>。

『*Ordos-un jang ayali*』<sup>190</sup>（オルドスの風俗）では「健康で聡明な子どもに育つためには、胎児や妊娠している母親の世話から始まる」と書かれている。モンゴルの各部族や地域によって胎児の育て方は多少異なるが、ほぼ同じことを行う。胎教とは、妊婦が精神力を高めたり、健康に気をつけたりすることにより、胎児によい影響を与えることができるというものである。古代からのモンゴルにおいて、妊婦への戒めや励ましは決して今のように科学的に検証されたことではなかったが、習慣的に行われていた。妊婦に対する「戒め」として以下のようなことが伝えられている。

まず、妊娠中の母親の食物に対する禁忌である。母親の食べたものは、胎児が吸収する栄養の源のため「新鮮ではない食べ物や奇蹄類<sup>191</sup>の肉」を食べてはいけない。また、ホルチン<sup>192</sup>・モンゴルではカササギの卵などまだらの殻の卵を食べたら生まれた子どもの顔に斑点ができると言われている。奇蹄類の肉を食べたら早産あるいは難産するというように飲食

<sup>188</sup> フフバートル、前掲書、p.183。

<sup>189</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀』、pp.217-221。

<sup>190</sup> Narasun, S. *Ordos-un Jang Ayali*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a ,1989.

<sup>191</sup> 哺乳類のうちに蹄を持った動物を有蹄類という。モンゴルの五畜のなかでは、牛・ラクダ・羊・山羊が偶蹄類（ひづめが二つに別れている）だが、馬（ひづめが一つだけ）は奇蹄類になる。

<sup>192</sup> モンゴルの一部族の名。

にも多くのタブーがある。また、妊娠中の女性は居ずまいや行いにも気を付けなければならない。そして、母親自身の心理状態である。生まれてくる子の容姿がよく、知恵や徳芸にすぐれるように願うのは、母の心次第と言われるため、モンゴルでは妊婦に対するタブーを母子の健康と命への尊敬とみなし、これらのタブーを厳しく守らせた。

しかし、女性は妊娠中に重いものを持ってはいけないという禁忌はあるものの、自然環境の中で生活するうえで必要なことは遂行した。モンゴルの女性たちは働きものであり、それは妊娠中といえども例外ではない。妊婦は臨月まで水汲みもすれば、大きな籠をかついで、燃料用の牛糞拾いもする。日常のゲルの中での洗濯掃除だけではなく、馬に乗って草原で放牧することもある。ときには、そんな放牧作業中の草原で産気づき、誰の助けも借りずに自力で子どもを生み落してしまうこともある<sup>193</sup>。

近代的な設備や病院がなかった時代は、モンゴルの女性の出産も独自に行われていた。オルドス地域では、ゲルの中に仏像が祭られている場合、これを汚すことを忌避し、屋外の家畜置き場や荷車の下で出産することも珍しくなかった<sup>194</sup>。妊婦は陣痛を訴えはじめると、一本の長い糸を炉のところから支柱に巻いて天窓（トーン）の外へとつなぐ<sup>195</sup>。人間の命は天より授かるという信仰にもとづいた措置である。

モンゴルには今から二千年前にはすでに医師が存在していたという記録がある。また、シャマンも医术を行っており、特に女性のシャマン（イドガン）は助産婦の役割も担っていたとされる。

出産の介助には、その土地の女シャマンや助産に巧みな年輩女性が呼ばれるほか、婚家の姑など身近な女性が手伝いに来る。助産者の「へその母さん」（küyisün eji）は生まれた子どもの成長に関わる諸儀礼、結婚式への招待、新年の挨拶まわり、病気見舞いなど出産後も関係が保持される。

「斎」は「物忌」で、身体を浄め、不浄を避けることだった。赤ちゃんが生まれたとき「へその緒切り」儀式があり、「オルドスでは昔、矢の先でへその緒切りを行っていた。これがチンギス・ハーンの弓の矢を意味し、無病健康で勇気向上心のある子に育つことを託して、切られたへそを赤い絹に包み、大切に保管し、死ぬときに一緒に埋蔵する」<sup>196</sup>という習慣がある。臍帯を切ってからへそにワタをおき、帯で巻く。男の子が生まれたら天幕ゲルの出入り口の上部にモンゴル人の勇敢の象徴である弓矢を飾り、健康な成長を祈る。女の子が生まれたら丸い木の輪に赤い布で折った花を飾り、美しくきれいに育つことを祈る<sup>197</sup>。生まれて1か月になっていない母子がいる家の外にこうしたものを置き、汚れたものが入ってくることを拒んでいるということを知らせている。これには本来子どもが風邪を引き

<sup>193</sup> 呉人恵「性のいとなみ」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』財団法人千里文化財団(1998)、p. 54。

<sup>194</sup> 呉人恵、前掲書、p. 56。

<sup>195</sup> 楊海英「天幕に表象される宇宙観」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』財団法人千里文化財団(1998)、p. 44。

<sup>196</sup> 敖木巴斯尔、南丁『蒙古族传统民本教育』民族出版社(2010)、p. 8。

<sup>197</sup> 同上、p. 8。

易いのは、誰かが入ってくると子どもの霊がその人について行き易いからだという言い伝えが原因していると考えられる。いずれもモンゴル人が子どもに対する愛や期待を内包していることを示している。

モンゴルでは、子どもが生まれると犬や仔馬が一頭その子どもにあたえられ、自分の分身である犬や仔馬の世話を子どもたちが行き、大切に育てる習慣がある。子どもたちには、小さいうちから他者の命の大切さや共に生きることを意味を実際に生活の中で教えるのである。

一般に、社会が継続的に発展を遂げていくためには、その経済・社会を担う新しい世代とその家族の再生産が不可欠であり、前提となる。換言すれば、若い世代が先代までの蓄積された知識と技能、社会の仕組みとその文化を伝承し、発達させていくことが必要不可欠ということである<sup>198</sup>。

モンゴルでは親が上の子に家畜を分与して独立させ、末っ子の男子は親の家畜を継承するのが普通である。モンゴルではこれを「かまどの火を継ぐ」という。この「かまどの火を継ぐ」ためには、牧畜民の子供たちは親から長期の訓練を受け、それを体得しなければならない。この牧畜という生業の体得しなければならない知識と技能もまたモンゴル独特の教育内容であろう。

#### 4.2.2 乳児期における育児

遊牧社会では、十分な衛生的、栄養的、治療的な環境や条件が整っていないため、乳幼児の死亡率が驚くほど高かった。そのため、親たちも子どもの健全な成長に心血を注いだ。赤ん坊が生まれて、3日目になると「産湯」儀式が行われる。そのとき、塩をいれたぬるま湯で洗い、さらにアルチャ (Arča) <sup>199</sup> の木の葉っぱで香を焚き、その煙で浄める。地域によってお茶や肉汁のスープなどで洗う習慣もある。これは、モンゴルのお茶には塩が入っているため、塩で皮膚を守るといった伝統的健康知識でもある。3日目には、「揺りかごに入れる」儀式も行われる。モンゴルでは揺りかごをウルギ (ölügi) といい、主に野榆の枝で造る。が野榆のように折れにくい強い精神力と丈夫な身体力を持てるようお願いを込める。また、揺りかごにウルジー・ジャンギヤ (üljei jangiy-a) <sup>200</sup> や銅銭をぶら下げておき、子どもたちが縁起よく成長することを祈る。

子どもが生まれてから丸1か月たつと、親は親戚や隣人などを招き、子の誕生を祝う。日本のお宮参りにあたるものを、モンゴル語では「サリーン・ツァイ・ヒーフ」<sup>201</sup> という。

<sup>198</sup> 島崎美代子、長沢孝司『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社 (1999)、p.102。

<sup>199</sup> ネズマツの芽、香として使用することが多いが、祭事などでも浄めのときその葉っぱがよく使われる。

<sup>200</sup> モンゴルの幸福円満のシンボルとされる模様を皮や毛糸などで結んだもの。

<sup>201</sup> サラは月のこと、ツァイはお茶のこと、ヒーフは行うという直訳になるが、つまり、一カ月の祝いとして食事などで招くことを指す。モンゴルでは、お茶は飲み物として飲用するお茶だけではなく、食事代わりで食べるものとしてもある。ミルクティーに干し肉やチーズ・バターなどを入れて食べるため、持ちが長い。

この行事は主に、年輩や親族を招き、赤ん坊に挨拶をし、名前を決めることにある。祝宴に招かれたお客からは、衣服や絹などが贈られる。そして、同日に赤ん坊に名前を付ける。

これは子どもが人間として社会に参加する資格を得たという象徴でもある。モンゴルでは「呼ばれる名は親からもらう、知られる名は自分で得る」ということわざがあり、命名は非常に大事なことである。一般的に名前は祖父母や両親から与えられるが、お寺に行つて僧侶からもらうこともしばしばある。名前には、子どもの健康・幸福・未来などの願いや期待を込めた意味の言葉を付ける。モンゴルの仏教はチベット仏教に由来しており、僧侶からもらう名前はほとんどチベット語の名前になる。

モンゴル人は子どもの初誕生日を結婚式や葬式と同じく盛大に行い、誕生日は生涯のなかで一度しか祝わない。誕生祝宴に招かれた一番年上の年輩から順番に赤ん坊の髪を切り、頭の各部分を順にほめ讃える祝詞が述べられる。そして、立派な人物に育つようと祈願される。宴会で切られた産毛は布袋に入れて、銅銭と一緒に結び、着ている服の後ろに付けておく。1年が過ぎれば、切られた髪をさらに大切に保管し、13歳で成人してから山やオボアの高いところにおく。モンゴル人は頭を体の中の一番尊い部分としているため、髪の毛や帽子などをとても大事に扱う。

乳児期の段階での育児は、無病で健康に育つことが中心になる。そして、大自然に願いを託し、天と地を崇拝するのである。

#### 4.2.3 幼児期における育児—礼儀教育

礼儀教育は他者に対する正しい態度であり、人と人とのさまざまな関係を円滑に成り立たせ、その関係を平和に保つための作法として重要視されている。遊牧民は土地を所有し、資源を掘り、自然を破壊する固定範囲内に活動することがなく、大自然をそのままに委ねることを重視し、常に移動することで他者との干渉も控えられないことが多いため争いや紛争が絶えなかった。そこで、平和を保つために、「和」を非常に重視してきた。モンゴルにおいて理解される「和」は、常識として考えられるよりもさらに広い心や寛容などを意味し、このような和を体現する性格を育て、子どもの内面をしつけるには礼儀を教えることから始まる。

他者を尊敬することは人間同士の関係をつくることの基本であるが、まずは自分のことを知ることが前提になる。それから、子どもたちのもつ先天的な素質を踏まえつつ、遊牧という生活の中で培われる後天的な経験を重視する。家庭教育の最初の授業は、子どもに自分の祖先と氏族を教えることである。ラシード・ウッディーンの『史集』には「モンゴル人は祖先の由来を覚えるしきたりがある。ものごとを知りはじめた子どもすべてに、どの氏族に属するかを全部教える」と書かれている<sup>202</sup>。また、ロシアのモンゴル学者であるJ. ウラジーミルツォフも「モンゴル人は祖先や氏族のことをとても大事にする」と論じて

<sup>202</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀』、p. 40。



いる<sup>203</sup>。モンゴル人の子どもは自分の名前を覚えると同時に氏族の名前および歴史を知っておかなければならない。

また、挨拶のルールは非常に厳しく、幼いころからしっかりと覚えなければならない。「客好き」ともてなしの文化を有することで知られているオルドス・モンゴルでは、来客を家の外から迎え、初めてのお客や目上の人の場合、頭を深く下げお辞儀をする。子どもは大人に言われたことは、たとえ間違っていたとしても、反抗してはいけない。モンゴルのことわざには「広い道には曲がりがない、大人には間違いはない」とあるが、大人の言ったことは小さい子どもにとって正しいとされる。これは、大人の発言を絶対的に正当化しているのではなく、大人は子どもに正しいことを教えなければならないという大人への要求と子どもに対する目上の人を尊敬するという上下関係の教えを意味している。モンゴルにおいて、子どものしつけの良し悪しは、タブーを犯しているかどうかで判断される。

礼儀を知らない子どもに対して、親のしつけが問われるため、どの家庭でも礼儀を教えることは基本でもあり、子育ての必須条件である。

モンゴル人の思想には、教育を行う際の根本として上述した科学的あるいは法律的な見方よりも自然の中のすべてを信仰することからきている。子育てにおいて、「正しいもの」・「過ち」・「罪」などは天や大地、山や水、その他すべての神聖的な存在からの指令とみなされる。人間は命を天から預かるため、大自然に従属しなければならず、人間の「善悪」を天が常に見ていると考えられている。子どもたちがわがままやいたずらをした場合、「父なる天」あるいは「母なる大地」が怒っていると脅し、子どもたちに精神世界を認識させるのである。

「根のある木は優雅に揺れる」ということわざがあるが、子どもは親に幸福をもたらすという意味である。単に子を持つという喜びにとどまらず、子どもを育て、教育を受けさせる大きな義務と責任を果たし、さらに社会に貢献できる人間に育てることは両親や学校、社会に課せられているということである。時代や社会という大木が、現在から未来へ巍然と立つためには、教育という「根」が欠かせない。そして、教育の根の深さが、未来を決定づけるのである。

### 4.3 モンゴルの家庭教育の特徴

#### 4.3.1 家畜と共に成長

大自然の中、すべての生命たるものは公平かつ自由であるという草原の掟がある。そのため、モンゴル人の根源には、自然の厳しさや限界もありながら自分の意思で自由に生き方を選ぶという考えがある。モンゴル人の「家畜観」の中でも、畏敬されている狼は家畜を襲う害獣でありながら「天の庇護を受けている動物」、あるいは「幸運をもたらす動物」

<sup>203</sup> ウラジーミルツォフ『蒙古社会制度史』外務省調査部(1936)、pp. 21-22。楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀』、p. 40。

として遊牧民の生き様を投影している。狼は飢えたときに大事な家畜を襲うこともしばしばあるが、人間には決して征服されることなく、孤高を守って生きる動物であり、自由と共存を尊ぶモンゴル人には敬うべき存在である。草原でともに生きるモンゴル人と動物との関係性は実に見守りし合うものである。

今西錦司氏は「遊牧の特質として、遊牧民は季節の節目に家畜をひきつれてゲルごと営地移動する。営地移動する理由は、移動して生きるという有蹄類の本性に人間の側が合わせているからである」<sup>204</sup>。また、「営地移動して生きるという生活様式は4千年以上の歴史をもつと言われ、それが独特の民族的な基本的気質を形成してきた。それは基本財産である家畜をこよなく愛する一方で、モノに溢れた生活をきらい、徹底して簡素な生活を好むという気質」なのである<sup>205</sup>。

遊牧民は草原で生きていくために、単なる家畜と生きる能力を身につけるだけでなく、長年蓄積された経験と知識を駆使しながら高い家畜飼育の技術を持たなければならない。遊牧民は飼育している五畜の本来の有している本性を活かし、人間の利用する目的に合わせて動物を巧みに家畜化してきたのであった。生き物を相手にしているだけに極めて注意を払うことが多く、変化を読めない気候や厳しい自然環境のもとで臨機応変な判断と対応が求められることも多い。これらを習得してはじめて、子どもたちは一人前の牧畜民として自立することができる。したがって、「この家畜を営む技術の習得こそが発達の要になるのである。子どもたちの牧畜民としての技術的な出発点は、騎馬の操作を自分でできるようになることである。これを男子も女子もできるように周囲の人々が訓練し、就学前の6、7歳になればもう乗りこなせるようになる」<sup>206</sup>。

特に牧民青年にとって父親は、厳しい大草原のなかで、広大な心をもってたくましく生きる姿は憧れの存在である。「遊牧民としての父親は強い自立心を持ち、また簡潔・簡素を美德とする民族であるから、わが子を口うるさくしつけることはしない。子どもが自ら成長する意欲を尊重し、子どもが聞いたときにはじめて簡潔に教えるのが、牧畜民の子育ての流儀なのである」<sup>207</sup>。

人間に主導されている牧畜方式は実に手間がかかる作業も多く、役割分担するほか共同作業も多い。そのため、子どもたちにとっての「教育者」は家族や親戚の年長者だけではなく、近隣近所の知人同士の場合もある。牧畜民は強い自立精神を特質としていることは先述したが、牧畜社会は動物と共存するだけではなく、人間同士の互助によって支えられている。絶えずに移動する遊牧生活であるため、近隣の家も常に異なり、決まった集団のなかで生活することは少なく、多様性をもつコミュニティのなかで生活することが多い。牧畜民の互助は直接的には協業のためのものであるが、日常生活の隅々まで及んでいる。

<sup>204</sup> 今西錦司「遊牧論そのほか」『今西錦司全集』〈2〉講談社（1974）、pp. 183-243。

<sup>205</sup> 鯉淵信一『騎馬民族の心』日本放送出版協会（1992）、p. 39。

<sup>206</sup> 長沢孝司、尾崎孝宏『モンゴル遊牧社会と馬文化』日本経済評論社（2008）、p. 60。

<sup>207</sup> 同上、p. 62。

子育ての共同もその一環である。「この大家族の環境を訪れた他者を誰であれ丁重にもてなす開放的な牧畜民の習慣はここから育まれたといえるだろう」<sup>208</sup>。子どもたちはこうした生業の必要性に基づく強い互助社会のなかで、さらに自立心をもって成長していくのである。子どもたちの成長がその社会の諸関係を通して、内面的な発達意欲も形成され、大人になっていく。

#### 4.3.2 遊びのなかの学び

「学び」(マナブ)は「学ぶ」(マネブ)、すなわち「まねする」ことから始まる。子どもの仕事は、遊び・食事・排泄・睡眠以外に大人のまねをすることである。

モンゴルの子どもの遊びはその生活環境である自然と密接に結びついている。骨との遊びは「シャガイ」と称しており、オルドスで「シャー」と呼ばれている羊のくるぶしの骨を利用する。モンゴル人は家畜の肉を食べる際、骨をきれいに削り、子どもに遊ばせる。踝の表と裏、上と下のそれぞれの形が異なるため、形ごとに家畜の名前が与えられている。たとえば、踝の表側を羊と命名し、裏側をヤギと命名する。子どもたちは「シャガイ遊び」をととても好む。シャガイの遊び方が多く子どもたちには家畜の概念自体を覚えさせる。この骨は四面が比較的平たく、全体が立方体に近いので、サイコロのように用いることができる。おはじきとしてももちいて遊ぶ。

「ごっこ遊び」はどここの国でも行われることだが、これはモンゴルでも実際の生活の真似をする。男子は馬に乗り、狩りにいくなどヒーロー役を演じ、強いものに憧れる傾向がある。女子は乳製品作りなど家事をするまねをし、極めて家庭的な見立てをする。子どもたちは「ごっこ遊び」を通じて、家庭や生活上の規律を学んでいく。子どもたちは気のむくままに楽しむことを通じ、その遊びは大人社会への入り口となっていた。

男の子たちはモンゴル将棋をはじめ、伝統的な行事ナーダムに参加する。エリーン・ゴルワン・ナーダム(er-e-yin γurban nayadum、男の3つの競技)では、競馬、弓を射る、相撲があり、草原の男にとっては最大の楽しみである。草原では、男同士のちょっとした賭けごとにも、相撲の勝ち負けで勝負をつけ、男たちの約束や信義を守る。エリーン・ゴルワン・ナーダムへの参加は、男の子にとって草原で生活できる実践技法の訓練だけではなく、厳しい自然環境で生きていく勇気を培い、勝ち負けの喜びと励みを教えてくれる精神力を磨く訓練でもある。日本の男の子が小さいときから柔道や剣道を習うのと同様の意義を持つのである。女の子は布やフェルトなどを切り・折り・結び・たたみのさまざまな方法で動物や自然の模様をつくり、遊びを通じ、裁縫を習いはじめる。

ものがあふれる現代社会と違い、遊牧民のたちには脳開発に役立つデジタル道具や先進的なおもちゃもなければ、人工的な公園や遊園地などの遊び場もなかった。子どもたちに提供できる遊び場は平野や川であり、加工も汚染もされてない土や水、そしてその空間で

---

<sup>208</sup> 鯉淵信一、前掲書、pp. 33-35。

生活できる環境だけであった。自然そのものだからこそ、子どもの遊びに危険や不安を伴うことも少なく、安心して遊び放題にさせることができる。子どもへの教育の目的といっても、草原で生きるのに役立つ生活技法や自然と動物と調和できる秩序と規則を身につければ合格した大人として認められる。日本の小学校では、読み書き、そろばんなどで思考力を育てるが、モンゴルの伝統的な教育では、生活実践のなかで思考や人格を形成するのである。

#### 4.3.3 労働のなかの学び

草原に生まれた子どもたちは、物事がわかる時期から大人たちの日常の「家事」を生きるテキストとし、その「家事」手伝いを実践教育として受けながら新しい大人となっていく。専門の教育機関や特定の教育者がいなかった状況で、教育は主に生産と社会活動を通じて行われていたのである。そのため、子どもは「育てる」というよりも「育つ」のであり、自ら成長していく。モンゴルでは、子どもたちが小さいときから自立性を持つことが求められていた。そのため、早くから大人の生活や労働の中に慣れる必要があった。

「6、7歳になると男の子なら乗馬、放牧、調教など、女の子なら裁縫、食事づくり、搾乳、乳製品の加工などそれぞれの労働を大人の傍らで見て覚えていく」<sup>209</sup>。そのようなモンゴルだからこそ、子どもの役割分担が大人たちの労働のなかに組み込まれている。

「夏の終わりから秋にかけて、モンゴル草原ではフェルト作りが始まるが、これは老若男女が参加する壮大な共同作業になる。古くからの技術が受け継がれるだけではなく、青年男女の出会いの場」<sup>210</sup>でもあった。「ゲルを建てる素材であるフェルト作りは羊の毛刈りから始まる。毛刈りは吉日を選び、近隣同士の多人数で短い期間に終わらせる。刈り取った羊毛を積層し、女性や子どもたちは水や馬乳酒をかける。作業中には男性は必ず小刀を、女性は鋏をつかう。小刀と鋏は、それぞれ男女の労働を象徴する道具」<sup>211</sup>なのである。

男の子は父親の放牧や狩りの手伝いをし、女の子は乳製品づくりや家事など母親の手伝いをする。子守りをしはじめ、母親の一番のヘルパーとなるのはその娘である。男女分業も段階的にはじまる。子どもたちは5、6歳になると母親の言付けを守って近所で燃料とするアルガル（牛糞）を拾い集め、仔家畜の世話の見習いやモンゴルの保存食作りなど、生産などへも参加させられる。特に加工された「白」の乳製品と「赤」の越冬食料は女性と子どもの手を借りなければならない。乳製品は日常生産されるが、肉類は草原の厳しい冬がやってくる前に準備しなければならない。「屠畜作業においても男女の役割分担があり、子どもたちの参与も見られる。屠畜と解体は男によって行われるが、男の子が仰向けにした

<sup>209</sup> 鯉淵信一、前掲書、p. 57。

<sup>210</sup> 楊海英「フェルトの民のイベント」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）、p. 38。

<sup>211</sup> 同上、pp. 40-42。

羊の2本の足をもって羊を動けないようにして介添えする」<sup>212</sup>。このような場面は、男の子にとって大人の男が羊の皮をはぎ解体していく作業を観察する実践教育となる。こうして、男の子は自分の能力でできる作業を手伝うとともに、将来担わされる解体プロセスの一部始終を学んでいく。一方、女の子は、女性の作業である内臓の処理の手伝いをし、血の腸詰め作りなどの複雑な作業も任せられるようになる。このように、大きい子も小さい子も労働の現場から疎外されないそれぞれが担う役割構造になっている点に注目しよう。

モンゴル人の伝統的な考え方では、子どもは父親の「骨」から分かれ、母親の「肉」から生まれると言われている。また、骨には父親の魂が宿り、肉には母親の魂が宿っているとす。そして、子どものしつけや教育にも両親の背中を見て学ぶということは、事実上大人の仕事、とりわけ労働のなかで学んで育つということである。例えば「eke-yin jegüü-yi bariju surbal iregedüi-yin üile бүтүне、Abu-yin ury-a-yi bariju surbal aduyuu mal ösüne」とあるが、「母のように針が握れば仕事が進む、父のように馬取り竿が握れば家畜が増える」という意味を表している。

このように遊牧の伝統生活は家畜から切り離せず、子どもの教育も遊牧生活そのものに密着している。歴史の大舞台と現実生活において女性は常に男を助け、子どもは「小さな大人」として生活や社会のなかでそれなりの役割を果たしながら一人前になるのである。

#### 4.3.4 伝統的な教育法である口承伝達

モンゴルの伝統的な社会では、「タブー」が道德の教科書となる。このタブーこそが、儀礼の核心にあり、タブーを恐れる人々の自制が、伝統文化を規範として支えていると考えられる。「正しくない行い」をし、「欲望」「執着」「怒り」「悲しみ」をもつと人々は「ヌーレ」をしたという。「ヌーレ」は「反道德」のことであり、人々へ「欲望」を自覚させ、自制させようとする警告となる。日常生活のなかでもなにか禁忌することはタブー化され、タブーといわれるだけで説明する必要がないほど制度化されている。

一粒の米をこぼしても、「天」の目には一匹の羊あるいはラクダほど大きく見えるとして食べ物を大事にする。狩猟は、春の出産の時期や冬など厳しいを避け、移動してきたばかりの動物に対しても狩りをするのが禁じられる。

このようなタブーも口承でのみ受け継がれてきた。タブー以外にも「童話」「物語」など民間口承がたくさんあり、知識がそれを通して伝えられてきた。文字も出版物も普及していなかったモンゴルでは絵本や読み聞かせもなかった。子どもが幼いころから受けてきた唯一の教授方法は口承伝達である。モンゴルの全域に広まっていたもっとも有名な童話物語は「バラガンサンの物語」である。古くから民間口承のなかで、説話・謎・祝詞・あざけり・呪いなどが即席の語り手により、受け継がれてきた。語りのなかには、悪役となる人喰鬼（マンガス）が登場し、ヒーローやヒロインの勇気・努力・良心によって退治され

<sup>212</sup> 呉人恵「性のいとなみ」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）、p. 57。

るというハッピーエンドの内容が多い。

また、「歌の海・詩の里」と知られているオルドスでは、母親が裁縫しながら歌を教えることが多かった。正月や結婚式などでは、子どもたちが年輩者にあいさつする際、ハダクという儀礼用の絹を捧げ、年配者はユルール(irügel,祝詞)をくださる。そのため、大人なら誰でも祝詞をたくさん知っていた。歌詞には、英雄への賛美、母や故郷を想う内容が多く、馬や山など家畜や自然への気持ちを込めた歌も少なからずあり、子どもたちにも大人の歌を教えていた<sup>213</sup>。オルドスには歌や詩にセンスのある人が多く、素人が曲を作り、歌詞を作ることがありふれていた。

このように、モンゴル人は子どもたちに大自然を主体とした世界を認識させ、有用な知識と善悪の区別を判断できるよう生活の中で実践的に育成し、道徳・理性をしつけとして身に付けさせてきたのである。

先人の金言・寓話、実践的教訓もよく後人を激励し、その活動の原動力になるものである。文化伝達の手段が口承や観察模倣に頼っていた古代モンゴルにおいて、女性の教育的役割はとても重要なものであった。そして、文字を広く使わなかった古代モンゴルの社会では、代々伝わってきた金言や寓話が、子どもを教育するためのテキストになり、そして母親の持つ知恵と経験が、子どもの中に再現されていった。

## おわりに

チンギス・ハーンがモンゴルを統一する(1206年)以前、モンゴル社会は数多くの部族や氏族に分かれていた。その時代のモンゴルは、遊牧経済で生産力が低く、文字もなく、人々は分散していて、定住不可能であった。これらの社会的背景で、子どもたちを教育する特別な組織をつくることは困難で、教育の任務が社会の最小単位である家庭で行われていた。一般的な家庭教育は、家庭のなかの両親および年長者が行うものである。しかし、伝統的なモンゴル社会で、男性は戦いに行き、家を空けた。そのため、家庭は女性、児童、老人、あるいは病弱者の避難所になっていた。そういう家庭のなかで女性が一番強い存在であり、主役であった。したがって、当時の家庭教育における主な教師は女性であったといえる。

モンゴルの家庭教育においては、女性、特に母親の影響はとても大きい。文字も学校も普及してなかった昔は、母親たちは子育ての任務を担い、子どもたちの最初のそして永遠の教師を務める。古代モンゴル社会の特殊な生産方式と歴史的条件のなかで、モンゴルの女性は生活上、重い責任のある役割を与えられた。同時に彼女たちが広い生活舞台で活躍していたことは、さまざまな面で子どもたちを育てることになったのである。幼い時に父親を亡くしたテムジンがやがてモンゴルを統一して偉大なるチンギス・ハーンになったのも、母親の教育の賜物であろう。このように古代モンゴルにおいて女性の教育的役割はとても重要なものであった。

---

<sup>213</sup> 楊海英、前掲書『草原と馬とモンゴル人』(2001)、pp. 80-81。

モンゴルでは家庭教育のなかで、人間の思想や性格、勇気や信頼性などの精神が育成されてきた。モンゴル人は教育を大事にする家庭をとっても好み、モンゴルの伝統文化を失わずに継承してきたのも家庭教育が働きかけていると考えられる。そして、モンゴルの女性たちは自らの才能を子どもに対する教育のテキストにし、母親の持つ知恵と経験が、子どもの持つ知恵と人間性として再現されたのである。

乾燥地帯の草原という生活環境におかれ、家畜の再生産を担うモンゴル人女性たちは、命を大切にす博愛精神の持ち主であることは古くから現代にまで知られている。戦争で残された孤児が敵の子どもであっても、モンゴル人の女性は自分の子どもと同等で、大切に育てた記録がある<sup>214</sup>。また、近代においても、1959年から1961年の中国が公有化政策で困窮に陥った時期に、内モンゴル自治区シリントグやフルン・ボイル草原の牧畜民たちは上海や北京、それに山東省などの「育嬰堂」孤児院の3千人の漢民族の孤児を養子として引き受けた。なかには、未婚の若い女性でも複数の漢人の子どもたちを引き受けて育てあげた事例もあった。彼女たちには「命を育む」独特な資質と精神があり、モンゴル特有の人間育成の価値観でもあろう<sup>215</sup>。

マルコ・ポーロは『東方見聞録』の中で「女性たちは男性たちが行う総ての商売と家庭経済を経営している」<sup>216</sup>と記している。つまり、「その広大な草原がそのおおらかな性格を育て、紛争の時代がその強靱なる人間性を育て、豊富な社会的実践生活が女性の知恵と才能を育てたのである」<sup>217</sup>。

---

<sup>214</sup> 杉山正明『大モンゴルの世界』角川書店(1992)、pp. 78-80。

<sup>215</sup> 楊海英『中国とモンゴルのはざまで—ウラーンフの実らなかつた民族自決の夢』岩波書店(2013)、pp. 118-121。

<sup>216</sup> マルコ・ポーロ(伝)、ゲレルチョゴメのモンゴル語訳『東方見聞録』黒龍江人民出版社(1978)、p. 163。

<sup>217</sup> オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所(1995)、p. 68。

## 第Ⅱ部 近・現代の学校教育とモンゴル人女性

### 第5章 近代教育の登場と導入

#### はじめに

中世モンゴルにおいては、教育施設（学校）という形態が出現する以前に家庭教育、とりわけ母親から子になされる教育は重要な役割を果たしていた。モンゴル社会は十三世紀の初期に文字を持ち、現在まで数百年にわたり民族共通の書き言葉を育んできた。この期間モンゴル語の発展にもっとも強い影響を与えた外的要因は、十七世紀ごろのチベット仏教の伝来によるチベット仏典などの翻訳、および二十世紀初期から始まった西洋文明の伝来によるモンゴル社会の近代化である。

『元朝秘史』によると、チンギス・ハーンが1204年、ナイマン部族を併合したとき、学識の優れた大臣タタトンガー（塔塔統阿）を捕虜にして、皇族の子弟たちに文字を教えさせたという。これが、モンゴルの歴史のなかで見出すことのできる、家庭以外の制度的教育に関する最初の記録であろう。したがって、1204年以降、「太子諸王」を対象にした教育組織が、モンゴル社会における最初の学校となったと推定することが可能である<sup>218</sup>。

1269年7月、元朝の朝廷から学校を創る命令が出され、すべてのツルゲ(路)(行政の単位)にモンゴル文字の学校が創られた<sup>219</sup>。当時、元朝には185のツルゲ(路)があった。したがって、少なくとも185所のモンゴル文字の学校があった<sup>220</sup>とある。モンゴル文字の学校のカリキュラムはモンゴル文字を学ぶことに重きを置き、ほかの内容も適当に按配していた。漢文選とチベット経典を翻訳し、生徒たちに配った記録がある<sup>221</sup>。

時代が下って、清朝統治下におけるモンゴル人は「学校教育に無縁のまま、十歳までには一人前の牧童に成長し、モンゴル語であれ、漢語であれ文字を読むことなく牧民として一生を終えるのが常であった」<sup>222</sup>といわれている。しかし、実際はこの時代の教育機関は清朝政府の官学や仏教寺院が中心的な役割を果たすようになっていた。清朝の乾隆皇帝(1736年～1795年)はモンゴル人の仏教への深い信仰を利用して、モンゴル人家庭において「男子が3人いる場合、賢い者2人を僧侶にし、男子が5人の場合は、同様に3人を僧侶にする」という政策を実施した<sup>223</sup>。これは、当時のモンゴル人の軍事力を失わせる作戦とモンゴル人の人口を減らすための政策であった。清朝の時、「高僧たちは寺廟での教育を通して、仏教

<sup>218</sup> オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所(1995)、p. 67。

<sup>219</sup> 『元史』(縮印百衲二十四史元史)〈6〉「世祖三」、商務印書館(1958)、p. 69。

<sup>220</sup> 同上、〈58〉「地理一」p. 679。

<sup>221</sup> 『大元聖政国朝典章(元典章)』(上册)〈31〉「学校一」、文海出版社(1963)、pp. 448-449。

<sup>222</sup> 白岩一彦「内蒙古における教育の歴史と現状」(中)『レファレンス』〈531〉国立国会図書館調査立法考査局(1995)、pp. 36-82。

<sup>223</sup> 意都和西格主編『蒙古民族通史』〈4〉内蒙古大学出版社(2002)、p. 365。



経典を紹介するとともに積極的に弟子たちにモンゴル史を言い伝えていた。実はレベルの高い僧侶は優れた歴史学者でもある」<sup>224</sup>。こうしたモンゴル史のテキストとしては、モンゴルの思想や精神世界を主導するホドクタイ・セチェン・ホンタイジの『十善福白史冊』、ロバソンダンジン国師の『アラタントッベチ(黄金史)』、ジンバドルジの『ボロトリ(水晶鑑)』などのモンゴル史書が挙げられる。

清末に漢人の内モンゴル進出が激しくなって以来、モンゴル人と漢人の雑居地域に「寺小屋式の私塾も見られ、満・蒙・漢の三ヶ国語の教科書を使つての教育が行なわれていた」<sup>225</sup>のである。清末から民国初期にかけては、中国の伝統的な旧教育から新教育への転換期であり、西欧の教育を導入していた時期でもある。1904年に「奏定学堂章定」(「癸卯学制」)が張子洞・張百熙・榮慶三人によって制定され、同学制は中国における近代的学校体系の構築が本格的に始められたシンボルでもあった。このような影響もあつて、内モンゴルにおいても学校創設が始まり、モンゴル民族の近代教育は誕生した。社会が近代化されるにしたがつて、政治や経済などあらゆる環境も変化し、家庭教育やしつけのほとんどが学校という教育機関に委ねられることになった。

## 5.1 カトリックの伝播と近代教育の誕生

先陣をきつたのは、西洋からの宣教師たちである。1874年4月、ベルギー出身のカトリック教聖母聖心会の神父であるアルフォンス・デ・ヴォス (Fr. Alfons De Vos) とレミ・ウェルリンデン (Remi Verlinden) らが内モンゴル西部のオルドスのボロ・バルグースン (Boru Balayusun, 漢語名は城川) 地区で宣教を始め、のちにジェン・バプティスト・スティーンニケース (Jan-Baptist Steenickers) とエドワード・グイサート (Edward Cuissart) も宣教活動に加わった<sup>226</sup>。カトリックの伝来はモンゴル地域における近代教育の始まりを宣言するような意義を有している。

### 5.1.1 モンゴルにおけるキリスト教の伝来

大モンゴル帝国の建立後、モンゴル軍のヨーロッパへの侵攻によって、東西を結ぶ大きな道が開いた。東西諸国の貿易流通が進み、まずはユーラシア西部地域でジェノバとヴェニス商人や領事およびカトリックの宣教組織が現れ、やがて中央アジアへ流れていくようになった。そして、東西諸国の経済促進だけではなく、精神世界や文化な交流をも可能にした。

モンゴルにおける初めてのキリスト教の伝来は早くも元朝の時である。この時期に伝来したのは、主にネストリウス派とローマ・カトリックの二つの宗派であった。明朝期にな

<sup>224</sup> ウルゲン『中国におけるモンゴル民族学校教育』ミネルヴァ書房 (2015)、p. 38。

<sup>225</sup> 同上、pp. 56-57。

<sup>226</sup> 楊海英「変容するオルドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。  
宝貴貞、宋長宏『蒙古民族基督宗教史』宗教文化出版社 (2008)、p. 211。

ると仏教が主な信仰の位置を占め始め、清朝前期になるとキリスト教の宣教は一時的に禁止された。しかし、モンゴルでは辺鄙な地理環境にあったため、キリスト教はある程度は普及していった。

1865年以降、モンゴル地域に伝承された主なカトリックはベルギーの「聖母聖心会」であり、現在の内モンゴル地区の東部・中部・西部に広がり、モンゴルの三大教区となった。さらに歴史的な縦軸として詳しく区分するとしたら「イエス会」(1644-1785)、「遣使会」(Congregation of Priests of the Mission) (1785-1865)、「淳心会」(1865-1955)<sup>227</sup>へと移り変わってきた。

中華民国期においても、カトリックのモンゴル地域での宣教は継続していた。清の時代に形成されたカトリックのモンゴル三大教区は、民国期に五大教区・七大教区へと発展した。モンゴルにおけるカトリックの宣教は範囲が広く、影響も大きかった。中華人民共和国時代に入ると、宣教活動は全面的に禁止され、宣教師もが外国へ追放されて今日に至る。

228

### 5.1.2 布教と近代教育の試み

#### 清末における伝来

モンゴル地域では、チベット仏教を信仰するものが多く、カトリックの宣教はとても困難であった。宣教師たちはお金を集め、簡素な教会を建て、宣教と同時に救済活動を広げた。1876年になると、カトリック教の洗礼を受け入れた家庭はオルドスで30戸以上を超え、うち3つがモンゴル人の家庭であった。

オルドス草原での宣教活動をスムーズに行うため、宣教師たちは、モンゴル人の生活習慣を見習い、モンゴル語を習い、皮革製の服を着て、乳製品を食べ、ゲルに住み、馬に乗った。1879年、ジェン・バプティスト・スティーンニケース (Jan-Baptist Steenickers) がモンゴル語の書籍を翻訳した。しかし、非識字者が多いため、まずモンゴル文字を教えるならなかった。そして、学校を作り、モンゴル文字を学ばせてからカトリック教義をモンゴル文字に訳して教えた。また、教会内には20個以上の宿泊寮を建て、ラテン文字やモンゴル文字を子どもに教える授業が開設されたが、主な教科内容は「聖書」であった。1900年以降になってから、宣教活動はますます盛んになり、「モンゴル人のカトリック教徒は千人以上」<sup>229</sup>に達した。「ボロ・バルグースン(城川)は…一つのモンゴルの村であるが、全村のすべての人はみなカトリックを信仰しており極めて珍しい」ことであった<sup>230</sup>。著名なモンゴル学者であるモスタールトも1905年から1925年までオルドスで宣教活動に参

227 宝貴貞、宋長宏、前掲書、p. 7。

228 楊海英「変容するオルドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。

229 王学明「天主教在内蒙古地区传教简史」『内蒙古文史资料』〈22〉中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会文史资料研究委员会編集(1987)。楊海英「変容するオルドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。

230 王守礼著、傅明淵訳『边疆公教社会事业』上智编译館(1947)、p. 36。

加し、『オールドスロ碑詩』『モンゴル語大辞典』などの著作も誕生した。

また、当時、ボロ・バルグースン地区の南側に位置するソハイン・バイシン地区 (Suqai-yin bayising, 漢字名は寧条梁。現在は陝西省の管轄地区となっている) はオトク旗の牧場に属していて、カトリック教のシンボリックな教会である「小橋畔」(Bay-a kögürege) 教会が 1875 年に建てられていた。民国政府の『オトク富源調査記』には、「小橋畔教会には 240 戸、800 名以上の教民がいた」と記載されている。

## 教育への影響

カトリックが伝播される前のモンゴル地区における教育は、主にチベット仏教の寺院(日本の寺子屋に相当)を中心に行われていた。1880 年以降に、宣教師たちは教育施設を創設しはじめ、最初は短期間で学習できる「修身教育書房」を創立した。入学してくる子どもたちには男女貧富を問わず、全員に無償で教育を提供し、主に宗教修身や、「三字経」「百家姓」など民間の伝統的啓蒙教材を使って識字教育をしていた。また、長期で教育を受けられる者は四書・算数・歴史・地理も学んでいた。1906 年になって、「モンゴル教区にある教育施設の一環である「要理学校」の男子校は 125 所、女子校 114 所に及び、学生人数は 5740 人に達した(うち男子生徒 2,925 人、女性生徒は 2,815 人)。また、教会「公式学校」も同時に創立された。1906 年の時点で、モンゴル教区には 9 か所の公式学校が創られ(うち男子学校は 7 か所、女子学校は 2 か所) 学生数は 309 人(男子生徒は 236 人、女子生徒は 73 人)<sup>231</sup>であり、オールドス地域では女子学校も創られた。これ以外にも、夜間学校や家政学校、看護学校などが創られていた。

これらの学校のなかでは、唯一モンゴル語で教授する学校がボロ・バルグースンモンゴル語学校であった。宣教師たちは自らモンゴル語を学び、1905 年 9 月 13 日にモスタールトが陣頭指揮を執って開校した。宣教師たちは保育所や夜間学校を始め、1929 年には 40 名以上の乳児を引き受けていた。保育所はのちにモンゴル人の神父となる馬仲牧と彼の妹により運営され、彼の叔母は保育士を務めた。夜間クラスものちにモンゴル人の学校に変身し、モスタールトにより「聖書」の宣伝も広まった。葛永勉は主な責任を負い、文懷徳を校長に任命し、賀歌南 (Van Hecke) がモンゴル語の教科書を編集した。教科はモンゴル語、数学、生理衛生、自然知識、地理、歴史、モンゴルの歴史・文化・文学などであり、幅広い分野にわたって教えていた。そのほか、修道女も集まり、多くの修道女が教育及びボランティア活動をしていた<sup>232</sup>。

ボロ・バルグースン教会では、1931 年、石揚麻が宣教の任務に加え、モンゴル文字の印刷工場を開設した。主に「聖書」をモンゴル語版の書籍が印刷されていた。「淳心会」はボロ・バルグースン地域で 1945 年まで聖職人材を育成し、3 人のモンゴル人神父(馬元牧、

<sup>231</sup> 宝貴貞、宋長宏、前掲書、pp. 271-292。

<sup>232</sup> 楊海英、前掲書、「変容するオールドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。

馬仲牧、石生玉) と 8 人のモンゴル人修道女を育てた。

### 共産党の内モンゴル進出

1930年代になると、この地域では、共産党との関係が生まれてくる。1935年12月10日付「対内モンゴル人民への宣言」では「すべての民族はみんな平等である」、「モンゴル民族の生活習慣、宗教道徳及びそのほかの全ての権利を尊重する」と強調されている。1936年5月28日、中華ソビエト人民共和国中央政府から「モンゴル地区や教会のある区域に進入する際の注意事項」として「もし、中央政府の法令に従うならば、宣教活動は自由であり、人命と資産は保護する」、「教会や軍閥が占領したモンゴルの領土はすべてモンゴル人に返す」と宣伝した。毛沢東も安辺堡のカトリック教会に、「安遍カトリック教会への手紙」(1936年4月19日)を書き、その中で「相互に友好であること」を提案した。また「小橋畔カトリック教会と協定を結び、平和な関係を築いた」<sup>233</sup>。

その後、この地域に中国共産党が進出してくる。元々設置されていたボロ・バルグースンモンゴル語学校の校舎に、共産党の根拠地延安にあった民族学院<sup>234</sup>が1945年2月に移ってくる。しばらくは「城川民族学院」と呼ばれ、建国後は現在の中央民族大学の前身と位置づけられるようになった。

#### 5.1.3 キリスト教と少数民族の文化変容

キリスト教が中国の少数民族地域で受容された理由に「民族の弾圧から経済発展が遅れ厳しい生活環境の中にいるという弱みにつけこみ、病弱や貧困を救済し、識字や精神的な支えなど現実問題を解決する上で人々の信頼を受けた」<sup>235</sup>ことがある。そのため、少数民族はキリスト教に対する違和感が少なく、信仰を受け入れやすいとされている。また、キリスト教は、モンゴルといった中国少数民族の歴史伝説や神話観念などの文化的要素と整合性があるため、宣教の障壁はなく、同民族の社会文化や生活環境への適応性が強かったという側面もあった。

また、中国の内陸における宣教活動について次のような説明がある。「キリスト教が中国雲南省で宣教運動をしたことは、単純な宗教や文化伝達の活動ではない。それは特別な歴史背景や国際環境のもとで起きた宗教活動であり、現代中国と西洋文化との衝突の結果である...はじめから極めて不平等的で、強い文化の弱い文化への侵入であり、根本的に言えば、中国の西洋資本に対する市場開放が求められ、国際資本による中国に対する政治・経済・文化への覇権主義である。そして、宗教伝達と文化伝達の二重の特性をもっており、さらに伝承と侵略の二重の特性を持つ」と言える。たとえば、キリスト教及び雲南少数民族民

<sup>233</sup> 宝貴貞、宋長宏『蒙古民族基督宗教史』宗教文化出版社(2008) pp. 271-292。

<sup>234</sup> 1941年に創建され、1944年の夏陝西・寧夏・甘肅の境界にある定辺というところに移動し、「三辺公学民族学院」と名付けられ、1945年にオルドスのオトク前旗の城川に移動した。

<sup>235</sup> 钱宁主编『基督教与少数民族社会文化变迁』云南大学出版社(1998)、p. 2。

族の文化変容における先行研究は多く、キリスト教が現地の人々に及ぼした影響は主に以下のようにまとめることができる<sup>236</sup>。

- ① キリスト教を信仰することで、民族特有の伝統文化に変容が起きる。
- ② 民族文化の主な母体である原始的な教育がミッションスクールに取って代わられる。
- ③ 伝統的な婚姻制度が変容する。

宗教は一つの民族の言語・文字・服装・生活習慣など文化のあらゆる面において影響を及ぼすだけではなく、民間信仰に意味づけを与え、精神的な面である価値観や人生観に変化をもたらす。キリスト教は人々を貧困・病弱・精神的な苦しみから「救う」ことによって、健全な暮らしと合理的な知識を伝達しているとして評価される。ただし、民族の内部に教徒・異教徒などのアイデンティティ問題、あるいは他民族との分裂を促し、中華民族というアイデンティティに障害を与えたという批判もあることを付言しておきたい。

#### 5.1.4 当事者が伝えるカトリック教育

モンゴル地域で広まっていたカトリック教育に関する既往研究は少なく、わずかに楊海英と宝貴貞らによる報告が出されている<sup>237</sup>。従来の内モンゴルにおける近代教育に関する研究の多くは、東部に注目したものがほとんどであった。日本側に豊富な資料が残っていたからであろう。

東部よりも先に開花した西部の教育に焦点を当てた研究は、管見の限りではほとんど無い。そのため、本論では、「聞き書き」という手法を使って当時カトリックによる教育の実態を明らかにすることを試みた。文字資料がほぼ残されていないからである。カトリック教育がモンゴル人に与えた影響とはどのようなものであったか、カトリック学校で学んだ当事者2人のインタビュー調査から明らかにしたい。

##### 1) X氏 (調査日時：2015年、3月27日、PM19:00～20:30)

X氏は80代、当時は、カトリックの学校に通っていた。17歳の時に同級生であった現在の夫と結婚した。

##### インタビュー内容：

X氏がカトリック学校に入った理由は「天におられる全能の神に自分の魂の救済を願うため」であり、「神はあらゆるところに存在する。そして唯一の存在である」と信じる。

カトリック学校では、主に洗礼を行い、全能の神を崇拝し、アデイスの水で顔を洗う。それは、正直、忠実、平和である心構えの持ち主になるためである。良いことをしてい

<sup>236</sup> 同上、pp. 1-2。

<sup>237</sup> 楊海英、前掲書「変容するオールドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。

ば、天国で永遠に幸せになる。一方、悪いことをすれば、永遠に罰を受け、地獄に落ちる。

当時の学校の先生は 3 人いた。馬伸牧先生は、モンゴル語名はフチュンテグス。馬先生は、インタビュー当時、96 歳でまだ健在である。石先生のモンゴル語名はバトマンナイ。石先生は当時 32 歳。3 か国語を話せる先生で、英語もペラペラだった。1960 年代での文革時に逮捕された。逮捕された理由として、当時、カトリックの宣教が批判されたことである。宗教を通して国を滅ぼすという外国の意図ではないか、という世論が広まっていた。しかし、当時の 3 人の先生は、みな文字や畑先生の教えを伝えてくれた。畑先生とは A・モスタールトのことであり、みなが尊敬し、「宣教の父」である。

X 氏は「カトリックの学校に通っていたことはとてもよかった。そのおかげで識字ができるようになった。その時代、女子はなかなか学校に行けず、ほぼ非識字者だった。カトリック学校は多くの人材を育成してくれたと思う。私はそのおかげで生活も何とか順調で、何より子たちを無事に育てることができた。

## 2)V 氏 (X 氏の夫、インタビュー調査日時：2015 年、3 月 27 日、PM19：00～20：30)

V 氏は 80 代、カトリックの学校に 3 年間通った。それまでは非識字者であった。学校ではモンゴル文字を教わり、その後、漢人の学生に漢語を教えた。当時の生徒数は 40 から 60 名ぐらいいた。

### インタビュー内容：

V 氏の印象の残るカトリック学校は男女ともに多かった。若い人は信仰が薄かった印象であった。

カトリック学校に通ってよかったことを以下のように語る。

「私はこの学校に通ったおかげで、文字も読めるようになり、羊の改良をする技術者として幹部になった。それから 30 年間、新疆から良い羊を地元仕入れてきた。そして、村の寺院の公社の羊を担当した。羊の質の改良に成功した、旗の行政から高く評価され、「良質組合」の組織化が実現した。それが村、公社、成川に広まり 3 年間ぐらい続いた。そのあとはまた植林に努め、約 666 万㎡に達した」。

また、「カトリックの学校に通ったおかげで、生活に困ることなく、家族も病気などにかからず、健康で無事に暮らしてきたことが、私の一番の幸せである。60 歳過ぎてから町(旗)の暮らしを始め、寮住まいで学校に通う孫たちにご飯を作り、世話をしている。これ以上の良い人生はないだろう。とても感謝している」とカトリック学校で学べたことを幸せであったと語ってくれた。

上記 2 名の経験から、カトリック学校は当時の学校教育が普及していなかったモンゴル地域で識字教育に力を入れていただけではなく、より広い近代知識をも教えていたことが

分かる。この点については、別のモンゴル人神父も同様な証言を残している<sup>238</sup>。

宣教師らは宣教目的ではあるが、現地の生徒たちには学ぶことを伝え、彼らや彼女らの今までの人生には大きな影響をもたらした。X氏は「これまで、女子は学校に行けなかった」が、学校に行ったおかげで、運命が変わり、また天の主を崇拝するという精神的な拠り所を見つけたことに幸福を感じていた。そして、夫のV氏はカトリック学校で学んだ知識を活かし、仕事や生活で大きな成果を得られたことに感謝をしていた。

### 5.1.5 カトリックが内モンゴルの教育に与えた影響

カトリックの宣教はモンゴルの文化・学術事業に大きな貢献をした。モスタールトとP. J. ケレール (P. J. Kler) はオルドス・モンゴルの民俗に関する研究を行い、P. A. ヴァン・オースト (P. A. Van Oost) はオルドスの民謡に深く興味を抱き、オルドス民謡を収集し、新しい聖歌も作った。

また、地理学・気象学・古地質学・生物学の分野でもモンゴル地域に大きな貢献をした。1921年後、フランス出身の宣教師であるとともに生物学者でもあるP. エミリー・リセント (P. Emile Licent) とピルレ・ティルハード・デ・チャールディン (Pierre Teilhard de Chardin) らがオルドスのシャラオソ動物群を発見し、河套人化石など考古研究には大きな影響を与えた。

モンゴルの伝統文化の継承あるいは伝統的な教育制度、万物の起源、民族の歴史や生活知識の伝達は、記憶のみによってなされてきた。しかし、キリスト教の宣教活動によって、世界の秩序は「聖書」で説明し直され、新たな倫理秩序が教えられた。これはナショナリズムのイデオロギー的な統合から見れば「民族工作に障害を与え」、あるいは信仰上の矛盾を生み出すこととみなされるが、近代的な教育と発展の視点から見れば一つの推進力の役割を果たしているのではないかと考えられる。

例えば、タイの周縁社会に生きるカレン族 (山地民族) の場合も、「著しい経済成長を遂げ、山地から都会へと生活生業の変化を経験した。とりわけ、女性たちは多様な経験をした。そこで、カレン族のキリスト教化の進んだ村では、女性の高学歴が進み、女性のエリートが多くがキリスト教を信仰している。その意味で、カレン社会の動向、特に伝統的な規範を超えた女性たちの動向を理解するうえで、キリスト教は鍵となっていた」<sup>239</sup> のである。

カトリックは宣教とともに教育・文化の面だけではなく、医療・福祉事業を展開して老人ホーム、保育所、診療所を建て、漢族の足を縛る纏足の習慣やアヘンを禁止するように提唱していた。

モンゴル人の信仰してきた宗教は主にチベット仏教ではある。チベット仏教やシャマニズムはモンゴルの社会生活、医学領域、精神世界に深く浸透し、根強く定着した信仰とな

<sup>238</sup> 楊海英「変容するオルドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉(1994)、pp. 13-22。

<sup>239</sup> 吉松久美子『移動するカレン族の民族誌—フロンティアの終焉』東京外国語大学出版(2016)、pp. 296-357。

っていた。しかしながら、19世紀から正式に伝達され始まったキリスト教の影響も少なからずあり、キリスト教はモンゴルの教育及び各領域の近代化の種を蒔いたといえる。換言すれば、「文化継承」という課題において、文化形成および文化変容のプロセスにおいて、近代教育の影響は重要な要因となっているが、モンゴルの近代教育の草創期にキリスト教宣教師たちの果たした役割は大きかった。欧米の宣教師たちによる「教育」は近代的な学校教育のモデルの移入をし、現地の伝統文化の変容に無視できない影響を与えてきたといえよう。

## 5.2 日本から導入された教育機関の登場

内モンゴルにおける近代教育の始まりは、西部のオールドス地区においてはカトリック学校であったのに対し、東部のゾソド盟・ハラチン右翼旗<sup>240</sup>では日本式の近代的学校がやや遅れて創設された。1902年にザサク・グンセンノロブ親王<sup>241</sup>によって設立された私設の「崇正学堂」である。グンセンノロブ親王は当時、日本を訪問し、近代的教育制度に感銘を受け、モンゴルにも「学校教育」を導入した。崇正学堂では宿舎、食堂、図書館、モンゴル語の新聞、印刷館などを建て、男女の別や貧富の差なく子どもを受け入れていた。このような近代的学校が教育普及のモデル地区である直隸省などに遅れることなく創設されたことは、画期的なことであったと言えよう。

### 5.2.1 女子教育

グンセンノロブは崇正学堂に続いて、モンゴル初の女子学校である毓正女学堂、および軍事学校である守正武学堂を創設した。これらの学校は、当時、清末期の教育改革に呼応したものであり、日本の影響を少なからず受けている。

経緯について見ていこう。1903年、グンセンノロブは、大阪での国内勸業博覧会を見るため日本を訪問した。そこで、東京実践女子学校校長下田歌子と会見し、女子教育の重要性についての会談を通して、グンセンノロブは女子教育に深い関心を抱いた。日本訪問中、グンセンノロブは多くのことに感銘を受けたが、その中でももっとも心を留めたのが女学校であり、日本人の女性教師を紹介してもらいたいと下田歌子に依頼した。

このような日本訪問を経て、グンセンノロブは内モンゴルで毓正女学堂を建設したのである。毓正女学堂の開堂に伴い、招請されたのは河原操子という日本人女性教師だった。「河原操子は信州の漢学者の娘であり、下田歌子のすすめで横浜の大同学校での教職を経て、1902年には上海の務本女学堂の教師となっていた」<sup>242</sup>。この河原操子こそが、モンゴル民族の教育に初めて携わった日本人女性であり、東部内モンゴルの近代女子教育の第一人者

<sup>240</sup> 清朝政府はモンゴル地域を6つの盟に管轄区した行政区の1つ、現赤峰市にあたる。

<sup>241</sup> ウリヤンハイ部族の子孫であり、ゾソド盟・ハラチン右翼旗ザサクドロドリン親王であり、ゾソド盟盟長を兼任。

<sup>242</sup> 山崎朋子『アジア女性交流史』<明治・大正期編>筑摩書房(1995)、p. 67。



となった。そして、河原操子の後をひきついで毓正女学堂の総教習となったもう一人の日本人女性が、人類学者の鳥居龍蔵の夫人、鳥居きみ子であり、二人ともモンゴル文化発展に大きな役割を果たした人物である。

ここで、河原操子が、最初にモンゴル民族教育にどのように携わり始めたかについて、述べたい。河原操子がモンゴルに渡ったことは、表向きの名目はカラチン王府の教育顧問として、女学校を創設することが本務であったが、秘密裏に軍事上の機密に属する仕事を命ぜられていたという。当時、新聞や雑誌では河原操子のことを「美女スパイの河原操子」とか、日露戦争当時の「女間諜」と書かれていた<sup>243</sup>。いつどこで生命の危険が迫るか分からない状況に置かれていたが、彼女は勇敢で、愛国心の強い人であった。

河原操子は「私が女高師（現お茶の水女子大学）に入学するようになったのも、父河原忠の『教育は国家のために何よりも大切な仕事である。その大切な、神聖な道に従事するのはありがたいことだ』と、女学生時代の私の頭に、いつとなく染み込んでいたからだ」と存じると語っている。また、父は「昔、烈女木蘭は、男装して戦地へ出発した。お前も祖国のために大切な任務を帯びて入蒙するのだから、千危万難は覚悟の前であろうが、万一の時はこの懐剣で処決し、日本女子の名を汚すな」<sup>244</sup>という書き添えた手紙と共に、懐剣を贈った。

河原操子は、モンゴルで女学堂に勤めたことを次のように語っている。「私の本職であり、自分から進んで、従事した事業ですから、自信もあり、興味もあり、また少女達が日本唱歌を歌い、日本語で上手に話すようになりますと、愛情も自然に加わってきますので、私自身も益益と熱心になった」<sup>245</sup>。

河原操子はモンゴルで日本の女子教育に基づいた教育を実施した。それ以前のモンゴル民族の学校教育は、ほとんど無く、各地方に若干の寺子屋的学堂があったが、就学児童はわずかの数名に過ぎなかった。

当時、モンゴル民族の社会において、学堂は不経済と思われ、設立に反対する者がほとんどであった。教育が普及していなかったモンゴル地方では、学校の開設そのものが非常に珍しく、特に女子が学校へ行くということは到底、考えられなかった。モンゴルの人々から、女学堂開設の理解を得ることは難しかった。

学堂が開校した当初、「旗（地域単位）内の人々の所感並びに評判」に対して、女子学校に対する不理解やそれによる噂などが広がっていた。モンゴルの人々の間では「王や王妃が女子達を騙して、外国（日本）に送るための学校だ」という風評が広がり、入学志願者が集まらなかった。しかし、河原操子の「たとえ後官の侍女のみにてもよければ授業を開始」との強い意志によって急速に学堂を開くことに至った。

<sup>243</sup> 河原操子『カラチン王妃と私—モンゴル民族の心に生きた女性教師』芙蓉書房（1969）、p. 29。

<sup>244</sup> 同上、p. 23。

<sup>245</sup> 同上、p. 31。

### 5.2.2 教科目の近代性

開堂当初の生徒は「王妹及び後官の侍女と、王府付近に居住する官使の子女にて、24名」で、「陰暦新年に入り、生徒の数は増やして60に達し、幼年者は7、8歳、年長者は23歳と、20歳を越える者はただ一名のみで、大方は14歳から17歳まで」であった。これらの生徒は「頭班・二班・三班」の三学級に分けられ、日本式教育の「教育時間割表」で授業を受けていた。それは月曜日から金曜日まで各5時間、土曜日の2時間の合計27時間であった。そのなか、河原操子氏の受け持ちが過半数の14時間であった。学科は読書、日本語、算術、地理、歴史、習字、図画、編物、歌（日本の歌・モンゴルの歌）、体操などからなっていた。読書の時間のなかで、日本語・モンゴル語・漢語の3種の言語を教えていた。時間の割当は、日本語が週に4時間、モンゴル語が週に3時間、漢語が週に2時間であった<sup>246</sup>。

開校して以来、「生徒などの喜びは非常にて、夢中になり勉強をお続け、さながら柔らかき物を掌中にてまともごとき状態なり…それより半月ほど経たるごろ、早くも王府外の者の間にも、学堂に行けば種種よいことを覚えられるとの噂ひろまり、二ヶ月の後には、父母より進みて入学をお願い出ずるにいたった」<sup>247</sup>のであった。

また、このとき、河原操子とともにモンゴル民族の女子教育に極めて大きな役割を果たしたもう一人の偉大なる人として、当時の善坤王妃が上げられる。王妃が、自ら教育事業に理解を示し、これを奨励したことは、モンゴルにおける近代教育普及の基礎となった。

毓正女学堂が開堂したその日、善坤は自ら演説を行った。演説の要旨は以下の通りである<sup>248</sup>。

男も女も本来平等のものである、我が国では、女子はあまり才のない方が幸福であるという説を可として、一般に学問をしないのが普通になっている。しかし考えて見よ、個人として若し学問をしなかったら、知識も得られず、見識も作られず、つまらない人間として終わる外ないではないか。本来平等であるべき筈なのに、男は尊く女は卑しい者のごとくなっただけは全く学問しない所から来たのである。凡そ男子には、男子としての分に応ずる事業があり、女子には女子としての応分的事業がある。国家に関することは男子が専心力を尽くすべきであり、家内の仕事は主として女子の責務に属する。ところが女子に学問がなく才が乏しいと、家内の仕事までも男子が兼ねなければならなくなり、その結果男子の本務たる国家的事業が後れてしまう。だから去年の冬には正学堂を設け、この夏は守正武学堂を設け、今回また女子のためにこの毓正女子学堂を開くに至った。

また、「女子の教育は極めて緊急重要である。女が結婚して一家の主婦となり、家政を処理し、子女を教訓するのに、何一つとして学問上の知識を要しないものはない。だから各

<sup>246</sup> 山崎朋子、前掲書、P. 70。

<sup>247</sup> 河原操子、前掲書、p. 29。

<sup>248</sup> 同上、p. 199。

国とも女子教育を盛にして、無学の女は一人もない程に普及している。そして我が国の男子に及ばないまでも、一人一人の女子が進歩している。これらのことについては短い時間で委しく説明することができない。要するに文字を学ぶことはいろいろの知識をえる根本であり、行儀・作法・言葉遣いなども、女子として極めて大切なことである。この両方面のことを細かく分類して、研究し実行して行けば、モンゴルの女達も各国の女のように進歩することができるのである」<sup>249</sup>とも述べている。

そして、「就学の奨励については、王妃と河原操子が日本の園遊会のような集まりを開き、大勢の人々を招き、教育の必要性を説いたのである。また、生徒の作品を展示したり、日蒙の歌を聴かせたりした」<sup>250</sup>。さながら、現代日本の学園祭のような様相であったことが分かる。

東部内モンゴルに設立された女学堂は、日本の分校といった評判もたった。それは、母語であるモンゴル語の授業が週 3 時間、国語である漢語の授業が週 2 時間であることに對して、外国語である日本語の授業が週 4 時間もあったからである。それに休校日が日曜日と夏冬の休暇及びモンゴルの祝祭日に加え、日本の新年 3 日間のほか、紀元節・天長節・地久節が一樣に休日になっていることも、そうした評判の背景にはあった。河原操子は日本語を熱心に教え、2 月 11 日の紀元節や 11 月 3 日の天長節に授業を休みにして、式典を挙げ「君が代」を歌わせたという。

### 5.2.3 近代教育の影響

河原操子は「我は予てより、モンゴルの女子教育をなるべく日本風に発展せしめて、同地方日本化の根拠地にたらしめんがため、女学堂に於いては特に日本語と日本文字の教授に力を注ぎ、日本唱歌を歌わせ、日本の紀元節・天長節・地久節を休日たらしめ、その他日常の談話にも、日本に対して憧れを感じさせるよう注意している」<sup>251</sup>と語っていた。

「モンゴルの女子教育をなるべく日本の女子教育に基づいた教育として発展させようという目標達成には、若干名の女子生徒を日本に留学させる必要があると思い、王妃の贊助を得て希望者を求めたところ、王府重臣の娘であり、学堂の成績も優秀な 3 名を得た」<sup>252</sup>。1906 年 1 月、河原操子氏はモンゴルを離れ帰国する際に、3 名のモンゴル人少女を伴うことになったのである。彼女らの名前は、「何恵貞」(15 歳)、「于保貞」(15 歳)、「金淑貞」(13 歳) という。彼女たちは、同年 2 月 10 日東京へ渡り、その後、東京の実践女学校に入学した。そして、1911 年 3 月 25 日実践女学校第十回卒業生となった。彼女たちは日本に留学した最初のモンゴル人であると同時に、モンゴル人女性として初めて外国に留学した人たちであった。

<sup>249</sup> 同上、p. 200。

<sup>250</sup> 河原操子、前掲書、p. 215。

<sup>251</sup> 同上、p. 252。

<sup>252</sup> 同上、p. 262。

河原操子の帰国後、グンセンノロブ王は手紙で「女学は数千年まだ実施せざるところに候。幸いに良師を得て、諸生と必ず深化致すべく、全モンゴルの女学の起点として慶幸するとことに有之候。」<sup>253</sup>と書き、河原操子へ感激の気持ちを届けた。

その後、鳥居きみ子が毓正女学堂で河原操子の後を継ぎ、モンゴル民族の女性教育に力を注いだ。鳥居きみ子はモンゴルの昔話やわらべ唄をモンゴルの少女たちから採集し、これまで知られて来なかったモンゴルを『土俗学より観たる蒙古』のなかで日本に紹介し、アジア女性交流史でも希有な存在となった<sup>254</sup>。

このように日本人女性とモンゴル人女性の間での最初の交流は、河原操子など日本人女子教師たちとの触れ合いであった。東部モンゴルの近代教育の発展に力を注ぎ、モンゴルに女性教育の最初の種を蒔いたことが、1912年まで崇正学堂、毓正女学堂、守正武学堂などで600人の卒業生を輩出しモンゴル人の教育の発展にも繋がった。

また一方で、グンセンノロブは河原操子の協力を得て、上記3人の他、合計8人もの留学生を日本に送っている。このなかには、帰国後、内モンゴルで初めてのモンゴル語活字を作り、北京に最初のモンゴル語出版社を創設したテムゲト、1930年代の徳王を指導者とする蒙疆政府(のちのモンゴル自治邦)において要職についたアルタンオチルなど、内モンゴルの政治・文化史に残る人物が含まれていた。

このようにして、モンゴル人女性教育においては、日本人女性が深く関わっていたと言える。当時、河原操子の女学堂における教育に対して、モンゴル人女性たちを何とかして日本国家の味方にしようとする意図からであるという批判もあったが、それよりも筆者はモンゴル人の女子教育を始め、発展させたことは、大きな意義をもつと考える。

### 5.3 興安女学院の開設

その後、モンゴル人女性教育はどのように展開していったのだろうか。1911年に独立宣言を行なったモンゴル国は主としてロシアの影響下で近代化を進めてきたのに対し、その翌年に中華民国領となった内モンゴル側は主として中国の影響を受けていた。

しかし、1930年代以降は「満洲国」と徳王の蒙疆政府が樹立されたことによって、日本の影響が強まることになった。前の節で述べたようにモンゴル人の女性教育は日本とは切り離せない関わりの中で誕生したが、その後も日本とは深い関係を持ち続けたのである。それは何といても日本軍占領下の植民地であった「満洲国」との関わりである。

東部モンゴルは満洲国の西側領土に当たり、モンゴル人が集中して暮らしていた地域である。当時、満洲国政府は「興安各省旗地保全に関する件」を公布し、非開放モンゴル地での漢人の新規開墾を禁止し、モンゴル人の生活空間を保全しようとした<sup>255</sup>。また、産業、経済、文化、教育の面で配慮し、税制、治安維持面などでも特別の優遇政策を採り、特別

<sup>253</sup> 同上、p. 262。

<sup>254</sup> 同上、p. 76。

<sup>255</sup> 河原操子、前掲書、pp. 109-111。

な措置を執った<sup>256</sup>。

もともと教育普及が立ち遅れていた東北地方であるが、満洲国が建国されてから教育の普及が重視されるようになった。まず、各旗・各県で小学校が最低1校建設されることになった。さらに1937年より蒙旗教育振興助成費が認められ、小・中等学校の新設、就学督励に努力が払われた<sup>257</sup>。1935年には興安学院が開設された。興安学院はモンゴル人の中堅人材の養成を目的としており、一般中等学校とは別の体系で、国費により賄われていた。また、王爺廟には興安軍官学校もあった。そして、毓正女学堂の次の段階で設立されたモンゴル人の女子教育機関は興安女学院である。

以下、新保敦子の記述によりながら概観してみよう。興安女学院は1937年に通遼に創設され、軍事部病院がモンゴル人の看護婦生徒を募集したことがきっかけとなっていた。興安女学院はモンゴルの軍人、官僚のために文化教養のある良妻賢母を育成することが目的であったと言われている。教育内容は主に以下の通りである。

- ① 文化科（数学、蒙古文、日語文）
- ② 技芸科（裁縫、編み物、調理）
- ③ 文明礼儀を中心とした科目。

当初、女子生徒たちは日本語が分からなかったが、基本的に授業はすべて日本語によって行われた。授業の中で、日本語を聞き取れなかった場合もそのまま進められたが、日常生活では通訳がいたという<sup>258</sup>。

興安女学院を発案した金川耕作大尉以外にも、興安南警備軍司令部のモンゴル人参謀長のナチンションホル（那欽双和爾）のように、女子青年への教育機会の提供に賛同するものがおり、参謀のドグルジャブ（都固爾扎布）が、開設工作に協力した<sup>259</sup>。興安女学院は軍隊が設立した学校のため、学院の院長、教師、職員は司令部の日本軍人及び彼らの夫人が兼任していた。その中には、堂本修や山根喜美子などモンゴル女子教育に親身に当たった日本人女性教師がいて、教師と生徒といった続柄、モンゴルと日本といった民族間の交流や人情が深く長く残った。

興安女学院は、軍隊が学校を維持するのは困難ということから、1938年4月に興安南省へ移管され、学校の名前も興安南省立興安実業女学校となった。さらに、興安南省立興安実業女学校は、興安地帯における女子教育の拠点として強化され、1941年4月に、興安南省立興安女子国民高等学校に改められることになった。「女子国民高等学校令」によれば、女子国民高等学校の目的は、「国民道徳の涵養、特に婦徳を重視し、国民精神を修練し、身体を鍛え、女子に必要とされる知識・技能を授け、労働の習慣を養い、良妻賢母を養成す

<sup>256</sup> 新保敦子「満洲国におけるモンゴル人女子青年教育」『東アジア研究』大阪経済法科大学アジア研究所<50> (2008)、p. 5。新保敦子『日本占領下の中国ムスリム』早稲田大学出版会(2018) pp. 271-320。

<sup>257</sup> 同上、p. 7。

<sup>258</sup> 同上、pp. 8-10。

<sup>259</sup> 索布多主編「回顧興安女子国民高等学校建校与發展歷程」『興安女高』内蒙古人民出版社（2005）、pp. 1-16。

ること」(一条)<sup>260</sup>にあるとされている。

学校の規律は比較的厳しく、通常外出できず、用があった時には休暇を申請しなければならなかった。週末の外出も門限があり、外泊は不可だった。1942年に、興安女子国民高等学校は、正規の4年制一般中高等学校となり、入試で53名の新生を迎えた。また、翌年の1943年には、モンゴル人の教員を養成するため、1年制の教導科を付設し、10名の学生が入学した。この時期は興安女子国民高等学校のもっとも発展した時期であった。学生の資質においても明らかな変化がみられた。在校生は4学年、4クラス150名ほどで、すでに民族の特性を生かしたモンゴル人の女子学校となっていた<sup>261</sup>。彼女たちの多くは後に内モンゴル自治区の各界で女性幹部として活躍した<sup>262</sup>。

満洲事変から日中戦争時期(1930年代初めから1945年)の中国ではモンゴル自治政府は日本の傀儡政権として批判されることが多いが、モンゴル民族教育の発展を図った点については好意的かつ肯定的な評価がなされている。日清戦争以降、日本は中国や韓国などに対して教育文化面の働きかけを強めたが、その中で、内モンゴルも例外なく影響されていた。20世紀の初頭には多くの日本人が学務顧問あるいは教師として中国に招かれ、活躍していた。当時内モンゴルにおいても日本の教育をモデルにし、教育の近代化が始まったという<sup>263</sup>。そして、1930年代初めから1945年の蒙疆時期にはモンゴル自治政府自身も、女子教育の普及を図ったことは事実である。たとえば「蒙疆時期には、チャハル、シリングルのモンゴル民族教育は大いに発展し、統一モンゴル語教科書が作られ、学生数が急増した。それ以前は漢語のみを学習していたのを、主にモンゴル語と日本語を学習する形式に改め、またチャハル、シリングル盟での男子だけを入学させるという伝統も改めた」<sup>264</sup>。

そして、「チャハル盟やオラーンチャブ盟のモンゴル語学校では、男子のみ入学させるという従来の習慣を廃止し、女子分校や女子部が設立された。また、チャハル盟興蒙牧業中学校の女子部、シリングル盟スウニッド右旗の女子家政実験学校などに続いて、両盟で女子学校を次々に設立させた」<sup>265</sup>のである。

#### 5.4 中華民国期の教育—国民党政権下を中心に

周知の通り、中華民国の支配は内モンゴルの西部に限られていた。当時、綏遠省と呼ばれていた地域は、チャハル地域の一部とオルドス、それにウラトとアラシヤンのモンゴル人居住地である。

現代中国の公式見解によると、まず1922年に綏遠(フフホト)で「綏遠平民学校」が設

<sup>260</sup> 武強『東北淪陥十四年教育史料』〈1〉吉林教育出版社(1989) p. 531。

<sup>261</sup> 新保敦子「満洲国におけるモンゴル人女子青年教育」『東アジア研究』大阪経済法科大学アジア研究所〈50〉(2008)、pp. 14-15。

<sup>262</sup> 楊海英『墓標なき草原』岩波書店(2009)、pp. 92-106。

<sup>263</sup> 烏蘭図克主編『内蒙古民族教育概況』内蒙古文化出版社(1994)、p. 136。

<sup>264</sup> 同上、p. 136。

<sup>265</sup> 同上、pp. 163-164。

置され、教育庁の管轄下に置かれた<sup>266</sup>。日本が満洲国を建国するまでは東部内モンゴルに、また、徳王政権(蒙疆政権とも)が誕生するまでは中部のシリングル盟にも小学校の設置が政府によって進められた。その後、綏遠省内での学校は小学校から中学へと発展していったが、各盟には中学が一つしかなかった。

一方、中華民国の成立(1912年1月1日)が南京で正式に宣言された当時、孫中山が「漢、滿、蒙、回、藏の諸族が一つの国」という「五族共和」思想を提唱した。また、中華民国政府は「蒙蔵事務局」を設置し、「各民族一律平等」の政策をもとに、教育事業を取り込んだ。1913年には、「蒙蔵学校」に続き、「蒙蔵専門学校」(清の咸安官三学と理藩部蒙古学校の統合)が誕生した<sup>267</sup>。国民党の政権のもと、モンゴル優遇政策でオルドスにも国立伊盟中学校<sup>268</sup>が創設された。S氏のエピソードを紹介しよう(インタビュー調査による、2013年4月20日)。貴族出身のS氏(1920年代生まれ)は高学歴者で、当時オルドスで初めて大学に入ったモンゴル人女性として知られている。

高官であった父親がS氏と妹のために家庭教師を招き、漢人である家庭教師は「三字経」や「論語」など漢文の教科書を教えた。S氏は、私塾を経て、師範学校に入っていた兄に憧れ、勉強が好きになった。兄は中国語・モンゴル語・英語が堪能だったという。

S氏が、国立伊盟中学校(中高一貫)にいたころ女子生徒は4人のみで、大学に進学したのはS氏だけだった。国立伊盟中学校を卒業してから、北京にある国立蒙蔵専科学校に進学した。「蒙蔵学校へ入学した人たちは優秀な人ばかりで、ほとんどが貴族出身、ウラーンフもこの学校の出身であった。蒙蔵学校はハラチンのグンサンノルブ親王が設置したもので、学生も東部内モンゴル出身者が多かったが、女子学生は約一割しかなかった。オルドスからは私だけであった」という。S氏は、中華人民共和国成立後、北京の中央民族学院(大学)の政治学部編入し、2年後に「マルクス・レーニン主義学習班」という大学院修士課程に進んだ。その後、地元に戻り、衛生局の院長勤め、のちに中央民族学院教務処長を担い、退職後は企業を立ち上げ、植林プロジェクトを行っている。

S氏は家庭教育について次のように語る。「小さいころ、兄がよく妹と私に『紅樓夢』を読み聞かせてくれた。その時から政治の話が好きだった」「父親は仕事で忙しかったから、全部母親に子育てを任せた、兄と私に影響を与えてくれたのは母親だった」。

当時、S氏の家に30人ぐらいの使用人がいたが、父親の食事を母は毎日自分で作っていたという。「母親はとても伝統文化を大事にする人で、常に私たちに多くのしきたりを教えていた。私と兄は急進的な思想が強かったが、母親の言うことよく聞く子どもたちだった。兄は政治のことで母親のアドバイスに耳を傾け、母に反発することは一切しなかった」。

<sup>266</sup> 『内蒙古教育志』編委会編『内蒙古教育史志資料』〈第一輯、下〉内蒙古大学出版社(1995)、p. 413。

<sup>267</sup> 郝維民主編『内蒙古教育志』人民出版社(2009)、pp. 490-597。

<sup>268</sup> 中華民国教育部により、1938年に設立された。当初は教職員12名、内5名が専任教師、生徒が60名だった。

S氏の事例は、国民党時代の貴族の教育の実態を表しているのではなかろうか。また、学校には、貴族出身や男子生徒が多かったことが分かる。

## おわりに

内モンゴル地域に最初に導入された近代教育をもたらしたのは、西洋からのカトリックの宣教師たちであった。彼らは限られた地域、すなわちオルドス西部のボロ・バルグースンを活動拠点としていた。比較的狭小な地域に西洋型の近代教育システムを移植した。モンゴル人の児童を集め、宗教的な内容だけでなく、自然科学や社会に関する内容を網羅したテキストが使われ、体系的な知識が伝授された。

こうした学校にモンゴル人女兒たちが入学していた事実は、中国におけるエスニック・マイノリティに近代教育の恩恵をもたらしたという視点から再評価すべきであろう。その後、中華人民共和国建国後、共産党政権の下でキリスト教が禁止され、欧米の宣教師に対しては国外追放の処分が下された。

本章では、当事者へのインタビューも加えて当時の状況を明らかにしてきた。キリスト教ミッション団体の活動については、辺境のエスニック・マイノリティに対する近代教育の導入という点で、今後、継続的に検証する必要があるのではなかろうか。

モンゴル人女子教育の本格的な展開は、日本との関係の中で出現した。女子教育のシンボルともいえる興安女子国民高等学校は1945年8月のソ連軍の満洲国への侵攻と日本軍の敗戦によって、その短い歴史を閉じることになった。日本占領下でのモンゴル人女性教育も、このとき幕を閉じた。一方で、国民党統治下において、貴族の家庭では女子が学校教育を受けることもあった。

数十年間にわたったモンゴル人における女子教育は、東部内モンゴルを中心として展開したものの、その短い命を終えた。しかし、その間に養成されたモンゴル人の女性たちは、その後の内モンゴル現代史において、社会の様々な領域で目覚ましい活躍を続けた。モンゴル人の女子教育機関そのものは終焉を迎えたが、彼女らの存在はその後のモンゴル人女性の生き方に影響を与えたのである。



## 第 6 章 社会主義体制下の民族教育—学校教育

### はじめに

社会主義国家である中華人民共和国が 1949 年に建国された。内モンゴル自治区は、中華人民共和国における自治区として、もっとも早い成立であった。そして中華人民共和国の成立にともない中華民国時代の察哈爾省、綏遠省、熱河省、遼北省、興安省を廃止して内モンゴル自治区となった。

また、モンゴル人は中華人民共和国を構成する、漢民族を除く 55 の少数民族の 1 つであるモンゴル民族（蒙古族）と規定されることになった。1954 年に公布された中華人民共和国憲法第一章第 4 条では、民族の平等について、以下のように規定している<sup>269</sup>。

中華人民共和国は、統一された多民族国家である。各民族は、すべて平等である。すべての民族に対する差別や圧迫を禁止し、各民族の団結を破壊する行為を禁止する。各民族は、すべて自己の言語・文字を使用し発展させる自由をもち、すべて自己の風俗習慣を保持し、または改革する自由を持っている。各少数民族が集居する地方では、区域自治を実行する。各民族の自治地方は、すべて中華人民共和国と不可分である。

このように中国は「民族平等」という理念を強く提唱している。「民族平等」は、多文化共存・多民族共生を前提とする。中国政府の民族政策の基本方針は次の通りである。

- ① 民族間の平等
- ② 民族自治区域制度
- ③ 少数民族地区の経済と文化の発展の支援
- ④ 少数民族幹部の養成
- ⑤ 少数民族言語・文字の尊重とその発展
- ⑥ 少数民族宗教と風習の尊重と保護

上記のように中国では、「少数民族優遇政策が唱えられてきた」<sup>270</sup>ものの、現実に中華人民共和国憲法の第 4 条の「各民族の平等や共存」の規定のように実施されているのだろうか。

また、共産党政権下での民族教育とはどういったものか、社会主義が解放した女性、とりわけ少数民族の女性は内モンゴル自治区において、どういった教育を受けてきたのか。本章では民族教育について、学校教育の側面から考察する。

まず、中国の民族教育について、時期区分をしながらモンゴル民族の教育に焦点を当てて考察する。続いてモンゴル人女性にとっての少数民族教育の意味、換言すればモンゴル

<sup>269</sup> 中華人民共和国中央人民政府ホームページ (www.gov.cn) 2018 年 3 月 22 日。

<sup>270</sup> 韓景旭『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮人』中国書店 (2001)。

民族教育にとって女性はどういう存在であるのかを、近代教育の体現者である女性教師へのインタビューから考察していく。また、モンゴル民族学校の女子生徒及び女性教員への質問票調査から、若年女性の教育意識を明らかにするとともに、モンゴル民族学校が抱えている課題について、現地調査を踏まえて検証していく。

## 6.1 少数民族教育の政策と制度

### 6.1.1 政策の制定

多民族国家である中国での民族教育は次のように位置付けられている<sup>271</sup>。

民族教育とは、わが国 55 の少数民族すべての教育ではなければならない、それは民族語で授業をするものも、そうではない民族教育をも含むし、民族名を冠した学校もそうではない学校の教育も含まれる。同時に少数民族の就学前教育、職工（職員、労働者など）教育、成人教育、通信教育、テレビやラジオによる教育をも含む。すなわちおよそわが国少数民族の文化水準（学力、教養）を向上させ、少数民族の各種各クラスの人材を育成する教育はすべて民族教育と称されるべきである。

「民族教育政策」は当初、中国政府の方針通りに実施されていた。しかし、1966 年に文化大革命がはじまり、少数民族の言語は禁じられ、民族教育も廃止されて甚大な被害を受けた。10 年間も続いた文化大革命が 1976 年に終わり、その後 90 年代にかけ、改革開放政策が実施されたことにより「民族教育政策」が復活した。そして、90 年代に入ってから市場経済化が進み、少数民族の経済・文化・教育に大きな影響を及ぼした。しかしながら、「民族教育政策」の実践は、規定された内容通りに民族の経済文化の発展に役立っているか、「民族教育政策」が定めた目標を達成できているかは検証の必要があるだろう。

また、各少数民族地域は土地が広く、資源が豊富であるが、政治的、経済的、文化的に漢民族から「立ち遅れている」と捉えられている。政府は民族間の「格差」をなくし、「各民族一律平等」を果たすために、様々な優遇政策や特別方針を実施した。それは、少数民族地域においても漢民族の地域と同じ学校教育制度や義務教育制度を導入し、実施することである。少数民族を対象にして、以下に規定される優遇政策を実施している<sup>272</sup>。

国は、民族学院を創設し、高等教育機関に民族組、民族予科を設け、少数民族の学生を募集・採用するとともに特別の学生募集、特別の定員配分という方法をとることができる。高等学校及び中等専門学校は新入生を募集・採用にあたって、少数民族の

<sup>271</sup> 丁文楼「関与“双語”教學的思考」『新疆社会科学』〈6〉（1990）、p. 72。

<sup>272</sup> 『中国基本法令集』日本評論社（1998）、pp. 36-41。

受験生に対しては採用基準及び条件を適宜に緩める。

中央政府は少数民族に対して以上のように優遇政策を定め、民族の伝統文化を重視し、民族の言語・文字を発展させる「民族化」した教育政策を進めている。「平等」を実現させるための優遇政策は統一した「国民国家」の教育方針にもなると思われる。

### 6.1.2 教育制度の変遷

内モンゴルの教育制度は、時代背景に伴い変遷を遂げた。以下、中国の少数民族政策と少数民族教育政策の歴史的な経緯の政府見解<sup>273</sup>に沿って、中華人民共和国成立から1990年代までを、「黄金期」（安定期）、「大躍進期」、「文化大革命期」および「4つの現代化期」（改革開放期）に分けて見ていくことにする。筆者は教育変遷の期間を政府の見解に従って区分しているが、その教育的効果と役割については、検討の余地が残されていると考える。

#### 「黄金期」（1949年～1956年）

1947年5月1日、内モンゴル自治政府が正式に成立した。当時、内モンゴルにおいて民族中学校は5校、在學生は524人、民族小学校は377校、在學生は22,000人であった。専任の中学校教師は26人、小学校の教師は912人であった。この時期は、内モンゴルの民族教育を含めた教育全体の基盤が作られた時期であり、小学校から大学までの教育施設が整った。現在の内モンゴル師範大学、内モンゴル工業大学、内モンゴル医学院、内モンゴル農牧学院などの大学はすべてこの時期に創設された。そのほか、数多くの小学校、中学校、高等学校、専門学校なども同時期に開設された<sup>274</sup>。この時期は一般に少数民族教育の「黄金期」と呼ばれている。

#### 大躍進期（1957年～1965年）

1950年前後、中国の国内で少数民族の人材が不足し、モンゴル語版の教科書が作れなくなり、多くはソ連やモンゴル国のものを使うようになった。50年以降は内モンゴルの現地で編纂し、そのほか70%が人民出版社の全国版の教科書を翻訳したものだ。漢民族の学校と全く同じ内容だったため、少数民族の子どもの生活・生産様式に合わないこともあった。この時期、愛国主義教育を徹底し、「先進民族」とされる漢民族の文化を吸収し、民族の言語を豊かにするために漢語の授業が加えられた。こうして、少数民族教育としてのモンゴル民族教育は、政府の政治方針の影響を強く受けるようになった。

<sup>273</sup> 東郷育子「中国の少数民族教育政策—国民統合の視点から」（下）『季刊教育法』〈112〉エイデル研究所（1997）、pp. 82-88。

<sup>274</sup> オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所（1995）、p. 72。

## 文化大革命期（1966年～1976年）

1966年から始まった文化大革命の時期は、文字通り文化を破壊した「革命」となり、モンゴル民族教育が被害を受け、民族学校の停止や民族言語の否定が行われた。文化大革命では教育全体が影響を受けたが、民族教育が被った打撃が特に大きかった。「祖国言語統一」「漢語に近づく」を提唱し、漢語が必修科目になり、授業時間が急に増加したため、児童・生徒が聞き取れず、教育の質が低下した。

またモンゴル語そのものが「修正主義の言語」の代名詞となり、モンゴル語によって教育を受けてきた多くの生徒・学生が、漢語を教授言語とする学校へと転校した。3歳前の幼児はすべて漢民族の託児所に移され、子どもの言語環境に大きく影響を与えた。そのころ、民族学校へ通う子どもは3割にまで減少したという。

「文化大革命の時期には、民族問題はすでに消滅したとして、中央及び各地の民族教育行政機関が取り潰され、民族語による出版物もほぼ停止された。当時、学校の唯一の教科書は「毛沢東語録」で、授業の内容は「毛沢東語録」を読むことだったという。学生の唯一の宿題は批判文を書くことで、国家主席の劉少奇から学校の校長、一般の教師、あるいは同級生までもが批判の対象にされた。また、大学・専門学校へ入学するときの第一の必要条件是、「下放」<sup>275</sup>経験であり、学歴とは無関係だった。下放経験者で、「批判稿」で劉少奇、鄧小平などをよく批判した人たちは皆、推薦により大学や専門学校の入試に合格したという」<sup>276</sup>。さらに、「多くの少数民族教師が迫害を受け、死亡または障害を負わされている。内モンゴル自治区の首府フフホト市には、文化大革命前はモンゴル民族小中学校が10校あったが、文化大革命中すべてが廃校に追い込まれ、モンゴル語教師93人のうち、迫害を受けた3人が死亡し、55人が学校を追われ、29人が転勤させられた」<sup>277</sup>という。

そして、内モンゴル自治区東部の3盟（現在の赤峰市、ジリム盟、ヒヤンガン盟、ホロンバイル盟）と西部の3旗（現在のアラシャン盟）が、それぞれ遼寧省、吉林省、黒龍江省、甘肅省、寧夏回族自治区に分割されたのである。その結果、内モンゴルの半分以上の土地と3分の2以上の人口が、自治区以外の地方に属することになり、四分五裂の状態になった。したがって、内モンゴルの民族教育は統一した管理システムを失い、学校制度、進学時期、テキストなどの各方面で影響を受けたのである<sup>278</sup>。

## 「4つの現代化期」（1977年～1992年）

10年にもわたった文化大革命が1976年に終わった。モンゴル民族小中学生の民族語学習

<sup>275</sup> 中国共産党の上級幹部が農村に行き、実際に労働をすることによって、官僚主義や主観主義などを克服すること。

<sup>276</sup> オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所（1995）、p. 73。

<sup>277</sup> 烏蘭圖克、斎桂芝主編『内モンゴル自治区民族教育文集』内蒙古大学出版社（1990）、p. 18。

<sup>278</sup> オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所（1995）、p. 76。楊海英『墓標なき草原(下)』岩波書店（2009）、pp. 227-229。

率は1.7%まで低下していた。その結果、「少数民族の子ども達の中に母語の読み書き、(母語での)会話さえできない者が多く出て、学校は骨幹の民族教師陣を失った」<sup>279</sup>という。1978年から全国統一大学進学試験が行われ、1980年代からモンゴル民族教育も復活し、モンゴル民族小中学生の民族語学習率は約7割近くまで回復してきた。

しかし、同時に1980年代から中国の改革開放が始まり、計画経済から市場経済への移行がまたもやモンゴル民族学校の経費不足、学費の負担増、生徒の減少と教師の質などをめぐるさまざまな問題を引き起こすこととなった。さらに市場経済への移行に伴って、モンゴル民族の言語よりも漢語や英語の習得が求められるようになった。

このように民族学校には現代化に伴うさまざまな問題が絶えず起きていた。経費不足の原因として、1980年代から改革開放が始まり、計画経済から市場経済へ転換したが、それに民族学校の運営が合わなくなったことがある。物価が上昇する一方で、政府からの資金が教育に回らなくなった。近年において、周知のように中国は経済発展に力を注ぎ、バブル経済の状況にあると言っても過言ではない。一方で、国民の経済格差が拡大している。これは経済の問題だけではなく、人間の精神への影響も極めて大きい。教育をする側、教育を受ける側、そして教育を支援する側にまで考え方の変化をもたらし、諸問題の発生を招いている。経済格差は個人や家庭の問題にまで及び、教育費の負担に苦しんでいる人も少なからずいる。

### 6.1.3 民族教育の現状と課題—90年代以降

中華人民共和国は建国以降、「民族一律平等」と「共同発展」という政策理念のもとで民族教育を実施してきた。中国の経済発展の「モデル地域」に生きるオルドスのモンゴル人女性たちは民族教育を受けてきたが、それは、国家全体の教育に統合され、民族独自性よりも中央集権的政策の枠組みに収まるものでなければならない。

現代中国の教育の目的は、個人の間人形成が目的ではなく、国家への貢献をその最大の特徴としている。それは、漢民族であろうと、少数民族であろうと、例外は認められない。「社会主義教育は、祖国社会主義現代化建設事業の建設者を養成する」<sup>280</sup>という教育の基本的な目的に変わりはない。そして、民族教育もそれに従い、少数民族であっても、同一の教育を受ける。

1993年公布の「中国教育改革発展要綱」で、李鵬首相は「今や義務教育の普及と識字教育の強化は、全民族の資質を向上させる上での根本的要求であり、今後の一定期間、わが国の教育事業発展における『重点中の重点』である」<sup>281</sup>と発言した。このように教育普及への取り組みをすすめる、民族教育の発展を目指してはいるが、いまだ問題が残されている。

まず、民族学校は経費不足のため、学校の教育水準や設備が劣っている。給料が少なく、

<sup>279</sup> 岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』(1999) 社会評論社、p. 93。

<sup>280</sup> 『中国大百科全书』中国大百科全书出版社(1985)、p. 13。

<sup>281</sup> 大塚豊「第二章 教育」『中国総覧1996年版』財団法人霞山会(1996)、p. 387。

待遇が悪いなど教員をめぐる問題も多く、仕事への意欲が欠落し、教師の質が問われている。したがって民族学校の教員の転職も増加している。

次に、教育を受ける側にも問題が起きている。それは、社会で通用する言語はモンゴル語ではなく漢語であるという深刻な言語問題に由来する。社会で必要とされない言語を学ぶことが無駄だと考える親たちは、自分の子どもを漢語で教える学校に通わせる。そのような考えを持つ親のもとで育った子ども達は、母語を学ぼうという意識を持たないまま大人になり、自分の母語や文化から遠ざかっていく。その結果、民族学校の生徒が減少し、モンゴル語で教授を行う小学校は急速に統廃合されつつある。

モンゴル民族教育の衰退をより具体的な事例を通して見ていこう。

中国国営通信社のひとつである「内モンゴル・ニュースネット」によると、2007年11月29日、第10期内モンゴル自治区人民代表大会第31回会議で「内モンゴル自治区におけるモンゴル語関連事業規定」の進捗状況について協議した。同規定は、2004年11月26日、第10期内モンゴル自治区人民代表大会第12回会議で承認されたものである。同会議の報告書は、多くの代表が進捗状況の評価にあたり、「(モンゴル民族教育が抱える)問題の深刻さが認められた」と報告している。報告内容は以下の通りである。

「共産党委員会と政府機関のモンゴル語翻訳局は数を減らし処理能力を低下させている。わずか6つの翻訳チームにフルタイム翻訳者が23名いるだけである。モンゴル語で学ぶ生徒数とモンゴル語使用人口も急速に減少し、モンゴル語で学ぶ在校生徒数は1986年の38万人から、現在(2007年)では24万人に激減している(平均毎年6666人減少)。

また、小学1年生のモンゴル語教科書の出版発行部数は、1992年の6万8600冊から2006年の2万2500冊へと5年間で3分の1に激減している。平均毎年3292冊減少し、つまりモンゴル語を学ぶ小学校1年生が毎年3300人減っていったのである。さらに、「モンゴル語で印刷された『内モンゴル日報』モンゴル語版発行部数は、1万3800から現在の6000まで減少した」<sup>282</sup>。

以上は、モンゴル語で教育を受ける子ども数の急激な減少を示している。この背景には、1979年の「一人っ子」政策の影響を受けての内モンゴル全体での児童数の減少も含まれているが、単なる少子化現象ではないと思われる。また同会議では以下の項目を含む提言がなされた。

「これらの問題に細心の注意を払い、詳細な実施計画を提出し、また、民族教育の根幹としてモンゴル語教育の促進に焦点を合わせ、さらに、民族教育の条件を改善すること。教師の数を増やし、教育レベルを向上させること。既存のカリキュラムを再考すること。モンゴル語で学んだ学生の雇用機会を改善すること」<sup>283</sup>。

こうした提言を踏まえて、近年実施されたいくつかの取り組みを見てみよう。1978年に

<sup>282</sup> 「内モンゴル・ニュースネット」 ([www.nmgnews.com](http://www.nmgnews.com)) 2012年9月27日。

<sup>283</sup> 「内モンゴル・ニュースネット」 ([www.nmgnews.com](http://www.nmgnews.com)) 2012年9月27日。

設立されたジリム盟医学院（現内蒙古民族大学）はこの30年間で8千人以上のモンゴル医学の人材を育てた。主に、モンゴル医学、骨折、薬物、薬物製材などの専門で著しい成果を上げた。

オルドスのモンゴル民族学校は、モンゴル語で教授した大学卒業生を積極的に採用するよう働きかけ、2011年には124名のモンゴル民族の大学生の就職問題を解決した。また、漢語で学んだモンゴル人の学生たちにも「全国普通高等学校招生入学試験」（センター試験相当）に点数を加算するといった優遇政策を実施し、進学や就職の問題を支援した。また、同学校は2010年から民族学校の教員の研修経費などを支給し、給料は前年から、平均50元（約千円）上がった。

2011年、内モンゴル自治区教育庁は“優先重点”式発展の政策である「民族教育人材培養模式改革試点实施方案」と「民族教育発展水準提昇工程实施方案」を採用した。同方案によって、2012年3月1日から、モンゴル語で教育を受けた卒業生の就職問題に取り組み、具体的に「蒙漢兼通人材」（モンゴル語と漢語に堪能な人材）を採用する試験などを特別に実施した。

民族教育が重視されたこともあり、2012年段階で、オルドスには民族中学校、小学校、幼稚園が合わせて42校あり、うち幼稚園17、小学校12、小中一貫学校3、中学校7、専門学校3があった。教職員は3046人、専任講師は2429人である<sup>284</sup>。

2014年から内モンゴル自治区では少数民族の民族学校を卒業した学生に、「全国普通高等学校招生入学試験」の点数を加算する政策が施行された。その対象者には、モンゴル民族、达斡尔（ダオル）族、鄂伦春（オルチョン）族、俄罗斯（オロス）族、鄂温克（エベンキ）族などが含まれる。このように、モンゴル民族の学校教育はマイノリティ支援の一環として優遇されている。

ただし、2020年9月1日より、内モンゴル自治区全域のモンゴル民族中学校において、「二言語教育モデル」を導入し、実施することとなった。同教育モデルは、小学校一年生と中学校一年生より「国語」の授業を「漢語」に統一し、道徳科目・歴史と政治科目の授業などをすべて漢語で行うことである。換言すれば、小学校一年生より漢民族の学生が使用している漢語科目を導入し、全科目の授業において漢語が教授言語となり、母語のモンゴル語は「第二言語」一科目だけの授業になるということである。これにより、モンゴル語で行う授業が廃止され、モンゴル語で教えている教師が大量に解雇されることになり、モンゴル語とモンゴル文字の消失がさらに加速することが予測される。この問題がモンゴル民族学校の教師、子どもの保護者だけではなく、世界各国にいるモンゴル人による反対運動を引き起こし、子どもたちが自分の母語で教育を受ける権利を取り戻すよう当局に訴えた。

---

<sup>284</sup> オルドス市人民政府ネット、2012年9月27日。

中国において、教育は「政治と経済に奉仕しなければならない」<sup>285</sup>と位置づけられており、平等社会実現のためには教育の発展がその前提となっている。各民族の文化水準を上げることは国全体の経済発展に不可欠であるが、少数民族の教育は、その民族の母語で教授し、教育の目的や方針がその民族の特性に合わせた内容を行なうべきではないか。

文化的な差異をなくすことが「平等」なのではなく、それではかえって文化間格差は拡大し、少数民族の「遅れている」状況は変わらない。民族言語を始め、民族の文化・生活習慣を継続できる環境や可能性を与えること、これが少数民族教育の目標とならなければならないと考える。

## 6.2 モンゴル人女性にとっての少数民族教育

中華人民共和国が建国された1949年以降、エスニック・マイノリティであるモンゴル人の女性は、社会においてどのように位置付けられてきたのか。「マイノリティ」(minority)という言葉は『広辞苑』では「もともと少数派のことを指し、主に少数民族のこと」を指すと説明されている。だが、このマイノリティの指し示す対象は徐々に範囲を広げ、女性や障害者および有色人種など、社会的に弱い立場のグループ全般に使われている。そして、モンゴル人女性は「少数民族」かつ「女性」という立場であることから「二重のマイノリティ」もいえる存在である。

教育は文化と女性の相互関係に影響を与える重要な要素である。したがって、ここでは、いくつかの調査に基づきながら、モンゴル民族教育において女性はどのような存在であるかを述べていきたい。ただし、少数民族の教育において、モンゴル女性教育といった固有のカテゴリーで論じられることは今までなく、本論においても「女性教育」という枠組みにこだわらず、女性が受けている教育及び教育が女性自身に与える影響力を中心に考えたい。

女性を対象にした教育を特別に取り上げる必要がないのは、1949年以後、モンゴルでは男女共学が当たり前だと考えられる時代であるため、あえて「女性教育」を区別する必要がないからである。もともと、「女性教育」が始まった背景には以下のような要素があったと指摘されている<sup>286</sup>。

- ①女子は男子より能力が劣るから低度の教育でよいとする女性蔑視観。
- ②女子と男子は肉体的・生理的差違があるので、それに適した教育が必要だとする考え方。
- ③性別役割分業観に立って女性の役割を家庭内での家事・育児を担当することにおき、そこに女子特有の教育の必要性を求める考え方。

このように、女性をマイノリティとして捉えるがゆえの、独自の教育の必要性を説くも

<sup>285</sup> 牧野篤「教育道具主義の行方—『改革と開放』期中国の教育研究」『教育学年報4』世織書房(1995)。

<sup>286</sup> 『愛・希望・聡明—東京女子教育』東京女子教育懇話会発行、精興社(1995)。



のだったためである。

「旧中国においては「男子徳あれば才、女子才なければ徳」ということわざが流行していた。そのために、女性の知育がほとんど顧みられなかった。しかし陳東原は『中国婦女生活史—清代的婦女生活史—』の中で、『訓学良規』という書を挙げ、清朝期において女子も塾で学ぶという教育方法があったことを立証している。女兒も男児と同様『弟子規』や『小学』、さらに『女四書』や『呂氏閨範』を読み、大義の講義を受け、習字と家書の作文を教えられたこと、また男女共学の慣行もあったと述べている<sup>287</sup>。

ただ塾における学習例よりも家庭内での実践にある傾向にあった。意図的になされる教育とともに、『清俗紀聞』がいうような「自然に任せて殊更におしえる事なき」教育が同時に行われたのである。かつ女性教育は、夫家に嫁いだ後も、姑の監督下に実地訓練の積み重ねとして展開されたのである<sup>288</sup>。ここからみても女性の社会的位置が男性より低く見られていたことがわかる。

また、管見の限りでは、中国の主要な民族の漢族の場合、伝統的に男子が家の後継者であり、女子より大事にされてきた。特に、1980年以降に本格化した「一人っ子」政策においては、女兒より男児が望まれる傾向があり、女兒が生まれたら家の後継者がいなくなることを恐れていた。本来、男女の人としての能力に優劣はなく、それが長い男性優先の社会が続くうち、女性が忍従を強いられる中で自立心を育てる機会が失われてきた。男女の重さが異なることが存在しているのも事実である。そのため、社会主義の中国において、「憲法」、「義務教育法」、「女性權益保障法」およびその他の関係ある法律は、女性が男性と同じく平等に教育権を享受できると明確に規定されている。それにしたがって、女性の高等教育の進学率は増加し、あらゆる教育段階で女性の割合が増加する傾向がある。

以下、モンゴル人女性教師へのインタビュー調査から、モンゴル人女性にとっての少数民族教育や、彼女たちが置かれている少数民族教育の状況を明らかにしていく。

### 6.3 モンゴル人女性教師に対する調査

#### 6.3.1 調査概要

中華人民共和国成立後の民族教育においては、多くのモンゴル族の女性教師が活躍をしてきた。ではモンゴル人女性はマイノリティとして民族教育にどのような経緯で関わるようになっていくのか、女性としてモンゴル民族教育をどう考えているのか。以下では4名のモンゴル民族学校の女性教師への質的調査を紹介する。

<sup>287</sup> 山崎純一『女四書・新婦譜三部書全訳—教育から見た中国女性史資料の研究』明治書院（2002）、p. 2。

<sup>288</sup> 山崎純一、前掲書、p. 3。

女性教師は、いずれも、モンゴル民族学校出身である。表 6.1 はインタビュー調査の対象者の一覧である。なお、インタビュー調査の詳細内容は、文章化し本論文の付属資料 I として添付してある。

**表 6.1 インタビュー調査の対象者概要**

| 対象者 | 職業 | 年齢  | 学歴 | 家庭構成   | 公的場の使用言語 | 生活での使用言語 |
|-----|----|-----|----|--------|----------|----------|
| U   | 教師 | 70代 | 高校 | 夫と同居   | 漢語       | モンゴル語    |
| Z   | 教師 | 50代 | 大卒 | 子どもと同居 | 漢語       | モンゴル語    |
| Y   | 教師 | 30代 | 博士 | 子どもと同居 | 漢語       | モンゴル語    |
| W   | 教師 | 20代 | 大卒 | 独身     | 漢語       | モンゴル語    |

インタビュー調査の内容は主に、「女性教師としてどのような道を歩んできたのか」「少数民族の一員として、女性として教育をどう考えるか」という二点に焦点を絞って行った。

**表 6.2 インタビューの内容概況**

| 対象者 | 日時                        | 場所       | 得られた主な返答と主張   |
|-----|---------------------------|----------|---|
| U   | 2010.08.15<br>19:05-20:00 | 電話インタビュー | 残留孤児の日本人女性教師。里親や現地への恩返しのため、戦後も日本に戻らず現地の児童を教育。緑化事業にも貢献。            |
| Z   | 2010.08.27<br>13:40-14:40 | 教員室      | 文化大革命を経験し、良い職に就くため大学に入学。女性、少数民族という点で選択肢は少なかった。当時、男子生徒数が女子を上回っている。 |
| Y   | 2010.09.07<br>10:20-12:00 | Y氏宅      | 教育は生活、社会地位を決める主要要素である。これまで上級学校進学と転職を何度も繰り返した。また、学歴を求める女性が増えた。     |
| W   | 2010.08.28<br>10:30-11:00 | 教員室      | 自分自身、留学や大学院に行く願望が強く、学歴の重要性を強調。自民族の子どもに教育を与えることを誇りに思い、現行教育制度を支持する。 |

### 6.3.2 調査考察

以上の調査から分かるのは、モンゴル人女性教師たちが、学校教育によって社会上昇をしてきたこと、また、モンゴル人生徒の教育において、重要な役割を果たしてきたことである。中には、U氏のように、日本人でありながら、モンゴル人に育てられ、教鞭をとってきた者もいるが、モンゴル文化に育てられ、次世代を教育する重要な役割を果たしている。各教師について見ていこう。

U氏は残留日本人孤児という特別な身分を持ちながら、里親への恩返しのために、教師の仕事を務めた。モンゴル人に育てられ、モンゴルにおいて教育を受けたため、モンゴル人女性教師に含めて考える。悲惨な幼少期を体験したからこそ、育てられた「故郷」の子どもたちに最善を尽くし、教育でもっと多くの人とことを救いたいという強い意志があった。

U氏は、定年退職後、植林活動に力を尽くし、「沙漠」の緑化に取り組み始めた。教育の現場で、数多くの子どもたちを育て、さらに、植林ボランティアで破壊された草原の環境を救おうと努めている。

Z氏は文化大革命を体験し、文化や教育が大きく被害を受けた直後に大学へ入学した。それは、入試制度が回復した時期にあたる。民族学校の卒業者は出願できる学校や専門領域が限られていたこともあり、後の就職の選択肢も限られていた。Z氏が教師の職を選んだのは、安定した収入に加え、社会的地位の高い業種であったからである。そして、当時はさまざまな理由から、高等学校では、男子生徒の占める比率が高く女子は少なかった。現在では、80年代と比べ、女子生徒の割合が男性生徒を上回るようになっている。

Y氏は大学を卒業し就職したが、さらに良い職につき、社会上昇を計るため、より高い学歴を求め、大学院に進学した。さらに、海外留学を希望していたが、生活のため、やむを得ずに就職を選んだ。Y氏の進学や転職の繰り返しは、当時の社会的背景と生活条件向上の要求に深く関連していた。Z氏が就職した80年代と比べ、Y氏が就職した2000年頃、就職難で競争も激しくなり、安定した収入を得るために、さらに高学歴を求める必要が生まれた。そして、女性の社会上昇や高学歴が特徴的であった。

W氏は、英語を専門に学習し、留学して将来は通訳の仕事に就きたいという夢を持っていた。しかし、経済的な要因により、就職を決心した。当時、モンゴル語で英語を教える教師を募集していたため、すぐに教師という職に就くことができた。次世代に母語で外国語を教えることに誇りを持っているが、教師という職業の社会的な地位が昔ほど高くなかったことは残念に思うと語る。Z氏が就職した80年代には教師の職業的地位が高く、人気の職業だったが、30年後の現在は、職業の地位が変化しつつあるといえる。

インタビュー調査の内容（付属資料I）に基づきながら、それぞれの調査対象者に聞き取った内容からコードを抽出してみると、表6.3のようになる。

**表 6.3 調査対象者におけるコードの抽出結果**

| 対象者 | コード                              |
|-----|----------------------------------|
| U   | 尊敬される教師、憧れの職業、教育の重要性             |
| Z   | 安定した職業・収入、尊敬される教師、教育の重要性、男子生徒の多さ |
| Y   | 高学歴、博士課程、留学の夢、生活向上、社会的地位、教育の重要性  |
| W   | 高学歴、大学院、留学の夢、女子生徒数の多さ、学歴の重要性     |

これらコードにおいて、表 6.4 が示すように、学歴と生活向上、社会的地位を求める女性ほど高い志を目指していることが分かる。また、生活向上、社会的地位、高学歴への希求、女子生徒数の比率などをまとめ、「女性と社会上昇」「近代教育」という親コードとしてまとめることができる。

**表 6.4 親コードの抽出**

| 子コード                           | 親コード    |
|--------------------------------|---------|
| 生活向上、尊敬される教師、憧れの職業、社会的地位を求める女性 | 女性と社会上昇 |
| 高学歴への希求、男子生徒数を上回る女子生徒数         | 近代教育と女性 |

モンゴル人女性教師 4 人のインタビュー調査からは、彼女たちが、モンゴル民族教育という近代教育を受けることで学歴を得て、教師という社会的に尊敬される職業につき、社会上昇を果たしていることがうかがえる。また、近年では、社会的上昇を目指して、女子生徒にも高学歴を志向する者が増えていることが分かる。さらに、彼女たちの語りを分析すると、以下のような特徴が浮かんでくる。

第一に、教師の職を選んだのは、教師の仕事は安定した収入が得られ、周囲から尊敬される良い職業であると思ったからである。U 氏は、残留孤児の日本人女性という特別なバックグラウンドをもち、育ての親や現地への恩返しのため、教師の仕事を選んだという背景もある。また、Z 氏のように文化大革命の時代に良い職業につくために、大学に入って教師になった女性もいた。

第二に、さらにいい職、生活、高い社会地位を望むため、教師として就職した後も、高い学歴を希求していることである。Y 氏は留学を夢見ていたが、生計を得るために、中学校の教師となった。しかし、もっといいポジションを得たいと大学院に入学し、専門学校の教師となった。さらに、博士学位を取得し、最終的には大学の教授となった。このような進学と就職の繰り返しは Y 氏の人生をステップアップさせた。教育とりわけ学歴を取得することの重要性が確認できた。また、W 氏も同じく収入を得るため、留学の夢を諦めて就職したが、大学院への進学を望んでいる。

第三に、女性の学歴に対する関心がますます高まり、女子生徒数は男子生徒数を上回り、女子生徒の進学率、そして高学歴を望む傾向が強くなっていることである。Y 氏が大学の博士課程に進学した際はクラス全員が女性だったと指摘する。また、Z 氏の中学校の生徒においても男子と比べ、女子生徒数が圧倒的に多いという。

上記の 4 名の対象者は、全員教師という職業に誇りを持っており、自民族の次世代を教育していくことに価値を感じている。彼女ら自身が現在のモンゴル人女性教育そのものを代表しており、社会上昇における教育の大切さを体験し、それを伝達しているのではなかろうか。

## 6.4 若年女性の教育観

### 6.4.1 調査概要

社会主義における民族教育において、若年層のモンゴル人女性は学校教育をどのように認識し、教育の目的や役割をどう理解しているのだろうか。そのため、内モンゴル自治区のモンゴル民族中学校において、学校教育及び進学意識に関する量的調査を実施した。当質問票調査の対象者は女子高校生及び女性教師の計70名になる。10代の女子高校生31名、20代の女性教師28名、30代の女性教師11名として異なる年齢層における教育意識を考察した。調査対象概況と具体的な調査項目は以下の通りである。調査結果のグラフは、人数の絶対数を示している。

表 6.5 アンケート調査の対象者概況

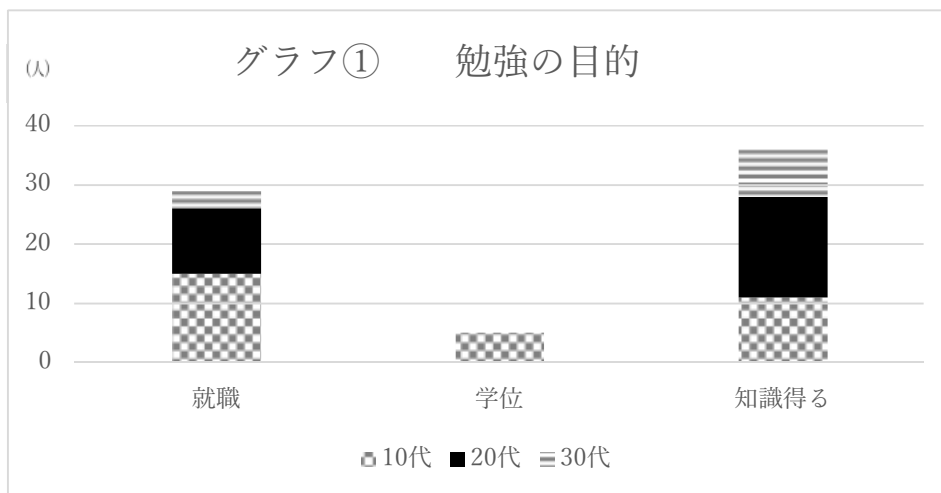
|     |                           |                     |
|-----|---------------------------|---------------------|
| 対象者 | Z モンゴル民族中学校<br>女性教師、女子高校生 | Y モンゴル民族中学校<br>女性教師 |
| 学年  | 高校1年 (2クラス)               |                     |
| 人数  | 女性教師 26 名、女子生徒 31 名       | 女性教師 13 名           |
| 場所  | 2F ・ 202 教室、204 教室<br>教員室 | 教員室                 |
| 日時  | 2010. 9. 15~9. 17         | 2010. 9. 9          |

表 6.6 アンケート調査の質問項目

| 質問            | 選択肢                             |
|---------------|---------------------------------|
| Q1 勉強の目的      | a 就職のため<br>b 学位のため<br>c 知識を得るため |
| Q2 進学希望       | a 高校<br>b 大学<br>c 大学院           |
| Q3 就職の際に重要な要素 | a 学校の知名度<br>b 親の社会的地位<br>c 専攻分野 |
| Q4 理想的な職場     | a 国家公務員<br>b 国有企業<br>c 私营企业     |

## 6.4.2 調査考察

### Q1 勉強の目的—何のための勉強か？



グラフ①から見ると、対象者は年齢層と関係なく、勉強の目的は、就職、あるいは知識を得るための選択が多数である。

特に10代で一番多いのは就職のためとなっている。就職のために学習することは、良い業界に就職したら良い生活ができるという考えから来ていると思われる。また、学位のための勉強という10代も少数ではあるがいることがわかる。基礎教育が普及しているため、「識字教育」のためという目的はすでに過去のことである。

20代、30代の女性教員は、就職のために学んできた経験を持つ。また、中には現在、大学院で学び、学歴を取得し社会的な上昇を目指している者もあり（グラフ②参照）、これが「就職」のためという回答に反映されていると思われる。また、生涯学習を通じて、知識を得て人生を豊にするために学ぼうとする者もいる。

### Q2 進学希望—学校はどこまで進みたいか？

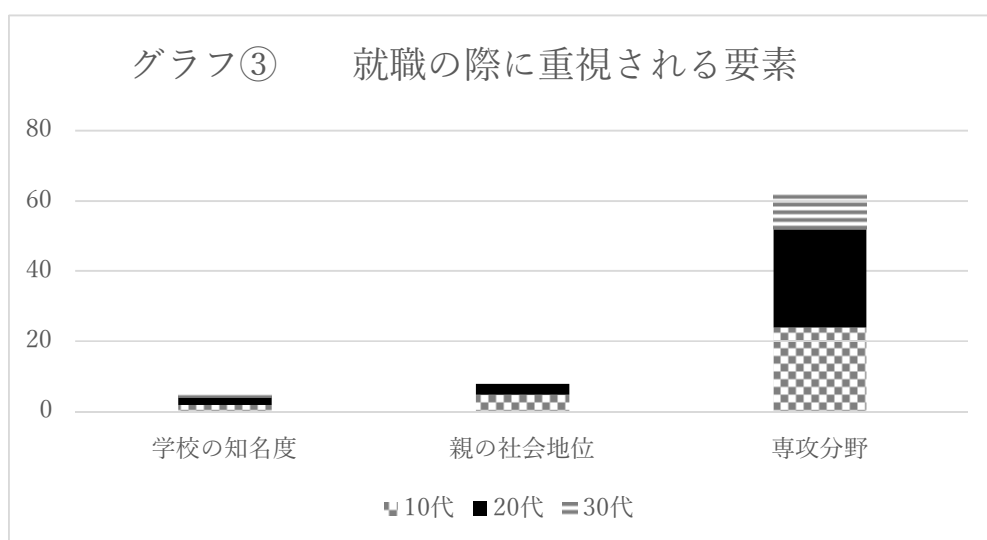


グラフ②での進学希望は高校までという人が 0 人という結果から、現代の社会は高学歴を要求し、学習者自身の学習意欲も高いことがわかる。また、進学に必要な費用を負担できる経済的に条件のよい家庭も増えている。特に、10代がより高学歴を志向している。

現代中国では学歴競争が加熱し、学歴社会化が進んでおり、内モンゴル自治区も例外ではない。大学が大衆化し、大学を卒業した時点で就職することが非常に難しくなり、若者は一層高い学歴を求めざるを得なくなったと言える。就職の採用側はもちろん学歴を重視して採用するが、就職できなかった者の中にはとりあえず大学院に進むことを選択する者もいる。

現在、教員として、教鞭をとっている女性教師は、基本的に大卒学歴であるが、それにとどまることなく、大学院への進学によって、社会的な地位の上昇を目指す意欲を持っている者が少なくない。

### Q3 就職の際に重要な要素—就職の際に一番重視されるのは何か？



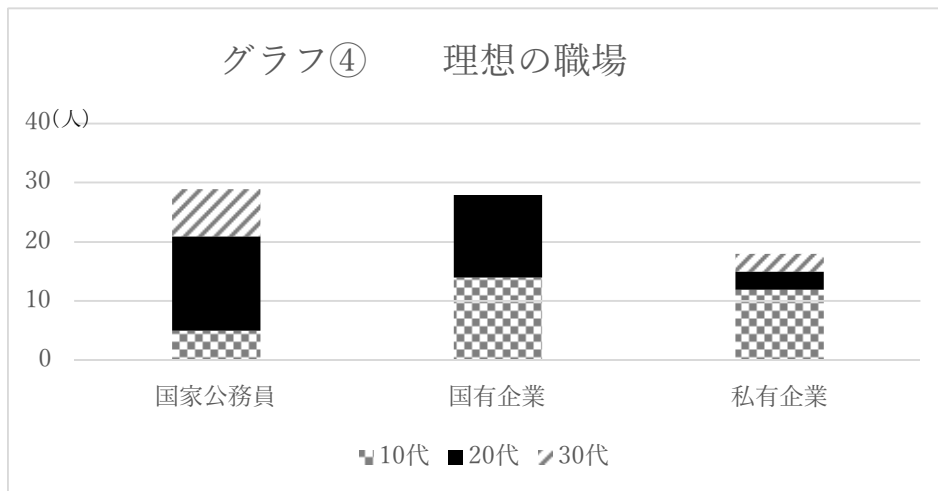
グラフ③では就職条件について調査結果が反映されているが、専攻分野が一番重要と考えられている。これは、女子学生、女性教員ともに、同じ結果となっている。

ただし、専門知識で職に就くことが少数民族にとっては難しい問題である。民族学校で学んできた生徒は言語の問題から、進学できる良い大学の選択肢は限られている。たとえ高等教育機関に進学しても、民族系の高等教育機関の場合、多様な専攻分野が設置されているわけではないため、どうしても就職に際しては不利となる。

あるいは良い大学に入学したとしても、これまで「外国語」として学習した漢語で授業を受けることになり、大学の成績に影響が生じて、さらに進路選択にも影響を及ぼす。これはモンゴル民族学生の就職時の難題の一つになる。

また親の社会的地位が重要と考える 10 代、20 代の存在が明らかになった。

#### Q4 理想の職場— 理想的な職場はどこか？



グラフ④からみると、10 代の学生は私有企業（民間企業）を希望する者が多く、経済発展や改革開放の影響を受けたためではないかと推測される。

20 代以降の世代は国家公務員や国有企業を希望するものが多い。教員という職につきながらも、国家公務員や国有企業が理想の職場であると考えている。教師という職業は、それほど社会地位が高いわけではないことが読みとれよう。それは社会主義体制という独特の背景によるのではないかと考えられる。

一方、以上 4 つの調査内容をみても、年齢層により、その時代・その世代の社会的背景が教育意識に多少なりとも影響することがわかる。

例えば、10 代は、勉強の目的は「就職」のためと思う者が多く、「大学院」まで進む希望者も多い。これは、学歴を重視する社会への移行が進んでいることを表していると言えよう。さらに、改革開放や経済発展により「私有企業」（民間企業）に働くことを希望している者が多いという特徴があった。

それに対して、20 代は、勉強の目的は、「知識を得るため」という回答が多い。20 代は教員という職に就いたばかりであり、知識の大切さを意識する年代であるといえる。そして、すでに教員に就職しているにもかかわらず、理想の職場は、「国家公務員」とする者が多かった。国家公務員は仕事が安定し、社会的地位も高いという理由で人気である。そのため、転職や社会的地位上昇を願ってのことか、20 代で進学希望として「大学院」とする者もいることに注目したい。

30 代は、知識を得ることを学びの最終目的として認識していた。それは、すでに職に就き、自分の居場所を見つけたため、知識を求める余裕が出てきたためだとも思われる。



## 6.5 民族学校の現状と問題点

以上の調査から、モンゴル人女性教師のインタビュー調査の事例から、モンゴルにおける民族教育において、女性が社会的上昇の機会を与えられてきたこと、また、モンゴル人女性教師たちが、モンゴル民族教育に尽力していることがわかる。また、若年女性の教育意識調査において、現在実施されている教育に満足している割合が多数を占め、社会的上昇の意欲が高く、そのために学習をしようとする学習意欲や向学心に富んでいることも明らかになった。

では、実際に、民族学校の実態は、彼女たちの向学心に答えるものなのであろうか。前節で実施したアンケート調査に加え、Zモンゴル民族中学校とYモンゴル民族中学校において、現在の学校・教育への要望という設問及び自由記述式の回答を用意した。現在の学校に「ほぼ満足」という結果が多数であった一方、「必ずしも満足ではない」という回答者もいた。自由記述回答からは、今の少数民族学校の置かれている状況が浮かびあがってくるので紹介したい。

第一に、学校の設備環境において、学校内の図書館は狭く、学校外での学び場がほとんどない点である。政府からの資金援助が不足している結果、学校の設備、宿舎が整備されていない。そのため、学習する時間があっても場所がないという状況にある。

第二に、教科書の内容において、理論的なものが多く、モンゴル社会の現状と離れ過ぎていることがあげられる。生徒側の要望としては、特に心理学など現代の子どもの成長を見守る教育を望んでいる生徒が多い。また、少数民族の女性として、民芸などの科目があったほうが文化の伝達に役立つという意見もある。

第三に、教材がほぼ漢語で書かれた教科書を使用し、復習問題もすべて漢語の資料（実質的に外国語）を使用しているため、漢民族の生徒と成績の差がつき、進学や就職に困難をきたしていることである。一方、学校の授業は少数民族の言語で教授を行うが、教授言語だけが民族語であり、教科書の内容は中国全国で同一使われている漢語のテキストを民族語に訳した内容という問題もある。

第四に、教育において、詰め込み型の学習であり、時間割が厳しいという問題である。勉強の目的を受験のためだと思ひ込み、試験に合格するためだけの勉強（受験戦争）をしている者が少なくない。勉強とは、理解力・知識力・技術力に加え、意欲・関心・態度、そして心を導くものでもあり、生徒たちはもっとゆとりのある学び方を望んでいる。

教師の教育方法も重要な問題である。学校では、生徒一人ひとりの個性を生かすことが大事である。教師の圧力で勉強するより、生徒自ら好奇心や興味を持ち学ぶ意識を育み、教育の自由を尊重することが望まれる。

第五に、学校外の学習環境も深刻な問題である。内モンゴルでは、社会教育があまり発展していないため、地域の図書館や公民館などの施設環境が整っていない。

以上、モンゴル民族学校における課題を紹介してきた。こうした制度的、構造的不平等がありながら、モンゴル民族は、漢民族から「優遇されている」と批判される。しかし、実際の就職にあたって、モンゴル語の使用範囲は狭く、モンゴル民族学校の卒業生の就職は非常に困難な状況にある。

民族学校の学生は、その伝統的社会に調和した活動に積極的に参加し、理論と実践とを結合させた教育を享受する必要があるのではないか。伝統文化を、社会の経済発展に「貢献できない」ものとして軽視するのは早計であり、少数民族の文化の伝達を継続させることが肝要と考える。

## おわりに

本章では、まず内モンゴルが自治区になった後の、少数民族が受けている学校教育—民族教育の実態と現状を論じた。中国の民族教育について、その制度や時期区分を考察しながら、民族教育の課題を分析した。

また、内モンゴルの少数民族教育におけるモンゴル人女性の教育についていくつかの調査から、その実態を明らかにした。まず、女性教師を対象にしたインタビュー調査からは、女性教師たちは教育によって社会上昇を遂げるとともに、モンゴル人女性がマイノリティとして民族教育を担い、次世代への伝達に取り組んでいることを検証した。年齢層により、異なる時代を生きてきた対象者たちは、教師という職業に誇りを持ち、次世代を教育していくことに意義を見いだしている。彼女らは自ら体験してきた教育の大切さを次世代に伝授している。

そして、若年層の女性たちの教育意識について、アンケート調査を通して検証した。対象世代の女性は知識のために教育を受け、より高い学歴に憧れ、社会で求められる専門分野を重視し、国家公務員を目指すものが多数を占めた。さらに、現在の受けている民族教育の現状にほぼ満足しているという調査結果がある一方、民族教育について、民族学校の設備環境の不備、試験制度や教科書内容の改善、教育方針及び教師の教育法などの要望がよせられた。

女性が社会に進出している現在の「男女平等」時代において、教育機関や教育関連領域における女性比率は高くなった。女性教師も女子生徒も増え、近年では高等教育を受ける女性数が男性を上回っている。しかし、それでも社会の各ポジションでの女性比率は必ずしも高いとは言えない。教育を受ける機会の平等が与えられても、社会に出て働く機会や職場での待遇の平等は、まだ課題として残されている。

学歴重視の現代社会で、男性中心の社会で諸種の競争に打ち勝つためには高いレベルの教育を受けることが要求される。モンゴル人女性たちにも、民族・性別の関係なく、自由・平等に教育を受ける権利を十分持ち教育を受けたいという要望が高まっている。

しかし、教育機会の平等だけではなく、社会的な地位を確保し、女性のエンパワーメントを十分に発揮できるという結果の平等に繋がっていることが、多民族国家の中国におい

でも重要である。モンゴル人女性の教育に望まれることは、女性が自信を持って、自己を形成すると同時に厳然と文化継承者として生きていくことではなかろうか。

## 第7章 文化継承と学校教育

### はじめに

本章では、伝統文化が受け継がれる過程において、教育はどのような影響を及ぼしているのかを検証していく。まず、その担い手である女性たちの生き方に焦点を当てる。そのうえで文化継承に影響を与える現代的諸要素として、家庭環境を踏まえつつ主に学校教育の側面から明らかにする。

そのため、筆者はこれまでに以下のような3種の調査を現地において行った。

- 1、教育環境が異なる女性たちの文化継承に関する調査
- 2、中・高校生世代に対する文化継承に関する調査
- 3、伝統文化の新たな創造に貢献している女性への調査

調査方法として、質的調査と量的調査を採用した。まず、質的調査（調査1）においてはインタビューを行い、女性たちのライフストーリー法によって次世代への文化継承の実態を、日常生活の中で可視化されてない問題を中心に実証的に導き出した。また、量的調査（調査2）において、質問票調査を行い、女子高校生世代における文化継承の実態について、検証を加えた。そして、質的調査（調査3）においては、インタビューによって、伝統文化の創造に貢献している女性の活動を検証した。

質的調査データの分析手法としては、オープンコーディングや焦点的コーディングで調査内容を具体的にラベル化し、中核となるコードを抽出して帰納的アプローチで考察に繋げた。分析にあたっては、主にモンゴル人女性と教育及び伝統文化との関係に着目した。

### 7.1 教育環境が異なる女性の文化継承状況—ライフストーリー法を用いて

#### 7.1.1 調査概要

調査において、年代別に年齢層ごとに分類し、時代背景とともに考察した。時代区分<sup>289</sup>は以下の通りであるが、モンゴル人女性たちも人生史について語る際に、それを援用している。

|     |       |                             |
|-----|-------|-----------------------------|
| 世代別 | 70代以上 | （中華人民共和国成立前 生まれ）            |
|     | 60代   | （1949年～1956年：黄金期）           |
|     | 50代   | （1957年～1965年：大躍進期）          |
|     | 40代   | （1966年～1976年：文化革命）          |
|     | 30代   | （1977年～1992年：四つの現代化期、改革開放期） |

<sup>289</sup> 東郷育子「中国の少数民族教育政策—国民統合の視点から」（下）『季刊教育法』<112>エイデル研究所（1997）、PP. 82-88。

以下の表 7.1 は、調査対象者の概況である。モンゴル人女性たちの家庭状況・生活環境・職業背景はそれぞれ違っている。したがって、異なるバックグラウンドを持つ彼女たちがそれぞれ自身と不可分のものとして身にまとっている文化の在り様は、家庭内に使用される言語を含めて、モンゴル民族の伝統文化の衰退と継承の諸相を示していると解釈することができる（インタビュー対象者には、年齢順に、A から I までの記号を付けている）。

**表 7.1 調査対象者の概況**

| 対象者 | 職業  | 年齢  | 学歴   | 家庭構成      | 生活地区 | 家庭内での使用言語     |
|-----|-----|-----|------|-----------|------|---------------|
| A   | 牧畜民 | 80代 | なし   | 孫の家族と同居   | 草原→町 | モンゴル語         |
| B   | 牧畜民 | 60代 | 小学校  | 一人暮らし     | 草原→町 | モンゴル語         |
| C   | 退職  | 50代 | 専門学校 | 子どもの家族と同居 | 草原   | モンゴル語         |
| D   | 牧畜民 | 50代 | 中学校  | 子どもと同居    | 草原→町 | モンゴル語         |
| E   | 牧畜民 | 40代 | 小学校  | 夫と同居      | 草原   | モンゴル語         |
| F   | 会社員 | 30代 | 大学院  | 夫と同居      | 都会   | 日本語・<br>モンゴル語 |
| G   | 教師  | 20代 | 大学   | 独身        | 町（市） | モンゴル語         |
| H   | 公務員 | 20代 | 専門学校 | 夫・子どもと同居  | 町（旗） | 漢語            |
| I   | 公務員 | 20代 | 大学   | 夫・子どもと同居  | 町（旗） | 漢語            |

続く表 7.2 は、調査内容に関する概要である。生涯を通して、幅広い社会的舞台で様々な役割を演じる女性たちの姿は社会変動そのものを反映している。彼女たちの日常生活は、まさに改革開放後の「現代化」の下でのモンゴル人の文化変容を物語っている。

**表 7.2 調査内容のまとめ**

| 対象者 | 日時                          | 場所          | 被調査者の見方と主張  |
|-----|-----------------------------|-------------|---|
| A   | 2012. 03. 02<br>10：20－12：00 | Y 旗<br>A 氏宅 | 80年間放牧生活を続けたが、「禁牧政策」で余儀なく「生態移民」になる。草原に戻ることは叶わない夢となっている。 |
| B   | 2012. 03. 07<br>19：40－21：00 | Y 旗<br>B 氏宅 | 「禁牧政策」で、草原離れは必然。町に移住後、「モンゴル民謡老人団」で活躍する文化継承者である。         |
| C   | 2012. 03. 10<br>15：30－17：00 | Y 旗<br>C 氏宅 | 医者の仕事の続けながら、草原で木を植え砂漠を緑にする活動に関与。伝統と現代を同時に生きる            |

|   |                                   |              |   |
|---|-----------------------------------|--------------|---|
|   |                                   |              | ロールモデル。   |
| D | 2012. 09. 12<br>10 : 05 - 12 : 00 | Y 旗<br>D 氏宅  | 放牧を営む生活方式が「生態移民」政策によって一変。経済的・文化的貧困に陥る。                              |
| E | 2012. 04. 02<br>10 : 10 - 11 : 40 | Y 旗<br>E 氏宅  | 幼児の時に母を亡くし、結婚後、姑から放牧生活及び生産活動について伝授される。牧場を守る使命感を持つ。                  |
| F | 2012. 05. 06<br>16 : 35 - 18 : 10 | T 市<br>喫茶店   | 海外留学を通じて、自民族への帰属意識が強まる。海外での教育は、女性と伝統文化を再びつなぐ契機でもある。                 |
| G | 2012. 09. 09<br>19 : 00 - 21 : 30 | Y 旗<br>G 氏職場 | 民族教育の役割及び問題点を指摘。民族教育を受けた少数民族女性の社会地位や文化変容について指摘。                     |
| H | 2012. 09. 02<br>14 : 40 - 16 : 00 | Y 旗<br>喫茶店   | 家庭や学校での教育で漢化が進む。それでも、職業環境の影響で、モンゴル人としてのアイデンティティを持ち、モンゴル文化の良き担い手となる。 |
| I | 2012. 09. 08<br>10 : 30 - 11 : 50 | Y 旗<br>I 氏宅  | 母親の価値観に左右される第二世代。民族言語及び伝統文化の消滅という普遍的な現象の典型的な事例。                     |

### 7.1.2 調査考察

女性たちを対象とした調査の子コードは、表 7.3 に示すように抽出した。具体的には禁牧政策、生態移民、草原離れ、言語と生活の漢化、移住、経済開発から「社会変動と伝統文化の喪失」、自立した女性像、自己実現する女性、留学、学校などから「近代教育と女性」という親コードを設定した。コードを一覧表にすると、表 7.4 になる。

表 7.3 調査対象者におけるコードの抽出結果

| 対象者 | 子コード                               |
|-----|------------------------------------|
| A   | 牧畜民女性、非識字者、禁牧政策、生態移民、草原から町に移住、伝統文化 |
| B   | 牧畜民女性、生態移民、草原から町に移住、文化伝承者、非物質的文化   |
| C   | 結婚後の看護学校入学、医者免許取得、文化変容、伝統文化の尊重     |
| D   | 草原離れ、草原から町に移住、環境難民、経済的貧困、文化的貧困     |
| E   | 牧畜民女性、牧畜専業、文化伝授、伝統文化の維持            |
| F   | 海外留学、アイデンティティの再認識、文化変容による意識変化      |
| G   | 女性教師、民族教育の問題点、マイノリティの社会地位、伝統文化の限界  |
| H   | 教育環境、職場環境、家系の影響、向上心、意識変化、文化的価値観    |
| I   | 家庭教育の影響、学校環境、社会環境、現実的な思考、意識変化、文化消滅 |

表 7.4 コードの上位のカテゴリ

| 子コード                         | 親コード         |
|------------------------------|--------------|
| 禁牧政策、生態移民、草原離れ、言語と生活の漢化、経済開発 | 社会変動と伝統文化の喪失 |
| 自立した女性像、自己実現する女性             | 近代教育と女性      |

インタビュー対象者は 20 代から 80 代にわたる年齢層になるため、女性たちの生きた時代背景が容易に読み取れる。彼女たちの人生史には中華人民共和国建国期から、大躍進期、文化大革命、四つの現代化期、改革開放時期といった時代区分によるモンゴル民族の文化変容が反映されている。

歴史的に遊牧生活を営んできたモンゴル草原は「定住化」「農地化」により、牧草地の非合理的な利用、その破壊が進む一方である。「禁牧政策」「生態移民」によって、土地と結びついたモンゴル人の従来の生活様式は変遷を余儀なくされた。例えば、A 氏と D 氏のインタビュー調査結果からは、遊牧を糧としてきたモンゴル人は、都市での仕事や生活などに関する知識も、それに順応できる手立てもないまま、先行きの不安な状況に置かれている。一連の政策は、人々の生活に大きな打撃をもたらしている、と読み取れよう。また「市場開発」「資源開拓」によって、自然を重視してきた伝統文化が失われつつある。モンゴルの伝統文化が基盤となる草原を失い、モンゴル人が主軸となる伝統文化が失われ、多様な価値観に惑わされている実態が現れる。

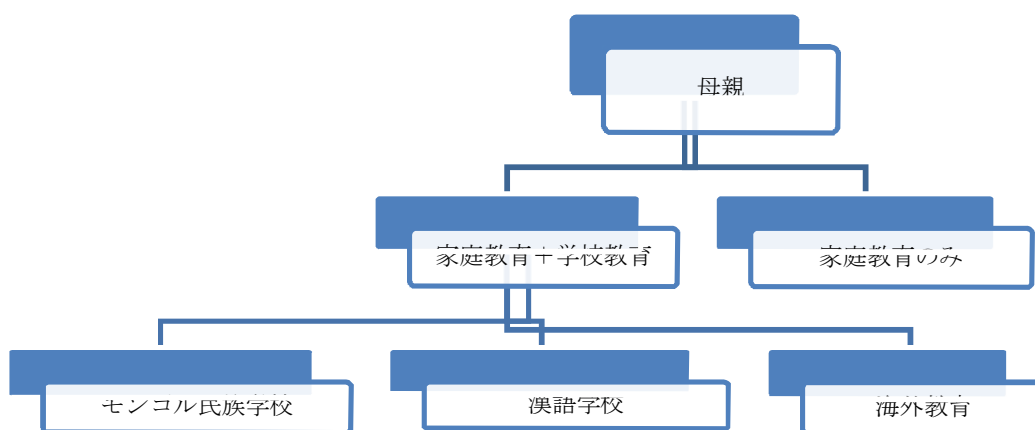
一方で、女性たちが近代教育を受けることで、自己実現している姿も浮かび上がってくる。それでは、伝統文化の消滅や保持及び再現において、女性はいかなる役割を果たしているのか。伝承者の文化に対する価値観、携わり方によって、その文化自体の存続形態が決まる。以下では、主に、女性の家庭環境（調査対象者の母親の職業）と、女性の受けた学校教育、職場環境、子どもに受けさせたい教育という視点から、文化継承の担い手である女性の役割に焦点を当てて考察してみたい。

まず、ライフストーリーによるインタビュー調査（A～I, 付属資料Ⅱ参照）の中から、以下 5 名のモンゴル人女性の事例をケーススタディーとしながら、それぞれの人生史的状况を踏まえ、検討していきたい。

ライフストーリー法によるインタビュー調査は、文化伝達の担い手として設定した母親に焦点を当てている。伝統的な家庭教育(ger-ün suryal)のみ受けた女性と、家庭教育と近代的学校教育を受けた女性とに大きく分け、さらに受けた学校教育の種類（モンゴル民族学校<sup>290</sup>、漢語学校<sup>291</sup>、海外教育）でも分類して調査を実施した。

<sup>290</sup> 本論では、モンゴル語で授業を行う学校を指す。同様に、民族学校と略する場合もある。

<sup>291</sup> 本論では、漢語で授業を行う学校を指す。



### ケーススタディー対象者の概要

- ・ A氏（学校教育を受けたことのない遊牧民）
- ・ I氏（漢語学校出身、職場環境：漢語）
- ・ H氏（漢語学校出身、職場環境：モンゴル語）
- ・ G氏（モンゴル民族学校出身、民族学校教師、職場環境：漢語）
- ・ F氏（モンゴル民族学校出身、日本に留学、職場環境：日本語）

表 7.5 調査内容のまとめ

| 対象者 | 本人の職業 | 母親の職業   | 自身が受けた教育         | 受けた教育の特徴      | 職場環境    | 自分の子どもへの進学希望 |
|-----|-------|---------|------------------|---------------|---------|--------------|
| A   | 牧畜民   | 牧畜民     | 家庭教育             | 文化重視<br>民族主義  | モンゴル語使用 | 家庭や放牧生活の現場   |
| I   | 公務員   | 販売員     | 漢語学校             | 政治経済へ貢献・愛国主義  | 漢語使用    | 漢語学校         |
| H   | 公務員   | 飲食店の従業員 | 漢語学校             | 政治経済へ貢献・愛国主義  | モンゴル語使用 | モンゴル民族学校     |
| G   | 教師    | 牧畜民     | モンゴル民族学校         | 民族平等<br>愛国主義  | 漢語使用    | 漢語学校         |
| F   | 会社員   | 公務員     | モンゴル民族学校<br>海外教育 | 自由・平等<br>民主主義 | 日本語使用   | 海外の学校        |

表 7.6 調査内容のまとめ

| 対象者 | アイデンティティ | 配偶者  | 受け継がれた民族文化 | モンゴル文化変容への意識 | 継承したい民族文化 |
|-----|----------|------|------------|--------------|-----------|
| A   | モンゴル人    | モンゴル | 伝統文化全て     | 受け入れない       | 伝統文化全て    |



|   |       |            |       |        |                 |
|---|-------|------------|-------|--------|-----------------|
|   |       | 民族         |       |        |                 |
| I | 中国人   | 漢民族        | なし    | 受け入れる  | なし              |
| H | モンゴル人 | モンゴル<br>民族 | なし    | 受け入れる  | 母語・アイデン<br>ティティ |
| G | 曖昧    | 独身         | 母語・習慣 | 受け入れる  | 不明              |
| F | モンゴル人 | モンゴル<br>民族 | 母語・習慣 | 受け入れない | 母語・アイデン<br>ティティ |

上記の調査内容を踏まえ、下記に分類し、考察を行いたい。

### 考察の結論

ケーススタディーによる以上の調査を通して得られた情報や明らかにできた知見を質的データ分析の手法で考察を行った。以下では女性・学校教育・文化というコードで以て三者の相互関連を二つの大きなパターンに分けて分析した。こうしたアプローチはいわばモンゴル人の女性、学校教育、伝統文化の相互関連を考察したことを意味する。

パターン①：学校教育を受けたことのない女性と伝統文化の相互作用。

女性⇔文化 (A 氏)

パターン②：学校教育を受けたことのある女性と伝統文化の相互作用。

女性⇔学校教育⇔文化

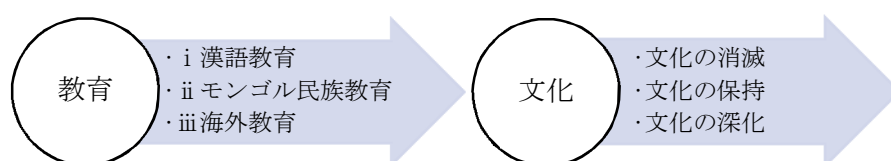
1) 漢語学校 (I、H 氏)、2) モンゴル民族学校 (G 氏)、3) 海外留学 (F 氏)

まず、パターン①の学校教育を受けたことのない A 氏は牧畜民の母親のもとで生涯を伝統文化に囲まれて過ごしてきた。言語や習慣といった非可視的な文化だけではなく、日々の衣・食・住・といった普段の生活が伝統文化そのものであった。そのため、学校教育は伝統文化の継承にプラスとしての機能はしていない。人工的な要素がさほど入る余地のない自然環境が、モンゴル人である A 氏にとって、伝統文化を身につけるための最高の教育現場であり、祖先の知恵や生活の実践を教えてくれる母親が一番の教育者になった。

近代教育が普及している内モンゴルで、A 氏は学歴を基準にみれば、もっとも下位の存在になる。しかし、伝統文化の継承に貢献できる能力を基準にするならばもっとも上位に立ったことになる。経済発展の最先端を走る今日のオールドスで、A 氏は牧場も家も失った。「過放牧」による「禁牧」政策、「生態移民」政策により 84 年間生きてきた故郷や遊牧生活から離れ、不本意ながら草原の家を壊し町の移民区に転居するに至った。物質的には貧困者だが、牧畜民の知恵という財産を持っている。そういう A 氏は、モンゴル民族の伝統文化を継承していくのに、もっともふさわしい存在であろう。伝統文化と近代的開発の間で起こった葛藤が彼女のライフストーリーに語られていた。

次に、パターン②は、4名の対象者である。学校教育を受けてきたにもかかわらず、全く異なる調査結果に注目してみよう。伝統文化に対する意識は、学校教育を受けた者もすべてが同じように育まれていくものではない。受けた教育の違い、職場環境や経験に大きく左右され、それにより異なる文化的価値観が育まれることが明らかになった。

パターン②は、受けた教育の異なる特徴によって、i) 漢語学校 (I、H氏)、ii) モンゴル民族学校 (G氏)、iii) 海外留学 (F氏) の3つに類型化できよう。



類型により一つずつ考察していくと、②-iの漢語教育を受けたI氏とH氏は漢語で学校教育を受けたため、モンゴル語を一切話せない。筆者は「調査対象者の母親の職業」という項目を設定して、被調査者の受けた家庭教育がどう違っているのかについて把握しようとしてつとめた。母親の職業環境がモンゴル語使用の場合には自分の子どもをモンゴル民族学校に通わせているのに対して、母親の職業環境が漢語使用の場合、自身の子どもの漢語学校へ行かせている事例が多い。I氏とH氏の母親の職場環境は漢語使用であった。

家庭でもモンゴルの伝統文化が伝承されることがなかったため、民族に対する意識やアイデンティティも漢族化されていた。こうした背景には、生活や職場が漢族文化の環境下であった両親の存在と、子どもの将来を考えモンゴル語で教育を行う学校を選ばなかったという、母親の意志があった。

I氏はモンゴル人の両親を持つものの、I氏の母親はモンゴル民族の小学校しか出ておらず、ほぼ漢語のみを使用する職場で、言語の面で苦勞した。母親自身の経験を踏まえ、I氏の母親は、I氏に漢語で学校教育を受けさせた。そして母親の勧めで「酒ばかり飲み、出世もできない、頼りにならない」モンゴル人ではなく、漢民族の男性と結婚した。

I氏は、就職や生活のために漢語学校に通わせてもらえたことを母親に感謝し、モンゴル語ができていてもメリットはないと考える。I氏は常にもっとも新しいものを求めるのは当然のことだと認識し、社会の変動についていかなければ取り残されると見ている。また、I氏は自身の受け継がれた民族に対する認識やアイデンティティを、そのまま自分の次世代に継承しようとしている。I氏は母親の希望で漢語名を付けられ、幼稚園から漢語で教育を受け、家庭でも常に漢語でコミュニケーションをとり、漢民族の男性と結婚した。そして自分自身が母親となったとき、自分の子どもに漢語名をつけ、漢語で教育を受けさせようとしている。ここから分かることは、文化伝達の担い手である母親が文化の存続に、いかに重要な存在であるか、ということである。

一方、H氏はモンゴル民族の文化に関わる職場に勤務となったのち、民族意識やアイデン

ティティに変化が起きたという。幼稚園から高校を卒業するまですべて漢語学校に通い、モンゴル語を話す機会がなく、モンゴル語が話せないモンゴル人になっていたため、就職するまでほとんど自分がモンゴル人である自己認識を抱くことはなかった。

ただし、オルドス地域の中でも、モンゴル民族の文化をもっとも残し、再現している場所でモンゴルの文化や歴史を紹介するガイドを務めるようになった H 氏は、生まれて初めて自分の存在を問い始め、モンゴル人としてのアイデンティティが次第に芽生えた。その後、自分のアイデンティティを常に意識するようになった。ここから分かることは、自身がどのような文化的価値観を持つかを決定するのに家庭環境とともに、職場環境がいかに大事かということである。ちなみに、H 氏の配偶者はモンゴル人である。

パターン②-ii の G 氏は、遊牧民の家に生まれ育ち、モンゴル民族の学校に入学した。現在は中学校の英語教師である。家庭環境や学校環境の影響から、モンゴル語を話し、伝統文化も受け継いでいるが、民族意識やアイデンティティが曖昧であり、漢文化の受容にも肯定的である。

G 氏は、モンゴル民族学校で少数民族教育を受けてきたが、類型②-i の二人と、大きく異なる点はみられなかった。中国の少数民族教育は、名目上は民族教育と言われるが、学校教育の質や教科書の内容については、漢語学校と同じとっていい。教科書は、漢語学校で教えている内容をモンゴル語に訳し、教師が漢語ではなく、モンゴル語で授業を行っている。歴史や道徳・政治関係の科目も漢民族の学生と同じ内容である。学校カリキュラムや教科内容なども、漢語学校と同じく中央政府の決めた理念のもとで実施されている。教育の場における使用言語以外には、民族教育を行う学校の施設や教材資料も不足している。大学入試にあたって名目上の「優遇政策」<sup>292</sup>があることが漢語学校とのせめての違いである。

G 氏の家庭や職場の環境はまだモンゴル人の集まっている環境である。しかしながら、民族学校で学ぶカリキュラムの内容は、基本的に全国一律の内容であった。また現在の職場である学校も基本的には漢語を使う環境にある。モンゴル語を使用するモンゴル民族学校に通ったにも関わらず、アイデンティティが曖昧になっていく彼女の背景には、近代教育や経済開発といった社会的要因があろう。G 氏が両親から受け継いでいるものはモンゴル語と、オボー（先祖より信仰している小さな山、地の神様）信仰であり、それ以外にはないという。

「自分は巨大な中国の中のマイノリティで、自民族の文化や言語を知っていても、社会にでればマイナスになるばかりだ」、と G 氏は悲観している。G 氏によると、漢民族の社会に入ったら、人一倍努力をしなければ置き去りにされる。社会の流れ全体が、伝統的生活から近代化が進み、その波に乗っていかなければ、時代から取り残される、というのが G

<sup>292</sup> いわゆる「優遇政策」で中国の少数民族の境遇が改善されたとの観点がある。しかし、近代に入ってから内モンゴルに移住してきた漢民族の人口がモンゴル人のそれを越えてから、漢民族から与えられた「優遇」政策が優遇かどうかも含めて、1950年代から不満が残っていた。楊海英『中国とモンゴルのはざまで一ウラーンフの実らなかつた民族自決の夢』岩波書店（2013）、pp. 104-105（参照）。

氏の考えであった。

「禁牧」政策や「学校合併」で草原を離れざるを得ない状況下において、モンゴル民族の若者のほとんどは②-i 或は②-ii の類型に属している。どちらの類型にしても伝統文化の継承は自分の世代あるいは次世代までには、伝統社会も幕を閉じそうだという予感を抱いているようだ。たとえ、伝統文化を継承したとしても、基盤である草原が失われ、「禁牧」政策、「生態移民」政策などで生活様式が変わり、伝統文化を存続させていく場は少なくなっているからである。

パターン②-iiiの F 氏はモンゴル民族学校で、少数民族教育を受けたあと、日本に留学したため、国内で学校教育を受けたパターン②-i・ii の対象者とは異なる点がみられた。彼女は本来、民族教育を受けた G 氏と同じカテゴリーに属するはずだが、留学後は民族意識やアイデンティティがさらに変化していた。それは、留学先での生活環境や、受けた教育の方針が異なるからである。

彼女は、民主主義を基本的な国家体制とする日本で生活するうちに、世界市民的な意識をもち、更に自分自身のモンゴル人というアイデンティティを強く意識するようになった。自己認識を改めて肯定できるようになったのである。

多文化共生が提唱される日本という環境だからこそ、自信や誇りを持って自分がモンゴル民族であるという意識を好意的に感じられるようになった。そのため、F 氏は明確に自分のアイデンティティを確認し、伝統文化の大切さも認識することができるようになった。学校教育を受けていない A 氏と同じように、民族意識も強くなっていることが分かった。そして、伝統文化の存続を妨げている経済開発の進展に、F 氏は決して賛成しないのである。

また、以上の類型分析の中で、パターン①とパターン②-iiiの共通点あるいは、パターン②-i とパターン②-ii の共通点を発見できた。

概して、母親の職場環境が、家庭内での教育や民族文化の継承、さらに学校教育での選択（漢語学校、モンゴル民族学校）に影響を与えている（A 氏、H 氏）。ただし、本人の職場環境も、アイデンティティ形成や文化継承の上で影響を及ぼす要因でもある（H 氏、G 氏）。

また、学校教育を受けることで、民族文化との距離が開いていくが、海外留学という国外の経験によって、民族的なアイデンティティを強めていくという事例（F 氏）もあることに注目したい。

## 7.2 女子中高生の「生活空間」と「家庭生産」における文化観

母親が子に伝えた伝統文化が、どのように受け止められているのかを検討するため、モンゴル民族学校的女子中高生に対し質問票調査を実施した。マイノリティの存在でありながら、現地で暮らすモンゴル人女性の若い世代は、自民族の伝統文化をどう意識しているかを究明する。

調査を実施したのは、Zモンゴル民族中学校およびYモンゴル民族中学校である。オルドス地域の全人口は約150万人、そのうちのモンゴル民族は約14万人を占める。オルドスの7つのホショー（旗）は、いずれも漢族人口が90%以上を占める<sup>293</sup>。

2010年代の調査であり、その後の社会変化は著しいものがあるが、当時の状況を示すデータとして貴重と思われるので、紹介していきたい。

**表 7.7 質問紙調査の概況**

| 対象者 | Zモンゴル民族中学校            | Yモンゴル民族中学校      |                 |                 |                 |
|-----|-----------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
|     | 学年                    | 高校2年（6クラス）      | 中学校2年           | 中学校3年           | 高校1年            |
| 人数  | 134名                  | 25名             | 22名             | 14名             | 11名             |
| 日時  | 2012.9.21<br>（夜の自習時間） | 2012.9.19<br>4限 | 2012.9.18<br>1限 | 2012.9.17<br>4限 | 2012.9.17<br>3限 |

質問紙調査は、質問項目を内容ごとに複数のカテゴリーに分けて実施した。調査対象は、モンゴル人の若い次世代であり、とりわけ中高校生の自民族の伝統文化に対する意識観念についての内容に限定した。下記の項目を取り上げた。

**表 7.8 質問紙調査の質問項目**

| カテゴリー   | 質問項目           |                 |
|---------|----------------|-----------------|
| 生活環境    | Q1. テレビチャンネル言語 | Q2. 民族衣装の着用     |
| 家庭生産    | Q3. 家畜の胃腸洗浄    | Q4. 家庭で使用する交通手段 |
| 居住地の選択  | Q5. 現在の居住地     | Q6. 将来の居住希望地    |
| 学歴・職業志向 | Q7. 母親の学歴      | Q8. 学歴志向        |
|         | Q9. 母親の職業      | Q10. 職業志向       |
| 言語・娯楽   | Q11. オルドス民謡    | Q12. オルドス民謡     |
|         | Q13. モンゴル詩     | Q14. モンゴル歴史     |

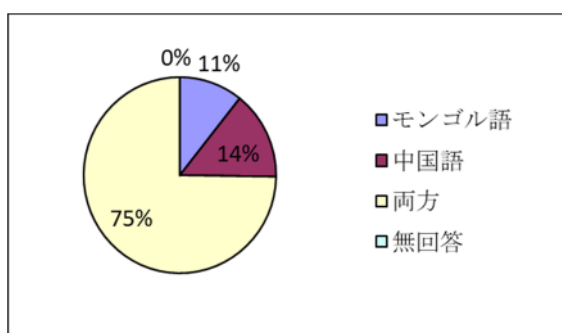
<sup>293</sup> 王益民、王文元『解读鄂尔多斯』内蒙古出版集团远方出版社（2011）、pp. 1-4。

|          |  |
|----------|--|
| 食生活・伝統行事 | Q15.伝統的朝食の「お茶」を飲んでいるか<br>Q16.積極的参加している伝統行事 |
| 価値観      | Q17.重要だと思うこと      Q18.将来の希望                |

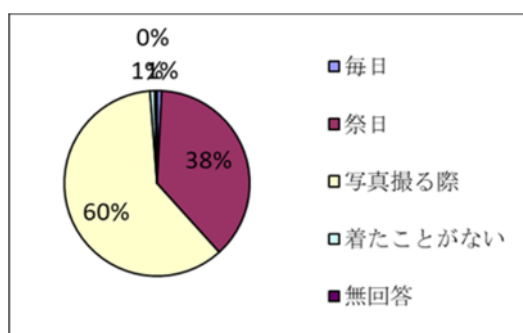
回収した結果を主に、生活環境に見る文化変容、家庭生産に見る文化伝承、居住地の選択、母親の職業・学歴と女子生徒の職業・学歴志向、民謡と口承文芸、詩と歴史、伝統食・行事、価値観の8項目に分けて、分析・考察していくと、以下のような構図が見えてくる。

### A 生活環境に見る文化変容

グラフ① 視聴しているテレビ番組の言語



グラフ② 民族衣装の着用



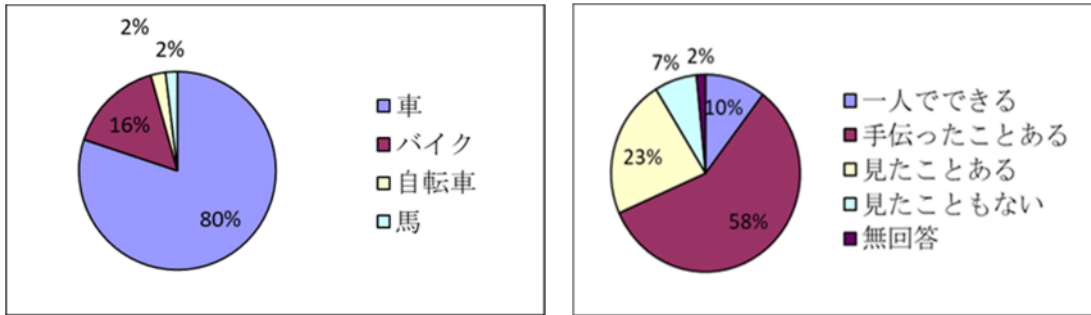
筆者が実施した調査の対象者は全員がモンゴル語で授業を受けている生徒であるため、家庭や学校では母語のモンゴル語を使用していることになる。しかし、テレビを見る際、7割以上の生徒はモンゴル語と漢語両方の番組をみている。さらに、情報化社会である現在において、テレビ番組(グラフ①)以外のインターネット及びスマートフォンのやりとりは、漢語の使用が多いことが予測される。

また、民族衣装において、記念写真を撮る際や祭日に着用する方がほとんどであり、普段着として使用している者はいなかった。しかし、記念日や祭祀などの重要な日だからこそ、民族衣装を着ることで、自己のアイデンティティを意識していると考えられる。

### B 家庭生産に見る文化伝承

グラフ③ 家庭で使用する交通手段

グラフ④ 家畜の胃腸洗浄の体験



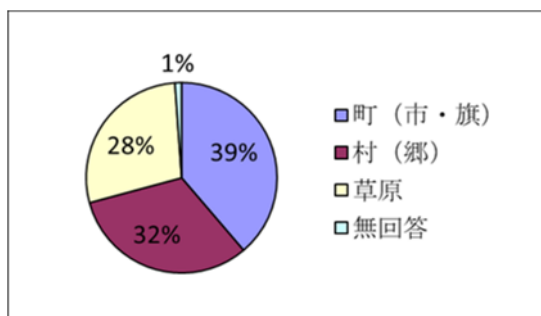
家庭で使用する交通手段（グラフ③）の8割が車となっている。牧場を離れているモンゴル人が増えているため、馬車や馬を交通手段にする家庭はほとんどいない。

これまで、家畜による肉と乳製品を食糧品としていた放牧生活や生産方式も変化を遂げている。これまで女性たちは乳製品作りに習熟し、家畜の内臓などを加工するのが一般的食糧生産であった。毎年の冬季には多量の保存食を用意するため、越冬用の肉を準備する際、家畜の胃腸を洗浄し、ソーセージなどを作る。そして、この作業は女性が担当し、子どもたちがその手伝いをする。

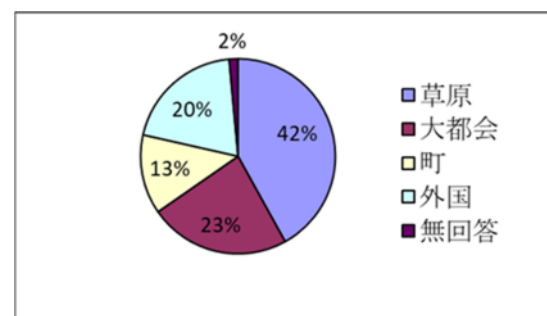
しかし、現代（グラフ④）では、女子生徒が家畜の内臓洗浄や加工をこなせるのは10%にとどまり、多数は手伝い、あるいは見たという体験にとどまる。若い女子の中で家畜の胃腸洗浄を経験したことがある人はすべて、母親が牧畜民であることが考えられるが、これは女性が身につけなければいけないことではなくなっている。

### C 居住地の選択

グラフ⑤ 現在の居住地



グラフ⑥ 将来の居住希望地



グラフ⑤からみると町に居住する人が一番多く、39%を占め、次に村や草原で暮らしている家庭であった。しかし、次のグラフ⑦でみると過半数を占める64%の母親の職業が牧畜民である。しかし実際には、28%しか草原に住んでないということから、一部の牧畜民はすでに町あるいは村に引っ越しをしたことを表している。この理由としては、母親自身の町への出稼ぎ、「学校統廃合」で小さい子供の面倒をみるため、父親の仕事が町にあるため、

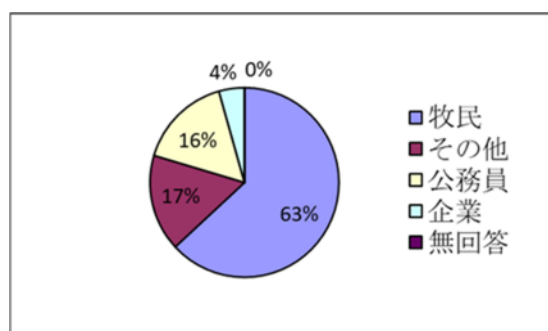
そして「移民政策」で住居を移動されたため、以上いくつかの理由が推測される。

ただし、グラフ⑥において、現在の10代の女子学生は42%が将来草原に住みたいという志向が高く、全体のなかでも一番大きい割合を占めた。次のグラフ⑧によれば、将来つきたい職業として、牧畜民になりたい人は3%しかない。将来、草原に住みたい人が多い割に職業として牧畜民を希望する人はごく少ない。

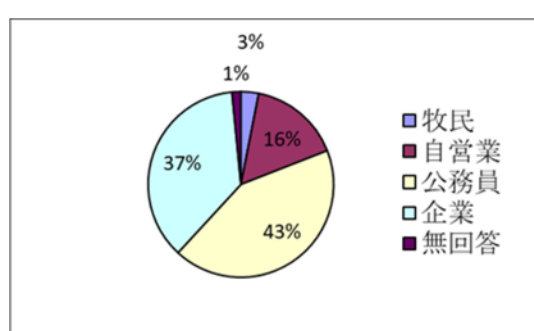
この点について、仮説をたてるとしたら、今の若い世帯は職業と生活空間或いは住居を切り離して考えていることがある。草原に住むことは生計をたてるためではなく、ゆったりした環境や自然を求めている。または、伝統文化の根付いた故郷への愛着が強く、離れたくないという理由も考えられる。さらに、母親の職業環境は次世代への文化に対する意識或いは人生観には非常に影響力があるともいえる。

#### D 母親の職業・学歴と女子学生の職業・学歴志向

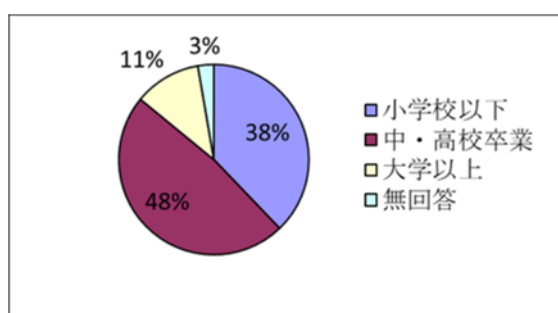
グラフ⑦ 母親の職業



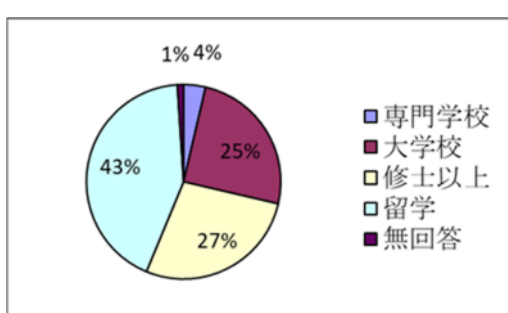
グラフ⑧ 将来就きたい職業



グラフ⑨ 母親の学歴



グラフ⑩ 希望する最終学歴



牧畜生活はそもそも家畜を放牧することによって生計を立てるため、一般的な牧畜民の「職業」も生活も密着し一体化したものである。しかし、社会環境の変動によって、若い世代にとって草原で生計を立てて生活する進路選択は次第に選ばれなくなり、現代社会へ適応することが求められる。職業選択においても、一番安定しており憧れの職となる公務員への就職希望が多数を占めていた。グラフ⑧によれば、将来の就きたい職業に対して、



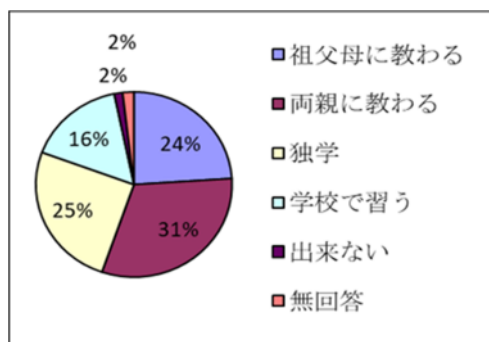
43%の人が公務員になることが願望であり、職業選択においても、一番安定しており憧れの職となる公務員への就職希望が多数を占めていた。次が企業に勤めたい人が37%を占め、牧畜民の希望はたったの3%しかない。

グラフ⑨から明らかなように、母親の学歴のうち、小学校卒かそれ以下が38%、中学校或いは高校を卒業が48%、大卒は11%にとどまっている。この世代の母親たちは40代或いは50代の年齢層にあたるが、文化大革命の時期に生まれた世代と見られ、十分な学校環境が整っていなかったのであろう。

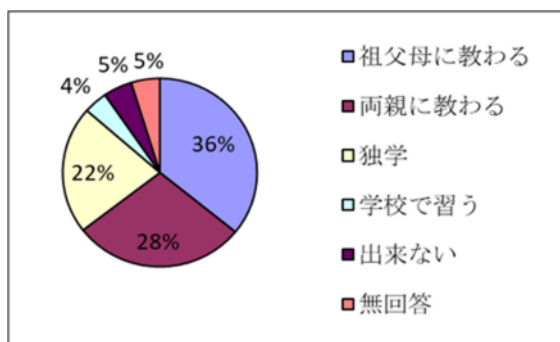
一方、現在の中高生は最終学歴への要望も高い。グラフ⑩からは、大学卒業の希望は25%、修士以上の学歴希望は27%、最多数の43%が海外留学を希望している。これは、大学卒業後に海外の大学で学ぶ希望を持っていると考えることができる。「ポスト90」(90後)といわれる1990年以降に生まれた若い世代は海外に憧れる志向が高く、ほぼ一人っ子か二人子が多く、両親からの支援が大きいため、留学できる可能性は低くはない。特に、情報化社会やグローバル化されつつある社会環境及びメディアの影響で若者世代に多文化化が進んでいる。そして、学歴社会に入りつつある21世紀において、女子学生であっても、高学歴を望み、修士以上の希望者も増えている傾向が顕著である。

## E 民謡と口承文芸(オルドス民話)

グラフ⑪ 民謡を歌えるか？



グラフ⑫ オルドス民話を知っているか？



オルドスはモンゴル各部族の中でも歌や踊りが得意な部族であり、オルドス地域が「歌の海、詩の故」と呼ばれてきた。特にオルドスの民謡は広く知られており、長老から幼い子どもまで歌えるということは一般的である<sup>294</sup>。若い人たちの間でもこうした伝統が受け継がれているかどうかについても調べた。グラフ⑪では、民謡を歌えないという回答が2%と無回答の2%を除けば、残りの全員が歌えるということである。祖父母や両親から教わった者と、学校で習った者が同じくらいの割合を占め、民謡は代々伝承されていることが分か

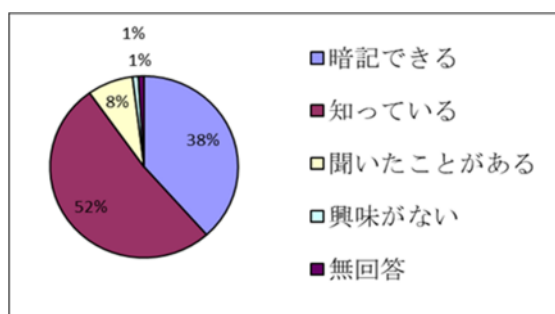
<sup>294</sup> 楊海英『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版協会(2001)、p. 80。

る。また、調査対象はモンゴル人の通うモンゴル語で教授している民族学校であるため、音楽の授業ではオルドス民謡、いわゆる伝統文化を継承していると言えよう。

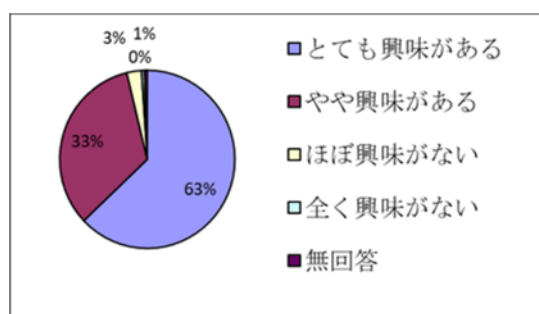
グラフ⑫はオルドスの民話（口承物語）の伝承であるが、ほぼ上記グラフ⑪の分析結果と同様である。特に、自分で習ったという比率も低くなかった。これは、やはり、若者たちの育っている環境によるものであろう。自ら学ぼうとした、或いは、趣味や好きだという理由から習ったと考えられる。

## F 詩歌と歴史

グラフ⑬ モンゴルの詩について



グラフ⑭ モンゴルの歴史について

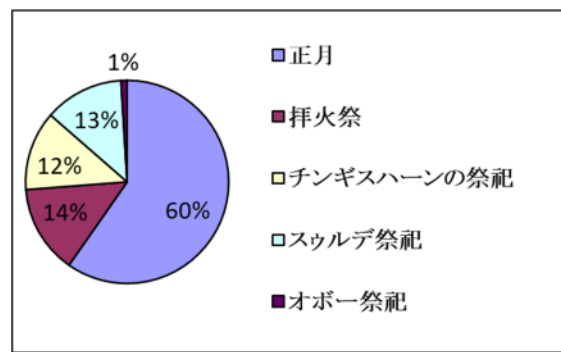
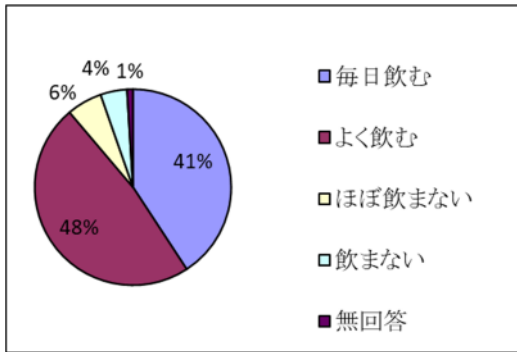


オルドス地域全体のなかで、モンゴル人の人口は約 1 割しかいない。今後はさらに少子化が進み、モンゴル人家庭や民族学校における次世代のモンゴル人生徒はもっと少なくなるのであろう。しかし、祖父母や両親をはじめ、学校の教師も消えゆく伝統文芸を諦めずに継承しようと努力していることがわかる。グラフ⑬でモンゴル詩を暗記し、知っている人がほぼ全体を占めている。自分たちの歴史についてもグラフ⑭において、興味を持っている者を合わせれば 9 割以上占める。民族学校の歴史教科書では、モンゴルの歴史について触れる内容は少ししかないが、学生たちは興味を抱いており、これからのアイデンティティの形成にもつながるのではなかろうか。

## G 伝統食文化・行事

グラフ⑮ 朝食の「お茶」について

グラフ⑯ 伝統行事について

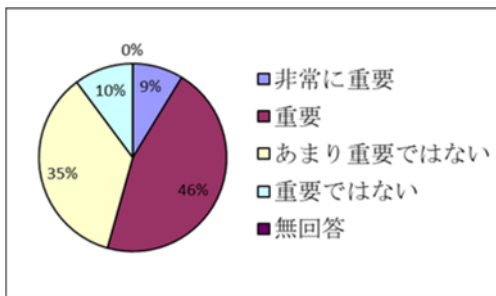


文化変容の進む中、モンゴルの伝統食文化と伝統行事への参加は、若い世代の文化に対する意識を示す。モンゴルの伝統的な食文化において、朝食は「お茶」を飲むことであり、ミルクティーに揚げ餅、お肉、乳製品などを食べる。グラフ⑮から見ると、家庭でとる朝食には「お茶」を毎日、あるいはよく飲んでいる割合が全体の約9割を占めている。また、積極的に参加しているモンゴルの伝統行事において、お正月における伝統儀礼は過半数の家庭で行われており、子どもたちも積極的に参加していることがわかった。

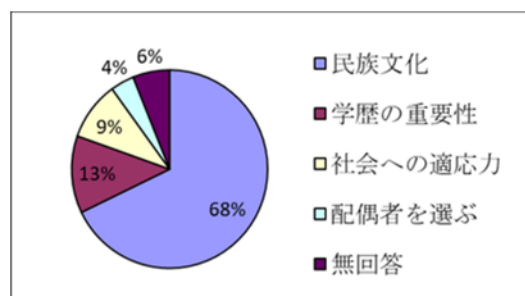
そして、拝火祭など重要な祭礼にも参加していることが明らかになった。伝統的な食文化や伝統行事はいずれも、家庭環境によることが大きいいため、家庭における次世代への文化継承が大事であるとともに、実際に継承されていることも確認できた。

## H 価値観—金・権力・夢

グラフ⑰ 金と権力について



グラフ⑱ 次世代に伝承したいこと



グラフ⑰から金や権力が非常に重要、また重要と考える学生の比率が過半数を占めていることが分かる。競争が激しい社会において、権力や金、そして学歴や能力が人々を迷わせ、歪んだ価値観をもつ者も少なくない。だれもが社会のさまざまな舞台で試練をうけることは必須のことであろう。そのなかで形成された民族文化が如何に次世代へと受け継がれていくかは一つの民族の存亡につながる問題でもある。グラフ⑱では一番次世代に伝承したいことは「民族文化」だと認識している者は、過半数の68%に上っている。次は学歴

と社会へ適応する能力であった。彼女たちのなかにはすでに民族文化に対する精神信仰に近いものが形成されているということも注目すべきであろう。

### 7.3 伝統文化の深化に貢献した女性

#### 7.3.1 調査概要

文化は可変的なものであり、絶えずに変容を遂げていく。モンゴルの伝統文化も時代の流れに沿いながら、さまざまな社会的・政治的要因によって変容を遂げ続けている。そして、モンゴルの文化継承の主な担い手である女性たちは各領域で伝統文化の継承、或いはその深化に力を注いでいた。では、実際に文化継承の最前線で努力する女性たちはどう行動しているのか。以下は9名の女性を対象とした、文化変容に関するインタビュー調査の結果である（付属資料Ⅲ参照）。

表 7.9 インタビューの対象者概要

| 対象者 | 職業  | 年齢  | 学歴 | 家庭構成       | 母親の職業 | 公的場の使用言語 | 生活での使用言語  |
|-----|-----|-----|----|------------|-------|----------|-----------|
| J   | 公務員 | 40代 | 大学 | 独身         | 家庭主婦  | 漢語       | モンゴル語     |
| K   | 起業家 | 30代 | 大学 | 夫と同居       | 牧畜民   | 漢語       | 漢語・モンゴル語  |
| L   | 会社員 | 30代 | 修士 | 夫と同居       | 公務員   | 日本語      | 日本語・モンゴル語 |
| M   | 自由業 | 30代 | 大学 | 親・夫・子どもと同居 | 牧畜民   | 英語       | 英語        |
| N   | 主婦  | 30代 | 大学 | 夫・子どもと同居   | 牧畜民   | 漢語       | 漢語・モンゴル語  |
| O   | 経営者 | 30代 | 大学 | 夫と同居       | 教師    | 漢語       | 漢語・モンゴル語  |
| P   | 自営業 | 20代 | 短大 | 夫・子どもと同居   | 牧畜民   | 漢語       | モンゴル語     |
| Q   | 公務員 | 20代 | 短大 | 子どもと同居     | パート   | 漢語       | 漢語・モンゴル語  |
| R   | 起業家 | 20代 | 修士 | 夫と同居       | 公務員   | モンゴル語    | モンゴル語・英語  |

表 7.9 インタビューの内容概況

| 対象者 | 日時                              | 場所             | 主な内容と主張   |
|-----|---------------------------------|----------------|---|
| J   | 2011. 11. 12<br>11 : 30-13 : 00 | Y 旗<br>O 氏の事務所 | 中学校で日本語を学び、教師の職と兼ねて英語を習得。塾を経営し、外国語や母語を教授する。                     |
| K   | 2012. 04. 03<br>19 : 30-22 : 00 | Y 旗<br>喫茶店     | 思想・能力・経済といった「3 つの独立」の新型女性代表。観光における伝統文化の再現に貢献。                   |
| L   | 2015. 10. 09<br>19 : 30-20 : 30 | T 市 喫茶店        | 草原で育ち、母から伝統食品乳製品の作りを継承。博士課程で乳製品の研究をし、大手企業で研究員をしながら伝統食品の開発を目指す。  |
| M   | 2012. 09. 06<br>9 : 30-11 : 00  | Y 旗<br>M 氏宅    | 少女時代の草原環境が彼女の人格を形成。外国人と結婚したが、伝統文化を大切に思い受け継ぐ。                    |
| N   | 2012. 09. 08<br>19 : 00-20 : 40 | Y 旗<br>N 氏宅    | 経済発展や社会背景に惑わされず、モンゴルの伝統手芸品を職業としてし続ける文化の担い手。                     |
| O   | 2015. 05. 25<br>19 : 00-20 : 00 | O 市<br>店舗      | 母から裁縫を、学校では法律を学び、民族衣裳店を経営。オリジナリティがあり、なおかつモダンな民族衣裳を作り、精力的に普及する。  |
| P   | 2011. 12. 02<br>14 : 30-17 : 00 | O 市<br>喫茶店     | 収入不安定ながら、伝統民族衣裳作りを継承。伝統文化を尊重。                                   |
| Q   | 2016. 01. 02<br>19 : 00-20 : 00 | Y 旗<br>喫茶店     | 看護師でありながら民族衣装作りという伝統文化を継承。女性シャマンという顔も持つ。                        |
| R   | 2016. 01. 03<br>21 : 30-22 : 30 | Y 旗<br>喫茶店     | 伝統文化を継承するためファッションショーを開催。公務員の仕事を辞めて留学し、多文化を学び、自民族の伝統文化を広めることに尽力。 |

### 7.3.2 調査考察

ここでまず、インタビュー調査を文章化した付属資料Ⅲに基づいて、それぞれの調査対象者のコードを抽出し、表 7.10 に整理した。

表 7.10 調査対象者におけるコードの抽出結果

| 対象者 | コード                              |
|-----|----------------------------------|
| J   | 外国語教育、女性教師、教育と文化、経済的自立、精神的自立、塾経営 |
| K   | 経済的自立、精神的自立、自己実現、文化変容、文化の再構築     |
| L   | 海外留学、伝統食品の継承と開発、海外大手企業、女性研究員     |
| M   | 民族舞踊の継承、多文化の中で生活、外国人との結婚、伝統文化の伝達 |
| N   | 民族手芸品制作、伝統文化の継承、伝統文化の価値、文化の再認識   |

|   |                                    |
|---|------------------------------------|
| O | ファッションコーディネーター、民族衣装のデザイナー、馬頭琴学校の経営 |
| P | デザイナー、民族衣装作りの継承者、自己実現、決断力、アパレル店舗経営 |
| Q | 女性シャマン、民族衣装の作りの継承、独自の発想力、伝統とモダンの調和 |
| R | 海外留学、探究心、挑戦者、民族衣装のファッションショー開催      |

これらのコードにおいて、表 7.11 に示すように、精神的かつ経済的自立、現代的な女性像、自己実現、挑戦者から、「現代的な女性」、伝統文化の尊重、伝統食品の研究や開発、民族衣装づくりの継承、伝統とモダンの融合、文化の再構築などが、「伝統の継承と革新の融合」という上位カテゴリーとする。また、母語や外国語を学ぶ塾の経営、民族衣装のファッションショー開催、伝統楽器の塾経営などをまとめて「文化貢献」という上位カテゴリーとしてまとめることができよう。

**表 7.11 コードの上位カテゴリー**

| 子コード  | 親コード            |
|---|-----------------|
| 精神的かつ経済的自立、現代的な女性像、自己実現、挑戦者                           | 現代的な女性          |
| 伝統文化の尊重、伝統食品の研究や開発、民族衣装作りの継承、民族舞踊の継承、伝統とモダンの調和、文化の再構築 | 伝統の継承/<br>革新の融合 |
| 母語や外国語を学ぶ塾経営、民族衣装のファッションショー開催、馬頭琴学校の経営                | 文化貢献            |

上記のインタビューの対象者の女性たちは、モンゴル社会における牽引役を務めてきた人物で、「優秀な女性」と認知されている。彼女たちはそれぞれ違うバックグラウンドを持ちながら個性あふれる人生を送り、政治や経済の分野で活躍し、自己実現を目指してきた現代的な女性である。そして、伝統を継承しながら、伝統を新しいものとして生みだそうとしている。その上で、モンゴル文化を普及し、文化貢献を果たそうとしているのである。

以下、具体的に見ていこう。

J氏は「とても向上心を持った女性」と認められている。彼女は教師の仕事辞め、公務員に転職し、教育の場で民族の文化を伝承する道ではなく、経済開発の中での伝統文化の再現というステージで活躍をしている。市場経済を背景にした伝統文化の再現は、観光などほかの意味での目的はあるが、現代風に改革された文化保存の一手段とも理解できる。

K氏は、大学を卒業して大都会ある企業で勤めていたが、両親のもとに戻り、自分の貯蓄と民族舞踊団体の援助を受け、夫婦で起業した。母親の手作りの乳製品を商品化する目的で、乳製品加工工場をつくり、牧畜民のブランドを立ち上げた。従来の手作りではなく、機械化し、効率を上げた生産を行う。また、時代の合わせ、ネットでの広告及び通販などの販促で伝統食品を広めている。

L氏は、海外に留学し、現在は海外の大手乳製品企業で研究員を務めている。彼女は、母親の手作りの伝統的な乳製品が大好きで、乳製品を最先端の舞台で学び、研究することを実現した。長年継承されてきたモンゴルの「白い食」を、最新の技術と科学により発展させるため、力尽くしている。

M氏は、小学校を卒業してからモンゴルの民族舞踊団に入り、その後、中国の大都会で芸能活動をしてきた。牧畜民の家庭で生まれた彼女は、漢語の環境で育ち、さらに外国人と結婚した。現在、海外で生活するM氏は、自分の子どもたちにモンゴ語を教え、モンゴルの伝統儀礼などを伝えている。また、海外の現地において、ボランティアで異文化交流活動をし、モンゴルの文化や歴史を多くの人と共有している。

N氏は、牧畜民の家で育ち、大学卒業後は、地元の観光地でガイドを職に就いたが、正社員になれることができなかった。結婚したことを機に、家庭主婦をしながら、民族手芸品を作ることに専念した。N氏はモンゴル伝統的飾りやアクセサリを手作りし、観光地で販売をしている。手作りで地味な作業を職にし、収入も不安であるが、伝統的な手芸を続けていることに価値を生ませている。

O氏は、経済発展のもとで変化した社会環境やその中で生活していく若者としての価値観に惑わされず、自分の選択した道を歩んでいた。彼女は収入も将来もないと言われた職業を選んだが、後悔も迷いも一切なかった。O氏の希望に満ちた目と堅実で前向きな決心が、印象的であった。O氏は経済発展や社会変動の影響に自分を失わなかった数少ない若者の代表であり、同時にモンゴル民族の伝統文化を守り続けていく担い手である。

P氏は、母親の手作りの民族衣装を着て育ち、幼い頃から裁縫に興味を持っていた。大学では違う専門を学んだが、デザイン関係の職に就き、大舞台でコーディネータを担っていた。大都会で仕事の経験を積み、現在の町で自分の民族衣装の店舗を持った。オールドスではバブルが起きた当時、夢を抱いて起業したい若者たちは多く集まっていた。彼女の夫もその一人で、モンゴル伝統の楽器である馬頭琴教室を運営している。

O氏、P氏、Q氏及びR氏は、それぞれ民族衣装作りを本業として、あるいは副業や趣味として携わっている。彼女たちは、それぞれ自分の個性、特技を活かし、民族衣装の伝統とモダンを融合させることに挑戦し、オリジナリティな作品を創出している。

対象者の中には、民族衣装を作り、伝統文化を継承している方が多かった理由としては、近年、内モンゴルでは民族風の普段着が流行し、特に若者に好まれるようになってきたことがある。したがって、民族衣装を作る店が増え、競争も激しいという。結婚式や結婚記念写真の撮影など儀式の際だけではなく、女性たちが普段着としても着るようになった。近年民族の文化の尊重の提唱がなされ、人々も生活が豊かになり、衣食が自由になったという原因もあると考えられる。また、インターネットが普及し、様々な情報取得、文化発掘、モンゴル文化に対する認知向上など多くの外的要因が若者たちの意識を刺激し、自らの文化の認識や誇りに繋がったともいえる。人が身に付けているものは、その人の潜在的な部分であり、内面的世界を表現するものでもある。民族衣装に身を包むことは単なるフ

アクションに過ぎないが、自分のアイデンティティを知らず知らずのうちに意識していることもあるかもしれない。

また、インタビュー調査により、対象者たちの共通に意識していることを確認できた。L氏は母親の手造り乳製品に感銘を受け、海外で乳製品の研究職を務めている。Q氏は母子家庭で育ったため、母親の姿だけが彼女を見守り、支えてくれたという。O氏は民族衣装のデザイナーになったきっかけは、幼い頃母親が手作りの衣装（デール）を作って着させてもらったことである。R氏は海外留学や自分で起業した動機に、常に母親の優しさと強さが前進する勇気を付けてくれたと語る。彼女たちは若者を代表する新型の伝承者であり、その裏には家庭の環境や母親の影響が大きい。現在の生活、文化環境は、漢語使用のマジョリティの中であるが、母親の影響から伝統文化を継承させ、深化させようとする彼女たちの行動があった。

伝統文化の消滅や保持及び再生において、女性はどうな役割を果たし、どう向き合えばよいのかについても、インタビューの調査結果からヒントを抽出することは可能であろう。人間は世間に惑わされやすく、社会環境に影響を受けがちだが、そのなかでいかに「自分」を持ち続けるか考えさせられる。また、女性の伝統文化に対する価値観、携わり方によって、その文化を存続させられるかどうかが決まる、と彼女たちは唱える。伝承者こそが文化の消滅、あるいは保持、さらに深化及び変化といった運命を握っている。上記のインタビューを通じて、伝統文化の担い手である女性の役割を一段と認識することができる。

モンゴル民族の衣裳や食品は、遊牧社会において何千年もの長い歴史を持っており、前人の知恵で作られ、昔からほとんど変化せず今日に至っている。そして多くの産物が生まれたが、経済の発展に追いつかず、市場に出回ることもなくなってきた。伝統的文化を残すといっても、博物館にしか見いだせない可能性もある。時代の必要性に応じきれないものは取り残されることは当然のことである。伝統文化の保持を考えること以上に重要なことは、既存のものを深化させ、さらに新しいモンゴル文化を創造していくことではなからうか。

## おわりに

現地で実施したライフストーリー法によるインタビュー調査においては、年齢層が異なるインフォーマントを通して、時代別の社会環境がモンゴル人のなかに反映され、文化の変容に伴い女性たちの価値観も変わりつつある実態が明らかになった。調査結果からは、オルドスの「地下資源開発」、「都市化」などの経済発展がもたらす伝統文化の衰退や精神的価値観の変化が人々を直撃している事実も確認された。

このような困難のなか、女性自身が自民族の文化をいかに再認識し、そして次世代へ継承していけるのかという課題は重要であり、教育がもっとも重要となってくる。教育に注



目した結果、母親の職業に伴う家庭教育への影響、学校教育、本人の職場環境等が、女性の価値形成に影響を与えていることを明らかにすることができた。

続く若い女子中高生たちを対象とした質問票調査では、母親たちから伝承された伝統文化が子どもにどのように受け継がれているのかを究明した。

10代の若い世代の女性は伝統文化の継承者として祖父母、両親から、あるいはモンゴル民族学校でも民族文化を受け継いでいることが考察できた。しかし、祖父母や両親の世代と比べると、時代とともに生活環境も価値観も変容し続けている。特に、若い世代はもの心がついたころから、オルドス地域が急速な経済発展を遂げ続けてきた。極端的な資源開発や環境の変化が現地の人々に様々な面で戸惑いをもたらし、生活様式及び価値観に大きく影響している。

近年、牧畜民は「禁牧」や「地下資源開発」による「移民政策」で町に移動し暮らしている。「学校統廃合」により、子どもを町の学校に行かせるため、家族が離れ離れで生活するようになった。牧畜民の所有地に石炭や天然ガスが発見され、開発のため政府から大金をもらい移動する「億万長者」もでてくる。政府は、沙漠化の原因は遊牧民による過放牧であり、カシミア需要や遊牧民人口の増加に伴い、草の根まで食べつくすヤギの数が急増したことだとの立場を崩さない<sup>295</sup>。そのため、政府は沙漠化の進んだ地域に緑を復活させようとして、2000年以降、「緑地回復政策」を実施し始めた。それが、「禁牧政策」である。この政策は、一戸で飼うことのできるヤギの数を制限し、飼育法も柵の中に限定する。

一方、財政収入が爆発的に増えた政府は町の再建設・公務員の増加・工業や商業など各分野で巨大な投資をした。その結果、不動産バブル・民間高利子問題・環境汚染問題・腐敗問題・庶民の騒ぎが相次いで起きた。

この混沌とした状況のなかで、子供たちや若い世代の中で民族文化を巍然として重視している者がいることは、家庭や民族学校における大人世代の伝統文化への認識、保持、継承への努力の賜であろう。

一方、文化継承者へのインタビュー調査からは、伝統的な手法を保持しながら、新しい生活スタイルを知り、新しい方法を選択する者が現れていることが明らかになった。新たな文化的要素が、受け手にとって新たな価値観を示し、神聖さを帯びたとき、それは抵抗なく受容されるのではなかろうか。

文化の担い手である現代の女性自身の新たな文化に対する姿勢は、社会の変容にとって極めて大きな影響力を持つ。その際に、伝統文化の維持と文化革新のどちらを「選択」するかという女性自身の意思こそが、重要となってくる。この意志選択でどのような方向性

<sup>295</sup> いわゆる「過放牧」も入植者の増加により、モンゴル人の草原が狭小化した結果、生じた現象である。かつて移動遊牧していた時代は特定の地域に集中して過密化かるのを避けていた。家畜の中の一種ヤギも決して環境破壊の「犯人」ではない。遊牧民は紀元前からヤギを含めた「五畜」をモンゴル高原に放ってきたが、それによって草原が沙漠に変わったという記録はない。現代においても、人類学者はヤギの習性を観察した結果、沙漠化を促しているという事実は見つかっていない。風戸真理『現代モンゴル遊牧民の民族誌』世界思想社（2009）、pp. 115-117。

が採用されるかによって、モンゴル人の生活環境及び習慣、ひいては民族文化そのものの在りようが今後左右されていくと考えられる。

## 終章 伝統文化の担い手の課題

本研究の目的は、遊牧民であるモンゴル人社会の女性に焦点を当て、子どもの教育・養育と女性の関係性の検討から、女性が次世代への文化継承においてどのような教育的役割を果たしてきたのか、伝統社会の行動様式や慣行などとの対比において、近現代社会への移行の過程でそれらがどのように変容しつつあるのかについて解明することである。

北・中央アジアにおけるモンゴルは長い間、遊牧生活を営んできた。遊牧は人間と自然の最適な調和であり、一種の合理的な生活様式として現代に至る。しかし、工業化と農耕化拡大といった近代的システムの定着に伴い、数千年という歴史的プロセスの中で文明として発達してきた遊牧も終焉を迎えつつある。したがって、文化継承の担い手である女性たちも当然、激しい試練に直面している。

本論文の研究対象地域である現代中国・内モンゴル自治区においては、歴史的、政治的要因による農耕化と外来人口の増加によるモンゴル人遊牧民の定住化、そして、地下資源の開発や環境移民政策などの社会的圧力と変容により、モンゴル民族の伝統的な生活様式は一変し、牧畜産業が成り立たなくなっている。いわば「草原離れ」が進んでおり、牧民にとって生活環境の変容だけではなく、従来保持されてきたモンゴル文化のあり方やアイデンティティまで揺らぎ、あるいはそれに伴う様々な社会問題が生じている。こうした未曾有の状況下において、これからの文化継承の担い手を誰が演じるかという問題も喫緊の課題となっているといえる。

本論文はモンゴルの伝統文化の継承において、女性の果たしてきた役割に焦点を当て、担い手の諸相とその変容を考察しようとする試みであった。そして、「改革開放」政策以降のモンゴル社会の近代化、市場化の進展に伴い、近代教育が定着する中で、文化の継承者としての女性の地位と役割がどのように変遷を遂げているのか、文化継承者としての女性の今後の可能性を模索してきた。

### 1 各章のまとめ

まず、上記各章の主旨を整理した上で、全体を通して得られた知見を軸に考察を試みた。

序章では、本研究の対象であるオールドス・モンゴルの社会的背景から問題を提起し、研究課題を設定し、研究方法や先行研究を検討しながら本研究の独自性を提示した。本研究のオリジナリティは以下通りである。

- ① モンゴル人女性を文化継承の担い手として位置づけ、通時的に考察したこと。
- ② 文化と女性の切り離せない関係を文献史料と現地調査フィールドワークに基づいて検証し、モンゴルの伝統文化の再認識を試みたこと。
- ③ 伝統と女性とをつなぐ教育のありようを解明し、モンゴル独自の教育の姿を概念化

したこと。

- ④ 文化、女性と教育の三点を一つの論点にまとめたこと。
- ⑤ 改革開放以後の社会変動の著しい内モンゴル地域において、ライフストーリー法やサーベイ調査を行い、文化変容及び文化継承の実態、そこにおける女性の姿をリアルに描き出したこと。
- ⑥ 伝統文化と文化の革新の調和を図りながら、新たな文化構築を図ろうとする女性像を模索したこと。以上である。

本研究では、調査対象をオルドス・モンゴル地域に設定しているため、この地域のモンゴル研究における独自性を見出すことを試み、文献学、人類学の方法も有効に応用している。主な方法論としては、①文献研究（史書、旅行記）、②ことわざ、風俗習慣、口承文芸調査（フィールドワークによる収集）、③質的調査（インタビュー調査）、④量的調査（質問票調査）、⑤雑誌（女性誌）分析などである。文献学、人類学と教育学的なアプローチを併用し、複数の方法と成果を生かしていくよう工夫したのは、モンゴルにおける文化変容/継承/消滅の実態を、女性を軸としながらできるだけ多角的に記述することを試みたためである。

筆者は、女性に焦点を当てたことによって見られるモンゴル社会の特徴をよりリアルに描写する研究手法を取っているが、男性が文化の担い手ではない、或はなり得ないというフェミニズムの立場を取らない。規範化された社会体系の中、そして、父系親族を基本とするモンゴルの社会構造上<sup>296</sup>、女性の立場と果たす役割もすべて男性との相関関係があることに自覚していることを強調する。

第1章では、まず、本研究の調査対象地であるオルドス・モンゴルという部族とオルドス地域を選定した理由を述べた。オルドスは、モンゴルの伝統文化を守っていると同時に文化変容の最前線にある。

次いで、オルドス地域の地理、歴史、文化、経済などの独自性についてまとめた。オルドスは長年の歴史による紡がれた豊かな文化資産に恵まれ、複数の文化圏が交差する地域という地理的位置に置かれながらモンゴル民族の伝統文化が比較的によく保持されてきたことで知られる。したがって、モンゴル人の文化継承を検討するにあたってオルドス地域は選択するに値すると考えられる。『元朝秘史』の原典の序文にも書かれているように、チンギス・ハーンの遺品を伝えるという「八白室」がこの地にあるため、オルドス地域はモンゴル人にとって特別な意味を持っていた。モンゴルの年代記『蒙古源流』がオルドスで書かれたということも、モンゴル研究にとって、この地を由緒ある土地にして、オルドスは国内外のモンゴル研究者たちの注目を集めている。

しかし、チンギス・ハーンの遺品を保存している「八白室」を霊廟として奉祀し、800年近い歴史の歳月が経つオルドス地域はモンゴルの伝統文化が強く守られている一方、豊富

---

<sup>296</sup> 楊海英、前掲書『モンゴルの親族組織と政治祭祀』（2020）。

な地下資源を持っていたため、中国で開拓が急速に進められる経済開発の「モデル地域」となった。「資源開発」、「禁牧」、「生態移民」、「都市化」が徹底的に実行されてきた最近のオルドスでは、昔ながらの牧畜文化の風景は一変したことを本論文で具体的に論じた。こうしたコミュニティの社会的特徴と地域の歴史的特徴は、内モンゴル自治区の民族教育の現状を把握するうえで典型的な事例となる。

第2章では、主として歴史資料などの文献研究の知見から伝統社会において、モンゴル人の精神世界のセクシュアリティ形成や信仰について述べ、モンゴルの大地母神にみるセクシュアリティの役割を組み込む点に注目した。また、「父系社会」、「男性主役の大モンゴル帝国」において、帝国の政略と女性の関係性を事例としてあげながら女性の政治活動について分析した。

そのうえで、歴史資料から女性の地位を探り、モンゴル独自のジェンダー思想について考察した。モンゴルの日常生活の担い手としての女性の存在が、非日常における儀礼行事において忌避されることの隠れた本意を解明した。一見低いと見られる女性の地位であるが、内実的に主役でありながら排除されている二面性を明らかにした。

モンゴルの歴史では女性はずねに男を助け、遊牧集団と家庭の基盤を支える重要な役目を果たし、賢い妻、優しい母親として描かれてきたが、男女の関係は役割分業における「バランス」を衡量することを基に、生業による経済活動、政務執行や財産管理、資産相続などの権威を持つこともできた。言い換えれば、社会の形式的な部分、表面的な部分にかかわる変更を決定するのは男性が大多数であるものの、社会活動の実質を動かし、生活文化の内実を維持し、継続させているのは女性である。

そして、モンゴルの伝統社会に女性はあらゆる面で重役を担ってきたモンゴル独自の女性の地位がうかがえた。モンゴル研究、なかでも歴史研究分野では日本の東洋史の中の蒙古史の研究は世界をリードしてきた分野もあり、その成果を女性研究の視点から生かし、再検討を加えた章でもある。

第3章では、遊牧しているモンゴル人の日常生活について論じながら遊牧文化の特徴をまとめて取り上げた。ここでは、狩猟文化と農耕文化を比較対象とし、遊牧文化における「場」(自然)と「もの」(動物)の位置づけについて述べた。モンゴルの主要な生業である家畜の営みと家畜の再生産を主導している女性に焦点を当て、遊牧民が大自然の循環に順応し、家畜と共存して生活を営む簡素な生活スタイルや生き方についてまとめた。

モンゴルの家事の特徴は「家の中」よりも「家の外」で行われる作業が多く、自然環境が厳しい条件のなか、厳寒や強風と向き合い、水を汲み、燃料を集め、家畜の世話や出産などに携わさなければならない。モンゴルの女性にとって、「家畜育て」は「子育て」を超える労力を費やす仕事であり、それは「家事」ではなく「生業」である。そこには自然と人間を根底から結びつけるモンゴル独自の文化と信仰が潜められていた。

加えて、家畜から生産される乳製品や肉の食材も主に女性の手でこなされる。遊牧民の長年の経験と知恵を通してつくられたモンゴルの「白い食」(乳酸品)と「赤い食」(肉)

に、「食生産」にみる男女の役割分業、「食文化」にみるセクシュアリティ信仰が反映されていることについても考察した。

そして、家畜に寄り添い、牧畜に立脚した生活様式の日常においても女性が仕事を担っているのは事実であった。女性が衣食住に力を注ぐことはもとより、家畜の再生産を主導することにあたっては女性も極めて中心的な存在であり、女性が遊牧文化の重要な担い手であることをここに提起した。

また、ここではモンゴルの伝統的な生業である牧畜が文化と社会の基盤となり、その遊牧生業を支えるかけがえのない存在である女性の役割を分析し、女性と文化構築との密接な関係を明らかにした。牧畜社会の女性の社会的役割が、モンゴル民族の文化自体の特徴でもあると言えよう。

第4章では、モンゴルの伝統社会において、子どものしつけと母親としての女性の役割について分析した。苦境に負けなかったチンギス・ハーンの母であるウエルンは心の強さと広さでモンゴルを統一できるリーダを育てた偉大なる母として歴史資料に書かれている。また、「手に武器を握って、馬に跨り、兵を指導し、国を正し、民を導き…」と年代記に書かれているモンゴルの再統一を果たした「国母」のマンドハイ・ハトンも挙げられる。『蒙古秘史』に書かれている「優れた教育者であったアランゴワ・コールンは不仲の5人の息子に5本の矢を束ねて団結すること教えた」説話は現在でもモンゴル語の教科書に載っている。以上のように、モンゴルの歴代人物のなかでは、母の教育や母への畏敬は強かった。

遊牧社会における子どもは「家畜とともに成長」、「遊びのなかの学び」、「労働のなかの学び」を通して、生活や生産の技法を身に付けていた。その教育の場は家庭であり、主に母親や年長者により口承伝や生活、労働の体験を教科書として学んでいた。

具体的には、豊富な民族誌の記述を援用し、伝統社会におけるしつけ・母親の役割などについて記述した。本章ではまた、歴史資料にみるモンゴルならではの子育ての特徴について取り上げ、主にモンゴルの家庭教育の独自性及び母親の教育的役割を解明し、モンゴルにおける女性と教育との密接な関係について論じた。

第5章では、伝統文化の変容の要因となる教育のあり方を検討し、ヨーロッパからのカトリックをはじめとする近代的学校の創設についてまとめ、清朝統治下におけるモンゴルの教育機関である官学や仏教寺院について述べた。1874年4月、ベルギー出身のカトリック教の神父であるアルフォンス・デ・ヴォス (Fr. Alfons De Vos) とレミ・ヴェルリンデン (Remi Verlinden) らが内モンゴル西部のオルドスの城川地区で宣教を始め、のちにジェン・バプティスト・スティーンニケース (Jan-Baptist Steenickers) とエドワード・グイサート (Edward Cuissart) も宣教活動の支援に来た。カトリック教の伝来はモンゴル地域の近代教育の始まりと深く関わりがあった。内モンゴルにおける近代教育の始まりは、西

部のオルドス地区のカトリック教学校を始め、東部のゾソド盟・ハラチン右翼旗<sup>297</sup>にも近代式学校が創設された。

1902年にゾソド盟・ハラチン右翼旗ザサク・グンセンノロブ郡王によってされた私設の「崇正学堂」である。グンセンノロブ郡王は当時、日本の教育制度に感銘を受け、モンゴルに「学校教育」を導入した。そして、河原操子や鳥居きみ子などの日本人女性教師が招かれ、モンゴル初の女学堂である毓正女学堂が誕生し、その後、満洲国時代は興安女学院が創設された。

そして、近代化の到来がモンゴルの伝統社会及び独自の文化にどのように影響し、それによってモンゴル人のコミュニティの生活・環境・教育のあらゆる面においていかなる変化が生じたかについて考察した。近代的学校教育の導入には自然科学や社会に関する内容を網羅した教科書が使われ、体系的な知識が伝授された。専門的な学校教育機関をもたなかったモンゴル人は、西洋型のシステム化された教育を受けることによって知識を身に付け、従来の文化や生活様式、そして、価値概念に大きな変化をもたらされた。

第6章では、内モンゴルが中華人民共和国の自治区となった以降の学校教育—民族教育現状と実態について考察した。社会主義国家の少数民族教育は、中央政府の独特な政策や試練を受けながら、少数民族政策と少数民族教育政策の歴史的な経緯のもと、教育制度も時代背景に伴い変遷を遂げてきた。具体的に、中華人民共和国成立から1990年代までを、「黄金期」（安定期）、「大躍進期」、「文化大革命期」、「4つの現代化期」（改革開放期）<sup>298</sup>、と時代区分し、時代の特徴を反映しながら、民族教育の性質や実態に注目し、民族教育の課題を分析した。

また、教育の現場で働いている女性教師（4名）にとってのモンゴル民族教育の意味や彼女たちの教育観について質的調査を行った。教育の前線に置かれているモンゴル人女性教師は、教育によって社会上昇を遂げるとともに、職業に誇りを持ち、マイノリティとして民族教育を担い、次世代への伝達に取り組んでいることを検証した。彼女らは自ら体験してきた教育の大切さを次世代に伝授している実態を明らかにした。

そして、若年層の女性たち（70名）の教育意識について、質問票調査を通して検証した。対象世代の女性は知識のために教育を受け、より高い学歴に憧れ、社会で求められる専門分野を重視し、国家公務員を目指すものが多数を占めた。さらに、現在の受けている民族教育の現状にほぼ満足しているという調査結果がある一方、民族教育について、民族学校の設備環境の不備、試験制度や教科書内容の改善、教育方針及び教師の教育法などの要望がよせられた。

第7章では、経済開発と伝統文化の継承に矛盾や軋轢が生じる中、文化継承が多くの課題を抱えているオルドス地域での実態調査のデータを例示し、分析を加えた。現地で世代

<sup>297</sup> 清朝政府はモンゴル地域を6つの盟に管轄区した行政区の1つ、現赤峰市にあたる。

<sup>298</sup> 東郷育子「中国の少数民族教育政策—国民統合の視点から」（下）『季刊教育法』〈112〉エイデル研究所（1997）。

別の女性（9名）にライフストーリー法によるインタビュー調査を行い、女性と文化と教育の三者関係を確認し、分析した。そして、モンゴル人コミュニティの生活環境の変化及び文化継承者である女性の価値観の変容が次世代の伝統文化の受容に対し、どのような影響を与えたかを解明した。

以上を踏まえて、牧畜民が「禁牧政策」や「生態移民政策」で草原を離れていく実態を明かし、モンゴル民族の女性が牧場を離れざるを得なくなった状況下でいかに伝統文化を維持しているかについても論じた。また、「生態移民」政策とは沙漠化が進んだ地域の牧民を、「生態移民村」と呼ばれる町、あるいは町の郊外にある「人工村」へ移住させることで、その後、規律なきバブル経済により経済格差が引き起こされ、モンゴルの伝統文化が一変した。

それにより、モンゴル人は自分たちの家畜を売り、牧草地を離れ、遊牧生活を捨てざるを得なくなった。そうなった背景として、「禁牧政策」や「生態移民政策」だけではなく、土地をめぐる問題が存在していた。内モンゴルで生活している遊牧民が所有する牧草地は、国の所有地であり、遊牧民は30年あるいは50年の期間で国から借りている形となっている。これと同じく、内モンゴルにおけるすべての地下資源も中国政府の所有物であり、国と遊牧民との土地契約の期限が終了した場合、居場所を失う不安を抱く遊牧民もいた。

このような困難のなか、女性自身が自民族の文化をいかに再認識し、そして次世代へ継承していくかという課題は重要であり、そこで教育がもっとも肝心となってくる。伝承の手段となる教育に注目した結果、母親の職業に伴う家庭教育への影響、学校教育、本人の職場環境等が、女性の価値形成に影響を与えていることを明らかにすることができた。

また、若い世代の女子中高生たちを対象とした質問票調査（206名）では、母親たちから伝承された伝統文化が次世代にどのように受け継がれているのかを究明した。

一方、伝統文化の新たな創造に貢献している女性も少なからずおり、その実態をインタビュー調査で明らかにした（9名）。現在の生活している環境は、漢語使用のマジョリティの中であるが、伝統文化を継承させ、深化させようとする彼女たちの行動があった。このような、若者を代表する新型の伝承者にも共通点があり、彼女たちの前進する動機には家庭の環境や母親の影響が大きく働きかけていた。

民族教育を受けたエスニック・マイノリティの女性が社会にどのような存在であるか、そして、経済開発という社会的背景が女性にいかなる価値観を与えているかが明らかになった。時代の変化によって、人々の思想や文化、それに現実も流動していく中、次世代の文化継承者がどのような価値観を持ち続けるかを期待する。

## 2 全体考察

本論文はモンゴルの文化と女性と教育の三者関係を明らかにし、その相互作用を究明するため、文献資料をはじめ、民族誌などの資料に対する分析、及び世代を渡る実証調査を行った。

古くからモンゴルの伝統文化は遊牧という生業をもとにし、その生活基盤から生産方式の隅々まで女性が重要な役割を果たし続けてきた。モンゴル人の衣食住だけでなく、生産産業を含む経済と大モンゴル帝国の勃興にまで大きく貢献した女性たちの存在があった。ゆえに、モンゴルの文化と女性の関係は日常行事を超え、信仰におけるセクシュアリティに染み込むほど精神世界まで位置づけられていたのである。

文化と女性の密接な関係において、しつけ・教育は貴重な要素となっていた。文化は生活の中で教養によって洗練され、価値として内面化されるが、教養＝教育が「人」の資質であり、その「人間開発」に欠かせないのは教育である。伝統社会から現在にかけて、モンゴル人は遊牧民の独自の教育をはじめ、ヨーロッパ人宣教師による近代的教育、海外(日本)から導入した近代教育、中華人民共和国における少数民族教育などさまざまな教育を受けてきた。

伝統文化の本質を守りつつ、文化変容がどのように克服されていくのか、文化変容における女性のあり方がどのような教育的意義を有しているのか、そして今後の文化継承の担い手の限界に着目しながら、全体を総括する。本論のキーワードである「文化」、「女性」、「教育」の三つの視点からまとめ、筆者の見解を述べていきたい。

## 2.1 モンゴル文化変容の行方

モンゴルの遊牧文化は自然と動物との共生を前提に、あるいはその範囲ではすでに最適な発展に達していると言える。近代に入り、大量生産と消費社会は人間の欲望を駆り立て、遊牧民もその素朴に生きる境界を越え、自然や万物に配慮する生き方に変化が生じてきた。

近年、少しでも豊かな暮らしを求めて、牧畜民のなかでは遊牧生活をやめて都会へ移り住む者も増えている。過去におけるモンゴルの伝統生業では、すべての人が一様に牧畜民であったため、専門的職業の分化は成立することがなく、畜産物を加工する企業も、市場も生み出されなかったと言えよう。しかし、近現代の市場経済への移行によって、牧畜民社会の経済構造が変わり、自給自足、中央集権的経済構造を経て、自由競争の仕組みにおける商品化した生産が促されたと考えられる。このような半ば無意識の行動の同調性(あるいは伝染性)は動物学において「社会的促進 (social facilitation, Thorpe, 1963; Kummer, 1971)」<sup>299</sup>と呼ばれる現象に似ている。いわゆる経済発展、社会進化であるのだろう。

中国の改革開放以降、特に、1994年以降の地下資源開拓によって高度経済成長に入った内モンゴル自治区のオルドス地域の経済格差は一段と拡大し、裕福な階層とそれに次ぐ中間層、貧困層の生活格差は現在でも生じ、伝統文化と開発の間での葛藤が見られる。したがって、もっともモンゴル人の伝統文化が残っているとされるオルドス地域で民族言語文化をはじめ、日常の生活スタイルまでが急変した。伝統文化を尊重しつつも、自身の民族の言語を理解しない人が増加し、表面化してはいないが伝統文化＝「後れた」・「無用」

<sup>299</sup> 今村薫『沙漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と礼儀—』どうぶつ社 (2010)、p. 53。



といった考え方が、無意識のうちに人々に植えつけられ、自らのアイデンティティを保てなくなっている<sup>300</sup>。

ヨーロッパで最初に起こった産業革命以来、工業の発展が人々の生活を豊かにし、幸福をもたらし、経済が発展した。一方、積極的に取り入れた「開発」に付随する多くの問題が指摘されるようになった。近年はこうした幸福をもたらすと信じられてきた「開発」を見直し、再認識することが求められている。そして、この問題は文化の問題と密接に関連し、現代文化人類学のなかでももっとも中心的なテーマの一つとなっている<sup>301</sup>。

また、内モンゴルは、世界でも自然環境の破壊がもっとも深刻な地域である。環境破壊が生じたひとつの原因は、伝統文化が守られなかったことと深く関係している。つまり、これまでは分散型で、かつ持続性と合理性を考慮した遊牧産業は土地を有効に利用し、生態系のバランスを維持してきた。しかし、現在はグローバル化の進展が押し寄せ、都市化が進み、それによって、自然を重視してきた伝統文化が失われつつある。そして、地下資源の開発が環境破壊の原因となった。こうして社会的条件により、伝統の遊牧文化を維持できなくなったことが、環境破壊の大きな原因となっている。ゆえに、伝統文化の再認識は、環境問題を改善するための重要な鍵になるといえよう。

グローバル化が進行する世界情勢において、「開発」は「なされるべきこと」であるが、伝統的価値観・技術・文化の再評価、文化財の保護と観光開発や地域おこし、さらには大気汚染・ゴミ問題などの公害問題の解決なども考慮すべき課題である。

これらの問題を解決するには、一般的な「進歩」「発展」という考え方そのものを、再検討してみる必要があるだろう。さらに、「開発」の推進、あるいは反対という二者択一の判断に一步距離を置きながら、個人的、社会的な利権と結びつくかたちで問題を引き起こす「開発」のありようを認識しなければならない。

単なる利便性を求める近現代の社会環境において、モンゴルの「遊牧文化は時代遅れ」と扱われる向きがある。しかし、一見簡素に見える遊牧民の生活ではあるが、現代社会においても学ぶべき点が多くある。モンゴル高原に形成された遊牧文明は、信仰の対象である大自然や生命のある動物を至上としている。そのため、自然との調和が優先され、長年続いてきた。移動式テント「ゲル」の生活は、移動を前提としているため所有するモノを最低限にする小消費生活が基本である。それは、家畜解体時に、血一滴も無駄にしない生命の有り難みと直面する生活であり、そして円形の移動式住居ゲルは家族団らんの中でもあり、遊牧民は家族の絆をとっても大切にしている。

また、現代の急激な経済発展や社会環境の変化においても、遊牧文化は臨時応変に性質を変える機能性を持っているのではなからうか。絶えず利益・欲望を追い求める時代に入

<sup>300</sup> 社会主義中国は遊牧民を定住させようとして、宣伝に力を入れてきた。定住すれば「進歩」、遊牧即ち「時代遅れ」とされている。

<sup>301</sup> 例えば、日本は戦後復興、高度経済成長、バブル経済といった発展の歴史を辿ってきたが、こうした発展によって、日本人の伝統的な生活や地域の文化は急激に変容してきた。そして今、何十年も遅れて同じ道を歩んでいるのが、まさにオールドスである。

っても、遊牧文化はその伝統的資質を保ちながらも、さらに良き方向に変わりうる可能性を秘めている。

人類の過去の文物全てを維持保護することが不可能である以上、何を守り、何を変えるかの選択は避けることができない。その選択をする際、歴史に対する洞察、文化に関する見識を冷静に判断すべきであろう。今日ほど情報化された社会で、生存競争を生き抜いていくために文化的鎖国は自滅の選択である。

多様な文化活動の中からより優れた生活様式を選択する能力を養い、生活の文化を向上していく以外には道はないのである。むしろ、伝統文化の中に諸外国や他民族の文化を取り入れて、現代に適した新たな文化の創造に向けて努力することが求められている。

モンゴルの伝統社会及び伝統文化は近代化により、プラスの影響を受けている側面もある。生活水準、環境衛生、教育などは発展を遂げた。しかし、伝統文化と近代化との矛盾において、モンゴル人の心の中では葛藤があり、文化継承が一つの対抗措置として存在しているという部分もある。今後、伝統文化の中に他民族の文化を取り入れて、現代に適した新たな文化の創造に向けて努力することが求められている。伝統と近代の融合したモンゴル文化が構築されることを期待する。

## 2.2 モンゴルの文化継承における女性

モンゴル社会において、女性自身は貴重な働き手であるばかりではなく、また将来の労働力を再生産する能力を持つ。しかしながら、女性の仕事は子育てに専念するというよりも家畜による食料生産に時間と精力をとられてきた。牧畜における諸種の作業は、必要とされている生活手段であるからこそ、携わる女性はその担い手として期待されてきた。

遊牧生活などの伝統文化の継承において、女性は主役であったが、経済開発と文化変容の潮流の中でもやはり、彼女たちは文化伝達の担い手を務め続けている。同時に、さまざまな社会的影響を受け、伝統的な生活が失われつつある現在、そうした文化から離れていくもっとも象徴的な存在もまた、女性である。

本論文では、女性たちがモンゴル遊牧社会の中で重要な役割をはたしてきたのかを見直し、現代における都市化と遊牧生活離れとの関係のなかでどう生きるかを捉えてきた。社会が多様化する過程では、若い世代は外来の新たな文化的要素を自らの文化体系の中に取り込んで、その一部を変容させていく場合がある。その結果、受け手側の文化にさまざまな変容がもたらされる。

こうした点から、文化の担い手である女性自身の新たな文化に対する態度の決定が、文化の変容にとって極めて大きな影響力をもつ。具体的に、伝統的遊牧生活を営むうえでの活動——前述した家畜の世話・餌やり・乳製品作り・育児・食事、お茶の準備など——を実際に行う女性たちが、これまで伝統的な方法でやってきたとしても、仮にある時、従来とは別の新しい生活スタイルを知ったなら、彼女たちの中にはその新しい方法を選択する者が現れる。だからこそ、伝統文化と文化革新のどちらを「選択」するかという問いには、

女性自身の意思が重要である。ここでの「選択」が、モンゴル人の生活環境及び習慣、ひいては民族文化そのものの在りようを左右していくと考えられる。

地域の経済開発と女性の関係について、以下のような見解がある。

「開発とジェンダー」は、WID (Women in Development) と GAD (Gender and Development) の双方を包括し、また、開発学、女性学、文化人類学などの社会科学を中心とする理論的研究と、途上国の開発実践の過程で蓄積された知見とを包含する総合的領域である<sup>302</sup>。そして、地域の開発において、「エンパワーメント」の重視が協調されている。

エンパワーメント・アプローチは、女性を抑圧する社会構造の変革を促す点では1970年代初頭の公正アプローチと類似している。しかし、抑圧の原因の捉え方や変化の戦略、女性の位置づけなどの点で異なり、改革に当たっては法的地位の向上だけではなく女性の自発的な運動による下からの改革が不可欠であると考えている。いずれにせよ、女性は、国際政治経済体制とジェンダー構造を変革する「変化の担い手 (change agent)」であるとみなされている<sup>303</sup>。

そして、この「力」をつけるためにはまず女性が、自らの置かれた状況や社会の構造を自覚し、女性自身の中から変化を求める必然性が湧き出てこなければならない<sup>304</sup>。伝統とは近代化＝変化に対置されるものとして不変の様相を呈するが、一方でつねに生成され続ける<sup>305</sup>。伝統が再発見されることによって、女性たちの役割が注目されるのではなかろうか。

モンゴル人の女性は献身的な妻や母親像に惹きつけられてきた。しかし女性にとって、結婚だけが人生の目的ではないこと、一人の人間としてどう生きるべきかについてしっかり考えること、生きる目標を明確に持つことも大切である。女性は与えられた才能と知能を最大限に開花させ、担っている文化伝達の役割を果たすことが、その民族自身の存続に繋がるのである。

また遊牧生活の継続において、女性は主役であったが、経済開発と伝統文化の葛藤が起きている現在においても、彼女たちはなお文化伝達を担い続け、伝統文化の保持/革新に少なからず貢献できるのではないと考えられる。現代の女性自身の新たな文化に対する姿勢は、モンゴルの伝統文化の変容にとって極めて大きな影響力を持つが、女性は従来のモンゴルの伝統文化をそのまま継承するというより、社会各界に進出し新しい文化を構築し、挑戦していく。

また子どもや家族を守るという資質により、女性は次世代へのしつけと文化伝達を担う存在をつとめ続けるのであろう。アイデンティティが希薄で、むき出しの欲望と衝動で行動する人々が増えている現代中国社会において、家庭における人格育成及び民族文化の継

<sup>302</sup> 宇田川妙子、中谷文美『ジェンダー人類学を読む—地域別・テーマ別基本文献レビュー』世界思想社(2007)、p. 214。

<sup>303</sup> 宇田川妙子、中谷文美、前掲書、p. 224。

<sup>304</sup> Moser, Caroline O.N, *Gender Planning in the Third World: Meeting Women's Practical and Strategic Needs*, *World Development* 17(11), 1989, pp.227-254.

<sup>305</sup> 窪田幸子、八木裕子編『社会変容の女性—ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ出版(1999)、p. 120。

承が個人に対して、巍然とした価値観を養っていくことを期待する。

### 2.3 モンゴルの文化における教育

遊牧民の特殊な生活環境、生産そのものが子どもたちの生きた模範となっている。モンゴルの子どもたちにとって、自然と生活が切り離せない概念であり、労働と遊びは区別のつかない関係であった。子どもたちは幼少から「小さな大人」として様々な労働に参加させられ、労働を学んでいた。

伝統的な遊牧生活を営むモンゴル人女性は子どもに対して、その社会環境に順応したしつけや子育てを行っていた。そこには、ただの継承としての「教育」が存在した。科学理論や専門知識もなかった大自然において、このようなしつけと生活技能は、モンゴル独特の教育と位置づけられ、子どもたちは次々と社会を担う大人に育ち、文化を継承してきたのである。モンゴル独自に行われてきた教育は、大自然を舞台にし、遊牧生活を営む背景を前提として存在するということである。その場、その状況に応じたものだからこそ、その社会環境に役立つ人間を育てていた。

改革開放後、生活環境の変化によって、子どもたちの育つ時間も空間も仲間も一変した。それでも、エスニック・コミュニティの基盤が文化であるとしたら、その文化の担い手・継承者を育てることは重要である。そのため、もう一度伝統的なしつけや教育を振り返ってみる必要がある。モンゴル独自の教育は現代の子どもの教育及び文化継承にも役立つ部分があると考えることができるのではないだろうか。

最後に、今後のモンゴル民族の教育のあり方について、筆者の見解を述べておきたい。

第一に、少数民族地域が経済発展や文化変容の現状に適応するための教育を立案し、実践に移すことである。国や自治体が資金や援助を支出し、政治と経済が教育に奉仕できることが理想である。内モンゴルにおいて「義務教育普及」が定着し、基礎教育の制度が整えられつつあるものの、成人教育や専門教育などといった社会教育の分野が欠けていることが指摘できる。いつでも、誰でも、どこでも学ぶことができる学習環境が必要である。

第二に、教育の発展は今後の人類文化社会の発展と密接な関わりを持っていることを自覚し、経済発展への偏った認識を改めて見直さなければならない。また、単一化した民族教育の体制を改革し、現地の経済発展の状況に基づいた、文化背景や時代進展に適した教育が必要とされる。民族間の「差異」を認め合い、尊重することこそ「格差」克服の教育ではないかと考える。「少数民族文化はそれぞれに固有なものであり、優劣をつけられるものではない」ということは根本原則とする「差異」の尊重である<sup>306</sup>。

多元化した少数民族の多様性のある人間らしい心の育成、精神性の醸成は、これからの教育のなかでも取り組まなくてはならない内容である。科学技術の進歩に裏打ちされた近代社会を維持するうえで、人生の価値観の基礎が固まる中等教育の時期にこそ、人間性、

<sup>306</sup> 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育』東信堂(2001)、p. 223。

個性、特性豊かな教育をすることが大事である。そうした教育を実現するためには、質の高い教師の育成が不可欠になる。少数民族教育の質的な問題は教師の質の問題と直接的な関係を持っている。まず教職員自身の自己改革が望まれる。彼らが時代・状況を意識し、よりよい生徒指導のあり方を模索し、研磨していかななくてはならない。

文化という概念には「教養・修養」の他に「育成・耕作」の意味も含まれている。生産力や文化を生み出すために、教育は重要な要素として存在する。文化の継承において、教育的なコードが個人及び社会に表出され、その品性の有無によって、生活や文化の質は大きく左右される。

モンゴル社会の場合、女性と文化との密接な相互作用によって、しつけ・教育は極めて大きな影響力を及ぼしてきた。文化継承の担い手であった女性たちが近代学校教育によって、伝統文化を継承する存在であり続けるか、それともその変容を助長する存在となるかは、彼女たちが受けた「教育」と深く関わりがある。

モンゴル人女性が近代的な知識を身につけ、近代的な生活水準を高めることによって、変化しつつある環境や日々激しく競争し合う社会に適応する能力、またその社会で生存する能力を高めていくことができるということは、本論の検証が示している所である。そして、自分たちの歴史ある文化を発展させる能力、及び牧畜地域やモンゴル文化の持続可能な発展を確保することも期待できるのではなかろうか。

とりわけ、女性が文化伝達に与える影響は、女性自身の受けた教育によっても異なるが、伝統と近代的価値観をどう受容するかは、女性たちの受けた「教育」に委ねられる面が大きい。モンゴルの伝統文化が存続の危機を迎えている現在、女性が伝統文化の伝達においてカギを握っており、教育が文化と女性という二つのファクターの間で橋渡し役を果たす。そのため、モンゴルの文化において、教育は最重要な課題である。民族教育の未来は予測できないが、家庭教育や母親の影響は今後のモンゴル文化、民族の未来を決めていく重要な要素になりうる。

### 3 今後の課題

本論文では、「伝統文化」と「経済発展」の二重のモデル地域となるオルドス地域を対象に、文化変容及び女性の文化継承に焦点を絞り、モンゴル人女性の伝統文化の継承状況を考察した。そして、対象地域の文化変容の現状及び民族学校教育の問題を取り上げ、女性と文化の関係性、女性と教育の関係性を明らかにしてきた。今後、文化、女性、教育と三者間の密接な関係をより明確に論理付ける作業を、継続的に行っていきたいと考える。

本論文の今後の課題として、以下3点を指摘しておく。

① 調査対象地域と対象者において、内モンゴル全体をカバーできなかったことである。モンゴルは多くの部族及び氏族によって生まれた総称であり、単一な文化体系ではない。一つに地域や氏族でモンゴルという概念を解釈することは困難であり、より多くの事例を検討することが必要である。事例を増やすことで、地域文化の変容過程の類型を描くこと

が可能となり、事例を類型化することによって、特殊性のあるモデルやビジョンにこだわることを控え、より普遍的でかつ客観性の高い研究成果を提供することができる。さらには、本論文で明らかとなったモンゴルの文化における女性の地位、女性が文化継承における教育的役割の一般化と特性の強調といった内的リソースに着目して語りを分析することで、もっと多様な知見が得られる可能性がある。

② 男子学生との比較研究、追跡調査が必要であることである。

本論文では女性側の視点のみを扱ってきたが、男性側の視点を取り入れることで、より多面的な問題解明を捉えることができると考える。

サンプルサイズと対象を拡大することが本研究の次の課題である。サンプルサイズを増やすことで、視点がより多様に広がり、充実した比較研究の内容となる。また調査対象を拡大することで、性別の特徴をより明確化することが可能になる。さらには、男女比較研究にもつながると考えられる。

③ 伝統の文化のなかでもどういう部分を保持し、深化する文化として再構築していくか、そこで女性のあるべき姿勢を一段と明白にしていくことである。漠然とした「伝統」や「文化」という定義しがたいキーワードであるため、さらに多様な事例についての応用可能性を検討し、もっとも文化を代表できる要素を精査することである。また、ジェンダーによる格差は、多分野にわたっており、例えばセクシュアル・マイノリティ等、ジェンダーの多様性については明確に検討できていない。本論文では、現在のリスク社会や男女共同参画の推進の現状を踏まえたあり方とその研究に、いかに接続できるのか、どのような示唆を提供でき得るのかを検討していく必要がある。

## 補論 社会主義中国が描くモンゴル人女性—民族教育と社会教育の間

### はじめに

近代化や学校教育といった社会環境により、女性自身の考え方も変わっていく。では、それぞれの時代における理想の女性像はどのようなものだったのか。あるいはどのようなものとしてメディアによって宣伝されてきたのか。本章では女性の価値観の変化に果たすメディアの役割について検証するため、モンゴルにおける女性雑誌が描くモンゴル人女性像の変遷について考察していきたい。

内モンゴルにおけるモンゴル人地域は、社会主義の中華人民共和国に統合されてから、次第に自治区に編入された。社会主義は女性を解放した、と宣言している。では、解放されて、近代化の道を歩む女性たちにはどのような地位が与えられたのか。近代的な女性は近代教育を受けて育つ。本章では、モンゴルにおける民族教育に関して社会教育という側面から考察する。言い換えれば、民族教育と社会教育によって創出された、近代的な女性のイメージと実態はどうであったか、ということでもある。

社会教育に関して考察するため、モンゴル人女性向けの雑誌である『内モンゴルの女性たち』（中国語：《内蒙古妇女》、モンゴル語：*Öbör Mongyol-un emekteyičüüd*）という雑誌をとりあげる。女性専門の雑誌をとりあげ、そこにモデルとして提示された女性像を分析しながら、改革開放後のモンゴル社会の急激な社会変動の中で、どういったモンゴル人女性がロールモデルとして期待されてきたのか、モデルたる女性がモンゴルの文化変容にどのように結びついているのかを検証していく。換言すれば、これはメディアの社会教育といった教育的役割、ある意味で大衆宣伝という役割を分析することにも通じる。

### 1 民族教育と社会教育—女性誌が描くモンゴル人女性

『内モンゴルの女性たち』は内モンゴル自治区の婦女連合会が主に編集している唯一のモンゴル語版の女性誌である。『内モンゴルの女性たち』誌は男女平等・女性の思想、政治的地位を向上させる目標を主旨とし、女性を宣伝し、女性に情報やサービスを提供する目的で発行されている。創刊当時はまだテレビやインターネットのようなメディア媒体がなく、情報伝達は紙媒体に頼っていた。そのため、女性誌は女性をテーマにしたメディアとしては唯一かつ検討価値のある資料だと考えられる。

『内モンゴルの女性たち』誌は1951年に創刊され、モンゴル語が使用されている中国内の8つの省と自治区で発行されてきた。女性と社会を結ぶ主な情報のチャンネルとなり、モンゴル民族の文化、教養リテラシーに大きく貢献し、女性解放を提唱してきた重要な情報ツールであった。主な内容としては、「時代的女性」「有名人の物語」「身近の物語」「婚姻と家庭」「家庭教育」「女性の風采」「警鐘を鳴らす」「愛の捧げ」「民族習慣」「衛生、化学、生活知識」などが含まれている。2000年に「第五期華北地区優秀季刊誌賞」、

2001年に「優秀なデザイン季刊誌」と「中国季刊誌方陣」、2004年に「北方優秀季刊誌」、2005年に「第三期内モンゴル季刊誌賞」、2007年に「自治区民族団結進歩賞」など内モンゴル自治区のブランド季刊誌として数多くの受賞実績がある。

## 1.1 分析概要

本誌は1951年に創刊されたが、文化大革命の10年間は発行が休止され、さらに発行済の書物もその多くが焚書されたため、1970年代以前の号誌は見つからなかった。内モンゴルの図書館は過酷な歴史を経験しているため、古い書物の体系的収集は大変難しい状況にある。今回の分析対象となる資料は1982年5月から2014年6月に至る約30年間分であり、年代順に76冊を選んだ。

改革開放期に入って以降80年代の社会動向を背景として、内モンゴルにおけるモンゴル民族、さらに女性はどうのような社会環境に置かれ、いかなる生活習慣や価値概念を持っていたかを明らかにする。そして、1980年代から現在に至って、中国の経済は急スピードで成長し、その社会変容によって少数民族の女性たちの内面世界に何が引き起こされたかということに着目する。

この約30年間の社会や文化の進展とともに女性の社会的な地位が向上したが、新たな社会変動にいち早く適応したのが女性たちであった。雑誌は時代を写す鏡と言われており、雑誌を定点観測することで時代の変化を読み取りたい。

雑誌に対する分析では、主に表紙の解説と掲載内容の検討を行った。まずは、表紙に選ばれた写真の人物や絵の内容によって、女性はどうのような側面から評価されていたかを考察する。そして、時期によって変遷するファッションや社会の流行の傾向を窺うこともできる。

記事の内容において、登場する女性の生き方や、世間の評価を集める女性に焦点を当て、それぞれのコラムが対象としている題材の類似性により、女性を中心とした視点でカテゴリーに分類した。このことによって、時代の流れに伴って変わり続ける掲載内容の傾向およびそれに影響される女性の価値概念を考察する。具体的には、季刊誌の表紙に掲載された写真や絵、また記事の内容により次の5つに分類し、分析する（付属資料I参照）。

- ① 社会全体の中にみる女性のイメージ（表紙およびコラムの分析）
- ② 家庭における女性の重要な役割（家庭教育の分析）
- ③ 女性自身の生き方（婚姻生活の分析）
- ④ 女性に影響を与える文化（民俗文化の分析）
- ⑤ 女性の自立を支える（キャリア生活の分析）

## 1.2 分析内容

- ① 社会全体における女性のイメージ（表紙およびコラムの分析、付属資料IV-表1）



表紙と「現代の女性」、「有名人の物語」の2つのコラムの中で、女性のイメージに焦点を当て、女性の外見と内面の両方から分析を行った。季刊誌の表紙に掲載されている写真と絵や「現代の女性」「有名人の物語」のコラムの内容からその当時の女性のイメージ、憧れている女性、理想の女性像を分析し、何が評価されているのか検討した。

表紙を飾るのは、歌手、女優、デザイナー、ダンサーなど有名人である。ここでは、その時代の代表的な人物を取り上げているだけではなく、髪型、ファッション、化粧など当時の流行を示してしている。1980年代から2000年代頃の表紙に載っている人物の服装や装身具には、貴族や舞台用の伝統的な民族衣装が多いが、2014年以降の表紙に掲載されている人物の民族衣装は現代的なデザインが多いという傾向が顕著である。



『内モンゴルの女性たち』誌表紙(一部)

1990年以降、モンゴル人の民族衣装の着用が復活しており、また、デザインも洗練したものが普及している。ファッションとしても着用している人が増え、民族衣装作りをビジネスとしてあるいは趣味としている若者が増えてきた。民族衣装のデザインの深化と着用の普及は、継承されているモンゴル文化の代表的な一例である。この背景には本や雑誌を始めとするメディア媒体やインターネットの普及が時代の潮流を伝達する上で、大きな役割を果たしていると思われる。

「現代の女性」のコラムにおいて、1割が女性連合会など政府関連の機関についての記事、1割は伝統と女性を関連づけた内容であり、残りの8割は当時代の女性の生き方や仕

事に関する内容であった。とりわけ、女性の企業家や世界の発展における女性の役割、女性の権利といった今までモンゴル社会に見られなかった情報および主張が読者に届くようになった。女性の家庭と仕事の両立を積極的に受け止め、女性の社会進出を肯定した内容が増えてきている。

女性のキャリアに関する記事においては、その時代の要求する職業が憧れとなっており、社会の変動によって人気職種も移り変わっている。例えば、80年代と90年代の雑誌には女性の軍人、女性教師等の職業に関する記事や人物が多く記載されているが、2000年代後半からは企業家など自営業に関する記事が増えた。「現代の女性」のコラムは、文字通り現代的な価値観や人生観を強調する記事が多く、当時もっとも人気のあった女性たちを紹介しており、時代の最先端の流行を代表している。

「有名人の物語」のコラムには、民族、国、世界といった3つの枠に、それぞれ有名人の紹介が記載されている。モンゴル民族の著名人には、歴史上の人物も多く登場し、モンゴル帝国を創ったテムジンをはじめ、十三世紀のホラン妃、イエソイ妃、ソルハクタニ妃およびチンバイ妃などが紹介されている。

中華人民共和国において内モンゴルを自治区として建立させたウラーンフ、現代の女優であるスチンゴワ・ナランホワラの紹介もあれば、同時に、世界を舞台に活躍している歌手のテングル、アメリカで活躍していたNBA選手のバートルなど、現代のモンゴル人の英雄ともいえるべき男性の著名人も紹介されている。また、中国民国の政治指導者である孫中山、宋美齡、劉少奇、李鵬、李克強夫人、習近平夫人の彭麗媛など指導者及び夫人の紹介の他、マーガレット・サッチャー首相など外国人から、草原の英雄・優秀な牧畜民といった優れた一般人まで紹介されている。

上記の内容は、著名人たちが歩んできた成功の生涯を通して、彼らの努力、知恵、志を学習しようという意欲を読者に喚起させることを狙いとしていたと考えられる。すなわち、優れた精神世界や知見といった面での女性たちの精神的なロールモデルとなるような人物が取り上げられているのである。

## ② 家庭における女性の重要な役割（家庭教育の分析、付属資料IV―表2）

カテゴリー②は「家庭教育」と「母の愛」から構成されている。「家庭教育」のコラムは、の心身ともに受けるべき健全な教育に関する内容が取り上げられ、家庭における親から子どもに対するしつけ、子どもの発達や子どもと正しくと接する方法など、遊びから学校の勉強の方法まで幅広い領域で教育に関する内容が記載されている。その中でも、親が子どもに対しては個性を尊重し、ゆとりのある教育をすべきという考え方が主張されている。また、外国の子育てに関する記事も記載されており、とりわけ、アメリカの事例が取り上げられ、子どもに対して、金銭感覚や価値観、思考力を植え付ける方法が紹介されている。

当コラムには、女性の教育的な役割に焦点を当てながらも育てる義務は母親だけではなく、父の愛も必要だといった事例も記載されている。すなわち、家庭教育の役割は母親だ

けでなく父親にもあるという考え方が示されている。また、伝統的な家庭教育に関する記載より、西洋の子育てを手本とした記事が多い傾向にある。家庭における教育は伝統を重視する保守的な方法よりも、先進国を学ぶ開放的なやり方に重点を移している。

「母の愛」のコラムにおいては主に母への感謝が寄せられた詩が当該内容の 8 割以上を占めている。モンゴル人は昔から歌が好きな民族であり、モンゴルは「歌の海、詩の里」と言われている。モンゴルの歌と詩の内容は、母親や故郷への思いを綴ったものが多い。また、著名な詩人の書いた詩以外にも学生や一般市民の「母親」をテーマにした詩や「父の愛」や「妻への詩」、留守児童の書いた詩、中国人の子どもを育てたアメリカ人母親の紹介記事も掲載されている。その他、良い母親になるための記事や母への親孝行に関連する物語が多数収められている。

母の愛は時代や人種に関係なく、存在するもっとも大きな無償の愛であること、そして、女性の尊厳、女性への敬意が再認識されていることが伝わる。詩やエピソードの内容は、母親からどのような教育を受け、そして子どもに何を伝達し、どのように子育てをするかという女性が持つべき教育的役割を強調した内容が注目に値する。

### ③ 女性自身の生き方（婚姻生活の分析、付属資料IV-表3）

カテゴリー③は「婚姻・家庭」、「法律」、「男性」から構成されている。「婚姻・家庭」のコラムでは、男女の恋愛に参考となる恋愛観や男性を選ぶ際に注意すべき点をはじめ、結婚後の夫婦関係および幸せな家庭をつくるために役立つことなど、家庭生活を営むために役立つ技術や教養が掲載されている。また、男女関係における女性の健康、既婚女性の幸せ、家庭内暴力の防止といった情報や事例も紹介されている。そして、鄧小平の 3 回の婚姻生活や宋慶齡と孫中山の結婚についての記事も含まれる。ここでは婚姻生活や家庭づくりに役立つ情報や模範となる夫婦円満の事例が取り上げられ、女性が正しい生き方を選択するあるいは自身の生き方を選択できるという生き方の自由を訴えるメッセージが多く含まれている。これは伝統的な束縛された生き方から解放されたい女性の願望を表しているとも言えよう。

「法律」のコラムでは、草原法や女性がもつ土地の使用権をはじめ、婚姻法に関連する資産問題、離婚問題、融資返済など普段の生活のために知っておくべき法律知識がとりあげられている。そして、犯罪に関する記事があり、これらは詐欺や各種の犯罪防止を狙いとしている。この他に、エイズに関わる法律や海外の法律などが紹介されている。生活に結びつく、身近な法律知識や情報を伝えることにより、女性自身が自分の身を守るためにはどうすればいいか知ることができるようになっており、女性にとって役立つ情報、女性特有の権限を生かすための情報を伝えている。

「男性」のコラムでは、男性の立場からみる女性と、女性の立場からみる男性について書かれており、配偶者をどう選ぶか、女性は何を望むか、女性の不満に対し、どう対応するかといった内容もある。婚姻における主導権や夫婦の不仲の影響の事例も紹介されてい

る。そして、ビル・ゲイツ夫人やオリンピックで金メダルを取得したスポーツ選手の男性といった著名人が紹介されている。モンゴル人の奥さんを大切にといった記事も見られた。

女性のライフスタイルの一環である結婚生活において、夫やパートナーとの関係を築くのに役立つ情報を伝え結婚生活の中でのあるべき女性の姿や男女関係をどのように維持していくかということが網羅されており、男女の視点から男尊女卑を改めることを提唱している。

#### ④ 女性に影響を与える文化（民俗文化の分析、付属資料IV-表4）

カテゴリー④は「民俗」と「文化収集」から構成されている。「民俗」のコラムでは、モンゴルの各部族の生活習慣、中国にいる他民族の生活習慣、外国の風習を広く紹介している。モンゴルは多くの氏族や部族から成り立っており、内モンゴル自治区にも多くの部族が共存している。誌面においては、東部に住むバルク部の縫裁、バーリンの子育て、スニトの正月、フルン・ボイルの競馬、ホルチンの女性連合会など他部族の民俗を紹介している。そして、チベットとミヤウ族の結婚式、ファッションなどの記事があり、また香港やマカオの生活習慣を紹介した旅行記がある。

外国については、日本人女性の老後の人生の過ごし方、アメリカの著名なアナウンサー、韓国の女性、日本の道徳文化、イギリス王妃の人生観、フランスの夫婦などの内容が記載されており、異文化における女性のライフスタイルなどに焦点をあてて紹介している。異文化を知ることは、物事を客観的に見るができるようになり、知見を広げるのにも欠かせないことだと考えられる。このような雑誌の記事は民族や人種を超えた交流を促進する契機となる。

「文化の収集」のコラムは、中国の少数民族のファッションや生活習慣など他民族の文化の紹介と外国の風習やライフスタイルなどを紹介した内容であり、中でも「女性」のキーワードが入った記載が多くみられる。例えば、カナダ人女性の老後生活、日本の女性誌、ネパールの科学賞を取った女性たち、世界の女性大統領について、フィンランドの女性は子どもを産みたくない、フランス人女性のお金の使い方、北欧の女性、スウェーデンの子育て、女性の権益を保護する世界機関など女性の各国の女性の幅広い事情を記載している。また、ドイツに暮らすモンゴル人、ウラーンフと3000人の孤児、チンギス・ハーンの陵などモンゴルの文化や歴史に関する記事も掲載されている。

多様な生活習慣や文化を紹介することによって、女性の家庭生活や生き方などをもっと充実できるようメッセージを伝達している。他の文化の理解を通じて、女性に幅広い知見を身に着けるよう提唱している。そして、多様性に触れることで、女性が従来から持っていた価値観を見直し、伝統文化を再認識し、女性自身の内面世界に変化が引き起こされることが期待されている。

#### ⑤ 女性の自立を支える（キャリア生活の分析、付属資料IV-表5）

カテゴリー⑤は「キャリア」「生活の豆知識」「健康」から構成されている。「キャリア」のコラムには、女性の仕事に関わる内容に加え、精神世界や思想的な内容の記事などが紹介されている。女性の権利を守る法律、女性は自分の価値を活かし、起業すること、働く女性の資質、女性としての自信・自尊心・自立・強い精神、改革・開放・発展への女性の貢献など、現代女性に積極的な社会進出を訴えている記事が多くみられる。女性の経済的な自立に欠かせない前提として、女性自身が家庭から社会に進出し、仕事をするのが女性自身の生き方の新しい選択肢であると訴えている。

「生活の知識」のコラムでは、生活の中で使える制度知識などの内容が盛り込まれている。政府の組織から健康保険制度をはじめ、農村の飲用水の安全制度、企業家を支援する制度、大学院生の奨学金制度などがある。また、女性同士の付き合いといった人間関係の問題や日常生活の問題・家事など料理・美容に関することも多く書かれている。特に、高齢者の介護と親孝行についての記事が多い。現代ではインターネットが普及し、スマホで調べれば回答が見つかるが、情報伝達の手段が限られてきた当時、本誌の伝えてきた知識や情報は、かつては重要なアイテムのひとつであったと推測できる。

「健康」のコラムにおいては、食の原料を紹介し、料理方法、規則正しい生活習慣、病気予防の知識や情報を紹介している。特に、女性の心身の健康を守るための知識、病気の予防法、健康な子どもを産むための注意事項など女性の健康についての記載が多い。また、モンゴル医学やモンゴル薬の紹介が載っており、サプリメントの掲載もある。そして、アメリカの美容専門の知識やブラジルの受動喫煙の宣伝も掲載されている。これ以外の内容として、お見合いや学生募集、病院や名医の紹介、薬の紹介などの宣伝が多く載せられている。女性は家庭の中で主役であるからこそ、家族の健康管理、生活習慣を担うことが重要であろう。

以上のように、『内モンゴルの女性たち』は女性の生活に必要なかつ多様な内容を載せた総合的な情報メディアである。近年、情報の発達につれ、メディアが多様化され、インターネットによる情報が主要な情報伝達のツールになってきたが、本雑誌は従来のメディア界の主役としてもっとも重要な資料である。

## 2 まとめにかえて—創成された女性像

上記の分析を踏まえ、『内モンゴルの女性たち』は読者にどのような情報を伝達しようとしているのか、メディアを通して伝達している内容はなにか考察していこう。同誌は内モンゴル自治区が中国の改革開放期に入って以降の社会変容を語るメディアであり、時代の変化に伴う「理想な女性の資質」や「女性のあり方」を伝達している。メディアは社会全体に普及している情報であり、当時の社会状況や文化も提示している。

そして、『内モンゴルの女性たち』誌は、以下のような二重の役割を果たしていると考えられる。まず、本季刊誌は女性と社会を結ぶ主な情報ツールとして、必要な情報や知識を伝達し、女性たちの解放を提唱するとともに、モンゴル民族の文化・教養リテ

ラシーに大きく貢献しているという読者への役割を果たしている。次に、『内モンゴルの女性たち』誌は共産党政権下でのモンゴル地区における「理想」の女性像や、憧れの存在を登場させ、国民に価値観を伝達しているという政府への役割を果たしていることにある。

メディアには、女性が社会において様々な役を演じていることが描かれ、その時代の「理想的な女性の資質」を作り上げ、女性の生活環境・価値概念も反映されている。80年代には「牧畜民女性」「労働者女性」が登場していたが、2000年頃からは「勤勉な女性」「インテリ女性」が模範として取り上げられるというような変容があった。女性は労働力として、昔から社会や産業において大いに期待されてきた。記事に登場した優秀な女性は、子どもがいるのに仕事で優秀な成績を上げていると紹介されている。家事・育児が女性の責任であることを前提に、困難を各自で克服し、さらに社会労働にも積極的に参加することを女性に提唱している。女性は自ら文化の構築者・貢献者であるうえ、家事だけではなく社会の継承者である子どもを育てるための時間を合理的に割り当てることが要求されている。また、子どもを産み育てながら、家事、仕事、学習もこなす女性が理想的な規範モデルとして創成され、伝達されたといえよう。

そして、時代の変化により、女性は良き母親・良き働き手から、さらに自立した個人を演じる役になり、社会進出、経済的な自立の潮流が高まっていく。この女性像の変容を伝えている内容からは、メディアは女性に労働と家事・育児の両立が自らの努力と工夫次第で克服できるという信念を発信し、向上心を持たせる思想教育の役割を果たしていたことが伺われる。メディアによって伝達された女性象のイメージは、女性の生き方に浸透し、女性たちはそれを受け止めていったのである。

時代の変化に加え、諸要因によって女性たちの生活様式や価値概念は変容したが、当時唯一の情報源である雑誌というメディアを通し、文化の多様性及び変容を知り、隠された教育的機能により新しい価値観が形成されたといえよう。価値観が変化することによって女性は伝統文化から遠ざかり、イデオロギー的束縛から自由になる。このようにメディアはその教育的機能により、女性が伝統文化の拘束から自立する上での重要な役割を果たす。

しかし、別の観点からみると、雑誌のようなメディアは、女性と伝統文化との密接な関係を切り離していくファクターともなっている。女性はメディアに影響され、伝統文化からの離脱を助長する存在にもなる。このようにメディアを通して文化変容が女性自身に投影されるのである。

(本補論は、以下の論文に修正を加えたものである。サラントナラ「文化変容に隠された教育的機能 -内モンゴルの婦人誌にみるモンゴル人女性-」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要・別冊』26(2)、2019、151-162頁)

## 参考文献

### 日本語文献

- 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録』校倉書房(1960)
- 家永泰光『草原文化の道』古今書院(1994)
- 石田英一郎『文化人類学入門』講談社(1976)
- 磯野富士子『冬のモンゴル』中央公論社(1986)
- 井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察—“二人のセチェンの祭祀”を事例に—」『北東アジア研究』島根県立大学北東アジア地域研究センター(2008)
- 井上靖『蒼き狼』新潮社(1964)
- 今西錦司「遊牧論そのほか」『今西錦司全集』<2>講談社(1974)
- 今村薫『砂漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と礼儀—』どうぶつ社(2010)
- 煎本孝「モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析」『東北アジア諸民族の文化動態』北海道大学図書刊行会(2002)
- 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』岩波書店(2012)
- ウェザーフォード・ジャック著、星川淳監訳、横堀富佐子訳『パックス・モンゴリカーチンギス・ハーンがつくった新世界』日本放送出版社発行(2006)
- ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』平凡社(1971)
- 宇田川妙子、中谷文美『ジェンダー人類学を読む—地域別・テーマ別基本文献レビュー—』世界思想社(2007)
- 梅棹忠夫『回想のモンゴル』中央公論(1991)
- ウラジーミルツォフ『蒙古社会制度史』外務省調査部(1936)
- ウルゲン『中国におけるモンゴル民族の学校教育』ミネルヴァ書房(2015)
- エドモン・ド・ゴンクール、ジュール・ド・ゴンクール著、鈴木豊訳『十八世紀の女性』平凡社(1994)
- エンゲルス著、岡崎三郎ほか訳『ゴータ綱領批判・家族・私有財産と国家の起源』新潮社(1956)
- 大塚豊『中国総覧 1996年版』<第二章 教育>霞山会(1996)
- 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫』ビジネス社(2016)
- 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店(2010)
- 小澤重男『元朝秘史全訳』風間書房(1989)
- 小澤重男訳『元朝秘史』岩波文庫<上、中、下>(1997)
- 斧原孝守「雲南少数民族におけるキリスト教の民族教育史的的位置」『東洋史訪』<4>神戸教育大学(1998)
- オンドルナ「多民族混住地域における婚姻と民族意識の関連—内モンゴル赤峰市地域のモンゴル民族と漢族の族際婚姻を中心に—」『北東アジア研究』<10>(2006)
- 温都日娜『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関

- する社会学的研究』溪水社(2007)
- 岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社(2008)
- 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育』東信堂(2001)
- オドン・ゲレル「内モンゴル自治区における民族教育」『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジア研究所(1995)
- 海山著、岡洋樹編「内モンゴル遊牧経済転換の地理的分析」『モンゴルの環境と変容する社会』東北大学東北アジア研究センター<27>(2007)
- 風戸真理『現代モンゴル遊牧民の民族誌』世界思想社(2009)
- 加藤謙一『匈奴帝国』第一書房(1998)
- 河原操子『カラチン王妃と私—モンゴル民族の心に生きた女性教師—』芙蓉書房(1969)
- 梶村昇「『元朝秘史』にみるモンゴル人の信仰」『アジア研究紀要』(モンゴル研究特集)亜細亜大学アジア研究所(1978)
- 韓景旭『韓国・朝鮮系中国人=朝鮮人』中国書店(2001)
- ギー・ブルトン、曾村守信ほか訳『フランスの歴史をつくった女たち』<全十巻>中央公論社(1993)
- 窪田幸子、八木裕子編『社会変容の女性—ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ出版(1999)
- クライド・クラックホーン、光延明洋訳『人間のための鏡』東京サイマル出版会(1971[1949])
- 呉人恵「性のいとなみ」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団(1998)
- 鯉淵信一『騎馬民族の心』日本放送出版協会(1992)
- 後藤十三雄『蒙古の遊牧社会』生活社(1942)
- 後藤富男『騎馬遊牧民』近藤出版社(1970)
- 小長谷有紀著「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」畑中幸子、原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会(1991)
- 小長谷有紀『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』角川学芸出版(2009)
- 小長谷有紀「ヒツジに託す願い—モンゴル族、春のチンギス・ハーン祭典」『季刊民族学』<48>(1989)
- 小長谷有紀「モンゴルにおける家畜の去勢とその儀礼」『北方文化研究』<21>(1992)
- 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』朝日選書(1996)
- 小長谷有紀、シンジルト、中尾正義編著『中国の環境政策 生態移民』昭和堂(2005)
- 笹口健『文化とは何か—知性の文化の発見』日本図書刊行会(1997)
- 賽漢花「学校統合政策による民族教育の変容」『日本モンゴル学会紀要』<47>(2017)
- Sh・ナツァグドルジ著、鯉淵信一訳『賢妃マンドハイ』読売新聞社(1989)
- 白岩一彦「内蒙古における教育の歴史と現状」(中)『レファレンス』<531>国立国会図書館調査立法考査局(1995)
- 新保敦子「グローバリゼーションの下での中国ムスリム女性指導者」『学術研究』<55>(2007)
- 新保敦子「中国ムスリム女子青年とキャリア形成—イスラム女学をめぐる—」『ワセダ



- アジアレビュー』〈4〉(2008)
- 新保敦子「満洲国におけるモンゴル人女子青年教育」東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研究所)〈50〉(2008)
- 新保敦子「改革開放政策下での中国ムスリム女性教師」『日本社会教育学会紀要』〈46〉(2010)
- 新保敦子「改革開放政策下での中国エスニック・マイノリティと中等教育」『学術研究』〈60〉(2011)
- 新保敦子『日本占領下の中国ムスリム—華北及び蒙疆における民族政策と女子教育』早稲田大学出版会(2018)
- 鈴木豊訳『アジアの経済発展と伝統文化の変容』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター(2007)
- ソーハン・ゲレルト「『モンゴル秘史』所伝「蒼き狼神話」と「アラン・ゴア神話」」『日本モンゴル学会紀要』〈30〉(2000)
- 園田茂人、新保敦子『教育は不平等を克服できるか』岩波書店(2010)
- ソロンゴト・バ・ジグムド著、ジュルンガ、竹中良二共訳『モンゴル医学史』農文協(1991)
- 高坂正突『文明が衰亡する時』新潮社(1981)
- 『中国基本法令集』日本評論社(1998)
- チョクト『チンギス・カンの法』山川出版社(2010)
- 張天路『北東アジア研究』(1993)
- 東京女子教育懇話会編『愛・希望・聡明』精興社(1995)
- トゥルムフ・オドントヤ『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから—』東北大学出版会(2014)
- 東郷育子「中国の少数民族教育政策—国民統合の視点から」(下)『季刊教育法』〈112〉エィデル研究所(1997)
- 鳥居きみ子『土俗学より観たる蒙古』大鏡閣(1927)
- 鳥居きみ子『満蒙を再び探る』六文館(1932)
- ドルジ・バンザロフ著、白鳥庫吉訳『シャマニズムの研究』新時代社(1941)
- Nachinshonhor.G.U、広瀬忠樹「モンゴル草原の生産力と遊牧」『モンゴル研究論集』〈6〉東北アジア研究センター(2002)
- ナツァグドルジ著、鯉淵信一訳『賢妃マンドハイ』読売新聞社(1989)
- 長沢孝司、尾崎孝宏『モンゴル遊牧社会と馬文化』日本経済評論社(2008)
- 西田正規、北村光二、山極寿一編『人間性の起源と深化』昭和堂(2003)
- ハイシツヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』岩波書店(2000)
- 服部あさこ『マイノリティ女性のアイデンティティ戦略—「母親性」の役割—』専修大学出版局(2010)
- ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容—バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐる—』現代図書(2016)

- ヘレン・E・フィッシャー、吉田利子訳『愛はなぜ終わるのか』草思社（1993）
- フフバートル『私が牧童だったころ』インターブックス（2000）
- フフバートル「伝統的生活空間にみるモンゴルの女性—ことばとコミュニケーション、情報をさぐって—」『女性と情報』（昭和女子大学女性文化研究業書 第八集）お茶の水書房、昭和女子大学女性文化研究所編（2012）
- プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社（1965）
- プルジェヴァリスキー著、田村秀文等訳『蒙古と青海』〈上巻〉生活社（1939）
- 包龍「古のモンゴルの宇宙観と霊魂観について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』〈24〉（2007）、pp. 81-93。
- ホブズボーム、E. レンジャー編、前川啓治ほか訳『創られた伝統』紀伊国屋書店（1992）
- 牧野篤「教育道具主義の行方—『改革と開放』期中国の教育研究」『教育学年報 4』世織書房（1995）
- 松原正毅「遊牧からのメッセージ」小長谷有紀、楊海英編『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）
- 松原正毅「ユーラシア史の構築にむけて」松原正毅、小長谷有紀、楊海英編『ユーラシア草原からのメッセージ—遊牧研究の最前線』平凡社（2005）
- 松本ますみ「キリスト教宣教運動と中国イスラムの近代への模索」『中国 21』〈28〉（2007）
- 満鉄庶務部調査課編『外蒙共和国』〈上編〉大阪毎日新聞社（1927）
- 宮脇淳子『モンゴルの歴史』刀水書房（2002）
- 宮脇淳子『モンゴル人力士はなぜ嫌われているのか』WAC 出版（2017）
- 村上正二『モンゴル秘史—チンギス・カン物語』平凡社（1970）
- モスタールト著、磯野富士子訳『オルドス口碑集』平凡社（2003）
- 山崎純一『女四書・新婦譜三部書全釈—教育から見た中国女性史資料の研究』明治書院（2002）
- 山崎朋子『アジア女性交流史』（明治・大正期編）筑摩書房（1995）
- 楊海英「家畜と土地をめぐるモンゴル民族と漢族の関係—オルドスの事例から—」『民族学研究』〈55、4〉（1991）
- 楊海英「変容するオルドス・モンゴルのカトリック」『西日本宗教学雑誌』〈16〉（1994）
- 楊海英「白い食物と動の思想」滝口直子、秋野晃司編『食と健康の文化人類学』学術出版社（1995）
- 楊海英『チンギス・ハーンの末裔—現代中国を生きた王女スチンカンル』草思社（1995）
- 楊海英「天幕に表象される宇宙観」『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団（1998）
- 楊海英『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版協会（2001）
- 楊海英、児玉香菜子「中国少数民族地域の統計をよむ—内モンゴル自治区オルドス地域を中心に」『静岡大学人文学部人文論集』〈54、1〉（2003）

- 楊海英、新聞聡『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成』風響社 (2004)
- 楊海英『中国とモンゴルのはざままで—ウラーンフの実らなかつた民族自決の夢』岩波書店 (2013)
- 楊海英『日本陸軍とモンゴル』中央公論(2015)
- 楊海英『逆転の大中国史—ユーラシアの視点から』文藝春秋(2016)
- 楊海英『モンゴルの親族組織と政治祭祀』風響社 (2020)
- 米村正一訳「世界史資料」『大ザサク』東京法令出版(1977)
- 米山俊直『文化人類学の考え方』講談社 (1968)
- ラティモア著、後藤富男訳『農業支那と遊牧民族』生活社 (1940)
- リンチン「大躍進期の内モンゴルにおける放牧地開墾・人口問題」『現代中国研究』<25>(2009)
- 渡辺昇一『国民の教育』産経新聞ニュースサービス (2001)
- 和田清『東亜史研究 蒙古篇』東洋文庫(1955)

### 中国語文献(ピンイン順)

- 額尔登泰、乌云达赉『蒙古秘史—校勘本』内蒙古人民出版社 (1981)
- 鄂爾多斯報社『鄂爾多斯学研究特集』(2012年7月13日)
- 『鄂尔多斯风暴』、导演：郝光、主演：温锡莹・王晓棠、优秀战斗故事片、中国三环音像社出版发行 (1962)
- 宝貴贞、长宏『蒙古民族基督宗教史』宗教文化出版社 (2008)
- Patrick Taveirne 著、古偉瀛、蔡輝偉譯『漢蒙相遭輿福傳事業』光啓文化事業 (2012)
- 浦昌『蒙古薩滿』内モンゴル人民出版社 (1990)
- 马克・波罗(意)著、策・高穆嘉普译『马克波罗游记』民族出版社 (2004)
- 孟慧英『中国北方民族萨满教』社会科学文献出版社 (2000)
- 苗忠「试论内蒙古草地资源危机与保护」『内蒙古草业』<4> (1996)
- 莫斯太厄(比利时、Mostaert, A.) 著、曹纳木整理『鄂尔多斯考察记』民族出版社 (1995)
- 丁文楼「関与“双語”教学的思考」『新疆社会科学』<6> (1990)
- 娜仁格日勒『论蒙古族的祖先崇拜』嗟峨野书院 (2003)
- 娜仁图雅『蒙古族民间禁忌』内蒙古人民出版社 (1997)
- 内蒙古自治区畜牧业厅修志编史委员会编著『内蒙古畜牧业发展史』内蒙古人民出版 (2000)
- 内蒙古统计局『辉煌的内蒙古』中国统计出版社 (1999)
- 内蒙古自治区畜牧业厅修志编史委员会编著『内蒙古畜牧业发展史』内蒙古人民出版 (2000)
- 『内蒙古教育志』編委会編『内蒙古教育史志資料』<第一輯、下>(1995)
- 拉施特主編、余大鈞、周建奇译『史集』商务印书馆 (1985)
- 樂文『20位著名兒童教育家的私房筆記』靈活文化事業有限公司 (2013)
- 梁多俊「少数民族地区經濟發展的展望」『中国少数民族地区经济概况』西南师范大学出版

- 社 (1993)
- 刘海源主编、李克仁统稿『内蒙古垦务研究』、内蒙古档案局·内蒙古档案馆、内蒙古人民出版社] (1990)
- 李美玲「明代土默特部蒙古族妇女的社会地位及其作用」包头师范学院 历史文化与管理学院 (2008)
- 盖山林『陰山汪古』内蒙古人民出版社(1991)
- 康尽欢「一个隐形的富裕城市—“猛开”的鄂尔多斯—」『新周刊』〈314〉广东新周刊杂志社 (2018)
- 郝维民主编『内蒙古教育志』人民出版社 (2009)
- 郝维民、齐木德道尔吉主编『内蒙古通史纲要』人民出版社 (2006)
- 金海『日本占領時期内蒙古歷史研究』(蒙古史研究 211 丛书卷二) 内蒙古人民出版社 (2005)
- 吉田順一著, 阿拉腾嘎日嘎译「游牧及其改革」『内蒙古师范大学学报』〈第 5 期〉哲学社会科学汉文版 (2004)
- 钱宁主编『基督教与少数民族社会文化变迁』云南大学出版社 (1998)
- 奇守業『内蒙古自治区地名志』内蒙古出版社 (1986)
- 張穆『蒙古遊牧記』文海出版社 (1965)
- 肖瑞玲等『明清内蒙古西部地区开发与土地沙化』中华书局 (2006)
- 陳育寧『鄂尔多斯』中国华侨出版公司 (1989)
- 初和日思、乌力吉『蒙古民族传说故事』内蒙古人民出版社(1985)
- 萨楚日勒图、查干嘎日『鄂尔多斯古籍文献丛书』内蒙古人民出版社 (2011)
- 僧格『蒙古民间文化研究』民族出版社 (2006)
- 赛航、金海、苏德毕力格『民国内蒙古史』内蒙古大学出版社 (2007)
- 『塞上风云』导演：应云卫、主演：黎莉莉·舒绣文·陈天国、大连音像出版社出版发行 (1927-1949)
- 索布多著「回顧興安女子国民高等学校建校与發展歷程」索布多主編『興安女高』内蒙古人民出版社 (2005)
- 宋工『中国人口—内蒙古分册』中国财政经济出版社 (1987)
- 宋廉『元史』中華書局 (1976)
- 特·官部扎布、阿斯钢译『蒙古秘史』新华出版社 (2005)
- 楊碧雲『中日婦女教育面面觀』台北市政府教育局 (1997)
- 『伊克昭盟志』边疆通信社、蒙藏委员会 (1940)
- 烏蘭岡克主編『内蒙古民族教育概況』内蒙古文化出版社 (1994)
- 烏蘭圖克、齋桂芝主編『内蒙古自治区民族教育文集』内蒙古大学出版社 (1990)
- 武强主编『東北淪陷十四年教育史料』〈1〉吉林教育出版社 (1989)
- 乌云娜、套格套、杭盖『蒙古传奇女杰』内蒙古人民出版社(2010)
- 王学明「天主教在内蒙古地区传教简史」『内蒙古文史资料』〈22〉中国人民政治協商会議內蒙

- 古自治区委员会文史资料研究委员会編集 (1987)
- 王守礼著、傅明渊訳『边疆公教社会事业』上智编译館 (1947)
- 王益民、王文元『解读鄂尔多斯』内蒙古出版集团、远方出版社(2011)
- 敖木巴斯尔、南丁『蒙古族传统母本教育』民族出版 (2010)
- 营光耀、李晓峰主编『穿越风沙線』中国档案出版社 (2001)

### 欧文文献

- Bulag, Uradyn, *Nationalism and Hybridity in Mongolia*, Oxford: Clarendon Press, 1998.
- Bulag, Uradyn, *The Mongols at China's Edge-history and the Politics of National Unity*. Lanham • Boulder New York Oxford: Rowman&Littlefield Publishers, Inc. 2002.
- Fried, Morton, H(ed)., Readings in anthropology, 2nd ed. vol. II: *Cultural Anthropology*, New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968.
- Jack Weatherford, *The Secret History of the Mongol Queens*, New York: Broadway Paperbacks, 2010.
- Jack Weatherford, *Genghis Khan and the Making of the Mordern World*, New York: Three Rivers Press, 2004.
- Mandelbaum.D.G. *Women's Seclusion and Men's Honor: Sex Roles in North India, Bangladesh, and Pakistan*, Tucson, University of Arizona Press. 1988.
- Moser, Caroline O.N, *Gender Planning in the Third World: Meeting Women's Practical and Strategic Needs*, World Development 17(11),1989.
- Poppe, Nocholas, *Grammar of Written Mongolian*, 1974.
- Sen,Gita & Caren Grown, *Development,Crises,and Alternative Visions: Third World Women's Perspectives*, New York: Monthly Review Press, 1987.
- Serruys, H, *Kumiss Ceremonies and Horse Races--Three Mongolian Texts*. Asiatische Forschungen, Band.37. Wiesbaden: Otto Harrassowitz. 1974.
- Zhao Zhenzhou, *China's Mongols at University, Contesting Cultural Recognition*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc. 2010.

### モンゴル語

- Altanša, N, *Mongolčud-un öčügedür-un mör*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1993.
- Batu, *Uran tangnai*, Ordus qota-yin Qanggin qosiyun-u ündüsüten-ü kereg erkilekü tobčiy-a, 2008.
- Jiryalsaikhan, S. L. Udbal, *Chingis khayano-ni niguča teikhe*, (Mongyol) Liaoning-un ündüsten-üno keblel-ün qoriy-a, 2003.
- Lubsangčoyidan, *Mongyol jang ayali-yin üülbüri*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1981.
- Maysurjab, J. Sayinjaryal, *Ordus jang üüle*, ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a, 2006.

- Narasun, S. *Ordos-un Jang Ayali*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a ,1989.
- Narasun, S. *Ordos Mongyol Takiy-a* , Öbür mongyul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a, 2005.
- Nim-a, *Sünesü. Ongyod. Sütülye*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a ,1999.
- Qurčabayatur, *Qatagin Arban yurban atay-a tegri-yin tayily-a*. Qayılar: Öbür mongyol-un soyul-un keblel-ün qoriy-a,1990.
- Sayang seçen, *Eerdeni-yin dobči*, Öbür mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1980.
- Sonom, B, Alim-a, *Ordos-un yaǵar usun-n nerin domog-ün toli*, Begeǵing: Ündüsten-ü keblel-ün qoriy-a,2005.
- Sonom, *Gengen Toli —Ordos-un tuqai temdeglel*, Begeǵing: Ündüsten-ü keblel-ün qoriy-a,1995.
- Sonom, *Mongyol-un Čiger Yosun*, Öbür Mongyol-un Yeke Surǵayuli-yin Keblel-üQoriy-a, 1991.
- Tayičiyud • Mansang, *Mongolčud-un niyča tobčiy-u üliǵer*, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a,1991.

## 付属資料Ⅰ 女性教師に対するインタビュー調査

### 1) U氏：内モンゴルで育てられた日本人女性教員

内モンゴルで育てられた日本人女性教師U先生（70代）へのインタビューを行うことができた。ただし、U氏は内モンゴルの東北地方の町に住んでいるため、時間や距離の事情により電話でインタビューする形を取った。戦争のとき、残留孤児の日本人女子をあるモンゴル人の家族が里親になり、モンゴル語の名前がつけられて育ったとのことである。U氏と例えば、内モンゴルの民族学校を出た人はみな知っている。それは、U氏のことがモンゴル語の教科書に載っているためである。

内モンゴルの中でも同じモンゴル語が通用されているが、地方により方言がある。筆者はインタビューに際し、U氏と電話が繋がったとたん緊張した。それは、内モンゴルで育てられた日本人と何語で話すか戸惑ったためである。日本語、それともモンゴル語、あるいは漢語だろうか。しかし、受話器の向こうから優しい声で東北地方の方言のなまりが入っているモンゴル語でU氏は話しかけてくれた。インタビューに応じたU氏はとても明るく、そして熱心に話してくれた。U氏はすでに、教師の仕事を引退して内モンゴルの一市民として暮らしているという。そして、自分の歩んできた人生をもう一度振り返り、語ってくれた。

残留孤児となり、一人残された7歳（当時）のU氏は、現地の人に助けられ、回り回ってモンゴル民族と漢民族の夫妻の養子となった。養母は、恐怖で悪夢にうなされるU氏に、ぜいたく品だった砂糖水を作って与え「お母さんが抱っこしてあげる」と、深い愛情を注いでくれたという。学校でも、日本人のU氏を差別することなく、奨学金も出してくれた。U氏は「恩返しに、中国の子どもたちのために頑張りたい」と勉強に励み、高校の教師になったのである。日本の肉親が判明した後も内モンゴルに残り、結婚し、子どもが生まれ、内モンゴルを自分の故郷にした。

U氏は敗戦時、1945年8月の混乱—いわゆる「葛根廟事件」を振り返る。日本に帰国しようと、中国東北部（旧満洲）から歩く約1600人の行列の中にU氏の家族6人もいた。8月14日午前11時40分頃、行動隊が葛根廟丘陵付近まで到達したところで、戦闘中のソ連軍戦車部隊が行動隊に対し攻撃を開始、間もなく行動隊は壊滅し、非武装の女性、子どもを含む千人以上が死傷した。行列がソ連軍に遭遇し、姉と弟二人が殺された。その直後に始まったのが集団自殺だった。怖くて逃げ出したU氏は、母が短刀で胸を刺し倒れる姿を目にしたという。自らのつらい体験もあり「戦争は特攻の若い男性だけでなく女性もひどい目に遭わせる」とU氏の非戦への願いは強かった。

70年代以降、U氏は教師を続ける中で、教え子たちの家庭が学費も出せない貧困状態にあることに気付いた。その原因である草原の沙漠化による生活収入の減少という現状に問

題意識を持つようになった。退職後の94年から、ホルチン沙漠（約520万ヘクタール）での植林活動に力を尽くし、「沙漠」の緑化に取り組み始めた。黄砂を引き起こす沙漠化を食い止めようと、日本からの植林隊は今も続々とホルチン沙漠を訪れる。日本の植林ボランティアの全面支援で緑化が進んだ約360ヘクタールは「オヨン森林農場」と名付けられている。U氏は81年の一時帰国で徳島県に住む実兄と再会したが日本に戻らず、「育ての親」の地で緑化活動と教師の仕事に尽くし続けた。U氏が名誉顧問を務める「NPO法人どんぐりモンゴリ」（愛知県長久手町）は、森林農場を拠点に、植林のほか、現地のたちの教育支援に力を入れる。沙漠化の改善には現地の人々の教育も重要なためだと教育の大切さを強調した。国や周りのみんなに恵まれたおかげで、今日のような平和で何不自由ない暮らしができたという。その恩人達のために、そして子ども達のために最善を尽くしたいという思いから教師になる夢や、緑化事業を実現させられた。教師の仕事は「他人に明かりを与えるため自身を燃やし尽くすローソク」と例えるが、U先生の選んだ職業がまさにそれだった。他人のために何かできればということを生き甲斐にし、そのために力を捧げてきた。

## 2) Z氏：民族中学校教員の場合

Z氏はモンゴル民族中学校の副校長を務めている。教師の仕事をして20年間以上も続けてきたベテランである。最初は中学校の生物学を教えていたが、その後化学科目の教師を務めてきた。Z氏は、勉強の目標がやはり、いい大学に入り、いい職に就くためであるという点である。Z氏は小学校や中学校の時、成績や生活条件による「民族補助」（少数民族のみを対象とする補助金のこと）をもらっていたという。その時はZ氏の親の世代にまだ男尊女卑の考え方が根強かったが、Z氏の家庭ではそのような影響を受けることはなかったという。

Z氏がちょうど高校を卒業し、大学に入学することになった時期は文化大革命の終わった頃だった。その時から入試制度が回復したが、選択の余地もなくa大学の生物学部に入学したのである。そして大学を卒業し、地元に戻り中学校の教師を現在まで続けている。

Z氏が就職したころ、男女間の待遇の違いは若干あったそうである。行政関係の仕事にはあまりみられなかったが、民間企業の仕事になると、女性は能力や子育てなどの理由で不利な立場になることがあったという。そして、民族別として、やはり言語の問題も存在したという。

また、民族学校の卒業生は出願できる学校や専門領域が限られていたこともあり、後の就職の選択肢も限られていた。そして、当時はさまざまな理由から、高等学校では、男子生徒の占める比率が高く女子は少なかった。今は逆に女子生徒の数が男子生徒の数を上回り、現在努めているモンゴル民族中学校でも女子生徒の数が男子生徒の数の半分以上で、教員数も女性教師のほうが男性教師よりはるかに多いという。



### 3) Y 氏：大学教員の場合

Y 氏は現在 b 大学のある学部の副学部長を務めている 30 代の若い教授である。Y 氏は子どもの頃から、勉強するのは大学に入るためであり、大学に入れたらいい職に就くと信じていたのである。というのは、その時代の親や教師を含むすべての大人がみんな同じように考え、同じ希望を持って、決まった教えをしていたからである。Y 氏は高校を終え、学校の推薦で b 大学の歴史学部に入學できたという。歴史学を選んだのは別の理由がなく、専門分野などが関係なくただ大学のどの分野でも合格できればそれでいいという考えだった。大学に入ってから Y 氏の成績は優秀で、奨学金や生活補助金などをもらっていたそうである。この面では、Y 氏は少数民族であったため漢民族の学生よりも優遇されていたという。90 年代ごろは大学卒業者の就職率が高く、Y 氏も大学を卒業時点で中学校の教師を務めた。しかし、勉強を続ける意欲が沸いて大学院に進むことに挑戦し、順調に合格したのである。大学時代から第二外国語として日本語をずっと諦めずに続けてきたことが Y 氏を助け、修士課程を卒業し、短期大学で日本語教師を務めはじめた。当時は日本語教育に専念し、日本への留学を準備していたが、博士課程への進学チャンスがあつて、補助金や待遇が高いためまた進学を決意した。Y 氏は博士課程に入ってから、熱心に研究する気持ちが沸いたという。そして博士課程の学業を終え、今は理想の職に就き、研究をさらに深めようと努力している。

筆者が調査に訪問したとき、Y 氏は産休中で、出産する準備をしていた。女性として家庭と仕事を両立でき、職業でも立派な成果を出していることはとても尊敬できる。

Y 氏は自分が受けてきた教育と今自分がしている教育は時代背景の変化により変わったと語る。例えば、今は当時（90 年代）に比べて就職が難しくなったこと、また高等教育を受ける男女の比率は女性が上回っているのだと教えてくれた。Y 氏は修士課程の時も女性が多く、博士課程に入ってから周りは全員女性だったという。農村地域ではまだ男性が多数だが、都会では男女の比率は約 3 : 10 という。Y 氏の話聴いて、筆者が興味を引かれたことは、Y 氏が学業の各段階で何回か就職と辞職を繰り返し、何回か学業を継続したことである。就職や進学の繰り返しは、当時の社会背景と生活条件の要求に深く関連しているのではないかと思った。生活のためやむを得ずに就職するが、もっといい職につき、社会の上レベルに上るため、やはりより高い学歴が必要とされたのだと考えられる。

### 4) W 氏：民族中学校教員の場合

W 氏は 20 代であったが、教師歴はすでに 4 年目であった。W 氏は高校の時から成績優秀で、奨学金をもらっていたという。大学入試は自分の理想通りの c 大学を受け、自分の希望の学科に入學した。c 大学は「民族大学」という名前であるものの、生徒の大半は漢民族の生徒だったという。学校では、モンゴル民族も漢民族も一緒に共通語の漢語で授業を

受ける。W 氏のクラスは全員モンゴル民族だが、5 人の男子生徒に対して 40 人もの女子生徒がいたという。

大学時代には、W 氏は成績順で 2 等賞をもらい、そのほかに生活補助金を受けていたそうである。生活補助金は漢民族の学生より 20、30 元（300 円）くらい多かったという。そして、4 年間の勉強を終え、自分の出身高校に戻り教師を務めた。本来、W 氏は留学し、将来は通訳の仕事に就きたいという夢を持っていたという。だが、経済的な要因により、就職を決心した。当時、Z モンゴル民族中学校でちょうど教師を募集していたため、すぐに勤めることができた。今は教師の仕事を遺憾に思うことはないが、当初は、社会的な地位が低いことに残念に思うこともあったという。

しかし、モンゴル民族の教育のために、未来を担う子どもたちのためにとすると自分の仕事には誇りを持つと語っていた。W 氏は機会があったら、仕事を退職し、大学院にも進学したいという強い要望を持っている。今の大学卒業レベルではまだまだ勉強が足りない、学位などのためではなくもっと知識を増やしたいと話している。そして、今の教育制度では、試験の点数だけですべてを決めることは子どもの本当の能力を見抜けなく、子どもの向上心にもマイナスの影響を与えている。もっと、実践的に学力を測るべきだと指摘した。

## 付属資料Ⅱ 教育環境が異なる女性のインタビュー調査（一部抜粋）

### 1) A氏：学校教育を受けた経験のない遊牧民

2012年3月2日の午前、牧畜民であった80代の女性A氏をインタビューした。A氏はずっと放牧生活から離れることはなく、人生を送ってきたが、2010年に牧場を売り、移民区の住宅で生活することになった。彼女はモンゴル人の平均寿命からすれば長生きであるといえる。健康状態も良好であり、耳が若干遠くなっているだけだった。インタビューの時には、とても落ち着いた雰囲気、筆者が取材に訪問することを大歓迎してくれた。老人は草原で自然な、そして自由な生活をしてきたため、慣れない住宅区での生活を受け入れきれないという様子だった。そのため、不安や寂しさがA氏の心を曇らせているのではないかと感じられる。以下はA氏のインタビュー内容である。

A氏は、貧しい家庭で育ったため、A氏の兄弟3人は、誰も学校に行き勉強したことがない。家族全員が非識字で、みんな放牧をしていた。読み書きができないからといって、放牧する毎日の生活には困らなかった。彼女のほかの2人の兄弟は、すでにふたりとも亡くなっている

A氏は20歳前に、若くして結婚をしたが、子どもが生まれず、姉の娘を養子としてもらい受けた。姉のほうには子どもが9人もいて、生活が非常に苦しかった。A氏の夫は若い時、国民党の軍隊に入っていたため、文化大革命の時期には、厳しい暴力を受けていた。彼は、悪徳分子と言われ、何回も意識を失うまで殴られたことがあった。A氏は養子の娘を小学校まで学校へ通わせたが、女の子はやはり学問より家事をしたほうがよいという考えで、家で手伝いさせることとなった。そして婿を見つけ、結婚させた。

A氏は42歳の年に再び娘の長男となる孫を養子にし、今も一緒に暮らしている。孫も今年までに自分の母親と同じく、そして祖母と同じく牧畜生活を継続し送っていた。孫の娘であるひ孫を小さい時から町にある漢語で教えている学校へ通わせているため、今はモンゴル語を話すことがほとんどできない。モンゴル語で学んでも社会に出たら不利になるに違いない、必ず漢語学校へ通わせるという母方の家族の強い意志のもと、ひ孫は、漢語学校に行っている。

A氏の夫は今から10年前に病気でこの世を去った。一人で残された彼女は高齢であるが健康で、よく家事をし、牧畜や乳製品作りを行い、たまに畑の仕事もしていた。非識字者であり、裕福とはいえないが、A氏は自分の生きてきた道、牧畜生活の環境に十分に満足し、自由で楽しく過ごしていた。しかし、この状況を一変させたのが「禁牧」政策だった。砂漠化が深刻に進み、草原地帯が荒れている原因を「過放牧」とし、放牧することを禁止したのである。そのため、牧畜民は家畜を牧場に出すことを厳しく禁じ、小さな囲いの中餌で養殖することを政府から命じられた。大量の飼料を買うのに収入以上の費用がかかり、牧畜生活が営みにくくなった。広い牧場で自由に育てられていた羊やヤギも囲いの

中での飼育に慣れることは難しく、家畜の質だけではなく飼い主にとっての生産性や生活にも直接影響を及ぼしている。

生活を維持できなくなった牧畜民たちは次々と家畜を売るか、あるいは他の方法で家畜や牧場を処理し、草原を離れ、ほかに生存していく道を探しに出ている。牧場や家畜を売って、家族全員で出稼ぎに行く人たちもいた。言うまでもなく、何千年も続いてきたモンゴル民族のライフスタイルが崩れ始め、文化も変容し始めた。

そして、牧畜民たちにさらなる大きな危機が訪れた。それは牧場を離れ、今住んでいる家を壊し、町にある移民区のマンションをもらい受けることができるという政策である。牧場に残り、数少ない家畜を飼っても、収入にならず自分たちの生活を保障することもできなくなるが、町でマンションを持ち、賃貸に出せば、収入を得られると考え、家を壊して、牧場を離れることを選択する人が増えている。A氏の暮らしている村の26の戸籍の150名が、2010年に全員で移民することを実行した。多くの家庭は近くの小さい町の郊外にある低額で住めるマンションに移った。モンゴル人が移った後の草原は中国人の企業に売却され、漢民族が入ってきた。

これがいわゆる移民区というところで、この町の生活基準が中間層以下の人々に向けて建てた低額で住めるマンションである。また「扶貧楼」とも言われ、貧しい家庭を助けるために作られ、貧しいという状況を年収などで証明したうえ、政府に申請してはじめて買えるマンションである。

この町に住んでいるモンゴル人の割合はとても少ないが、そのほとんどが移民区に集中して住んでいる。地下資源の開発で故郷が発展し、豊かで広い土地を持っているモンゴル人たちはもっとも住居費用の安いところで、貧困な生活を選択することになった。

当村から「移民」した戸籍では、みんなこの移民区でマンションをもらえた。ただし、こここのマンションでそのまま生活している家庭もいれば、A氏の家庭のように部屋を他の人に貸出して、自分たちは田舎の小さな村などに引越し、もっと安い部屋を借りて生活をしている人もいた。移民区のマンションで生活する場合、草原で自給自足の生活と比べたら生活費用がはるかに高く、光熱費に困る家庭もいる。

それに、識字率も低く、特に漢語があまりできない草原で牧畜民だった人々が町で働く場を見つけることは非常に大きな課題である。仕事が見つからないと彼らに収入がなくなり、生存の危機に見舞われる。漢語を話せなければ、飲食店のスタッフにもなれない。実際のところ、彼らに何ができるのかというと、男性は工事現場、女性は道路の掃除をやる人が多い。しかし、時間の制限や仕事の規則もなく、牧場の地主として、家畜の持ち主として、自由自在な生活をしてきた遊牧民たちには工事現場や道路掃除の仕事はとても窮屈に感じ、働き続けることができなくなるケースが多い。特に、男性の人は工場で働くが、時間の制限になれなくすぐやめてしまったということをよく耳にする。

A氏の家族は移民区のマンションをほかの人に貸出し、自分たちで小さな村に移り、もっと安い部屋を借りて暮らしている。移民した牧畜民たちは、まだ生計の道が見つからず、

ほぼ全員が牧場や家畜を捨て、町に移民してきたことを後悔している。たとえ今再び牧場に戻ったとしても住んでいた家は壊され、何も残っていない。必ず家を壊すことを条件にして、マンションを与えるということは、牧畜民たちが再び牧場に戻ってきて住めないようにした戦略である。牧畜民を牧場から離すことは魚を水から出したのと同じことであるとA氏はため息をついた。

ところで、牧畜民から離れた草原は誰の所有物になり、どのように残っているのだろうか。「禁牧」「移民」などの計画が成功したが、果たして植物がよみがえり、砂漠化を食い止めることはできたのだろうか。当村の草原地帯には、大きな湖があり、緑豊かで、放牧に最適の牧場であった。この地帯を今すでにある不動産会社のオーナーが買い取っている。この会社はオルドスでもよく知られている民間企業である。彼は10年ほど前からこの土地を気に入り、ずっと購入したいと考えていた。この企業のオーナーは漢民族の大金持ちで、今後この土地に大規模な観光地をつくる計画を立てている。

生態環境の平衡を保つには、自然のありのままの生態環境を崩さず、人類は手を出さないことであり、もはや遊牧民の生活生産の主体となる家畜自体が生態平衡の一部である。遊牧民は数千年前からこの生態環境の規則を知っていたため、知恵を使い、家畜を移動させる遊牧生活をしていた。長きに渡りこの生活をしてきたが、自然環境が破壊されず、砂漠化の問題も起きなかったとA氏は考える。

A氏は牧場を捨て移民区に移ることを最初から最後まで反対していたが、孫が町に住みたいといい、また家畜を囲いで飼うより出稼ぎのほうが生活していきやすいと考え、孫の意思に従うことにした。また、村の全戸が移民区に移る契約に同意したため、自分たちだけ行かないという道を選ぶことはできないとも考えた。A氏は引っ越し当時、孫に80年以上も生きてきた故郷や遊牧生活から離れられないと泣いて訴えたが、孫は意思をかえることはなかった。彼女は、隣の移民区に移らない組の牧場でゲルひとつでも立てて残りたいとお願いしたが、高齢の一人暮らしは心配であると言われ、反対されてしまった。

## 2) I氏：漢語で教育を受け、漢化した女性

I氏は20代で、一人娘である。彼女は大学を卒業後、出身地に戻り、現在公務員を務めている。そして、同じ職場の漢民族の男性と結婚し、女兒を出産した。以下はI氏の語りの内容である。

I氏の両親は二人とも純粋なモンゴル人であり、普段もモンゴル語でコミュニケーションをとることが多い。特に、親戚の間では漢語よりもモンゴル語を使っている。I氏の父親は公務員であり、母親は10年前までは販売業の従業員だったが、店舗が閉店したため、専業主婦をしている。

I氏は幼稚園から漢語で教えている施設に通った。これは母親の要望であった。母親はモンゴル民族小学校しか出ていなかったため、漢語のレベルはあまり高くはなかった。そし

て、出身地の町の一番大きいデパートに務めていたが、ほとんど漢語で販売の仕事をしてきたため、言語の面で苦勞した。そのため、自分の娘には必ず漢語で教育を受けさせるという強い思いを持っていた。

I氏は挨拶程度のモンゴル語しか話せないため、家庭内でも常に漢語でコミュニケーションをとっている。また親戚や祖父母もI氏と会話をする時は漢語でやり取りする。彼女の父親がお酒好きで出世できないため、母親はよく「モンゴル人の男はお酒ばかり飲み、出世もできない、頼りにならない」と娘に笑って言っていた。おそらく母親は父親のことをモンゴル人男性の代表のように常に語っていたから、I氏自身の中で父親を基準にモンゴル人男性をイメージするようになったのであろう。

また、母親からは結婚相手は絶対にモンゴル人ではない方が良いと説き続けていた。母親の希望に加え、学校の友達や職場のいずれも漢民族ばかりであり、I氏にはモンゴル人の男性と出会う機会がなかったことから、I氏は漢民族の男性と結婚した。

しかし、漢民族に嫁いだという理由で結婚式に出席しなかった親戚もいた。I氏は幼いころからあえて漢民族の環境に置かれ、そして家庭内でも積極的に漢民族の文化や習慣を植え付けられたため、今まで自分がモンゴル人だということを意識せずに生きてきた。「確かに、モンゴル語で教えている学校に通ったとしても、就職も難しい上、社会ではモンゴル語は使えないから母の選択肢は正しかったと思う。娘の未来の就職や生活のために漢語学校へ通わせてくれたことに感謝している。例え、モンゴル語で読み書きできたといっても何のプラスになることもない。今モンゴル語を話せないからといって、社会や職場、そして家庭でも困ることは一つもないから、モンゴル語を習わなかったことを後悔する気持ちはない」。彼女はむしろ、モンゴル民族よりも漢民族に対して好意的であるといえる。なぜなら彼女も「モンゴル人の男はお酒好きで、出世しない」という母親の考え方を漏れなく伝授されているからである。

彼女は生まれた時、母親によって漢語の名前が付けられたが、自分の子どもにも同じように漢語の名前を付けた。そして、子どもの将来の就職や生活を考え、もちろん漢語学校で教育を受けさせたいと考えている。I氏の中には、民族やアイデンティティという概念がはっきり存在せず、それを考え直す必要もなかった。伝統や文化というよりも目の前の現実を見て生きていくことが今の若者にもっと重要なことではないか。また、モンゴル民族の文化をもっと発展させるには現在の絶えず変化する社会変動についていかなければならない、そうしなければ取り残される。誰もが一番新しい、そして一番良いものを求めることは当然であるため、社会の発展する方向に合わせて、社会の要求していることに応えていくことが民族やアイデンティティなどに関係なく、若者一人ひとりに欠かせない姿勢ではないか。

以上の語り内容は、漢語で教育を受けてきたモンゴル人のアイデンティティの変遷を示し、また、文化伝達を担う母親の存在の重要性を明らかにしている。このような事例はまさに、内モンゴルという領域の中で起きている民族言語と伝統文化の消滅の一番典型的か

つ普遍的な現象である。

### 3) H氏：漢語で教育を受けたが、伝統文化を大切に思う

草原や牧畜生活を離れ、町に住むモンゴル人の生活スタイルおよび文化の意識について、H氏にインタビューした。彼女はモンゴル人だが、漢語学校に通っていたため、モンゴル語を話せず、モンゴル文字の読み書きもできない。そのため、筆者も漢語でインタビューを行った。以下はその語りの内容である。

H氏は20代であるが、結婚し、就職してすでに7年目になる。H氏自身はモンゴル語を話せないが、両親は二人とも純粋なモンゴル人である。父方の家族は内モンゴルの東北地方から祖父の仕事の関係でオールドスに移民した。母の実家は文化大革命の時期に財産を持っていた王族の家柄だったため、大量の資産が没収されたことがあった。そのため、H氏の母親は学校に行けなくなり、家事を手伝い、その後結婚をした。

H氏は幼稚園から漢語幼稚園に通い、小さい時からモンゴル語を習うことがなかった。両親が彼女を漢語幼稚園に通わせた理由は単純に家から近かったことだった。当時、家庭の生活も苦しかったため、両親が共働きし、子どもの教育を重視する余裕もなかった。生まれた町でもモンゴル人が少なく、H氏の近所もほとんど漢民族が住んでいた。幼稚園から高校を卒業するまですべて漢語学校に通っていたため、モンゴル語で話す機会もなく、モンゴル語が話せないモンゴル人になってしまった。両親の仕事場にもほとんどが漢民族であるため、普段漢語を使うことが多く、家庭の中に戻っても家族みんなが漢語で交流している。たまに、子どもに知らせてはいけない秘密の話などを両親同士はモンゴル語で話していることがあると笑いながら言う。

H氏が中学校の時、一つのクラスは50人ぐらいだったが、一割弱の生徒はモンゴル民族の子どもたちであった。彼女以外のモンゴル民族の生徒たちも家庭の事情や両親の判断などさまざまな理由で、モンゴル語で教えている学校ではなく、漢語で教えている漢語学校へ通うことを選択したのである。なかでも、多くの親が自分の子どもにモンゴル語を学ばせても社会で使えないため、漢語で教えている学校へ通わせるという考えを持っているようである。

モンゴル人であっても漢民族の子どもと同じ条件で教育を受け、学校の生活や勉強の成績においても差がつくことなく、もちろん言葉の壁や障害もなかった。H氏は幼いころから漢民族の子どもとともに遊び、共に学校へ通い、ほとんど自分がモンゴル人である自己認識を持たなかった。

モンゴル人としてのアイデンティティを持ち始めたのは、社会に出て、仕事に就いた時であった。彼女がガイドとして勤めていた観光地はモンゴル民族の文化をもっとも残しており、かつ再現している場所である。小さい時から自分の民族や所属を考えたこともなく、自分の母語を話せずに生きてきた彼女はまさに観光地で世界各国から観光で来る観光客あ

るいは各地から当施設を信仰し、祀りに集まってくるモンゴルの諸部族の人々にモンゴルの文化や歴史を紹介する最前線の仕事を担っていた。子どもの時からガイドになることが将来の夢でもあり、高校を卒業後すぐに気力や希望をかけ、ガイドの勉強を3年間も専門的に行った。そして、ついに地元が一番有名な観光地での理想的な就職がきまり、夢を叶えたのである。

しかし、H氏の心の中にあることがコンプレックスになり、果たして観光地のガイドの仕事を果たす資格は自分にあるかと戸惑いを感じた。それは、彼女自身が自分の民族の言葉も文字も分からないまま、自分の民族の歴史や文化を他人に胸を張って紹介することへの自信を失ったからである。観光地のほとんどがツアー客のため、ガイドの仕事としてはもちろん漢語で紹介することは多数であるが、自分の母語を話せないことが彼女の心理に障害を与え、乗り越えられない壁となった。

H氏は生まれてはじめて、自分の存在を認識し、彼女自身のアイデンティティが芽生えた。そして、彼女は自分が母語であるモンゴル語を話せないことに対して悔しく思い、すぐにモンゴル語を学び始めた。このような決心と努力が彼女の仕事への自信に繋がった。H氏のように、大人になってから母語を学ぶということは、通常異例のことである。しかし、H氏は、モンゴル語の学習を通じ、仕事にも一段と興味が湧き、自分の民族の歴史や文化を他人に紹介することに限りなく価値を感じ、自分がモンゴル人に生まれたことに誇りを持つようになった。

H氏は日常の生活や仕事において、自分のアイデンティティを常に意識するようになっただけでなく、彼女の人生観にも変化が起きた。彼女は小さい時から漢語で教えている学校へ通っていたため、友達も知り合いもほとんど漢民族であった。

しかし、H氏はモンゴル語の読み書きができるモンゴル人の男性と結婚することを考えるようになった。人口比率からいってもモンゴル民族は数少ないうえ、H氏の周囲の仲間や環境の中での出会いはとても難しかった。モンゴル人女性は優しく、そして強く、また気前がよく、さっぱりしている性格が漢民族の男性にとっても人気があり、好かれる傾向にあり、結婚相手は見つけやすいと思われたが、H氏は結婚相手としてモンゴル民族であることを第一条件にした。

H氏は理想通りモンゴル語を話せるモンゴル人男性と結婚することができた。家庭の中でも、夫の家族とはできる限りモンゴル語で会話しているという。その後、子どもが生まれたが、モンゴル語の名前を付け、学校も必ずモンゴル語で教えているところへ通わせようと決めている。自分のようにモンゴル語を話せない悔しさを子どもに味わわせたくない。H氏と筆者はインタビュー中、片言のモンゴル語での会話を少ししたが、今でも子育ての合間にモンゴル語の勉強を続けている。

H氏が子ども時代の生活環境はモンゴル語の消滅を示す一例でもあり、育児する環境や職場及び生活環境が子どもの言葉を習う成長にいかにか大事であるかということを反映している。また、教育が一人の文化的価値観にどのような影響を与えているかということも明らか



かになった。

#### 4) G 氏：内モンゴルで教師をしながら修士課程に在籍

G 氏は現在民族中学校の教師である。学校は夏休みのため、自宅でインタビューを行った。以下はインタビューにおける G 氏の語りの内容である。

G 氏は 20 代で独身、現在は中学校の教師であるが、休みの期間を利用し、修士号をとるため c 大学校大学院で院生として学んでいる。

ここで、G 氏の経歴を簡単に説明しよう。彼女は、普通の牧畜民の家に生まれ育った。両親は二人とも兄弟が多く、生活が困難だったため、学校教育を受けることができなかった。G 氏自身は 2 人の兄がいるが、二人とも大学を卒業し、現在大企業に勤めている。牧畜民の両親が 3 人の子どもを大学、そして大学院まで進学させた例はオルドスではまれなことであり、言うまでもなくエリート兄弟である。大学の奨学金制度や学生のアルバイト環境も充実していない中、両親にとって経済的な負担はもちろん、精神的にも大きな負担があっただろうと G 氏は語る。両親の心の内には、子どもをどうしても学校に行かせ、高いレベルの教育を受けさせたいという熱意があった。両親のこの熱意は、自分たちが学校で勉強できなかったという悔しさが原動力になっている。だからこそ、自分たちと同じように読み書きのできない、知識のない人生を子どもたちに送ってもらいたくないと考えたのである。両親の思いは、G 氏が自分自身で教育を受けねばならないと考えるようになった一番の動機であった。

彼女は草原育ちのため、近所に幼稚園がなく、7 歳から小学校に入った。モンゴル民族の学校に入り、家の中でも家族同士が皆モンゴル語で交流している。G 氏は小さいとき、将来の夢は軍人だった。女性の軍人がとてもかっこよく見え、軍服が大好きだったという。しかし、大学入試で c 大学の外国語学部に入った。

G 氏の本当の希望としては、語学力を活かし、教師とは違う仕事に就きたかった。しかし、地方の田舎には外資系の企業や外国語を使う職業の選択肢は、極めて少なかった。そのため、地元のモンゴル民族中学校の教師を務めた。もともと、教職志望ではなかったため、教師という仕事に興味を持たず、なんとなく教師になったと考えているが、専門や就職先が理想的ではなくても、これまで壁にぶつかったこともなく、うまくやってこられたことから、就職できない人と比べたら自分は幸運なほうだと考えている。さらに、教師になってから、学生たちに向き合うようになると教育に興味を沸き、責任を持って、一所懸命教えたいという気持ちになった。しかし、教師の仕事を数年間続けてきたが、やはり職を変えたいという思いは消えなかった。

そのため、大学院の入学試験に合格したことに加え、専門分野を変え、今まで取り組んだことのない MPA（公共管理）を学び始めている。長く教師をやっていると、同じ仕事の繰り返ししかない。他の仕事をしてみれば新鮮さを味わえるうえ、さまざまなチャンスにも

挑戦できると感じている。

また、モンゴル民族の伝統文化の伝授や伝達について、言葉以外に両親から特別に受け継いでいるものは、ほとんどない。唯一、両親から受け継がれたこととして、家族で信仰し、守り続けてきたオボー（氏族や祖先のときから信仰していた小さな山、大地の神様）信仰がある。人々の日常生活や社会の動き全体が、伝統的形式から現代的なものに進み、その波に乗っていかなければ時代から遅れる。これまで自分自身のアイデンティティをあまり意識したことがなく、モンゴル人として生まれたという民族の誇りもほとんど持っていない。なぜなら、モンゴル民族は中国の55の少数民族の一つでしかなく、自分たちの長い歴史や素晴らしい文化を持っているということをなかなか実感できないからである。現在、モンゴル人は、巨大な中国の中のマイノリティであり、自分の民族の文化や言語を知っていると云っても、社会に一步出れば、そのすべてがプラスになるのではなく、不利な面も非常に大きい。

しかし、一緒に生活していく相手はやはり、同じ民族の人がよい。言葉や文化、日常生活習慣、食などを考えると同じ民族の男性と結婚することが最善だと考えている。また、子どもが生まれたら漢族の学校に行かせるかもしれないが、家庭の中ではモンゴル語を話したい。子どもを漢語学校に入学させたいと考える理由は、自分自身が社会に出て、モンゴル語で教育を受けた少数民族の人々に同情したことに理由があった。なぜなら、彼らは言葉の壁にぶつかることが多く、漢民族の社会に入ったら人一倍努力をしなければ、仕事場でもいじめられてしまう。

社会における女性の役割について、今日は、全て男女平等といわれているが、実際に就職が有利なのは、女性より男性であると思う。特に、企業が男性を採用するケースがはるかに多い。知人は、IT 関係を専門に勉強したが、卒業して5年目となる今も正社員の職に就くことはできず、契約社員として働いている。

自分自身も、男性上司と一緒に仕事をした方が仕事しやすいと感じている。女性は神経質で繊細な性格の人が多く、女性同士でトラブルが起きやすいと感じている。今の社会は、男女平等であり、女性を尊重しなくてはならないと言われてはいるが、それは日常生活や娯楽などの副次的な面であり、仕事や社会的な場面で女性が弱い立場に置かれていることは事実であると語る。

## 5) F氏：日本に留学し、大学院修士号を取得

F氏は日本に留学し、現在はある会社の社員として勤めている。

F氏はモンゴル民族高校を卒業し、内モンゴルのある短期大学で勉強を終え社会に出て勤めていた。しかし、自分の学歴である短期大学というレベルに満足できず、もっと高い学歴に持ち、良い職業に就きたいと決心した。その結果、海外に留学すれば、きっと自分が成長できるチャンスがあると思い、日本に留学することを決めた。

両親は、娘が将来の結婚のことも考えず、海外留学を希望するということを心配していた。最初は、両親から反対されたが、最後には娘自身の堅い意志を応援してくれた。それは、F氏は小さい時から、両親から学校に行き勉強することが自分の義務であり、大学を卒業することが当たり前であると散々言われていたからである。彼女の両親もほかの大人たちと同じく、良い学校を卒業したら必ず良い仕事に就くことができるという考えを持っているからである。だからこそ、娘が仕事を捨てて、海外に留学することを応援してくれているわけでもある。

F氏は日本に留学できたことにとっても満足している。自分自身が成長できる環境でもあり、地元にいるよりはるかに多くのチャンスとチャレンジできる場があり、留学することができ、本当に良かったと笑顔で語る。日本に来てもう長い間、自分の出身地よりも東京に住み慣れた。日本には留学目的で来たが、何年も住んでいるうちに、日本の良さを感じ、ずっと日本で生活する考えも持つようになった。自然環境や生活環境及びサービス・社会の仕組みにいたるまで外国人にとっても住み心地が良い環境であると感じさせている。

F氏は大学院を卒業後就職した。もともとは学業を終えたら自分の国に戻り、仕事を探したいと考えていたが、日本の生活が大好きになったことから、日本の企業で働き、もっとグローバルな舞台上で活躍したいという熱い願望を捨てず不況な時期でも諦めず就職活動を続けたそうである。留学を終えたら帰国しなければならないと考えていたが、自分の可能性を広げるのに、もっと高く、もっと遠く飛べなければならないと思うようになった。これからも、チャンスがあったら、日本以外のほかの国にもいき、草原の遊牧民ではなく「国際遊牧民」になりたいと笑いながらいう。

彼女は、小さい時から町で育てられ、都会育ちのモンゴル人であった。草原にはほとんど行ったことがない。それでも、F氏はモンゴル語で教えている学校へ通い、家庭でもみんながモンゴル語で交流するそうである。彼女は今自分の母語で話していることは、両親のおかげだととても感謝していると語る。近所には、モンゴル語を話せないモンゴル人がたくさんいるが、すべて親の考え次第であり、モンゴル語を学べるかどうかは自分の意志で決められないのである。

日本に留学する前は、自分のアイデンティティについて考えたことがなかった。日本に来て初めて自分がモンゴル人であるということを強く意識するようになった。内モンゴルにいた時、周囲は漢民族ばかりだったため、自分が少数民族であるとあまり思いたくなかったのだと考えている。それは、中国は多民族国家だが、その中で区別されたくないと考えていたためである。

しかし、日本では他民族と共生しており、そしてお互いの言語・文化を尊敬し合っている環境のため、自信や誇りをもって自分の「少数民族」のモンゴル民族であるというアイデンティティを良いものと思えるようになった。

F氏が今少し悔しいと思っていることは、町育ちのためモンゴルの伝統文化などよくわからないことである。お正月の行事や火を祭るなどの大きな祭事は分かるが、詳しいことに

関しては知識がなく、これから一つ一つ勉強していきたい。日本にきてから、自分の民族の伝統文化にとっても興味を持つようになった。異国にいながら毎年火を祭る日（旧お正月から7日間前の日）を忘れずに祀っている。

もう一つ自分にアイデンティティを感じさせたのが、彼氏を選ぶ時であった。日本に留学してきて、学校の友人や周囲の知人にさまざまな民族の人がいて、出会いも非常に多かった。しかし、結婚して、一生一緒に暮らしていくことを考える時にやはり同じ民族の人が言葉も生活習慣も変わらないため、モンゴル人を選ぶと決めた。F氏の両親からはほかの民族の人でも反対されることはなかったが、自分の意志でそのように決めた。また、現在内モンゴルで生活しているF氏の友人や同級生で漢民族と結婚している女性が多数いるが、内モンゴルでは、特に娘が漢民族と結婚することを反対する家庭が多い。主に言葉や文化の違いがあること、そしてモンゴル人の人口がどんどん減少しているからである。しかし、現実では漢民族と結婚するモンゴル人女性は多い。モンゴル人女性のうち、草原にいるモンゴル人より都会に生活している或は町に出稼ぎに行くモンゴル人女性のほうが、混族結婚のケースが多い。

F氏も一つの民族の存続や伝統文化の継続において、女性は大きな役割を果たしている存在だという考えに理解を示してくれた。将来自分の次世代にも自己を証明できるアイデンティティを持たせたい。子どもにはせめてモンゴル語を話させ、自分たちの文化や歴史を認識させたい。たとえグローバル化が進み、あるいは国家統一が強まったとしても、独自のステータスを意識していくことは自己肯定にも影響があることだと考えている。

子どもは親の背中を見て成長するが、親の生き方や考え方が子どもの人格形成の重要な要素でもあることは言うまでもない。子どもに伝統文化を継承するのに母親が一番大きな役割を果たしているが、父親もかけがえのない存在である。F氏は特に子育てにあたって、父親のほうがよりよく文化の伝達をすべきだと強調する。また、自分たちが海外に生活しているからこそ、きちんとしたアイデンティティを持ち、なおグローバル時代を生きる子どもを育てたい。彼女には、子持ちの友人もたくさんいるが、ほとんどの友人たちが自分の子どもに英語や漢語を重視した教育を受けさせ、母語のモンゴル語は社会で通用されないからと「無駄な勉強」はさせていないのが残念だとため息をつく。

F氏のような故郷を離れて生活している人たちの中には、多文化の影響を受けているうちに自分のアイデンティティがはっきり分からなくなる人、自己意識が変容し新しいアイデンティティを持ち始める人、そして自分の持つアイデンティティがより一段と強くなる人などと、それぞれが違う傾向を示す。F氏は長年高度教育を受け、さらに海外留学など学業だけではなく知識や経験も豊富なことから、人それぞれの考え方や意識の違いがあることを理解している。彼女が、異国で生活をし、他文化を尊敬しつつ、自分の文化をも大事にしているという姿勢は私たちにとって大いに学ぶべき点ではないかと考えさせられた。

F氏の語りから、受けた教育や生活環境が文化的な価値観に影響を与えることを明確に確認できた。また、教育は女性と伝統文化を切り離す要素であると同時に、女性と伝統文化

を再度つなげる要素にもなりうるといえる。

## 付属資料Ⅲ 伝統文化の発展に貢献した女性に対するインタビュー調査内容

### 1) J氏：文化再現の前線に勤務

取材目的： 外国文化交流、経済圏で活躍している女性

選定理由： 向上心の強い、バイタリティのある現代人女性

J氏が中学校に入った頃、オルドスで日本の技術を導入したカシミヤ工場が作られ、人材育成のためオルドス地域の全モンゴル民族中学校で日本語教育が始まった。各民族学校で日本語教師の育成制度が作られ、多くの教師が日本語の勉強や研修に派遣された。当時のd学校で日本語教師の研修が行われていた。J氏の日本語教師は、派遣された教師たちの中でも優秀であり、とても熱心に日本語の授業をしていた。J氏も小さい時から言語にとっても興味があり、日本語を勉強するのが大好きで、クラスの中で日本語の成績が一番良かった。また、日本の漫画やドラマが好きで『鉄腕アトム』や『血疑』などに嵌まり、女優の山口百恵の大ファンであった。その時から日本という民族に興味を持ち、またドラマなどを見た影響でファッションやおしゃれに初めて触れ、興味をもったという。

J氏は中学校を卒業後、e師範学校で勉強を続けた。師範学校を卒業したJ氏は故郷に戻り、教師を務めた。J氏は、仕事の合間を利用し、英語の勉強にも励み、旅行ガイドの資格試験を受け、夏休みに旅行会社でガイドのアルバイトをしていた。

現在 J氏は転職し、資源開発及び貿易を基本に、経済発展から文化発展における分野の計画や促進をしているところである。

特に、近年オルドスで資源開発が進められているが、同時に、現地の特徴を生かし、モンゴル民族の伝統文化を再現する活動が提唱されている。J氏の話によると、当局は2012年に四つの大きな文化園区を計画している。一つ目はチンギス・ハーン体育文化産業園区（主にホッケー、スキー場、アーチェリー、ナードム会場など様々なスポーツ施設を建てる）。二つ目はオルドス文化産業園区（主に大型のゲームセンターを作る）。三つ目は馬をテーマにした産業園区（主に馬術練習場、馬術学校、競馬関係の貿易センターを作る）。四つ目は蒙古源流園区（元の美術、彫刻、チンギス・ハーン国際会場など五つ星のホテルを作り、元朝の宮殿を再現する）。

J氏はまた、文化や教育の面でも自分の思いを伝えてくれた。現地のモンゴル民族の昔ながらのんびりした生活スタイルが経済発展とともに変遷し、経済意識や時間的な意識が植え付けられた。それでも、経済発展のおかげでオルドス地域は「全国文明城市」に選ばれ、衛生や基本生活のレベルは上がった。もうひとつの問題として、不動産バブルが起き、物価が上がり、貧富の差がさらに激しくなった。また、社会の中では男女の不平等が相変わらず存在し、就職や仕事の昇進などで性差別があり、特にJ氏のように能力が高く、経済的に自立した女性への排除はよくあり、差別的な目で見られると感じている。

教育の面では、母語で教育をすることは当民族の特徴を持続し、かつその民族の文化そ

のものを伝承していることである。特にオルドス地方は、モンゴル民族の伝統文化の根が深く残されている地域であり、チンギス・ハーンの霊を祭っている聖地であり、有名な歴史人物も多く輩出している。全モンゴル部族の中でもオルドス支族には伝統文化を受けづけていく重要な使命があるはずだと語る。今でも週末の自由な時間を利用し、自宅で塾を開き、子どもたちに英語を教え、ネイティブの先生を招き、言語交流、文化交流に活躍している。

## 2) K氏：伝統食品の普及と商品化に尽力

取材目的：伝統食品の発展に貢献している

選定理由：伝統食品を商品化するため、都会から地元に戻り起業した女性

K氏は、優秀な成績で大学を卒業して、大都会で活躍するため、h市のある企業に就職をした。しかし、帰郷するたびに老いていく両親の姿をみて、故郷に戻る気持ちがはじめて生えた。その際、母親に「年をとることによって、乳製品も作れなくなってしまいそう、これからは今まで食べてきた乳製品を作れる人もどんどん減っていくだろう」と言われた。母が言う通り、若い世代が手作り乳製品を作れなくなれば、伝統食品もこれで失われていくのではないかと危機を感じた。

K氏は、故郷に戻り、自分の貯蓄と民族舞踊団体の援助を受け、夫婦で乳製品加工の工場を作り、ブランドを立ち上げた。K氏の夫は機械設計を専門に学び、当該分野の企業で務めていた経験もあったため、機械の設計プランから、工場建設まで、乳製品加工に合わせた独自の創設に挑戦した。母から「乳製品は、モンゴルの伝統的な「白い食」であり、清潔な環境で作ってほしい」というアドバイスを受け、牧場で工場を建設した。また、生産や仕入れにおいて、現地の牧畜民と協力し合い、取り引きもするようになった。

しかし、伝統食品を商品化するにあたって、決して順調ではなかった。まずは、工場建設、設備投資、食品製造の関連手続き及び許可など資金問題が大きかった。そして、市場で商品として登場することがなかったため伝統食品の乳製品において、食品として成分、品質、安全性の基準が定まっておらず、統一性がないことであった。さらに、無添加の製品に工夫しているため、保存期間や運送の手段においても難関ばかり残っていた。伝統食品が現在の競争が激しい市場に、新商品として送られる際、想像以上の困難があった。

しかし、K氏夫婦で、今までになかったモンゴル伝統食品の新しい時代を開き、革新を作れたと言えよう。そして、さまざまな困難を乗り越え、現在は、市販の乳酸菌飲料、バター、チーズ、ヨーグルトを主な商品として生産している。

## 3) L氏：伝統食品の未来を探求

取材目的：伝統食品の深化に勤める女性

選定理由：海外乳業大手の研究員であるモンゴル人女性

現在は、日本のある乳業会社の栄養科学研究所、栄養食品開発部の研究員を務めている。

小さいときから、草原で母親の乳製品作りの手伝いをして、食品作りにとっても興味を持っていたという。草原で育った環境や生活がいつまでも身に染みており、いまでもとても誇りに思っているという。L氏は、食品化学を専門に学んでいたが、外国語の授業は日本語で学んでいて、日本語の勉強もとても好きであった。

今の職場では育児用ミルクの成分を研究し、動物の母乳の成分分析や実験を行っている。研究以外の自分の時間は NGO 法人でボランティアをしている。モンゴルの孤児向けの支援をしている日本人の団体と交流活動をしている。

L氏の近い将来の夢は、モンゴルの乳製品を商品化し、モンゴルの伝統食品を深化させたということである。モンゴルの伝統食の乳製品は何千年も前から、先人たちの知恵で何百もの種類の食として開発されたが、いまだにその製法や成分は原始のまま保持されている。このような資源があるのかかわらず、商品化していないこと、深化していないことを残念に思ってしまうという。いつか自分の民族の文化に少しでも貢献したいという強い気持ちを持っている。

L氏は日本に来て、便利な生活をしているが、心の中には「内モンゴルではまだまだ生活に苦しんでいる人がたくさんいるのに、自分だけが日本で便利な生活をしていることに罪悪感を持っている。地元のもっと多くの人のために何かをしたい。一人だけ裕福になっても心の中は空しく、精神的に満たされないものなの。」と最後に話してくれた。

#### 4) M氏：異郷で文化継承への努力

取材目的：海外でモンゴルの文化を継承

選定理由：離れた環境でも次世代に文化を継承

M氏は、大家族に生まれた。彼女は経済的に状況により、早くも自立していくような道を選んだ。M氏は、小学校を卒業してからモンゴル民族舞踊団に入り、モンゴルの民族踊りを習った。舞踊団に入ることは、学費が安く、舞台に立てるようまで練習すれば、多少の収入になり、せめての自給自足ができる。こういった進路は、両親が支払う教育費の負担も減り、自分自身も民族舞踊に興味があったからよかったという。

舞踊団での生活は、決して毎日楽しく踊っているほどの安易なものではなかった。朝から夜遅くまでの過酷な練習、集団での寄宿生活、厳しい上下関係を通じて、M氏は鍛えられた。彼女は、所属の舞踊団内で、優れた演技力で、人気を浴び、優秀な成績を手に入っていた。その後も舞踊や演劇を専門に活躍し、舞台のディレクターを務めたこともあった。

自分の専門分野を活かし、もっと大きなステージにあがるため、M氏は中国の大都会で芸能活動をし続けた。派手な芸能業界の中でも、常に自分を失わず、もっと上を目指して努力を緩めずに頑張っていたという。そして、現在の夫と出会い、夫のふるさとであるオー



オーストラリアに行って結婚生活を始めた。二人の子どもに恵まれたが、子どもにはモンゴル語を教え、よく大自然の中で伸び伸びを自由に育てたいという。M氏自身は、幼い頃を牧場で自由奔放に過ごし、その後舞踊団という厳しい規範のある環境で育ったが、遊牧文化が身にしており、自然と動物が大好きで、柔軟な考えと明るい性格を持っていると語る。また、海外で暮らしながら、モンゴルの家庭料理をよく作り、家族とモンゴルの食を楽しむ。

M氏はこのように、食文化を通して、異国の家族だけではなく、暮らしている地域の異文化交流などのボランティア活動にも参加し、自分の文化と歴史を周りの人々を共有しているという。牧畜民の家庭で生まれた彼女は、漢語の環境で育ち、さらに海外で生活をしている現在でも、自分の民族の言語や文化を大切に、次世代に継承している。

### 5) N氏：伝統的な手芸品の創作

取材目的：民族の手芸を創作する若い女性

選定理由：失われる伝統的な手芸品を蘇らせることに挑戦

N氏は、牧畜民の家で育ち、モンゴルの文化環境には大きく興味を持っていた。特に、小さい頃から、刺繍や編み物が好きだった。大学を卒業後は、就職において、競争が激しい時代であり、とりあえず地元の観光地でガイドを職に就いたが、競争が激しい環境におかれ、正社員になることができなかった。結婚して、家庭主婦になり、自分の趣味と兼ねて、民族手芸品の製作を職として専念した。

最初は、家事の余暇に趣味としてはじめたが、周りの友人や親戚からも応援され、本格的に創作物として行った。N氏の作ったモンゴル伝統的飾りやアクセサリが、徐々に生産物として価値が認められ、民族芸術の特徴と手作りということで、希少な価値を生み出した。伝統的な飾りといっても、時代の変化とともに需要が異なっている。例えば、モンゴルの伝統的飾りには、騎馬する際に使用するものが多かったが、今は車の中で掛けるものが増えている。アクセサリにおいても、昔の女性用の帽子や民族衣装の帯などに使用するものが多かったが、今は指輪、ブレスレット、ネックレス、イヤリングなどが人気という。

彼女は、小さな手芸用品専門店を開き、同じ手芸品に興味を持つ女性たちに手芸を指導し、創作物を販売している。また、観光地のお土産を販売店にも自分の製品を展示してもらっている。毎日細かい手作りに没頭する地味な作業であり、収入も不安であるが、伝統的な手芸を続けていること、そして、他人にも自分のできる手芸を教えることに誇りを持ち、失われている伝統文化に少しでも役立てたことが一番に価値を感じるとN氏は語る。

### 6) O氏：民族衣装の普及に尽力

取材目的：伝統衣装をモダンな普段着として大胆に普及している女性

選定理由：オリジナリティと個性溢れたデザイナー

小さい頃、母が民族衣装（デール）を兄弟や自分にたくさん作ってくれたことから、O氏自身も、ずっと裁縫に興味を持っていた。また、小学校の時は絵を書くことが好きで、のちにデザイナーになりたいという夢を持っていた。

彼女は高校をモンゴル民族中学校で学び、優秀な成績で f 大学に入学し、卒業後ファッション関係の仕事に就いた。映画製作会社の舞台設計部に就職し、俳優や女優たちのファッションコーディネータを務め、のちに自立したコーディネータになったという。この仕事では、古代から現代のファッション、民族衣装など様々なコーディネータを担い、デザインから色などをコーディネートした。

コーディネータの仕事で経験を積み、大都会を離れて内モンゴルに戻った。彼女は内モンゴルに戻ったとき、ちょうどオルドスではバブルが起き、起業したい若者たちも夢を抱いてオルドスに集まった。O氏もオルドスでは独立し、店舗経営をやりたいと考え、モンゴル式のバーをオープンした。

O氏は結婚し、夫婦で現代モンゴル式バーを広めようとしたが、オルドスのバブルが思ったより早く崩壊しはじめた。そこで、S氏は長年考えていた自分の一番好きな民族衣装をデザインして作る店を開いた。昨年オープンし、一年ぐらい経ったが、従業員はすでに17人に達した。デザイナーはモンゴル国の方もいて、裁縫担当者たちは内モンゴルの各地域から募集して集めたそうである。S氏は自分で主にデザインや経営をしているが、従業員には裁縫を任せている。従業員がたくさんいても、とても忙しく、次々と注文が入ってくるそうである。

今の時代、モンゴルの民族衣装といえば、素材は絹使用が多く、衣装のデザインは長くても重く、色も派手で、結婚式やお正月などイベントの際に着る正装のことがほとんどである。だが、彼女が作る衣装の材料はコットンか麻を使っている。元来、民族衣装は絹が多く使われていたが、普段の生活には絹素材の服は痛みやすく不便なため、普段着としての素材を選んだ。素材の入手先は上海や杭州だが、毎回 S氏は自分で仕入れに行っている。彼女が作る民族衣装は、民族衣装そのものではなく、民族衣装を現代風にアレンジした普段着である。しかし、O氏は正装としての衣装や踊りや演奏などで使う舞台衣装も作るが、主に普段の生活に着るモンゴル民族風の普段着に力を入れて作っている。彼女が作っている衣装の素材は麻やレースが多く、使いやすさと可愛さを重視している。

彼女の生まれた地方では、普段でも民族衣装をよく着るが、オルドスでは民族衣装を普段から着る人は少ない。モンゴル衣装をあまり着ない地域で、モンゴル衣装を広めるため、伝統的なデザインを深化させ、流行でかつ着やすいデザインと素材にして作っていくと話す。色も派手すぎず、ベージュや単色などのヨーロッパの流行色風アレンジしている。

近年は民族衣装の店が増え、競争が激しいが、O氏は自分の作品に自信を持っており、今

後も商品化し、フフホトのデパート、そして北京にまで商品を進出させたいという。競争が多いため、ほかの店ではデザインと似た衣裳や、安く売っている店も多い。しかし、O氏は服の裾やボタン一つでもオリジナルにこだわり、工夫しており、高い質感を持っているため、誰もコピーできないという。また、シーズンごとに新しいデザインを次から次へと速いスピードで製作しているため、競争には自信があると語る。ただし、今の若者で裁縫を仕事にする人は極めて少なく、地味な作業はあまり人気がないという。これからの課題として、裁縫を担う人材不足は大きな問題であると話す。彼女としてはこの仕事に誇りを持ち、これからもたくさんの人材を育成していきたいという。

彼女は、現在作っている衣裳を知り合いの友達や自分がモデルとして着て、ネットで販売している。男性衣裳のモデルは夫に頼んで、夫婦で忙しい中、楽しく販促活動もしている。夫も馬頭琴教室を開き、オルドスのバブルが弾けたとはいえ、次の夢を持って励んでいる。

最後に、O氏は民族衣裳を作る仕事は、自分の趣味から始めたが、民族の伝統文化を継承に加え、民族衣裳を深化させ、さらに、モンゴル人だけではなくすべての人々が着られる服にしていきたいという。モンゴルの一文化としての民族衣裳を市場で求められる商品にし、民族という狭い境界を越え、世界中の人々が着られる服にすることがS氏の夢である。

## 7) P氏：伝統文化保持の試み

取材目的：民族の伝統衣装を継承する若い女性

選定理由：変容する社会環境の中文化継承を戸惑わず選んだ女性

20代のP氏は、モンゴル民族衣装のデザイナーを目指している。彼女はモンゴル民族学校を卒業し、ある専門学校に受かったが、ほかの進路を選び、g大学（短期大学）で勉強した。

短大を卒業し、故郷のオルドス市に戻りカシミヤ工場でデザイナーを1年間務めた。その後結婚し、子どもが生まれてからは、今年まで専業主婦として生活していた。夫はモンゴル民族だが、小さい時から漢語学校に通ったためほとんどモンゴル語が話せない。だが、P氏は自分の子どもには母語を教え、母語で教育を受けさせたいという。

今年の3月にP氏はモンゴルの民族衣装を作っている熟練した先生の弟子になり、半年間勉強してから、今は独立し、自分の借りたマンションで衣装作りの事業を始めたという。資金がないため、オーダーを受けたら、客のところに行き、衣装の材料も注文が入るたび自分で買い出しに行っている。始めたばかりということもあって、とても苦勞をしているが、民族衣装を作り続けていきたいという強い意志がある。伝統文化の一つである民族衣装作りは、決して人気のある職業ではなく、特にP氏のような若い女性には向いてないと考えられている。衣装作りの先生も最初彼女を弟子として受け入れることを、断っていた。手作業が多く、手間暇がかかるうえ、収入面の安定も保証されないため、衣装作りの仕事

を勧めることは難しかった。しかし、P氏は自分の趣味であることに加え、やり手がないからこそ挑戦してみたいという気持ちが沸き、また取り残される伝統文化を受け継いで行くという思いもあり、先生の弟子になることを諦めなかった。10年以上も衣装作りを続けてきたが、先生の断りをP氏の熱意で説得できた。

衣装作りの仕事を始めた後、P氏は家族や周りの応援を受け、特に有名な民謡歌手である親戚に大きく励まされたという。支援してくれた親戚の方は、まさにオルドス民謡を継承者でもある。オルドス地域でもう一つ残されている伝統文化はモンゴルの民謡と民族の踊りであり、オルドス独特の民謡はもっとも知られている典型的な文化である。近年、オルドス民謡はモンゴル国でも流行り、多くの有名な歌手はオルドス民謡をハルハ・モンゴル語（ハルハはモンゴル部族の一つで、ハルハ・モンゴル語はモンゴル国で標準語とされて使われている）で歌い始めている。

#### **8) Q氏：伝統とモダンの文化融合**

取材目的：民族衣裳の伝統とモダンにチャレンジした女性

選定理由：民族文化を大事にしているシャマンである女性

Q氏は中学校を卒業して、看護学校に入り、その後は勤めている。

彼女はモンゴルの文化を大事にし、かつファッションにも興味があつて、モンゴル民族の衣裳作りを始めた。彼女もモンゴル国からデザイナーを招き、衣裳作りをしている。

彼女は生活のなかでたくさん苦難を経験し、そこからはもっと強く生きていくことを学べたという。特に、兄と自分の学費や生活費を無職の母が一人でパートをしながら稼いでくれたという。母親の強い姿と支えがあつたからこそ、自分は今日まで努力してきたという。

彼女は去年からはシャマンになったという。シャマンとは神霊と交信できる能力者のことであり、モンゴル語で「ブー」という。これは精霊や冥界の存在が信じられている宗教形態の一つでもある。シャマンは天を崇拜し、古くからモンゴルで伝統宗教として社会的に信仰されていた。そのため、彼女は毎日修行をしている。

Q氏は今、自分の「蒙古服装服飾工作室」を開設し、民族衣裳の中でも舞台衣装に専念して作っている。本職と副職の多忙な中でも民族刺繍の交流会参加に参加し、ファッションという趣味のためではなく、民族の伝統衣裳の美しさを多くの方に広めたいという。

#### **9) R氏：探求心の強い現代女性**

取材目的：モンゴル民族の衣裳を作っている

選定理由：探求心の強い現代版モンゴル人女性

R氏はモンゴル民族学校で小学校から高校まで学び、モンゴル国に留学した。モンゴル国

の大学で修士の学位を取得し、地元のオールドスに戻った。彼女は本業とは別に、趣味としてモンゴル民族の衣裳の店を経営し、モンゴル国からデザイナーを招き、個性のあるファッション作りに励んだ。R氏は自分でデザインし、裁縫する場合もあるという。彼女が作っている民族衣裳は舞台衣装（結婚式や祭りなどで着る服装）が多く、普段着も作っている。普段着の方は、カジュアルで単色のシンプルなデザインが主である。そして、地元で、民族衣裳のファッションショーを主催した。

R氏のもう一つの趣味は旅行であり、アジアやヨーロッパを一周した。モンゴル国に行った際、「トナカイの旅」も経験し、真冬の-40℃の山奥まで辿った。そこで、トナカイの飼い主に多くの貴重な話を聞き、とても勉強になったという。

彼女はまだ若いうちにもっと多くの国に行き、視野を広げたいと考え、現在の地方公務員の職を辞め、オランダに留学することを決めた。彼女は英語が堪能で、様々な国の友達も多く、もっと自分に挑戦したいといきいき話していた。

彼女は多文化にはとても興味を持っているが、それは自分の民族の文化に誇りを持っているからこそできることであると話す。

## 付属資料Ⅳ

表1 社会主義体制における女性のイメージ

| 内容<br>年度 | 表紙の写真          | 現代の女性                               | 名人の物語                              |
|----------|----------------|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1988年11月 | 若手歌手：<br>オドンゴワ | オーストラリアの旅行記、全国婦人連合<br>会主席、女性の義務     |                                    |
| 1992年3月  | モンゴル女性         | 女性公務員、女性相撲                          |                                    |
| 1993年9月  |                | 成功した女性技術者                           | テンゲル                               |
| 1994年2月  |                | 草原の女子、優秀な嫁                          | ファッションモデル：ウラン S・テレビキ<br>ャスター：フグジルマ |
| 1994年5月  | 女優：アリア         | 裁縫、中国の初の汽車運転手                       |                                    |
| 1995年2月  |                | 世界女性大会の主旨                           |                                    |
| 1995年3月  |                | 女性技術者、21世紀は女性の世紀                    |                                    |
| 1995年9月  |                | 世界の発展は女性抜きでは語れない、世界<br>初女性の権利を提言した人 |                                    |
| 1995年11月 |                | 仕事への貢献                              |                                    |
| 1995年12月 |                | 中国人の女性の状況、女性の仕事と子育て<br>の両立          |                                    |
| 1996年10月 |                | 女性の権威について                           |                                    |
| 1997年4月  |                | 優秀な射手                               |                                    |
| 1997年7月  |                | 科学発展と生活レベルの向上、移住老人を<br>助けた女性        |                                    |
| 1997年8月  | 軍人の写真          | 歌手、女性軍人                             |                                    |
| 1997年11月 |                | 愛が溢れた生きる道                           | サチル妃の生涯                            |
| 1999年5月  |                | 草原の英雄                               | 優秀な牧畜民                             |
| 2000年2月  |                | チンギス・ハーンのブルテ妃を演じた女優、<br>賢いブルテウジン    |                                    |
| 2000年3月  |                | 草原の歌手                               | ホラン妃とイソイ妃                          |
| 2000年5月  |                | 規律委員会の副書記、成功した経営者                   | 李鵬の家族、ソルYダニ妃                       |
| 2000年6月  |                | 実業者の紹介                              | 故郷に貢献した人                           |
| 2000年7月  |                | 孤児を育てた母親                            | 周恩来夫人の革命のための犠牲、劉<br>少奇の「金箱」、チンバイ妃  |

|          |                 |                                     |                                |
|----------|-----------------|-------------------------------------|--------------------------------|
| 2000年8月  |                 | 踊りの伝達力                              | フランスの大統領と交流したモンゴル人記者、モンゴルの王妃   |
| 2000年9月  |                 | 女性牧畜人の生涯                            | 劉少奇の生涯、チャンビイ妃                  |
| 2001年8月  |                 | 女性作家                                | 中国の初の少数民族外交官:<br>フ・イン          |
| 2001年10月 |                 | 復旦大学に入学したモンゴル人女学生                   | ウラン氏の生涯                        |
| 2001年12月 |                 | 南京在住の若手歌手:オドンゴワ                     |                                |
| 2002年8月  |                 | 女性連合会の役割、踊りの伝達力                     | NBA選手:バートル                     |
| 2002年9月  |                 | 女性教師、モンゴル医学の継承者、継母は4人の子どもを大学生に育てあげた | 自分の趣味を仕事にすることの幸せ               |
| 2003年4月  |                 | 気象の仕事に身を捧げた女性                       | 張ハイディの生涯                       |
| 2003年5月  |                 | ホルチン氏族の模範人物                         | ボロルダイの今日                       |
| 2003年10月 |                 | 社会は女性の創業を支援すべきである                   | 100の歌を歌える70歳の女性                |
| 2004年1月  | モンゴル民族衣装のデザイナー  | 強い意志を持っていれば必ず成功する                   | 宋美齡の一生                         |
| 2004年2月  | 女優              | 伝統衣装の裁縫者                            | 女優:ナランホワラ                      |
| 2004年4月  |                 | 初期裁縫人の意志、親孝行する嫁                     | スポーツ、ウーマン                      |
| 2004年7月  |                 | 歌手の紹介、IT事業者                         | 中国とモンゴル国の友好に貢献した大臣、草原の若年英雄     |
| 2004年11月 |                 | 家庭生活を担う妻                            | 女優スチンゴワと彼女の母                   |
| 2005年1月  |                 | ジャーナリスト                             | 馬頭琴の演奏者                        |
| 2005年3月  |                 | 生活の支え、退職後のライフスタイル                   | ホラン妃の生涯                        |
| 2005年10月 |                 | モンゴル衣装の美しさ                          | 一代の英雄                          |
| 2005年5月  |                 | 発展の歩み                               | 努力をやめなかった老人                    |
| 2010年4月  |                 | モンゴルの言語、文字のために努力した女性                | 内モンゴル自治区書記バートル氏の「政府の工作意見」の主要内容 |
| 2010年7月  | ダンサー:トゴス(エウエンケ) | 仕事に励む女性教師 B.アルタンチェエグ                | 優秀な共産党員                        |
| 2010年8月  | 歌手:エルデンチメグ      | 砂漠に生きる女性                            | ショーラガン:科学の頂点にいるモンゴル人           |
| 2013年8月  |                 | 帰郷して豊かな生活を手に入れた女性                   |                                |
| 2013年11月 |                 | ダンサーの魅力                             | 中国の初の外交代表:張チェン、第一夫人:彭麗媛        |

|          |              |                               |             |
|----------|--------------|-------------------------------|-------------|
| 2014年1月  | モンゴル衣装のデザイナー | 成功のヒミツは意志にある                  | 宋美齡の生涯      |
| 2014年5月  |              | 信頼と尊敬が支えた生活、女性村長              | 宋氏の6人兄弟     |
| 2014年6月  |              | 優秀な幼稚園の先生                     | 孫中山の娘孫ワンの一生 |
| 2014年7月  |              | 家庭を担っている女性                    | 李克強の妻       |
| 2014年9月  |              | モンゴル民族の文化に貢献した女性、牧畜民の健康を守った女医 | テムジンの物語     |
| 2014年10月 |              | 「末永く生きる夫婦」活動                  | テムジンの物語     |



表2 家庭における女性の重要な役割—家庭教育

| 項目       | 家庭教育                             | 「母の愛」コラム                 |
|----------|----------------------------------|--------------------------|
| 1988年11月 | 父に愛                              |                          |
| 1992年3月  |                                  | 命を超える母の愛(物語)             |
| 1993年9月  | 女性の金銭管理                          |                          |
| 1994年2月  | 女性をリーダーに、道徳教育                    | 祖母(詩)、特別な母の愛(アメリカ)       |
| 1994年5月  | 道徳教育、母を殺した事件                     | 私の妻(詩)、母のキス(歌)           |
| 1995年2月  | 赤ちゃんのファッション                      | 母(詩)                     |
| 1995年3月  | 女性の読書、子どもの遊び、子どもの聴く力             | 祖母の思い出                   |
| 1995年9月  | 外国人の子育て、小学生の発表能力を向上させる           | 母への歌                     |
| 1995年11月 | 女性の栄養補給                          | 母の愛(エピソード)               |
| 1995年12月 | 夫婦の関係が子どもの健康な成長に影響する             |                          |
| 1996年10月 | 子どもに良い躰を身につけさせる、子どもに自由を与える       |                          |
| 1997年4月  | 両親は子どもをかわいがり過ぎない                 | 私の妻(エピソード)               |
| 1997年7月  | 子どもの主観性を育てる                      | 故郷を返せ(詩)                 |
| 1997年8月  | 親の責任、間違った家庭教育                    | 母(詩)                     |
| 1997年11月 | 子どもとのコミュニケーション                   | 母(詩)                     |
| 1999年5月  | 試験を怖がる子どもへの対策、勉強することは子どもの権利      |                          |
| 2000年2月  |                                  | 86歳の母親(エピソード)、母親はをどう手伝うか |
| 2000年3月  | 女の子に対する伝統的な家庭教育                  | 良い母親になるため                |
| 2000年5月  | アメリカの子どもに教える金銭観                  | 母(詩)                     |
| 2000年6月  | アメリカ人の子育て、親は子どもとどう接するべきか         | 母は花嫁になった                 |
| 2000年7月  | 女性の個性を生かす教育                      | 放牧する女性の楽しさ               |
| 2000年8月  | 子どもにプレッシャーを与えない                  | 母の愛                      |
| 2000年9月  | 子どもの個性を発達させる                     |                          |
| 2001年8月  | 子どもの運命に影響する才能                    |                          |
| 2001年10月 | 子どもの言葉に耳を向ける、子ども自身で問題を解決させる、金銭管理 | 中国人の孤児を育てたアメリカ人女性        |
| 2001年12月 | 子どもに失敗のチャンスを与える                  | 祖母、息子への愛                 |

|          |  |                                    |
|----------|--|------------------------------------|
| 2002年8月  | 子どもを家事に手伝わせる                           | 祖母(エピソード)                          |
| 2002年9月  | 自分が中国人であることを自覚する                       | 母親を2年間介護した7歳の女の子                   |
| 2003年4月  | 大学受験                                   |                                    |
| 2003年5月  | 子どもが自信をなくした時にどうすべきか                    | 両親への思い、父の愛                         |
| 2003年10月 |  | 姉の優しい瞳                             |
| 2004年1月  | 女性の健全な心の育成                             | 私の母(エピソード)                         |
| 2004年2月  | 道徳教育                                   | 娘を大学に行かせるために捧げた父の努力、父の愛<br>(エピソード) |
| 2004年4月  |  | 母(詩)                               |
| 2004年7月  | アメリカ人の少年に対する価値観、青少年の道徳                 | 母を救ってください(救束手紙)                    |
| 2004年11月 | 貧困家庭の子ども、子どもの思考力をどう育てるか                | 父の愛                                |
| 2005年1月  | 伝統的な家庭教育                               | 母の愛の収穫                             |
| 2005年3月  | ゲームに夢中する子どもへの対応、父親の愛が子どもの性格に影響する       |                                    |
| 2005年10月 | 違う方法での子育て                              | 妻へ(詩)                              |
| 2005年5月  | 子ども同士を比較しない                            | 母(エピソード)                           |
| 2010年4月  | イギリス人はどのように子どもを育てているか、道徳教育は子どもの未来に影響する | 母の偉大なる愛(エピソード)                     |
| 2010年7月  | 女性の見本になるため                             | 祖母の優しさ(エピソード)                      |
| 2010年8月  | 女性の間違いを正しく受け入れる、問題を解決した母親、の成長に影響する家庭環境 | 母(エピソード)                           |
| 2013年8月  | 女性の成長に影響するゲーム                          | 母(詩)                               |
| 2013年11月 | 両親による子どもの批判                            | 母からの手紙、父の愛(エピソード)、娘へのメッセージ         |
| 2014年1月  | 子どもの心の栄養素                              | 母の愛                                |
| 2014年5月  | 女性の嘘をどう直すか                             | 母の高齢生活                             |
| 2014年6月  | 宋慶齢の家庭教育                               | 母の手作り乳製品                           |
| 2014年7月  |  | 母の愛(エピソード)                         |
| 2014年9月  | 自己分析は一生の大事                             | 母への手紙                              |
| 2014年10月 | 家事を手伝わせる重要性                            | 留守児童の「美しい母」                        |

表3 女性自身の生き方—婚姻生活

| 項目       | 婚姻、家庭                   | 法律                     | 男性のコラム                  |
|----------|-------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1988年11月 | 恋人をどう理解するか              | 生活の困難を克服する             |                         |
| 1992年3月  | 早期恋愛の始末                 |                        |                         |
| 1993年9月  | 復婚した人々                  | 近所付き合い                 |                         |
| 1994年2月  | 離婚の原因、相手に尽くすため          |                        |                         |
| 1994年5月  | 幸せな家庭の特徴、夫婦関係には寛容さが大事   |                        |                         |
| 1995年2月  |                         | 婚姻法                    | 結婚にどんな女性を選ぶべきか、女性は何を望むか |
| 1995年3月  | お金と家庭                   | 産休に関する法                |                         |
| 1995年9月  | 性生活をどう調整するか             | 離婚後子どもを他人に養子にあげられるか    | 女性の非難にどう対応するか           |
| 1995年11月 | 性                       | セクハラに関して               |                         |
| 1995年12月 | 男も間違ふときがある              | 元の配偶者からの被害にあった場合       |                         |
| 1996年10月 | 性生活、女性の健康をどう守るか         |                        | 男性の清潔問題と健康              |
| 1997年4月  |                         | 不倫の始末、死刑者の遺言           |                         |
| 1997年7月  | 女性が結婚を決める術、お金は愛と交替できない  |                        |                         |
| 1997年8月  | 夫婦の喧嘩に関わらない             | 盗難事件                   |                         |
| 1997年11月 |                         | エイズに係る際の法律             |                         |
| 1999年5月  | 離婚女性が増えた原因              | 老後になって子どもが面倒見なければどうするか |                         |
| 2000年2月  | 女性の幸せ、家事は一種の仕事、性        | 老人の権益を守る法              |                         |
| 2000年3月  | 女性の大変さ                  | 老人の権益を守る法              | 男が悲しいとき                 |
| 2000年5月  |                         | 入籍証明書に関する法             | 買い物に付き合う大変さ             |
| 2000年6月  | 妻の健康に影響する要素の一つは夫、夫婦の性生活 | 子どもをテスト成績で賞罰した罪        | 心を照らす光、女性が彼氏を選ぶとき       |
| 2000年7月  | 歌手と科学者の恋                | お金の貸借について              | どんな男が一番かっこいいか           |
| 2000年8月  | 正しい価値観を持つ人を配偶者を選ぶ       | 女性詐欺師                  | 父親は母親の替わりになれるか          |

|          |                   |   |  |
|----------|-------------------|---|--|
| 2000年9月  | もてる男の特徴           | 恋愛の結末が犯罪事件<br>に至る                         |  |
| 2001年8月  | 男は個人の私有物ではない      | 婚姻法について                                   | 彼女を他人の目で見ると  |
| 2001年10月 | 喜怒哀楽を共にした夫婦       | 婚姻法                                       |  |
| 2001年12月 | 40年遅れた出会い         | 婚姻法                                       | 女性の精神面での疲労が体の<br>疲れになる                               |
| 2002年8月  | 気を付けるべき男性         | 女性の土地所有権                                  | 夢中になること  |
| 2002年9月  | 姑と嫁の関係づくり         | 入籍と同棲問題、資産相続<br>問題                        | 誠実な誓い  |
| 2003年4月  | 幸せな家庭に6つの規則       | 法律と年齢                                     | 独身の家   |
| 2003年5月  | 結婚するメリット          | 日常生活の中の法律知識、<br>ネット情報への判断                 |  |
| 2003年10月 | なんでも受け入れられる広い心を育つ | 身分証明書について                                 |  |
| 2004年1月  | ウジウムチンの優しい母親      |   | 酔っばらった後の反省   |
| 2004年2月  | モデル家庭、恋愛をどう営むか    | 土地所有権法、家を購入す<br>るときの法                     | 婚姻における主導権  |
| 2004年4月  | 鄧小平の3回の婚姻生活       | 2004年から享有できる権益、<br>消費者が使うべき権益を油断<br>しないよう | 生活の試練  |
| 2004年7月  | 姑と嫁の学校            | 恋愛の結末が犯罪事件に至<br>る                         | 男が怖がること  |
| 2004年11月 | 宋慶齡と孫中山の結婚        |   | 金メダル取得した男  |
| 2005年1月  | 若い女性の油断した選択       | 農村における法律実行状<br>況、海外の法律                    | ネット恋愛から発生した事件  |
| 2005年3月  | 家庭内暴力の防止、善意のウソ    | 同棲と婚姻、無職の奥さんは<br>借金返済をすべきか                | 放浪者の歌手   |
| 2005年10月 | 夫婦のコミュニケーション      | 草原法                                       |  |
| 2005年5月  | 離婚すると試すことのメリット    | 自分を一番大事にする人ー<br>妻                         | 資産分け問題、家庭内暴力   |
| 2010年4月  |                   | 毎日、愛のため10分間を残<br>す                        | なぜ人妻は綺麗に見える<br>か、60点の結婚は白髪を増<br>やす、に家を買う際危機を防<br>ぐ方法 |
| 2010年7月  | 姑                 | 親の介護責任                                    | 妻の料理(エピソード)  |

|          |                  |                        |                    |
|----------|------------------|------------------------|--------------------|
| 2010年8月  |                  | 結婚生活を通して女性は成長する        | 夫婦の不仲は社会への影響に関する調査 |
| 2013年8月  |                  |                        | ビル・ゲイツの奥さん         |
| 2013年11月 |                  | 土地の使用権                 | 仕事に励む人の跡積          |
| 2014年1月  |                  | 違法を反省した男               | 酔っばらった後の反省         |
| 2014年5月  | 幸せな夫婦の10の良い習慣    |                        |                    |
| 2014年6月  | 女性が結婚する前やるべき5のこと | 離婚の際の慰謝料、女性の土地所有権を守るのに | モンゴルの奥さんを大切に       |
| 2014年7月  | 恋の成熟             |                        |                    |
| 2014年10月 |                  |                        | 男性から見る女性           |

表4 女性に影響を与える民俗文化

| 項目       | 民俗                    | 文化収集  |
|----------|-----------------------|---|
| 1988年11月 | バルガ部族の裁縫、モンゴル人にとっての白色 |   |
| 1992年3月  |                       | ピラミットの紹介  |
| 1993年9月  | ドン族の競牛戦               |   |
| 1994年2月  |                       | 毛沢東の少年時代、チンギス・ハーンの陵、中国の女性大臣                       |
| 1994年5月  | バーリン部族の子育て、馬具で作る手芸    | アメリカ人のファッション、カナダ人女性の老後、スイスのプレゼントを贈る文化             |
| 1995年2月  | リビヤの結婚式               | 楽しく生きる術、ストレスの原因                                   |
| 1995年3月  |                       | 南アフリカの文化  |
| 1995年9月  | ゴリキーのラブレター            | ペルー人の結婚式  |
| 1995年12月 |                       | ノーベル賞について、500名の女性軍がチベット入り、鄧小平の思想を学ぶ               |
| 1996年10月 | 他民族の自然崇拝習慣            | 女性のファッション   |
| 1997年4月  | 他民族のファッション            |   |
| 1997年7月  |                       | ドイツ人の新婚旅行、アメリカ人のお金の使い方                            |
| 1997年8月  | ダイ族の民俗                | 21世紀の生活スタイルの傾向                                    |
| 1997年11月 |                       | ロンドンのホームレス、ウラーンフと3000人の孤児                         |
| 1999年5月  | モンゴルのファッション           | ハワイの村、イラクの結婚式、日本の女性誌                              |
| 2000年2月  | スニトのお正月               | 田舎暮らしをする総理夫人、ヘランの結婚式、世界の図書館、世銀、マカオのカジノ            |
| 2000年3月  | 日本人女性は後半の人生をどう過ごすか    | ドイツのモンゴル人、メキシコの老人のライフスタイル                         |
| 2000年5月  | マカオの婚姻習慣              | ヨーロッパ人の生活スタイル、アメリカ人のシニアの娯楽、20世紀のネパールの科学賞を受賞した女性たち |
| 2000年6月  | 少数民族女性の祝日             | 世界の女性大統領について、フィンランドの女性は子どもを産みたくない                 |
| 2000年7月  | ミャウ族の結婚式              | 国連、各国の女性の特徴、フランスの女性のお金の使い方、アメリカの高齢者の自立            |
| 2000年8月  | 少数民族のプロポーズ習慣          | フィンランドの禁煙、北欧の女性、インドの食文化                           |
| 2000年9月  | ミャウ族の結婚式              | アメリカの老人の健康意識                                      |
| 2001年8月  | オロス・ヤウ・ダイ族の民俗         | 貧困者に夢を与えたアンジェル                                    |

|          |                             |                                    |
|----------|-----------------------------|------------------------------------|
| 2001年10月 | ホルチン部の婦女連合会、中国の革命の歴史        | 世界の博物館、スイスの軍事                      |
| 2001年12月 | 少数民族の敬老習慣                   | 女性権益を保護する世界の機関                     |
| 2002年8月  | 子どものいない町                    | 戦場における恨み                           |
| 2002年9月  |                             | 30年後の地球                            |
| 2003年4月  | しゃぶしゃぶの由来、香港、マカオの旅行記        | フィンランドの禁煙、花とモスクワ、外国の老人の祝日          |
| 2003年5月  |                             | WTOに入ってから中国の農産業の前景                 |
| 2003年10月 | 中国の五大革命基地、フルン・ボイルの競馬        | 古代文明、インド                           |
| 2004年1月  | ウラトの正月、各国の正月                | シンガポールの多様性、世界の各民族の言語、発展している国韓国の女性達 |
| 2004年2月  | ジノエー族の乾坤式                   | ガンジョール寺                            |
| 2004年4月  | 今年の市民の注意すべき事項、              | 世界一周したアメリカ人女性                      |
| 2004年7月  | 中国共産党の成立した記念日、スウニド部族の婚約について | ドイツ人の79歳の女性は博士号を取得、レーニンの生涯         |
| 2004年11月 | チベットの民俗                     | ドイツ人の水の節約、デンマークの高齢者の保健             |
| 2005年1月  | 中華料理の接待習慣                   | スウェーデンの子育て                         |
| 2005年3月  | シン・バルグードの伝統ナーダム             | インドの残酷な姑の罪、中国の婚姻の変遷                |
| 2005年10月 | 甘粛にローマ人の子孫を発見               | ポーランド人のネット恋愛                       |
| 2005年5月  | シン・バルグードの衣装                 | 中国を揺り動かした事件                        |
| 2010年4月  |                             | 世界の人口と高齢者数、韓国の銀行はお見合いサービスがついている    |
| 2010年7月  |                             | 韓国の保険制度、パリのホームレス                   |
| 2010年8月  |                             | 分散したモンゴルの氏族                        |
| 2013年8月  | 夏門の思い出、礼儀正しい日本人は席を譲ることを戸惑う  | ホルチン氏族の民間ナーダム                      |
| 2013年11月 | 内モンゴルの地名の由来、アメリカの有名なアナウンサー  | 雲南のモンゴル氏族の習慣                       |
| 2014年1月  | 韓国の女性                       | 多民族多宗教の国:シンガポール                    |
| 2014年5月  | 日本の道徳文化                     | ハサク族の娯楽運動                          |
| 2014年6月  | 中国の不思議な15の数字                |                                    |
| 2014年7月  | イギリスの王妃の人生観                 |                                    |
| 2014年9月  | 各国の面白い習慣                    | 少数民族の結婚式                           |

2014年10月

フランス人の夫婦



表5 女性の自立を支えるキャリア

| 項目       | 生活の豆知識                    | 健康コラム                | キャリア                           |
|----------|---------------------------|----------------------|--------------------------------|
| 1988年11月 | 生活用品関連、赤ちゃんの写真をとる時        | アメリカの専門家による美容知識      | 経済:家畜の飼い方                      |
| 1992年3月  | 昼寝、女性の洋服を作る、ユーマアの効果       |                      | お見合いコラム                        |
| 1993年9月  | 美容、化粧、人民元の由来              | 産後の気を付ける事、女性の病気を防ぐため | 女性のキャリアコラム:女性の自信、自尊心、自立、強くなる精神 |
| 1994年2月  | すりを防ぐのに、料理コラム             | タバコの害、どうもろこしの効果      |                                |
| 1994年4月  |                           |                      | 女性は改革、開放、発展に貢献すべき              |
| 1994年5月  | 脳によい食品、薬を正しく飲む方法、タバコの害    |                      | お見合いコラム                        |
| 1995年2月  | 21世紀のファッション、美容            | 健康に良い摂食、女性の心身の健康     | 女性コラム:自分を守るため、結婚に選ぶ男性          |
| 1995年3月  | 飲食、サングラス、家具               | 肉食の取り方、病気の予防         | 女性コラム:誰のためにおしゃれする、手紙ボックス       |
| 1995年9月  | 買い物のコツ、偽物をどう判断する、         | 食の安全                 | 自動車展                           |
| 1995年11月 | 気持ちが落ち着く術                 |                      |                                |
| 1995年12月 | 子どもが怪我した場合どうすべきか          |                      | 人間と動物が土地を奪い合った事件               |
| 1996年10月 | キッチンの清潔、家具の扱い方            | 化粧品の扱いについて           |                                |
| 1997年4月  | 家畜を飼う術                    | 酒とタバコの毒害             | 母国語を学ぶ重要性                      |
| 1997年7月  | 食べ過ぎると健康に悪い、朝起きた後の健康アドバイス | 音楽療法、歯周病予防           | 専門学校での学生募集、本の紹介                |
| 1997年8月  | 現代女性の特徴                   | 女性の病気予防、正しく果物を摂取する   |                                |
| 1997年11月 | 政府の組織                     | 正しい姿勢、健康に良い習慣        |                                |
| 1999年5月  | 人間に役立つ動物を保護する             | 遺伝する病気               | 牧畜産業の豆知識                       |

|          |                              |                              |  |
|----------|------------------------------|------------------------------|--|
| 2000年2月  | 食生活                          | 性生活                          | 女性コラム:仕事している女性の資質、社会進出                   |
| 2000年3月  | お茶は健康に良いか                    | 羊肉を食べることは健康に良いか              | キャリア女性のあるべき資質                            |
| 2000年5月  | 妊婦の健康知識、正しいダイエット方法           | 乳がんや子宮がんを防ぐ方法、性生活            | 女性コラム:牧畜地の女性の仕事を発展させる                    |
| 2000年6月  | 健康的な外国の生活スタイル、おしゃれをすれば、長生きする | 高齢者の健康、女性の病気を予防、白湯を飲むことのメリット | 現代女性の権益を守るため新しいものを創造することが大切、病院、専門学校の新卒募集 |
| 2000年7月  | 若者のファッション、高齢者はおしゃれで健康になる     | モンゴルの薬、帝王切開について              | お見合いコラム、学生募集コラム、病院の紹介                    |
| 2000年8月  | 老人の転倒予防、ダイエット法               | 女性の魅力をどう維持するか、日を浴びる効果        | 学生の補助金、「女性、子どもの権益を守る法律」収集                |
| 2000年9月  | 女性同士の付き合い                    | おしゃれは健康に良い                   |  |
| 2001年8月  | 中学生が外で家借りるデメリット              | 健康に良い飲み物、タバコの害               | 女性は自分の価値を活かすべき                           |
| 2001年10月 | お酒と健康、労働する際の注意事項             | 健康食品と運動                      | 婦人科、病院の紹介                                |
| 2001年12月 | 人間の性格に影響する飲食                 | 女性病気の予防、高齢者の健康食品             | 病院の紹介                                    |
| 2002年8月  | 女性が毎日するべきこと                  | 子どもの健康食                      | 起業することも女性の生き方の一つ                         |
| 2002年9月  | 美肌を守る技                       | 健康に良い食品                      | 医師、薬の紹介                                  |
| 2003年4月  | 物の再利用、更年期の女性                 | 寛容な心を持つ、男性の体について             | 健康知識                                     |
| 2003年5月  | キッチンの清潔                      | 長生きと食                        | 名医の紹介                                    |
| 2003年10月 | 社会活動にどう参加するか、海南の旅            | 疲れと休みについて                    | 名医の紹介                                    |
| 2004年1月  | 女性の健康に良い食品                   | 健康を損なう悪習慣                    | 病院の紹介、手紙箱、「モンゴル・ヌド」                      |
| 2004年2月  | 女性同士の付き合い                    |                              | 有名なお医者さんの紹介                              |
| 2004年4月  | 冷蔵庫の使い方                      | 健康食品について                     | 「モンゴル・ヌド」、医師の紹介                          |
| 2004年7月  | エイズ病の影響                      | 健康な子どもを産むために                 | 「モンゴル・ヌド」、医師の紹介                          |
| 2004年11月 | 血液型と科学                       | 感染病気の予防                      | 農産業と提供                                   |

|          |                              |                       |                          |
|----------|------------------------------|-----------------------|--------------------------|
| 2005年1月  | アラブの女性のファッション、親孝行をどうするか      | ブラジルのタバコの被害について宣伝     | 化粧品の宣伝、大学の学生募集           |
| 2005年3月  | 高齢者の介護、料理の作り方、新聞の再利用         | 睡眠と健康、ニンジンを食べる効果      | 化粧品と薬の宣伝                 |
| 2005年10月 | 人間関係の構築                      | 栄養品                   | アル・ホルチンの婦女連合会、医師の紹介      |
| 2005年5月  | 電子レンジの使い方                    | 朝食の重要性                |                          |
| 2010年4月  | 生活豆知識、まな板を選ぶ方法               | 健康に良い食材               |                          |
| 2010年7月  | 牧畜民、農民の保険制度                  | 白髪、健康食品、高齢者の健康のため     | 脳梗塞、腎臓の病気を予防する方法         |
| 2010年8月  | 妊婦の注意すべきこと、胎児教育              | 高齢者の体の機能回復、病気の予防に効く食材 | 周りに褒められるモデル嫁、雑誌への評価アンケート |
| 2013年8月  | 内モンゴル自治区の修士院生の奨学金の学費の制度      | 妊婦の時、注意すべき食           | 大学生の就職問題について             |
| 2013年11月 | お金の借りに関する知識                  | 女性が体を鍛えるため            |                          |
| 2014年1月  | 悪い生活習慣                       | 脳の活性化に良い食品            | 「モンゴル・ヌド」、医師の紹介          |
| 2014年5月  | 若手企業家を応援する制度                 | 女性の病気を予防する            |                          |
| 2014年6月  | 農村の飲料水の安全のための制度、生活補助金、健康保険制度 | デトックスに良い野菜と果物、健康な食品   | 食の安全、出稼ぎ時注意              |
| 2014年7月  |                              |                       | 素敵な妻になるため                |
| 2014年9月  | ダイエット方法                      | 長生きする秘密               | 女性は繊細なライフスタイルを送るべし       |